
三人の姫と一人の手下の物語

五円玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人の姫と一人の手下の物語

【Nコード】

N5879K

【作者名】

五円玉

【あらすじ】

基本バカでオタクな高校生木山春吉には、三人の幼なじみがいる。柔道部所属の体育会系少女、口数は少ないけどとても優しい少女、生徒会長んだけど恥ずかしがり屋な少女。そんな彼女達やその他友達とのグダグダコメディーな学園ライフ！！

第1話 三人の姫様（前書き）

ども〜！！

最初に言っておきますが、この小説は不定期更新になると思います。

そのどころろ、よろしくお願いします。

第1話 三人の姫様

「お父さんお母さんは、ちょっと近場まで夜逃げしてきます。一応、富士の樹海辺りまで行こうかなと。だから春吉、お父さんお母さんを探さないで下さい。(^人^)」

ある朝、俺が起きたらこの手紙が机の上に置いてありました。

「……………は？」

さっぱり意味分かん。

「夜逃げ？」

俺は頭をぼりぼり。

「……………マジで？」

俺の名前は木山春吉^{キヤマハルキ}。16歳、高2。

今、俺は両親が置いて行った置き手紙(どちらかといつと遺書)とにらめっこ中。

「……………」

……開始早々、変な展開でゴメンね？

でも、まあ一旦、まずは軽く整理しようか。

ウチはつい最近、不況のあおりで父が会社をリストラされた……
んだよな!?

ちなみに父、元リーマンっす。

それからと言うものの、俺は学校帰りにバイト、母は昼間はパートで夜は内職、父は毎日酒を飲んでは「社長のバカヤロー!!」の連呼の毎日。

「まあ……夜逃げしたくはなるよな」

俺はその手紙を読みながら、朝食を取る。

メニューはトーストのみ。

……寂しい。

ってか確か昨日、両親はホームセンターで頑丈なロープを買って
きていたな……

何に使うのかは分らんが……

「うん……これは警察に連絡するべきか、まだ様子を見るべきか……」

俺はトーストを一口。

どうしようか・・・いや、今はまだ様子を見るべきかな？
富士の樹海だったって、別にアレとは限らんしな。

アレとは限らん、うん！！

・・・とりあえず今日は学校だったっけ。

俺は急いでトーストを食べ終え、制服に着替える。

生活費はバイトで何とかなるし・・・まあ、いいか。

ここで俺は時計を確認・・・ってうわッ！！ もう遅刻ギリギリ
やん！！！！

と、とにかく急がねばっ！！

「間もなく、一番線から電車が発車します」

うひゃー！！

今、俺は駅のホームを全力疾走中！！

くそっ・・・急いだから寝癖直し損ねたっ！

けど、今は電車の方が優先！！

「間に合えっ!!」

全力疾走!!

で、結果・・・

「ま、間に合ったあゝ・・・」

ギリギリセーフ。

俺を乗せた電車はゆっくりと走り出す。
つかマジ危なかった・・・

「アカン・・・はあ、酸欠だ・・・」

とりあえず空いている吊り革を発見!!
しがみつくように吊り革キャッチin俺!

その時!

「お!もしかして春吉か!？」

「はい!？」

突然、俺の目の前の席から声!!

「おっす!!」

「なんだ・・・楓か・・・」

そこにいたのは、ショートカットの女の子。

コイツはさわながえで沢那楓。

俺と同じ葉城高等学校の二年生で、+同じクラス。

一応、幼稚園の時から腐れ縁。

「なんだとはなんだ!! 何か不満か!？」

ちよいツン状態の楓。

「いや・・・っつか声、デカインだけど」

超車内迷惑。

周りの人、こっち見てるし。

「あつ・・・ったく、春吉のせいだ!!」

ちよつと大人しくなった。

「いまさら小声で言われてもなあ・・・」

はあく・・・ぶつちやけ楓は男勝りな性格。

言葉使いは男みたい、超暴力的(学校では柔道部所属)、おまけにデリカシーがない。

「う、うるせえな!! もう黙ってるッ!!」

あー、赤くなった。

コイツももつと大人しければ、そこそこ可愛いのに・・・もつた

いない。

「……………」

「……………」

長〜い沈黙。

いかん、暇だ。

「…………あ！」

「ん？」

その時、楓が何か発見したらしい。

「どうした？」

暇なんで聞いてみる。

「なあ、あれ、小夜じゃねえか？」

「小夜？」

楓は俺の後ろ側を指差す。

で、俺は体はそのまま、首だけ後ろに勢いよくくるっと半回転！！

ゴキッ！！

「グフッ！！」

何か首から嫌な音が・・・
HPが30減った。

・・・痛い。

「・・・・・・・・あれ？」

お！！ 向こうがこっちに気付いた。
そんな事より・・・く、首があゝ！！

「・・・・・・・・何、してんの？」

今こっちに寄ってきたコイツは荏咲小夜^{えんさきこよ}。

やっぱり小夜も俺らと同じ、葉城高等学校二年生。同じクラス。
小夜は楓と性格真逆。
超無口&コミュニケーションが苦手。

ぶつちやけ、いつも何考えてんのか分からないポーカーフェイス
だが、人一倍優しい子でもある。

どっかの誰かさんとは大違いで。

「・・・・・・・・春吉、首赤いよ？ 大丈夫？」

俺の真っ赤に腫れた首を見て、心配してくれたいらしい。

「まあ・・・何とか」

優しみが身に染みるう！！

「ふん、そんなの自業自得たるバカ！！」

何故か挑発的な楓。

「っなんだと！？」

このガキい！！ 人が30ものダメージ喰らったって言うのに！！

「何？ やるの？」

ポキッ、パキッと楓の関節が鳴った・・・何かヤバス！！

「ちよっ、ちよっと待とう・・・」

「何が？」

ぎゃ〜！！

楓のスキル、短気が発動しやがった！！ これはマジヤバス！！

「待て待て、おま、何を・・・ッ！？」

ヤバイヤバイぞ、楓の暴力の強さはハンパねえからな！？
ヤバイんだぜ！？

「春吉、とりあえず・・・」

バギボギッと鳴る、楓の関節。

化け物がコイツっ!?

「待て、楓、ここは暴力などと言った原始的な方法ではなく、会話と言う文明的かつ超平和的な和解方法で・・・」

そう、ここ、電車の車内だし・・・

「・・・腕出せ」

は？

う、腕？

「な、何で？」

「そんなの当たり前だろ・・・？」

楓の目付きが怖い。

「骨、折るんだよ」

「え・・・」

コイツ・・・目がマジだ!!

「はよ出せ」

「あ、いや・・・何か・・・あの・・・すみませんでした」

とりあえず謝るじ。

「ああ分かった。だから早く腕出せ」

何故だろう？ 今は春なのに汗がとまらない。

「楓、一旦落ち着こ・・・」

「いいからはよ腕出せや！..」

シカトっすか!？

「ごめんなさいいっ..!」

とりあえず、もう謝るしかなかった。

俺、悪いことした覚えはないのに。

その時！

グッ!!

楓の小さな腕が、俺の腕を掴みに掛かって来やがった!!
うわっ、ほどけねえっ!!

「ちよっ、やめっ、楓落ち着・・・」

「覚悟っ!!..!」

アカーーン!!

・・・その時、そんな惨めな俺に救いの手がっ!!

パシッ！！

今、俺は見た。
この眼で。

天使の手が、悪魔の手を掴んだ！！

「……………楓、だめ」

セミロングの黒髪、平均的な身長、そして何考えてんのか分からないけど綺麗な瞳をした天使……………小夜様ッ！！

「……………春吉がかわいそう」

天使の腕に力が入る。

ちなみに、小夜は運動も勉強も出来る子。
部活は弓道部所属。

「だ、だってよお」

小夜のおかげか、楓の腕から力が抜けていく。 た、助かった……………

「……………春吉は何も悪い事してない」

小夜、真顔で楓に対抗！
やべ……………何か俺泣きそう。

「……ツチ、命拾いしたな春吉」

しばらく俺を睨んでた楓。

しかし数秒後、とうとうプイツとそっぽを向いてしまった。

「……大丈夫？」

な、なんて優しい微笑み……ま、まぶしッ!!

「た、助かりました女神様っ!!」

よし、この際小夜を拝んどこ。

「……ん？」

小首を傾げる小夜。

なッ!! め、女神様やつ!!

「……気に入わねえ」

楓が何かブツブツ言ってるが……今は無視!!

「ありがたや、ありがたやあ〜!!」

今は……拝むべし。

〇〇県立葉城高等学校

俺らが通う、まあ普通の公立学校だ。

結構なバカ野郎共と顔面偏差値が低い女達が数多く在籍しているのが特徴かな・・・？

・・・悲しい特徴だ。

そんなバカブサイク高校の中でも、楓と小夜はまさに別格の可愛いらしさ（クラスの男子共談）。

小顔で容姿が綺麗、楓はちょい色黒、小夜は色白の綺麗な肌。

学校の野郎からはいつもちやほやされまくってるのだ（特に小夜）。

で、この二人とは別にもう一人、可愛い子（クラスの男子共曰く）がいるんです。

それが・・・

「春、悪いけどその書類取って!!」

「ああ、これが・・・あいよ」

俺は彼女に指定された書類を手渡す。
ちなみに現在、葉城高校生徒会室内。

「ありがとう！」

そう言っただけで彼女は次々に書類にはんこを押していく。
何か、あまりにもリズミカルに作業してるから……何かのはんこ押し機会でも見てみるみたいだ。

「彼女の名前は濱垣美羽^{はまがきみはね}。」

なんと彼女はまだ二年生ながら、我が校の生徒会長なのだ！！

性格はしっかり者って感じかな？

勉強もしっかり出来て、容姿も綺麗で、しかも顔が……超大和撫子的な感じ。つまり和風美人。

……ただ、超運動音痴なのはここだけの話
そして極度の上がり症ってのも、ここだけの話。

そう、上がり症なのに生徒会長やってんのこの人。

「ねえ春、もうすぐSHR始まるけど……」

「もう!?!」

俺は携帯電話を確認。

うん、あと5分ではじまるな。

「よし、じゃあそろそろ引き上げようかな。春、教室行こう!」

「ああ」

俺は時たまに、生徒会の手伝いをする時がある。

理由？

それはね、生徒会役員が不真面目過ぎるの、美羽以外。

副会長は現在骨折で入院中。

書記はサボり癖あり。

会計は朝は部活。

庶務は元々仕事しない人。

と、言う事で、俺が仕方なく手伝っているのだ。

あ、言つの忘れてたけど、楓、小夜、美羽と俺は同じ中学出身。

さらに言うなら、三人共幼稚園から一緒。

つまり、そこそこ仲は良いのだ。

多分……。

第2話 わがままな姫様

「喰らえ、我が最高必殺、かめはめ波EXレボリューションっ！
！」

「何っ！！ぐはっ！！」

吹っ飛ぶ俺。

「くそう、何のこれしき、いくぞ我が最強魔法、ググってはいけない検索ワードをググってしまい、後にする事となるあの絶大な後悔の念っ！！」

「な、うう、ぐわゝ・・・」

そう言っつて倒れるのは先程、かめはめ波EXレボリューションを放ったMyクラスメートの重原権三朗^{しげはらけんざんろう}。

超地味メンの男子だ。

「く、くそう・・・」

そして権三朗は力なく倒れていった。

「フツ・・・なかなかの野郎だったぜ」

ハードボイルド風に格好良く決める俺。
決まった……。

「すげえ春吉、あの“スーパーヤサイ人”こと権三郎に勝つちまうなんて……こりゃたまげた!!」

クラスの野郎共がヒューヒューと俺をおだてやがる。
……て、照れるぜツ!!

ん？今何やってんのかって？

そりゃ、毎週恒例の波動拳大会に決まってるでしょ!？
もちろん、教室の後ろで。

まあ……はしゃいでいんのは野郎共だけで、女子は教室前方で
白い目。

「おし、次は俺だ!」

お！新たなチャレンジャーや!!

「さあ、掛かってこい!!」

俺はビシツと身構える。

「行くぜ春吉、みんなの精力合わせて作った元気すぎ玉あ〜!!」

「ふん、こっちは頑張つて作ったトランプパワーを写メろうとして、誤ってタワーにぶつかってしまい、はかなくも崩れさるタワーを見た時のあの虚無感っ!!」

その日の帰り道

「はは、今日の俺はまさかの5連勝、もう世界は薔薇色だー!!」

ガハハハハ、何だか切ない気持ちもあるが、超嬉しい!!

「……つたく、よく男子はあんなバカげた事やってられるよな・
」

俺の隣には楓。

今日はたまたま部活がないらしく、何故だか俺のあとをついてきた。

「なぬ、バカげただと……どうやら貴様も、あの虚無感を味わいたいらしいな!!」

男子なら誰でもやるよね、波動拳大会?

「はあ!?!」

楓はあきれ顔。

「フハハハハ、このハードボイルドマグナムこと木山春吉の餌食となるがよいつ!?!」

いくぜ、我が最強の必殺技、かめはめ・・・

「・・・うざいからシバく」

「・・・え!?!」

楓のドス低い声はなんか・・・怖かった。
つてか、一瞬で現実に戻された・・・。

「な、ちょっと待て、これはかなり理不尽じゃ・・・」

ヤバい、このままだと・・・殺れる俺?

「腹出せ」

は!?!

意味不明な命令。

「な、何で?」

「骨髄を抜く」

な、なんですとお〜!!!!!!
こ、骨髓ッ!?

「ちよっ、まっ、だ、誰かたす・・・」

「シーユー春吉」

そう言つと突然、俺の腹をわしづかみしてきた楓!!

ヤバイ、このままでは確実に殺られる・・・。 ってか握力パネ
エ!!!

「まて楓、これマジで痛いッ!!」

「いいから骨髓を出せ」

「だから何故骨髓にこだわるんですか!?!」

ああ・・・マジでヤバイよこれ・・・。

あ、走馬灯が見えた・・・お花畑や綺麗な川まで!!

い、いかん、頑張つて自我を保て、俺。

・・・けどやっば限界近し。

もう俺が半ば命を諦めていたその時!!

「・・・あ、そうだ!!」

「あ!？」

俺は咄嗟に声を上げ、楓の殺人行動に隙を作る。
俺はいい作戦を思いついた。

「わ、分かった。もし、お前が俺の事許してくれんなら、後で
ケーキおごってやる!」

俺はちらつと向かい側のケーキショップを確認し、ここからの起
死回生に繋げる。

つてか、あんな所にケーキ屋あったんだ。

「ケーキ……」

お!？ 食いついたか？

俺を掴む腕から多少、力が抜けたのが分かる。

よし、もう一押し!!

「た、たまにはいいだろ？ お前、柔道ばっかであんまり甘いも
ん食ってないだろうし……な？」

楓は自宅が柔道教室。

親から強制的に柔道を習わされ、さらに今部活は柔道部所属。

「甘いもの……」

こんな狂暴……いや凶暴な楓も一応は女の子。
甘いものは大好きなハズ!!

・・・多分。

「ケーキか・・・よし、乗った!」

そしてパツと手を離す楓さん。

あゝ死ぬかと思った。

俺、生きてる!!

「よし、じゃあ早く行こうぜ春吉!」

超笑顔の楓。

俺は腹を摩りながらつくづく思う。

・・・コイツ、本当に女か!?

スイーツショップ「ベリーテイスト」

ここは主に苺やブルーベリーなどといったベリー系のスイーツを扱う店。

店の名前の「ベリー」はベリー系のベリーと、凄いと云う意味のベリーが掛けてあると言ふ事は、もはやどうでもいい。

店は2階建て。

1階でケーキ等を購入し、2階のテラスで購入したものを食べる。
まあ、そんな感じだ。

「んじゃ、いったただっきまゝす!!」

そう言つと楓はもの凄い勢いでケーキにかぶりつく。
すげえ……

何か……見てるこつちが清々しくなる食べっぷりだ。

「しかし……」

結構高かつたな……

今、奴のトレーにあんのは苺ショートケーキに三種類のベリーが
乗ったタルト、ブルーベリーパイ、ラズベリーとストロベリーのク
レープ、苺ヨーグルト、ベリーミックスジュース。

正直、まだ今月は半月ぐらいあるのに……もうピンチだったり
する。

あ、つーか今、両親家にいないんだ!!

参つたなあ……

「ん?どうした春吉?顔がバカになつてんぞ?」

「うるせえ!黙って食つてろ」

「ま、元からバカ顔か!!」

「……………」

「……顔に生クリームくっついてるアンタには言われたくない。
に、しても良く食うなコイツ……
もうトレーのケーキが半分を切った。」

「お前……もうちょっと上品に食ったらどうだ？」

ケーキを片手で掴み、そのままパクリ。
せめてスプーン使え。」

「いいんだよ、別に味は変わんねえんだし」

「……普通の女の子はそんな事は言わねえぞ」

本当に、マジでコイツは女なのか？

「うるせえな、イチイチいちいち」

「……すみません」

楓の目が怖かったので追及止め。
本当に恐ろしいヤツだ。

……その時、口にケーキを放り込んでいた楓の手がとまった。

そして何故かこつちを凝視。

「……ん？ どしたの？」

「……まあ、いいか」

そう言つと楓は俺にラズベリーとストロベリーのクレープを手渡してきた……は!？

「今日おごつてくれたお礼だ。遠慮せずに食べ」

……え？

「お礼？ お礼だったて、コレ俺の金で買ったや……」

「細かい事は気にするな！ さ、食べ!!!」

「……細かい事か？」

まあ、とりあえずクレープを一口。
うん、甘酸っぱくてうまい。

それから二人でしばらく食事タイムを楽しみ……

「あゝ腹いっぱい。今日はあんがとなー!!」

超満腹顔の楓。

なんだか楓の笑顔見たの、久しぶりだな……。

「いや、別に……っーかお前、口にクリーム」

「えっ!?!」

最後の最後で、珍しい楓のビックリ顔が見られたから、まあ今日は良しとしますか。

第3話 無口な姫様

「はい、じゃあ今から体育の授業を始めます」

葉城高等学校二年三組、木曜日二時間目の授業は体育。

「今日は体育担当の鯖江先生がお休みのため、今日の体育は自習としてサッカーをやるうかと」

体育自習担当の教師がサッカーと言った瞬間、野郎共から数多くの歓声がッ!!

「うわ、マジで!？」

「先生最高!!」

「やべー、最高!!」

「神様よ、感謝!!」

・・・まあ、もし今日が自習でなければ長距離走だった事を考えると、野郎共の気持ちは良く分かる。

「では、今からチームを2チーム作ってくれ」

ウチのクラスは男子16人、女子18人、計34人。
まあ、当たり前だが男女体育は別々なので、チームは野郎共16人を二等分、1チーム8人づつ。

「では、キックオフ!!」

自習担当がホイッスルを吹き、ゲームスタート!
ちなみに俺はキーパー……つまらん。

本当ならキャプ○ン翼を越えるスーパーシュートを決めるはずだったのに……。

「……仕方ない、ここは日頃イメージトレーニングで鍛えている俺のジャンプ力で……ばふっ!!」

ゆ、油断した……

ボールが顔面にクリーンヒット!!

「春吉い、大丈夫かあ? ってうわ、鼻血!？」

他の連中は皆、俺の顔を張ったゴール守備に歓声を上げつつ、俺の鼻血に多少引き気味……

「……………」

ああ……情けない。

「・・・で、サッカー開始5分でコレか・・・」

「コレです・・・」

現在、保健室。

結局あの後、鼻血がいつになっても止まらなかったから、とりあえず保健室まで来てみた訳ですよ。

「まあ・・・鼻が骨折している訳でもないし、とりあえず押さえとけばそのうち止まるだろう。しばらくそのまま押さえとけ」

養護教諭の言い付け通り、我が最強パワーで鼻を押さえる俺。

・・・鼻がジンジンしてきた。

「・・・とりあえず私、ちょっと職員室行ってくるから、そのまま押さえて待ってて」

「了解っす」

そう言つと養護教諭は一旦職員室へ。

・・・今、誰か来たらどうしようか・・・。

俺は一人寂しく保健室で鼻を押さえる。

「……はあ」

そりゃ、ため息も出るよ。はあ……。

コンコンツ！！

「おえっ！？」

び、ビツクリした……。
突然のノック。

そして……

ガラガラガラ！！

やべー、人が入って来ちゃうよ！！

「あ、今、保健教諭はここに……」

「……あ」

「あー！！」

俺はさらにビツクリ！

「なんだ、小夜か……」

そこにいたのは荏咲小夜。俺の昔からの友人だ。

「……鼻血？」

「ん？あ……」

ヤバ、恥ずかしい所見られた！！

「……大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫……」

現在小夜は体育着にハーフパンツ姿。

「さ、小夜こそどうしたの？」

鼻を押さえているから声が……

「……足、捻った」

小夜は右足をちょこつと触る。

そう言えば、今日の女子の体育って確かバスケットだったっけ。

「そっか……大丈夫か!？」

「……ん」

微妙な顔だな……

日頃ポーカークーフェイスの小夜はあまり感情を外には出さない。だから、こう言う時は非常に分かりづらい。

「まあ、とりあえず座りなよ、まだ足痛むんだろ？」

「……うん」

小夜はとりあえずベッドへ腰掛けた。

「……」

「……」

く、空気、重たくないか!?

「……」

「……」

う……気まずい。

何か話題を……

「さ、小夜はさ、サッカーとバスケだったらどっちが得意?」

「……うん」

「お、俺はバスケかな?サッカーとか人数多すぎてごっちゃになるし」

なんつー適当な理由言ってるんだ、俺!!

しかし、今は話題作りに集中せねば!!

「……うん、確かにそうかも」

なるほど、小夜もキャプ○ン翼派ではなくスラムダ○ク派か!!

まあ、ぶつちやけ俺はどつちも好きだが。

「や、やっぱりバスケットだね！なんつーかこう、左手はそえるだけ、つーか……」

「……………」

「……………」

女子にこんな話しても分からないか……

「…………小夜、何か楽しい事ない？」

もういいや。

必殺、人任せ！！

「…………マジカルバナナ？」

Oh、ここにそう来るか！！

コイツ…………侮れんな……。

「ま、マジカルバナナ……………」

「…………もしくは、古今東西？」

…………小夜に悪気はないんだ。

ただ…………この子の考えてる事は本当に分からない…………。

二人で保健室で鼻押さえながら古今東西。

さて、あなたならどうする？

「なんか・・・他に・・・考えなくてもできるよつな・・・」

「・・・じゃあ」

「ん？なんか思いついたか？」

「・・・み〇もんたのモノマネやって」

「・・・はい？」

「み〇さんのも、モノマネ？」

「・・・」(コクリ)

「本気で言ってるのか？」

「・・・」(コクリ)

「つーか何故み〇さんなの？」

「・・・何となく」

なっ・・・いつも感情を表に出さない小夜の瞳が・・・瞳がッ・・・

・
!!

輝いてやがるっ!!

め、珍しい・・・こんな瞳、珍しい・・・

「……………だめ？」

「……………いいだろう」

もはやノリで答えた俺。……………もう大怪我は免れないな。

「……………っでは」

「小夜さん、本当にいいんですね。ファイナルアンサー？（み〇
声）」

「……………」

ま、まさかのノーリアクションッ！！

「……………あの……………俺のモノマネ……………」

「……………微妙に似てた」

……………微妙？

もう俺は……………燃え尽きた。

第4話 真面目な姫様

「いいかお前ら、明日は数学のテストやるから、しっかり勉強してこいよ」

こう言うのは、ウチのクラスの数学担当教師、あしもとけん 葦本賢、今年で60のじいさん教師。

「うわあゝ、嫌だな・・・」

「やべーよ、俺ちつとも勉強してない」

「ははは・・・もう・・・終わりにしたい」

珍しい！！いつもあのハイテンション馬鹿の野郎共が、今はスーパーネガティブボーイになっているではないかッ！！

「いいか、テストで50点以下をとったら補習だからな！！」

ハードル高ッ！！

は、半分以上取んなきゃダメなの！？

「テストは明日の1時間目だからな。はいじゃあ週番、号令」

「……………まいったな、これは」

「まいったとか言うな!!!」

現在図書室。

全教科中数学が2番目に不得意な俺は、自称数学得意なハンサムボーイこと、権三郎に数学を教わっている途中。

「いいか春吉、三角形つてのはTangentにCosine、Signの三つが大事で、三角形ABCそれぞれの辺や角との関係は……………」

……………眠たい。

「つまり、三角形の総面積つーのは……………って春吉い!!!寝るな!!!」

「……………む?グッドモーニング権三郎」

おゝ、綺麗な朝日が眩しいなあ……………(本当は夕日)

「……………もう知らん、俺は帰る」

「え!あ、ちよつ、待って……………」

行ってしまった……………

「……………どうすっかな……………」

葦本の補習は嫌だな・・・あいついつも竹刀常備だし。

つかそれより権三朗帰っちゃったけど・・・

あいつ出番が欲しいとか言ってた割にはすぐ帰っちゃったな・・・

もつと粘ればよいものを。

「ん？春？」

「ん？」

背後から声が！！

「こんな所で何してんの？」

「ん、ああ・・・美羽か・・・」

今、俺の目の前にいるのは濱垣美羽。我が校の生徒会長だ。

「へえ・・・春が勉強だなんて珍しいね」

「バーロー、したくてしてんじゃねえよ」

「まさか葦本のテスト勉？」

「イエス・・・」

はあ・・・勉強だなんてつまらない。

「ちょうどいいや！私も勉強しに来たから、一緒に勉強しない？」

「ん？ああ、別に構わんが」

そついや美羽って頭良いんだっけ。

「で、どこが分からないの？」

「ああ・・・ここ、イマイチ二次方程式と言っちゃつが・・・」

第一、方程式って何だ？XやらYやらかつこやら何やら・・・？

「方程式って・・・中学生で習う事だよ？」

うわ・・・コイツの目、俺の事バカにしてる目だ・・・

「だ、だつてよ・・・」

「まさか春、因数分解や素因数分解とか、知ってるよ・・・ね？」

「インスウブンカイ？ソインスウブンカイ？」

「・・・これは重症たわ・・・」

みんなッ、因数分解って分かる？

作者ですらうる覚えなのに、そんなの分かるかあ！！！！

「・・・美羽様、どうか、どうかこのポンコツをお救い下さいませッ！！」

もう自分ではどうにもならない事を悟りました。

「・・・よし」

バシーンつと机に手を着く美羽。

「では、この濱垣ティーチャーが一肌脱ぎますか!!」

「よっ、待ってました!!」

多分権三郎よりかは分かりやすい授業をしてくれるハズだ!!

「よし!!」

長い黒髪を一つに束ね、軽く腕捲り、額には日の丸鉢巻き、そして右手には竹刀・・・竹刀いつ!?

「どっからそんな物を・・・」

「じゃあまず素数について!!」

「だから・・・その竹刀、いらなく・・・」

パシッンッ!!

「うわっ!!」

「無駄口たたかないの!!」

こ、怖えッ!!

美羽はスイッチが入るとかなり熱血になる事、忘れてた・・・。

「じゃあまず素数って言うのはね、1とか2とかの・・・」

始まってしまったか……。

今日バイトあんだけど……間に合うかな？

パシ〜ンツー！

「ひい〜!!」

「ほら、ボサツとしてないでノートをとる!!」

「す、すみません」

楓とはまた違った意味で怖い……。

「よし、じゃあ続き行くわよ!!」

「あ、アイアイサーツ!!」

その後、たまに図書室から男性の悲鳴が聞こえた事は言つまでもないな。

「・・・よく頑張ったわね、これできっと明日のテストは何とかなるわ!」

現在午後8時。もうバイトには間に合わない。

「俺は・・・魔界から帰ってこれたのか?」

もうHPは赤く点滅している・・・だ、だれか薬草を・・・

「よし、そろそろ帰りますか。春、行こう!」

「俺は・・・生きているのか?」

「何言ってるの?早く行かないと先生に怒られるよ?」

「俺は・・・生きている・・・ああ、女神アスタルテよ、あああ

・・・

命に感謝、ああ・・・生きるって素晴らしい!!

「春?」

「神様あゝ!!」

え？結局テストどうなったかった？

あ、聞いちゃうソレ？

聞いちゃうの？

うん・・・まあ・・・はい、49点でしたよ。

それが何か？

はい、久しぶりに泣きましたか何か？

まあ美羽には殴られましたよ。グーで。

うん、はい、補習ね。

やりましたよ、葦本の竹刀の元で。

二日連続竹刀は精神的にきつかったです。

え？他に？ああ、楓や権三朗もいたかな？ああ、いたね。

これからはもっと頑張ります（泣）。

第5話 金色の連休

5月・・・

俺、木山春吉が葉城高等学校二年生になってから約一ヶ月がたった。

「野郎共、明日からはゴールデンウィークだ！」

『ファイバー!!!』

ウチのクラスの担任、わなみたつ和波辰が叫ぶと、野郎共はみんなで仲良くファイバー!!!
俺もファイバー!!!

「ファイバー!!!?」

『ファイバー!!!』

「マックス!!!?」

『ウエーバー!!!』

「ザ・ワールド!!!?」

『無駄無駄無駄ア!!!』

何かの宗教団体みたいだな、ウチのクラス。

ま、とにかくもうすぐゴールデンウィークだ。

「と、言うわけで明日、映画見に行かね？春吉」

休み時間、俺の机の周りには男友達がいっぱい。

「明日？映画館なんて混むんじゃない？」

「いいじゃねえか、俺、見たい映画あんだよ」

「何見たいの？」

「そりゃライオンゲームだろ」

「ああ・・・成る程」

明日は確か・・・バイトは無し。

財布に余裕は・・・若干あり。

OK、明日はファイバーDay、sだな。

「じゃあ後で集合場所とかメールするから！」

「OK!!--」

ひゃっほーい、明日の予定が出来た！！

その後、眠気と言う軍勢と戦争しつつ授業を受け、なんとか4時間目の世界史を乗り越えた。

「お昼だ！！」

野郎共が適当に机を寄せ合い、弁当やパンを食べはじめる。

「春吉、お前今日も自作弁当？」

「イエス・・・あ」

はい、毎度のパターン

「弁当忘れた・・・」

「はい残念〜！！」

「一人で学食行ってこ〜い！！」

これが現実、悲しいな…………。

「……………」

俺はスツと立ち上がり、半泣きしながら食堂へ…………。

んで、食堂。

一人で食堂なんていつ以来だろうか？

あーあ、他の奴はみんな2、3人でテーブルを囲っているというのに…………。

とりあえず俺は券売機の前へ。

…………何にしようか？

カレー？魚定食？うどん？はたまたナポリタン？

「うわ、見るよあいつ、一人で学食とか…………」

ひそひそ声がまる聞こえなんですけど…………

よし、心が死んじゃう前に早く食事を済ませよう！！

「……………春吉か？」

ナウー！！誰か知り合いに見つかった！？

恐る恐るバックをルック！！

「はは、やっぱり春吉だ!!」

「……………春吉?」

「……………まさか、一人で食事しようとしてた?」

そこには、こんな場面で会いたくない奴らがいましたとき。

「……………あ、アハハ……………はあ」

楓に小夜に美羽……………

最悪なパターンやな。

絶対イジられる。

……………今、僕はこの学校で上位クラスの可愛い子三人と、学食を食べています。

まあ、良いのは見た目だけで、中身はアレですが……………。

「みんなさ、このゴールデンウィーク何か予定あるの?」

美羽は鮭定食を食べながら、話題を振る。

「あたしは毎年恒例の柔道大会」

カレーをガツガツ食いながら答える楓。

ちなみにライスは大盛り、ルーは激辛。

これで何故、こんな細身の体型を保てるのだろうか……。

「小夜は？」

「……………いつも通りバイト」

うどんを食べながら答える小夜。

確か小夜ん家は母子家庭で、さらに7人姉弟。

長女の小夜がバイト等をしないと、生活がキツいんだとか。

「じゃあ……友達がいない春吉君は？」

カツチーン

「友達と映画……！」

ざけんな！俺にもフレンドくらいいるわッ！！

……………んな事よりも……………。

「ははあ……春にフレンドなんているのかねえ〜!？」

ニヤニヤ顔の美羽がウザイ。

……………んな事よりも……………。

俺は話の合間をぬって、ちらつと周りを確認。

周りの野郎共がこつちを凝視。

周りからの視線が・・・痛いな。

学校でも上位の美少女三人と食事をしている冴えない男子。

・・・野郎共からしてみれば、かなりウザイんだろうな。

ハハッ、優越感。

「じゃあ美羽は何か用事あんのか？」

俺がテーブルに視線を戻すと、楓が美羽に質問中。

「私は・・・まあ、買い物とかいろいろ」

ハハハ、これはまだ予定がないと見た。

「本当はどうなんだよ!？」

「なっ、ほ、本当よッ!！」

「じゃあ誰と行くんだ!？」

「うっ・・・」

・・・勝った(ニヤリ)

「本当はお前の方がフレンドいないんじゃないかねえのか!？生徒会長さん!！」

「なっ……」

追い打ち成功!!

……実は俺、ちょっとSです。

「は？何言ってるんだ？あたしが友達だろ？」

楓ッ!!なっ……え、援軍だとお!!

「……私も」

小夜まで……

「二人共おっ!!」

あらら、感激中の生徒会長さん。

あいつ、昔から人見知り激しいからな。

楓は他人とケロつと仲良くなるし、小夜は何だか人を寄せ集める
体質だし……。

「……何なんだ？」

俺、孤立してね？

……とりあえず、さっさとこのナポリタン食って、食堂を後に
しますか。

。 八八八、俺、本当に心から友達と思える奴、いるのかなあ〜・・・

第6話 インフルの脅威

ゴールデンウィーク初日……。

今日は野郎共と映画……のハズでしたが！！
さっきこんなメールがッ！！

“悪い、やっぱ今日の映画中止！！タカとナカジーがインフルで
ダウンしたそうなの。”

なので、今日は中止。

クレームはインフルの二人まで

By 権三朗”

ちなみに、タカとナカジーってのは、一緒に映画行くハズだった
メンバー。

で、今俺は……

一人映画館の前。

さみしッ！！

つーか俺が映画館に到着した時に来たこのメール……タイミン
グ悪くね？

「さて……どうしたものか……」

このまま帰ってもいいのだが……それじゃつまらない。

「……とりあえず腹減ったな」

キュグルル〜っとなる腹。切ない。

ちなみに現在午前11時半。

空は快晴、気温は程よい。

とりあえず俺は空腹を満たすため、近くのファーストフード店へ。

映画館近くのファーストフード店。

ここはテーブル席以外にカウンター席もあるので、一人でも利用しやすい。

「いらっしやいませ〜!!」

営業スマイルを浮かべ、店員はレジの前へ。

……やはり、昼時だけあって店内は混んでるなあ……。

「店内でお召し上がりですか？」

「あーいや、持ち帰りで」

店内での食事を断念。

「ではご注文の方をどうぞ」

結局俺はツインチーズバーガーセットにつまつまチキン、そしてホットアップルパイを注文。

現在俺はその注文した品が完成するのを待っている所です、はい。

・・・俺は何となく携帯を取り出し、時刻を確認。

・・・そう言えば今日、楓の出場する柔道大会開催日だったっけ。頑張ってるのかな？

「・・・30番でお待ちのお客様？」

俺はハッと気づき、手元の番号札を確認。

あ！30番だ！！

いかにいかに！！

「あ、はい！！」

俺は店員の元へ・・・あれ？

「・・・お客様、お品物でございます」

「あ、はぁ・・・」

俺は品物を受け取りながら、店員の顔を確認する・・・ってやっぱり。

「よっ！小夜！！」

「・・・え？春吉？」

やっぱり小夜だ。

向こうも今気付いたみたい。

「ここでバイトしてんだ！！」

「・・・」

相変わらず無口・・・そんなんでやっていけないのか？

それより・・・

制服似合ってるな・・・。

「・・・ん？」

「ん？あぁ、いや、何でもない」

首をちょこつと傾けて、ん？、は破壊力抜群。

これは一般青少年には刺激が強すぎる！！

「あ、俺、そろそろ行くから」

いかんいかん、これ以上ここにいと小夜のバイトの邪魔になっ
てしまう。

「バイト頑張れよ！」

「……………あ!！」

俺が店から出て行くことすると、小夜に呼び止められた。

「……………えっと」

「ん？」

「ありがとうございました(ニコッ)」

ビブラバツ!!

た、太陽の笑みやッ!!

「あ、ああ……………」

久しぶりに見たな……………小夜の満面の笑み(営業スマイルだが)。

俺はファーストフード店を後にし、一旦帰路に着く事にした。
家帰ったらゲームでもすんかな・・・？

俺はチャリのスピードを少しだけあげる。
風が気持ちいいね〜！

・・・今なら時を止める事が出来るかも！！

まあ、無理だけど。

「俺だって、スタンドさえあれば・・・」

その時、俺は道路右側にあるアリーナの駐車場に、見た事ある奴
を発見！！

・・・どうしょ？

暇だし、行くか。

俺はチャリの方向をアリーナ側へ変更。

少しスピードを上げ、奴に接近！！

わお、風がすげえ！！

んな事より、

「そこのお嬢さん、こんないい日に一人で何やってんの？」

「え？」

俺の声に奴

美羽が気付き、くるっとこっちに向いた。

「は、春？」

「イエス、Springです!!」

つまらんシャレを言った所でチャリから降りる。

「何してんの？こんな所で？」

まさか本当に友達いないの？コイツ!?

「何って、楓の試合見に来たに決まってるじゃない!!」

「カエデ!？」

あ、そうか!

今日の楓の試合、ここのアリーナでやるんだっけ!!

「春は何してんの？」

む・・・何と答えるべきか・・・

「ファーストフード店行って昼飯調達！」

「ははん・・・一人で!？」

「ハッハッハ、俺は一人ではないッ!!いつも心にはもう一人の自分が・・・あ？美羽？」

「……………」

そ、そんな目で見るなあ〜!!

「…………とりあえず、春も暇なんだ」

「まあ…………うん」

「じゃあ一緒に柔道の試合、見ない？」

「楓のか？」

「うん。だって他の友達みんな柔道興味ない、って言うし……………」

「

まあ…………暇だし、いいかな…………。

「おう、じゃあ見に行こうぜ!!」

本日の暇つぶしが出来ました。

アリーナ入場料&試合観戦料は無料でした。

「えっと……」

俺はアリーナに入場した時に貰った試合表を確認する。

「楓は女だから(当たり前)……午後0時から第三アリーナで
葉城高校女子VS岡田工業高校女子……か。うわ、初戦は岡工か
……」

岡田工業高等学校

まあ、ぶつちやけ不良の集まりみたいな学校。

ヤンキーやスケバンなどと言う絶滅危惧種が数多く在籍している
らしい。

「岡工か……楓、大丈夫かなあ……?」

心配そうな美羽。

「大丈夫だよ、あいつは半男生物だから。そんじょそこらのメス
共には……」

「誰が半男生物だって……?」

……背後からパキッポキッと言う関節音が!!

「あ、楓!! 応援にきたよ!!」

美羽は笑顔、俺はヤバスな顔。

よし、勇気を持って振り返えろっ。

くるっ!!!!

「ハロー春吉」

そこには、鬼の形相をした楓の姿が・・・

「あら〜可愛いお嬢さん、お名前は何ていうの!?!」

木山流会話術、三ノ型、初めて会った風に話す。

「……………」

い、威圧感スゲー!!!

「もう一度聞こう、誰が半男生物だ?」

「…………権三朗の事です、はい」

「本当か?」

目が怖え〜!!!

「ほ、本当です……………」

「まあ…………今日はいいか」

楓はふう〜ッとでっかいため息。

ああ・・・一安心。

「楓、どうしたの？」

楓のため息に美羽が反応。

「いや・・・何でもない」

ハハハ、俺は気付いた！！

コイツ、緊張してんな！！

「おい楓、今日は確か団体戦だろ？お前ウチの何番目なの？」

恐らく先峰と見た！！

「・・・大将」

「・・・は？」

大将？

大将って、あの裸で、おにぎりで、絵を描いている・・・アレか？

「どうしよう・・・めっちゃくちゃ緊張すんだよ」

・・・これは一大事だ！！

第7話 街灯の下で

「楓、勝てるかなあ〜・・・？」

「勝てるだろ。あいつ半男生物だし」

現在、俺達は近所のアリーナに来ています。え？なんでアリーナにいるのかって？

そりゃ、楓の柔道大会の応援のためだよ。

まあ、詳しくは前話を見てくれ。

で、今第三アリーナの2階観覧席に俺と美羽はいます。

「にしても、あいつが大将とは・・・世も末だな・・・」

「世も末って・・・楓は結構強いらしいよ？」

「らしい・・・」

俺と美羽が客席でゴダゴダしていると・・・

「ただ今より、女子柔道団体戦、葉城高校と岡田工業高校の試合を始めます・・・」

アリーナ内に響くアナウンス。

「お！始まるみたいだぞ！！」

「葉城がんばれ〜！！」

・・・言つとくが、俺はあまり柔道の事を知らない。多分読者の方に難しい事言つても分からないと思うので、見た感じに脳内実況します。

「春、アンタ誰と話してるの？」

「あーいや、何でもない」

おっと、いかんいかん・・・。

「では先峰、葉城高校、本谷雛乃、岡田工業高校、佐橋小夏、両者前へ」

本格的に始まるみたいだな・・・。

葉城の先峰は三年生なので、あまり知らない人だが。

「さて・・・どっちが勝つんだか」

「どっちが勝つて・・・葉城校に決まってるじゃない!!」

必死な美羽。

まあ、我が母校だからな。勝つては欲しいが・・・。

「試合始めっ!!」

おっと、いつの間にか始まっていた!!

アリーナ内の客はまばらなので声援は微妙!!

まあ、とにかく頑張れ!!

まあ、楓以外は割愛します。アハハ・・・

つーか今回の試合、先鋒、次鋒、中堅、副将と葉城の連勝。もう楓の出番はなし。

第一回戦は葉城の圧勝でした。

「呆気なかったな」

「呆気なかったね」

本当に呆気なかった。
まさに瞬殺。

「・・・見る美羽、アリーナの端っこにガツチガチになってる楓がいるぞ」

アリーナの西側の選手入場口付近に、なにやら不審な高校生が！！

「うわー、超ガツチガチじゃん楓・・・」

ロボットみたいにガシャガシャと動いている楓。
ハハハ、珍しいから写メっとこ。

「まあ奴は大将だからな・・・っーか、本当にあいつ大将なのか？」

確かにバカ力はあるが・・・

「大将だよ、だって楓はウチの柔道部で1番強いんだって!!」

「1番!?!」

さ、三年生の先輩をさしぬいて1番!?!

「うん、だから二年生ながら大将になったんだって」

「ほへへ・・・」

凄いな・・・さすが実家道場っ子。

「あ、次の試合始まるみたいだよ!!」

美羽の目がマジ・・・

確かコイツも柔道のルール知らないのに、よく試合に集中できるな・・・。

「次は・・・松田高校か・・・知らん名だな」

松田・・・松田・・・うん、やっぱり知らない。

「では、これより松田高校と葉城高校の試合を始めます」

まあ、試合は接戦。

先鋒はこっちが綺麗な背負い投げで一本、勝利。

次鋒はこっちが判定負けしてしまい、敗北。

中堅は逆にこっちが判定勝ち、勝利。

副将はまたまた判定負け、敗北。

現在二勝二敗、全ては大将、楓の手に！！

〔大将戦、葉城高校、沢那楓、松田高校、藤平華子、両者前へ〕

相手 藤平華子は見た目はゴツイゴリラ的な女性。

うわー、アマゾンとかにいそう。

逆に楓は高二の平均身長よりちょっと小さめ、しかも細身。

楓いわく、柔道は剛ではない、柔のスポーツらしい。

「あいつ、あんなんで勝てんのか？」

奴の足、ガクガクしています。ここからでも見て分かる程に……

「楓……」

美羽は隣で手組んでいます。神様にでも祈ってんでしょうか？

「では・・・始めっ!!」

お、始まった!!

・・・開始わずか10秒、決着つきました。

「ウェイッ!!」

気合いを入れる声？もしくは奇声？を上げた華子は、早速楓に接近、柔道着の袖を掴もうとした
その時・・・

「せいっ!!」

一瞬だった。

咄嗟に楓は華子の下に潜り、一気に背負い投げ!

な、何が起こったのか分からん程、速かった。

「い、一本!!」

奴は天才かッ!?

「す、凄いよ楓、すごぉい!!」

美羽・・・跳ねるな、落ち着け。

「勝者、葉城高校!!」

ここから、他の仲間と笑顔で談話している楓が見えた。
・・・嬉しそうだな。

満面の笑みを浮かべてやがる。

その後、三回戦柳沼高校にはストレート勝ち。

四回戦須貝学園には次鋒が負けたが、その他は勝ち。

準決勝星村高校は、まさかの大接戦。

先鋒、次鋒が相次いで負けてしまったが、中堅、副将、大将の楓が何とか勝ち、決勝戦進出決定！！

「さっきの高校、ヤバかったよね？」

「ああ・・・星村は柔道の強豪校だからな。あの半男生物はよく頑張ったよ・・・」

さっきの対星村、大将戦は、まさに一進一退。

何とか楓があっちの大将に食いつき、ギリギリの所で勝ったのだ。

「次はいよいよ決勝・・・相手は征咲高校か」

ああ・・・外はもう薄暗くなってら・・・。

・・・本当に葉城は決勝戦まで来たんだな。

「春、試合始まるよ!!」

「ん? ああ・・・」

いよいよ決勝戦。

泣いても笑っても、これが最後!!

「女子柔道団体戦決勝、征咲高校と葉城高校の試合を始めます」

アリーナ内にアナウンスが響く。

美羽の目はマジ。よし、たまには俺も集中しよう!!

73

先鋒戦

試合は葉城の勝ち。

こちらの先鋒は相手の足元を狙い、何とか相手をひっくり返し、固める。

んで勝った!!

次鋒戦

試合は征咲の勝ち。

次鋒の三年生は、今日はスランプらしく、呆気なく一本を取られてしまった・・・。

中堅戦

試合は征咲の勝ち。

まさかの二連敗。こっちの中堅の僅かな隙について相手が一本。

副将戦

試合は葉城の勝ち。

ここに来て葉城柔道部部长が意地を見せた。

綺麗な巴投げで一本。

そして・・・

「ついに来たか」

大将戦！！

「楓え〜！！」

美羽は手でメガホン作って叫ぶ。

きゃー恥ずかしい、隣にいるこっちの身になれ！

〔大将戦、征咲高校、尼郷夕香、葉城高校、沢那楓、両者前へ〕

二人は両陣営からアリーナ中央へ。

相手は至って普通の少女と言った感じ。

楓の方は、もう緊張はしてない様子。

「・・・ん？」

その時、ふと楓と目が合った。

中央へ移動中、たまたまこちらを見た楓と、目が合ってしまった。

「あ……………」

次の瞬間、楓は慌てて前を向く。
……ん？顔が……赤くないか？

とにかく楓は急ぎ足でアリーナ中央へ。

「……春、今、楓と目え合った？」

どつちやら気づいていたらしい美羽。

「ん？ああ……………」

ふくん、とそっぽを向く美羽。

どうした？

「では、試合始めっ！！」

おっと、試合が始まってしまった！！

お互い、睨み合うようにギリギリ動き……

パツと楓が相手の襟を掴んだ……が、呆気なく降りはらわれた。

……あれ？

今、攻めるタイミングではなかったような……

「ん？」

また攻めた……しかし、また相手に降りはらわれ、しかも今度はこつちの袖を掴まれる始末。

今のは素人でも分かる、あれは攻めるタイミングじゃない。

何を焦ってたんだ、あいつ……？

「……ッせいっ!!」

また強引に攻めた!!

バカかあいつ、体格差を考えず、前に踏み込みやがった!!

そして……

相手は攻めて来た楓をすんなりかわし、足を引っ掻けそのまま倒す。

「……ッ!!」

楓の顔は、驚きに満ちていた。

「一本ッ!!」

審判がフラッグを上げる。

その瞬間、征咲応援サイドからは歓声が上がった……

『うおおー!!!』

会場は熱くなる。

相手チーム大將はガッツポーズ&笑顔。

一方、楓は……下を向き、俯いたまま……。

ここからでも分かる、あいつ……震えている。

「楓・・・・・・・・」

隣を見ると、美羽が心配そうに楓を見つめていた。

「3対2で征咲高校の勝ち、礼!!」

『ありがとうございますあ!!』

アリーナ中央での試合後の挨拶が終わり、両チームは自分達の陣営へ。

「葉城、負けちゃたね・・・一応小夜に連絡いれとこ」

美羽は隣で携帯を取り出し、小夜にメール。

俺は何となくアリーナ西側の葉城高校陣営に目を向けると・・・

「・・・・・・・・ん?」

仲間達からの慰めの言葉を無視し、一目散にアリーナの外へ走り出す少女が一人。

「・・・・・・・・楓?」

楓だ・・・

「ん？どうしたの？」

美羽の目線は携帯の画面、楓に気付いていない。

「あ、俺ちよっとトイレ行ってくる」

「はい」

俺はとりあえず席を立ち、アリーナの外へ。

アリーナの外へ出ると、外はもう真っ暗。

俺が辺りをキョロキョロ見渡すと、遠くの街灯の下に柔道着姿の少女を発見。

下を向き、拳は強く握られ、体は震えている。

「まったく、世話の掛かる女だ」

仕方ない、このスーパーハードボイルドマグナムの俺が直に行つてやるか。

少し小走りで楓の背後へ。

「おい」

俺が声を掛けると、楓の体はビクツと反応。

街灯の明かりに照らされてる楓の姿は、いつにも増して小さく見える。

彼女の着ている柔道着はしわくちゃになっており、足元には靴が履いておらず裸足のまま。

多分、アリーナからそのままここへ走って来たのだろう。

「どうしたんだよ？だ、大丈夫か？」

「うっせえな！！」

帰ってきたのは、大声ながらも震えている声。

「どうせ、あたしの事、馬鹿にしに来たんだろ！？」

「はっ！？」

その時、楓は体をこちらに向けた。

下に俯いているため、前髪が邪魔で顔が確認できない……。しかし、グツと顎を噛みしめ、涙が一粒、彼女の頬を伝ってアスファルトに落ちるのが分かった。

「……とりあえず、慰めないと！！」

「……お前は、良く頑張ったと思うよ、俺は」

これは事実。

確かに楓は、良く頑張ったと思う。

「……嘘だ、絶対そんな事思ってない!!」

「ほ、本当だ!!」

また一粒、涙が彼女の頬を伝う。アカンなコレ。

「か、楓……」

「うるせえ!ど、どうせあたしは、せ、攻めるタイミングも分からない、馬鹿な奴なんだッ!!」

コイツ、あの事自分で分かってたのか。

「……おい」

「もう……こんなじゃ……示しが……つかねえ……」

ぼろぼろと涙が溢れてくる楓の瞳。

……もういいや、後でどつかれても。

俺は右足を一步、踏み出し……

ギョッ!!

「えっ……」

楓をそっと抱きしめた。

「お前は良くやったと思うぜ。大将って言う超圧力の中、頑張っ
て戦ったんだ。スーパースげえよ」

・・・ここで絶対、楓からパンチが飛んでくるな・・・
っと思っただけど、あれ？パンチが来ない。

俺はそーっと楓の顔を伺う。

そこには、涙をボロボロ流し、俺の胸の中で思いつ切り泣いてい
る、楓の姿があった・・・。

第8話 反抗期？

あー・・・嫌だ。

学校行きたくねえ。

今日はゴールデンウィーク明けの初日。

学校行きたくねえよ、もう嫌だよ。

・・・何故ってか？

貴様ら前話読んでねえのか？

・・・はい、アレです。あの時調子乗って楓と・・・ハグしちゃいました。

その後、まだ半泣きだった楓を家まで送って行ったつきり、まだ一度も会ってねえんだよな・・・はあ・・・。

今日、学校で会ったら、どんな顔すればいいんだ！？

・・・とにかく、もう帰りたい（現在登校中）。

学校到着。

「ついに・・・来てしまったか・・・」

学校で俺は“ちょっと馬鹿だけど真面目な奴”的なキャラで通っているから、学校ふける事は出来ないし・・・。

「おお、そこにいるのは春吉か？」

「ひいつー!!」

突然、後ろから声がッ!!

・・・っーかこの声

「いや、また偶然だね!!」

「・・・やっぱりか」

そこにいたのは権三朗君でした!!

「何用だ、用がないならさっさと消えろ」

「ヒドゥッ!!せっかくの出番だと言っつのに!!」

ひよろひよろしてる権三朗。
今はコイツに構っている暇はねえ。

「ねえ春吉、何かお話ししない？そうすれば僕の出番が増え……」

「失せるッ!!」

久々にブチ切れ顔を披露。

まあ、今そんなにブチ切れている訳ではないのだが。

「あ……ああ……調子乗ってすみません！」

権三朗には効果テキメンだから、まあ楽。

「脇役風情が調子乗るんじゃないやねえよ!!」

「す、すみませんッ!!!!」

半泣きしながら権三朗は教室へダツシユ。

ああ……朝は疲れるなあ……。

俺は半ば覚悟を決め、自分のクラスの前へ来ていた。
・・・決めた、もう今日は一人、机に伏せてよう・・・。

ガラガラガラッ!!

俺がため息をつきながら扉を開けると・・・

「おー春吉!!」

「・・・!!?」

教室中央付近にいた楓がこちらに向かい手を振ってる・・・

・・・随分、ケロツとしてんじゃねえか。

「おう・・・」

とりあえず返事。

仕方ない、俺は顔を伏せつつ自分の席へ。

ハイそこ、ウブとか言わない!!

「よ!!この前は恥ずかしいとこ見せちまったな!!」

俺が席に着くと、トコトコと俺の席の前へやって来た楓。

「あ、ああ・・・」

いかん、目が合わせられない・・・

向こうはいつも通りの笑顔。

「何か悪かったな、迷惑掛けちゃったみたいだし」
「いや、別に……」

な、なんか……コイツの泣き顔みてから……変に意識しちゃ
ってる俺……ッてわああ!!
何考えてんだ、俺!!

「どうした？」

「はッ、いや、何でもな〜い!!」

ハハハ、と笑ってごまかしておこう!!

ガラガラガラッ!!

「はい着席〜」

担任登場。

「あ、じゃ!!」

楓は自分の席へ。

「はい、じゃ〜出席取るぞ……赤佐」

「はい!!」

「市原」

「ほ〜い」

「荏咲」

「……………」

「ん？荏咲？」

シーン……

「あれ？今日は欠席か？」

担任はとりあえず出席簿にチエツク。

つーかあれ？本当に小夜がいない。

珍しい……無遅刻無欠席の小夜が……。

「はい、じゃ次……沖島」

「はい!!」

1時間目終了後の休み時間。

俺の席には相変わらず野郎共。

「もう最悪だぜ。全然手に入らないんだよ、火竜の天鱗」

現在、みんなで携帯ゲームのスイッチオン。
モンスターを狩ってます。

「ハッハッハ、俺は天鱗三つ持ってるぜヨ!!」

俺はニヤニヤ。

だってあのレアアイテム、火竜の天鱗を三つも持ってたぜ!!

「チクシヨ、何で春吉ばかり・・・」

「ハッハッハ、うらやましいか？ハッハッハ！」

俺が上の者の気分を味わっていると・・・

ガラガラガラッ!!

「ん？」

教室前方の扉が開き、小夜が入室。
ん？遅刻か？

「おう!!」

俺は椅子に座りながら首だけ小夜の方へ向ける。

「・・・・・・・・」

シカト!?

小夜はトコトコと自分の席に行き、着席。
そのまま机に伏せた。

どうしたんだ？

「おい春吉、今から銀火竜行くけど、参加するか？」

「ああ・・・」

とりあえず、今はゲームに集中しよう。

放課後

「ねえ春」

「あ？」

現在、生徒会室。
いつも通り、生徒会の手伝い。

「今日の小夜、様子おかしくなかった？」

「小夜？」

「うん……」

美羽はパソコンで生徒会プリントを作りつつ、俺に質問。

そう言えば、いつもの小夜なら返事してくれるのに、今日はシカトされたな……。

「あれじゃね？反抗期って奴じゃねえの？」

小夜の反抗期……想像がつかんが。

「反抗期か……」

美羽はパソコンのキーを叩きながら呟く。
「つかコイツ、タイピンググうまっ！！」

「まあ、もしかしたら今日嫌な事があっただけかもしれないし、まだ何とも言えないな」

「うん……」

そう、まだ何とも言えないのだ。

第9話 ヤンキーさん

学校からの帰り道。

「ふわあ〜・・・」

ヤバ、眠い・・・

今日は学校で寝なかつたからな・・・

ずーっと机の下に携帯ゲーム忍ばせて、狩り三昧でした・・・はあ。

いつも深夜アニメ見ている俺は、学校で寝ないと・・・脳が・・・やばくなる。

ああ・・・寝てしまつ・・・。

歩きながら寝ると言う、前代未聞の偉業を今、俺は達成しようとしている！

寝るな俺、幸い今日は見たい深夜アニメはない。

家に帰ったら思う存分寝られるのだ。

だから・・・ここで・・・寝ては・・・いけない・・・グウ。

その時!!

「誰か、誰か助けて〜!!」

・・・は？TASUKETE？

「助けてえ!!」

・・・確かに聞こえた!!
多分、小さい男の子の声だ!!

と、とりあえずよく耳を澄ませてみよう。

「・・・おいガキ、大人しくしねえか!!」

「だ、誰か・・・」

「黙れガキ、シバくぞ!!」

・・・これは・・・近くのビルの路地裏からだ!

「う・・・どうするか・・・」

助けに行くか、スルーするか。

しかし、半分寝ていた俺の脳は、何を考えたのかそのまま路地裏
へ。

普通、携帯を110に設定した上で突入が当たり前・・・。

案の定、俺が路地裏に行くと、ヤンキーの皆様が少年相手にカツアゲ中でした。

「んあ、誰だテメエ」

ヤンキーは五人、そのウチの一人が俺を発見、うわ、メンチ切られた!!

「え!!あ・・・」

ここに来て眠気が覚めた!!

つーか今更になってこの行動を後悔!!

眠気のバカヤロー!このタイミングで消えんじゃねーよ!!

「誰だつて聞いてんだよッ!!」

ヤンキーさんがこちらへやって来て・・・俺の胸倉をギューつと

アカン、このままだとシバかれる。

「あー、ちよ、ちよつと待ってください!!」

とりあえずお話をッ!

「あー!!何だ!??」

ヤンキーの顔ごっつい・・・いや、今はそんな場合じゃねえ!!

「いやー、あの・・・貴方がたは今、何をなさっていたのかと・・・

・・・?」

俺は少年の方をチラ見・・・他のヤンキー四人に捕まっていますね、アレ。

「あ？見て分かんねえのかよ？カツアゲだよ、カ・ツ・ア・ゲ」
ヤンキーさんが笑ってらっしゃる・・・。

「アハハ、そうでしたか、じゃあ僕はこれで・・・」

「あ？何言ってたテメエ？」

・・・泣きたい。

「何とは・・・？」

「テメエ、こんなんで帰れると思った？」

「・・・ハハハ、ですよええ」

・・・俺の脳内に選択肢が現れた。

- 1、このヤンキー殴って、他のヤンキーも殴って、少年救助。
- 2、有り金全て渡して土下座。
- 3、もう諦める。

・・・よし、よくしよう・・・と、思いきや!!

ドスッ!!

「ぐはっ!!」

ヤンキーさんの腹にパンチ!!

よし、胸倉を掴むヤンキーさんの手が放れた!!

俺はダッシュで少年の元へ!!

「テメエ!!」

他のヤンキーさんブチ切れ!!

ヤンキーさんのパンチが飛んできた!!

「フッ!!」

俺はそれを何なくかわし・・・

ドスッ!!

「がはっ!!」

もう一人いたヤンキーさんの蹴りをもろに喰らいました。

「弱っ!!」

ヤンキーさんが笑ってらっしゃる・・・

俺はむせながらも少年の元へ・・・そして

「今のうちに逃げろ！！！！！」

俺、カツコイイでしょ！？

ヤンキー四人に向かいタツクル！！

「うおっ！！！」

怯んだ！！

「早く逃げろ！！！」

俺は叫ぶ！！

少年は涙で顔面くしゃくしゃにしながらダッシュ！！

「あ、しまった！！！」

ヤンキーさんの一人がそれに気づき、少年確保へ向かったが・・・

「させるか！！！」

俺はさらにタツクル！

「なっ！！！」

ヤンキー再び怯む！！

少年は一度こっちに振り返ったが、そのままダッシュで行ってしまった。

「・・・よし」

俺は・・・はにかんだ！！
ハハッ！！

その後、ヤンキーさん達にボコボコにされましたが・・・。

え？良くあんな度胸のあること出来たな、てか？
まあ・・・あの時は自分に暗示掛けてましたからね。

俺はモンキー・○・ルフィなんだって。

次の日

「・・・春吉か？お前」

権三朗が聞いてきた。

「ああ」

と、返す俺。

「アンタ、誰？」

楓が聞いてきた。

「春吉です」

と、返す俺。

「お、お化けえ〜！」

美羽が塩投げしてきた。

「やめて下さい」

と、返す俺。

まあ、皆のリアクションは当然だろう。

今、俺の顔は試合に負けたボクサーみたいな顔になってるのだ。
アザは当たり前、内出血、たんこぶ、擦り傷、切り傷なんでもあり。

「どうしたんだよ、何かあったのか春吉？」

「権三朗君、良く聞いてくれた。実は・・・」

昨日の事を全て話した。

「・・・マジで？」

「イエス、マジで」

その後、カツアゲされヤンキーさんから解放された俺は警察へ行こうとしたが・・・面倒臭かったので、そのまま家に直行。

「春吉・・・普通警察行くよね、そう言う場合」

「だから今日行こうかな・・・と」

その時

ガラガラガラッ

担任入室。

「じゃ、また後で」

と、権三朗は一旦自分の席へ。

「おし、みんなおはよう。よし、じゃあ出席取るぞ・・・赤佐」

「はい」

「市原」

「ほい」

「荏咲」

「……………」

「荏咲……なんだ、今日もないのか」

担任の言葉に、俺は小夜の机を確認……小夜はいない。

結局、その日小夜は昨日と同じ、1時間目の休み時間に登校。

「おう!?!」

「……………ッ!?!」

またシカトか……と思ったら、俺の顔を見て硬直。

まあ……そのリアクションには慣れました。

アハハ……と笑うと、小夜はこっちに接近。

「……………春吉、どうしたの?」

「あ、いや、昨日、カツアゲされてた子供を助けてさ」

俺の言葉に小夜はビクツと反応。

「まあ、あの時の俺はモンキー・〇・ルフィだったからさ、ギア3でボコボコにしてやりました!」

俺はガッツポーズ!!

まあ、一部嘘だが。

すると……………

「……………春吉、その少年って……………」

「ん?ああ、名前は知らねえよ?」

そう言いつと……………

「……………春吉、だったんだ……………」

「は?」

何?

「……………多分、その少年……………」

「少年……………」

「……私の……弟」

「……はい？」

「……何？この展開。」

第10話 小さい夜

・・・凄い。

「星乃、シャーペン返せよ!!」

「嫌、だってコレ、私のじゃない!!」

「月也、はやくそのお皿とって!!」

「誰か、七星のオムツ返ろよ!!くせえんだけど!!」

「小夜姉え、はい、キャベツ切ったよ」

「・・・・・・・・・・ありがとう(ニコッ)」

はい皆さん、この展開についてこれてますか？

・・・ここは市営団地の311号室、荏咲家。
まあ、小夜ん家です。

「あ、お兄ちゃんやめてよっ!!」

「ハハハ、ばーかばーか!!」

「あ、お皿割っちゃった・・・」

「姉ちゃんまだあゝ？もう腹減りすぎた!!」

「……………ごめん、もうちょっとだから」

「があゝ!!七星がリバーズしたあ!!」

「……………すげえ。」

事の始まりは今日の休み時間。

「え!!あの少年って…………小夜の弟!!」

「……………(コクリ)」

まさかの急展開!!

「え、マジで!!」

「……………うん」

これは…………たまげた…………。

「……………今日、春吉、暇?」

「ん?ああ、暇っちゃ暇だけど…………」

「……………じゃあ、今日ウチに来て」

ワッッ!?

「え！？な、何で？」

「……………お礼がしたい」

まあ、こんな感じで今、小夜ん家にいます。

お礼……………それは夕飯をご馳走してくれるらしい……………。

しかし……………

「腹減ったあゝ！！」

「お兄ちゃんの……………バカあゝ！！」

「リバースするな！」

「うつせえな、カス」

「お皿があゝ！！」

「……………」

……………。

小夜は七人姉弟。

では、言っても覚えられないだろうが、荏咲家の紹介！

長女は小夜、16歳、高二、皆さん知っての通り、大人しい子。

長男は月也。14歳、中三。

次男が天馬。13歳、中二。

次女が星乃。11歳、小六。

三女が夕香。9歳、小四。

四女が空。5歳、幼稚園年長。

三男が七星。1歳、保育所。

ちなみに、俺が助けたのは次男の天馬。

さつき、物凄い勢いで土下座され、

「昨日はありがとうございました!!」

と、デカイ声で言われた。

「……なあ小夜、何か手伝おうか？」

これは……何か手伝わないといけない気が。

「……大丈夫、春吉はお客さん」

「だ、だけど……なんか……手伝う」

こんなハイテンションの中、じっとしてたらどうにかなりそう。

「……ありがとう、だけど大丈夫」

「ああ……」

はあ……

その時

「なあ兄ちゃん」

「あ？」

そこにいたのは、次男天馬。

「兄ちゃんと小夜姉えつて、カップルなの？」

「なつ……」

な、何を言うんだ、このガキいゝ!?!?

「なあなあ、付き合ってるのか？」

「え……あ、いや、付き合ってる……」

トスッ

その時、俺と天馬の前には包丁を持った小夜の姿が……。

「……天馬」

「あつ!!!さ、小夜姉え……」

うおっ！！さ、小夜の目が・・・！！

「……………」

「……………」

無言の圧力。

天馬は一瞬で小さくなった……。

「……………」

「あ、ああ」

そう言つと、エプロン姿の小夜はキッチンへ。

「……………」

小声で天馬に聞いてみる。

「いや……………」

「これで……………」

で、夕食完成。
小さなちゃぶ台を8人で囲む。

ちなみに今日のメニューは“白米”“つみれ汁”“きんぴらごぼう”“ロールキャベツ”。メインが洋食なのか、和食なのか……？

「……じゃ、いただきます」

『いただきます!!』

皆が超デカイ声で言ったので、耳が……キンキンする……。

その瞬間、小夜以外は皆、一心不乱に食事を開始……っーかすっーお……!

一方小夜は、まだ1歳の弟、七星に哺乳瓶でミルクをあげています……家庭的だな……。

……ちょうどいい機会だし、アレを聞くか。

「なあ、小夜」

「……ん？」

「あのさ、昨日何で……俺をシカトしたの？」

すると小夜は視線を七星から俺へ。

「……………シカト？いつ？」

「え？だから昨日、小夜が登校してきた時」

「……………私、シカト……………した？」

「なっ……………」

もしかして…………俺の声、聞こえてなかっただけ…………？

「あーやっぱりいいや、もしかしたら声が届いてなかったただけかもしんねえ」

「……………ごめん」

しゅんとする小夜。

「いや、別にいいんだ……………よし、じゃあ飯、頂くぜ」

「……………うん」

あ、小夜にちよつと笑顔が戻った。

…………次からはもっと大きな声で生活しよう。

『じちそつとまでした!!』

結構な量あったおかずは僅か10分で無くなり、皆の胃袋の中へ。

「ぶはあく……つーか小夜、お前飯食ったか？」

「……………え？」

さつきから、小夜は七星にミルクあげたり、皆のおかわりをよそったりしてて、あまり飯を食ってないように見えた。

「……………うん、お腹いっぱい」

「そうか？それならいいんだけど」

あ、そうだ、もう一つ質問があった。

「でさ、一つ聞いていい？」

「……………ん？」

「あのさ、なんで最近、その……遅刻が多いのになって……」
結構みんな、心配してんだ。

しかし・・・

「・・・・・・・・」

小夜は俯いたまま、何も喋らない。
何か・・・まずい事聞いたかな？

その時

つつん！

「ん？」

誰かに突かれた。

「あのさ、ちょっと・・・」

そう言うのは、長男の月也。

「ん、ああ・・・」

俺は小夜に“ちょっと行ってくる”と言い、月也に連れられ外へ。

外はもう真っ暗。

時折、優しい夜風がスウ・・・と吹く。

「月也だっけ？何か・・・」

「あのさ・・・」

小夜と似て、どこか大人しそうな月也。

「ん？」

「姉ちゃん、いつも学校に遅刻して行ってるの？」

「ん？あ、ああ、まあ、ここ最近は」

すると、月也が下に俯く。

「・・・」

「ん？ど、どうした・・・？」

「じ、実は・・・」

その後、俺は月也から荏咲家の今を聞いた。

荏咲家は元々、両親健在の普通の家庭だった。

しかし、三男七星が生まれてすぐに父親が交通事故で亡くなったらしい。

それで、元々一軒家に住んでいた小夜達はお金の関係で、この団地へ引越してきた。

その後、母親と小夜が働き、何とか生活をしていたのだが……
つい先日、母親にガンが見つかり、まさかの入院……。

治療費は父親の保険金で何とかなるらしいが、小夜達七人の生活費は、現在小夜が一人でバイトし、生計を立てている状態。

そしてさらに、まだ幼い七星や四女、空の世話もあり、小夜はいつも大変らしい。

「だから……いつも遅刻……」

朝、皆の弁当を作り、空を幼稚園、七星を保育所へ連れて行ってから登校。

もしかしたら……あのシカトも、小夜が疲れてて、俺の言葉が耳に入らなかつたって事か？

「だから兄ちゃん、姉ちゃんを……」

「……分かった」

俺はグイッと伸びをする。

「あいつに学校でも無理させないで、って事だろ？当たり前だ、無理はさせないよ」

「ほ、本当か？」

「当たり前!!！」

ああ・・・この子はなんて姉思いの優しい子なんでしょう・・・。

「アンタの姉ちゃんは、俺が護ってやる!!！」

と、言った直後、改めて考えた。

俺、今超ハズい事言ったよな!!！
護ってやるとか・・・

「任せたよ、兄ちゃん!!！」

まあ・・・いつか。

で、帰る時。

「・・・とりあえず、団地入口まで送る」

「ん？ああ、いいよ。大丈夫」

「…………でも、送る」

「いや、だから……」

その途端、小夜の顔が曇った……ように見えた。

「……じゃあやっぱり、送って貰おうかな」

「……うん」

ちよつと笑顔になった小夜。

やっぱ……笑顔イイ!!

そうして小夜が靴を履き、一歩歩き出そうとしたその時……

フラッ……

「お、おっと」

小夜がよろめいた。

「だ、大丈夫か？無理すんな？」

「……………ん、大丈夫」

その言つと小夜は団地入口に向かい、歩き出した。

「お、おい」

俺も、小夜を追って歩き出す。

「小夜、あまり無理すんな」

「・・・大丈夫」

そうして、団地入口。

「・・・今日はありがとな。飯、うまかった！」

すると小夜はちよつと笑顔で

「・・・天馬助けてくれた、お礼だから」

・・・空には綺麗な月、風が気持ちい。

「・・・じゃ、また明日、学校で」

「・・・うん」

そう言つと俺は軽く手を振り、自宅に向かい、歩き出した・・・

・・・バタツ！！

「ん？」

背後から奇妙な音。

俺は急いで振り返つた。

そこには・・・

「さ、小夜ッ!？」

・・・呼吸を荒くした、小夜が倒れていた。

第11話 春吉ママ前編

あくクソツ、全然終わらねえ〜!!

ガチャガチャガチャ!

「兄ちゃん、だ、大丈夫か?」

心配そうな月也。

「安心せい、こういう物は得意だ!!」

があ〜!!だが終わらん!!

はい?今何をしてるかって?

そりゃ、皿洗い。

「おい月也、これ小夜に持ってっつけ」

俺はさっき切って皮剥いた林檎を皿に乗せ、月也へ渡す。

「うん、分かった」

そう言つと月也は小夜の寝室へ。

「……ふう」

俺は一息してから、洗い物を再開。

さつき、俺が帰ろうとした時、小夜が倒れた。

俺はとりあえず、小夜をおぶって荏咲家へ。

荏咲家に着いた途端、ちびっこ達のお出迎え……ではなく、皆の心底心配した顔。

特に四女の空に至っては、小夜を見た途端にわんわん泣き出す始末。

本当は病院とかに連れて行きたいが、保険証やら医療費やらがどこにあるか分からないので、とりあえず今は家の布団に寝かせてあげる。

で、俺はそのまま帰る事も出来ず、コンビニに行って林檎やヨーグルト買ってきたり、皿洗いや何やらの家事をやったり……。

俺は時計を確認・・・うわ、もう11時過ぎだ・・・。

「・・・とりあえず、様子見てくるか」

大量の皿洗い終了!!

よし、小夜の様子を見てきますか!!

コンコンッ

軽くノック（ふすまだが・・・）

「入るぞ?」

・・・反応なし

俺はゆっくりふすまを開ける。

・・・そこには、すやすやと寝息を立てながら寝ている、小夜の姿。

その周りには、小夜に寄り添いながら爆睡している荏咲ファミリー！。

「・・・ふう」

とりあえず俺は、皆を起こさないよう慎重に小夜に接近。
さつき脇に挟ませといた体温計を回収・・・出来るだけ体に触れないようにしながら。

「6、3度・・・まあ、熱はないみたいだな」

多分、過労で倒れたんだろうか・・・

「・・・さて」

さて、どしどしよ。

今日の食事の洗い物はやった。
林檎やヨーグルトも買って来た。
もうやる事なし。

だから帰る？・・・いや、こんな状況の小夜をほっとけるか！？

明日の朝、早く起きて弁当作って、洗濯、掃除、ちびっこ達の通園・・・。

・・・絶対コイツならやる。
しかし・・・無理はさせたくない。

「・・・どうしたものかな」

うん・・・

あ！！そつだ！！

いい事思いついた!!

「・・・何のよう・・・だ・・・」

「・・・ぐう」

現在午前5時。

市営団地入口前。

「姉さん姉さん、大変なんでさあ〜!!」

俺は姿勢を低くし、手をコスコスしながら、俺の目の前にいる人・
・楓と美羽のご機嫌取り。

「もう、こんな朝早くに何？」

ちょっと切れ気味の美羽、一方、楓は・・・

「・・・ぐう」

「ぐあ……」

見事、楓は起床したが……反射でナツクルを腹に頂きました。

「え、何！？……うわっ、春吉！！お前どうした！？」

しかも彼女は気づいていない様子。

「か、楓……ふ、不意打ちは……アウト」

ガクっ！！

俺は半分死んだ。

遠くから美羽の笑い声が聞こえたが、無視。

……はあ。

「……よし」

小夜の家の前、俺は昨日こっそりかっぱらって来た鍵でドアを開ける。

「・・・ねえ春、それ、犯罪じゃ・・・」

「・・・一応、月也には言ってるから大丈夫・・・多分」

ガチャ！！

開いた！！

「・・・では、只今より、荏咲家突入作戦を執行する」

「いいから入れ！！」

ゴツ！！

「痛っ！！殴る事ないだろ！！」

的な会話をしたあと、俺達は荏咲家に侵入。

「・・・とりあえず、私が料理と弁当、春が掃除に洗濯、楓は小夜以外のみんなを起こし、その他面倒を見る、OK？」

「了解です大佐！！」

美羽の提案に俺は敬礼する。ビシッ！！

「分かった！！」

楓も了承。

「では、解散!!」

美羽の解散命令と共に、俺はまずリビングへ。

洗濯はみんなが起きた後、パジャマも洗ったりするのでまだ駄目。掃除はほこりが立つから食事後。

つまり最初はやる事なし!!

「……春、暇なら朝食の手伝いして!!」

「あいよ!!」

俺は美羽に続き、キッチンへ。

「美羽、俺、食材とか持って来たけど、使う?」

「当たり前!!」

俺は持参してきたトートバックを美羽に渡す。

中身は卵とかハムとかバターとかパンとか。

ぶつちやけ、勝手に荏咲家の物使っちゃマズイだろうなと思い、持ってきた物だ。

「うん……とりあえずパン焼いて……卵とハムで……」

美羽は料理が得意。

和、洋、中どれでもいける、まさに鉄人料理人!

「よし、ハムエッグをパンに挟んで、上からバターを塗ろう!!」

どうやらメニューが決まったようだ。
すると・・・

「ふあゝ・・・」

「眠い・・・」

「姉ちゃん達、誰？」

「・・・ぐう」

ちびっこ達が起床。

楓と共に、寝室から出てきた。

「春、ほれ、洗濯行った!!」

「あ、ああ」

ちびっこ達は皆、もう着替えている。

「洗濯機つと・・・」

俺はとりあえず脱衣所へ。

「洗剤・・・洗剤・・・あ、あった!!」

現在脱衣所。

たった今、棚の上にあった洗剤を発見。

「さてと………うっ………」

洗濯機のフタを開けてビックリ!!

「……量が……パネエ………」

これは……洗濯機回るか？

「はあ………とりあえず半々に分けるか」

仕方ない、俺は洗濯機に手を突っ込み、グイッと持ち上げる。

「のあっ!!！」

バサバサバサっ!!

しまった、床にばらまいちまった!!

「いかんいかん」

俺はその場でしゃがみ、わっせわっせと洗濯物を集める。

「うわっ、洗濯機の下にも………」

仕方ない、俺は寝転び、洗濯機の下に手を突っ込んだ。
そしてキャッチ!!

「よし………って、コレ……」

な、こ、これブラジャーなんか!!
しかも大きさに……小夜のか?

「春うく!!洗濯まだあ……つハ!？」

あ……美羽はん。

「は、春……」

俺は今、手の上にある物を見た。

……誤解を生む可能性は……100%

「み、美羽、い、一旦落ち着こうか……」

い、いかん、こ、声に震えが……

「は、春の変態い……!!!!!!」

ドカツ!!

「ぶほお!!」

が、顔面にグー!!

不可抗力だ……。

「なあ兄ちゃん、その顔のアザ、どうしたの？」

悪気のない天馬が聞いてくる。

「これはな、不可抗力の証だ」

「不可抗力？」

「ああ。いいか天馬、男ってのはな、無実の罪でも刑を執行されなくてはならないと言うルールなんて、無いんだからな」

「兄ちゃん？」

「・・・俺は、何も悪くない」

やべえ、何か泣きたい気分。

「はい、朝ごはん出来たよ！！」

おっと、ここで美羽が朝食を持ってきた・・・ってチヨイ待て。

「あれ？俺の分は？」

「……………あると思った？」

「……………いいえ」

美羽さん……………頭から二本、角生えてますよ!?!?
き、金獅子や!?!あの金獅子や!?!
激昂したらアカン奴!

「さて、頂きますか!?!」

「あー!あたし腹減ったあゝ!?!」

……………俺もだが。

「じゃあ、手を合わせて……………」

『いただきます!?!』

第12話 春吉ママ後編

グウゥ……

は、腹減った……

「じゃあ私、空ちゃんと七星君を幼稚園と保育所に連れて行くから、春、楓、後は任せたわよ!!」

「あいよ!!」

そう言つと美羽は、空と手を繋ぎ、七星を抱っこしながら外出。

「……何か、何処かにいそうなお母さんみたい……」

そう呟きながら、洗い物を再開する俺。

結局、俺の朝飯はなし、しかも洗い物のおまけまで着いてきた。

「はぁ……腹減ったなあ……」

つーか、腹減りすぎて気持ち悪くなってきた。

「全く……」

もう嫌になる。

しかも……

「春吉い!!!洗濯機ってどう使うんだ!?!」

脱衣所からは楓の叫び声。

「スタートボタンを押せっ!!」

「了解!!」

ならよし。

俺は洗い終えた皿を棚へ置こうとした・・・
その時

ドウウンッ!!

「なっ!?!」

突然の轟音と振動。

俺はあいにく皿を落とし掛けた。

「は、春吉!! 助けてえ!!」

脱衣所からの悲鳴!!

あいつ・・・何をやらかした!?

俺が洗い物を終え、脱衣所へ行くと・・・

「なっ・・・」これは・・・

「あ、あはは・・・やつちまった」

そこには、洗濯物を頭からかぶった楓の姿。しかも、床一面水浸し状態・・・

「お前・・・何をやらかした!?!」

すると楓は笑いながら・・・

「間違えて、違うボタンを押しちった」

「な・・・押しちったじゃねーよ、お前何してんだよ!?!」

コイツ・・・一人で洗濯も出来ないのか!?!

「何って、洗濯」

「これが!?!」

もう床がウォーターパラダイス!!

「もう・・・なら春吉がやれよ!?!」

楓は少し拗ね気味。

「・・・いや、本当なら俺がやるハズだったんだけどね」

先程の苦い記憶が・・・あの時、美羽からもらった傷（と言っかアザ）が、痛む・・・。

「もう・・・あたしは家事とか無理っ！！」

「あゝあ、本格的に拗ねたなコイツ。」

「・・・分かった。じゃあ、お前は雑巾持ってこい」

「・・・まずはウォーターパラダイスの処理をしないと・・・。」

「・・・もう多くの人は薄々、気が付いているだろうが、楓は家事が出来ない。」

洗濯機はウォーターパラダイスへのチケットになるし、掃除機はゾウさんへ変身するし、泡立て機やフライ返しは双剣（コウリュウノツガイ）になってしまう。

「・・・楓に1番似合わない言葉と言えば「家庭的」の三文字。」

「はい雑巾！！」

「・・・」

俺は無言でそれを受け取り、床をゴシゴシ。

「・・・な、何かあたし、やる事ある？」

「・・・もうすぐ小中学校は登校の時間だから、ちびっこ達のお

見送りしてこい」

「アイアイサー!!!」

楓はダッシュで玄関へ。

はぁ……。

「……よし」

俺は無事、ウォーターパラダイスを終演させる事に成功。

「後は掃除か……」

あ、あと学校に少し遅れると連絡を入れた方がいいな。

とりあえず、この雑巾を片付けて、洗濯物を何とかしないと……

「おい、楓え!!!」

俺は洗濯機の中に衣類を入れながら叫ぶ。

……出来るだけ視線は外に。

「なに？」

廊下からひよっこり顔を出す楓。

「洗濯機のスイッチ入れとくから、洗濯が終わったら干しといて
!..!」

干すくらいなら、コイツでも出来るだろ。

「分かった・・・けど、あまり期待はしないでね・・・」

え!まさか干すのに自信がないのか!?
何だコイツ!?

「お前、干すくらい出来るだろ？」

「うん・・・一応な」

一応!?洗濯バサミやハンガーに衣類を掛けるだけの作業に、
一
応!?

「ああ・・・じゃ、じゃあ任せた」

ぶっちゃけ時間がないから、仕方なく楓に任せる事にしよう。

再び、この地で、水の祭典「ウォーターパラダイス2010」が、
開催しない事を願って・・・。

「・・・もう、ちびっこ達は学校へ行ったか」

俺は掃除機片手に玄関を確認。

とりあえず、あと玄関を掃除したら、掃除自体は終了。

「ふう・・・」

今現在、ベランダでは楓がハンガーと戦闘中。

その様子が、あまりにも悲し過ぎるので、割愛します。

だって、ハンガーという無機質相手に本気のパンチとか・・・

「よし、とりあえず掃除を終わらせよう」

俺は再び、掃除機のスイッチを入れた。

「お、終わった……………」

朝の家事終了!!

春吉ママは頑張りましたよ!!

俺は掃除機を片付けて、一旦リビングへ…………ってあれ？
楓がない。

俺はとりあえず携帯を確認。

そこには、メール受信のマークが。差出人は楓。
俺はそのメールを確認…………。

“洗濯終わったから先に学校行ってる”

い、いつの間に…………

俺は軽く怒りに震える心を沈め、携帯を閉じる。
その時、

「……………春吉？」

こ、この声は！

俺が後ろへ振り返ると…………

「さ、小夜！もう大丈夫なのか？」

そこにいたのは、カラフルな星マークがプリントされたパジャマ
を着た、小夜の姿。

「……………（コクリ）」

ホッ、よかった。

「……………春吉、なんでここに？」

あ、そつだ！事情を説明しなくては！！

「……………私、倒れたの？」

事情を全て説明し、とりあえず他に、美羽と楓がさっきまでいた事も説明。

そして、小夜からの質問。

「ん？ああ……………やっぱお前、無理してたんだな」

「……………無理は、してない」

「嘘つくな、お前、あまり食事や睡眠、取ってなかっただろ？」

「……………」

黙り込む小夜。

「全部月也から聞いたぜ。あまり一人で無茶しようとするな」

「……………」

俺は優しい口調で続ける。

「ほら、俺らはお前の仲間なんだからさ、何かあったら遠慮せず
に言えよ」

「…………でも」

「時には人に頼ったっていいんだぞ」

「……………春吉」

「もう一人で無理とかすんな。分かったか？」

「……………うん」

そして、小夜がちよっと微笑んだ。

「……………ありがとう」

「れ、礼なんて別にいいんだよ!!」

俺は何だか気恥ずかしくなって、小夜から顔を背ける。
その時…………

スウ…………

「ん」

俺の頬に一瞬、何やら柔らかい感触が・・・

「なっ!?!」

俺は慌てて小夜の方へ振り返る。

「……………ありがとう、春吉」

そこには、爽やかな笑顔をした、小夜の姿があった…………。

第13話 弾丸サーブ

「おゝし、じゃあ今から球技大会の説明するぞ」

担任の和波が、黒板にでっかく（球技大会）と白チョークで書いた。

・・・今日は、あの小夜の家で家事をした日から二日後。

あの後、小夜は念のため二日学校を休み、体力を回復。

そして今日、見事復活登校を果たした。

「いいかお前ら、我が校の球技大会は丸々一週間使つての大イベントだ」

俺は担任の話を八割方無視。

意識は担任、視線は右前方に座っている小夜。

「・・・・・・・・」

あの日、俺は・・・小夜から・・・頬っぺたに・・・ハツと気付くと俺は、右頬を指で触っていた。

・・・・・・・・まさかね。

「いいか？球技大会は6月の初めの一週間」

担任はチョークで黒板に表を書く。

月曜：バレーボール

火曜：テニス

水曜：サッカー

木曜：野球

金曜：バスケット

「ウチは人数の関係上、一人最低でも二個は参加しろよ」

二個・・・何にしようかな？

My脳内イメージ

バレー：バレーボール使い！？

テニス：青学！？

サッカー：ボールはいつでもトモダチさ！？

野球：アストロ！？

バスケット：キセキの世代！？

うわ・・・さっぱりだな、俺の脳内。

これ全部何のネタか分かった君は、相当なジャ○プ通かもね。

「なあ、春吉は何にするの？」

左斜め前の席の男子、権三郎が聞いてきた。

「うーん・・・どうしようかな・・・」

迷う・・・。

ちなみにだが、俺はそこまで運動が苦手というわけではない。
むしろスポーツ万歳、勉強さよならと言った感じかな。

「ちなみに俺は決めませえ！！」

権三朗君は胸を張りました。

「・・・何にすんの？」

「そりゃ、サッカーとテニスでしょ!？」

「・・・じゃあ俺はサッカーとテニス以外にしよう」

「ええっ!？」

と、なると・・・

「春吉、まさか俺の事・・・キライか？」

「嫌いではなくはない」

「嫌い・・・ではなくは・・・ない・・・って、結局それ、俺の事キライって事じゃんか!!」

「だつてねえ」

冴えない地味脇役的ポジションだからかな？

「ヒドイっ!」

その場でうわあ〜ん、と嘔泣きを開始した権三朗。
・・・ウザったい。

「セイヤツ!!」

ポツキユ〜ンツ!!

ズボオオオオ!!

「な・・・」

俺、絶句。

現在放課後の体育館。

「凄いつ!!」

「沢那さん凄・・・」

「さすが・・・」

・・・今、何してんのかって？

ああ、球技大会に向けての練習ですよ。

今はバレーボールの練習中。

・・・ちなみに俺はバレーとバスケに参加予定!

で、今は男子チームと女子チームに別れて試合中・・・。

「さ、次いくぞ」

そう言って楓はボールを上に向けて・・・

「セイヤツ!!」

バシッ!!

時速110越え(多分)の弾丸サーブ!!

ヒュンッ!!

「……………」

ボールは俺の頬をかすめ床に突撃!!
穴が空きました。

「……………」

こゝ、声が出ない・・・

「よぉくし、次!!」

ヒュンッ!!

ズバアアア!!

地獄絵図とはこの事だな、うん。

「あれは化け物だ。人間ではない」

「バレーボールで床に穴空けるなんて、聞いた事ないぜ」

「あれ、人に当たったら即死かな？」

練習終わりの帰り道、俺は野郎共と愚痴のこぼし合い中。

「つかさっきのバレーの練習、こっちにサーブ回ってきたっけ？」

「・・・きてない」

今年の女子バレーはウチのクラスが優勝だな。

「それより春吉、これからボウリングでも行かないか？」

「ん？ああ、いいけど・・・」

「よし、じゃあ決まりだな」

「こうして俺らはボウリングへ。」

空はもう、オレンジ色に染まっていた。

第13話 弾丸サーブ（後書き）

ども〜！！作者です。

え〜つと、まあ、ちよつとしたお知らせ。

今までかなりのスピードで更新してきたこの小説ですが、このたび春休みが終わりを告げまして・・・

そのため、勉強やら何やらで、今までよりかなり更新速度が落ちる事になると思います・・・。（作者は一般の学生です、ハイ）

と、いうわけで、まあ・・・お、お知らせでした。 何だかすみません！！

で、次回（と、言うか今回？）より、この小説は新章突入です！！

そう、球技大会篇！！

新キャラも登場予定ですので、お楽しみに！！

第14話 熱血っ！！

「ねえ、春」

「ん？何？」

現在生徒会室。

「春って球技大会、何に出るんだっけ？」

「ああ、バレーにバスケ。美羽は？」

「私は・・・一応、バスケにサッカー・・・」

「あ、そっぴやバスケん時にいたな」

「うん・・・」

俺はプリントの束を整理しながら、美羽と会話中。いつも通り、生徒会の手伝いだ。

「つーかお前、バスケ出来たっけ？」

ハッと俺は思い出した。

「うう・・・」

美羽はパソコンの画面を見たまま、少し俯く。

美羽は運動が苦手。

小学中学と同じ学校だった俺には分かる。

では、少しながら、美羽の運動音痴武勇伝を。

まず有名なのが、中二の時の顔面強打事件。

サッカーの試合中、自らの足に躓き、転倒した美羽の顔面に超口
ングシュートが直撃したのだ。

まあ、男女体育は別なので、あくまで聞いた話だが・・・
サッカーボールに付着していた泥と鼻血で顔が悲惨な事になっ
たとか。

他には・・・テニスラケット後頭部直撃事件とか、跳び箱崩壊事
件とか、走り幅跳び顔面記録事件とか、プール浮遊事件とか・・・
数えればきりが無い。

「はあ・・・球技大会・・・嫌だなあ」

「・・・生徒会長が何言ってるんだ」

「・・・会長権限で球技大会、なくせないかなあ・・・」

はあ、と、ため息をつく美羽。

そんなに嫌なんだ。

「まあ・・・何とかなるんじゃないかね？」

「なるわけないじゃん・・・」

うーん・・・俺的にはコイツ、結構運動出来そうな体型なんだけ
どな・・・

別に太ってないし（むしろ細い）、足は長いし……。

「ま、ともかく練習あるのみだな」

「……」

あ……机に伏せた。

「諦めるな！」

「……どうせ……無理よ」

「諦めるな、やれば出来る!！」

ちよつと松岡○造っぽく言ってみる。

「……無理」

「おい、諦めるなよ、やれば出来る、絶対出来る、突き進めよ!

!」

熱血うゝ!!

「……」

「何でもやれば出来るんだ。諦めるな!!米食べろ!!」

「……じゃあな」

突然、ガバツと起き上がる美羽。

び、ビツクリした!!

「な、なんだ!」

「春・・・わ、私の練習に・・・その・・・つ、付き合ってよ」

ちよいクネクネしてますコイツ。

「おお・・・やる気が出たか、良い事だ」

THE・O造パワー!!

「うう・・・じゃ、今から体育館に集合」

「今からあ!?!」

現在午後6時。

ちなみに体育館は午後8時まで開いてる。

「は、春がやれって言ったんでしょ!ほら、早く行くわよ!」

「え〜!」

今日は・・・7時から見たいアニメが・・・

「ほらっ!」

俺の腕は美羽の細い腕に捕まれ、強引に体育館へ・・・

「うが・・・マジで・・・今からかよ・・・」

改めて後悔。

○造パワーは明日使うべきだった……。

ダムっダムっ!!

「そこでターン!!」

「えっ!?!」

バスケットボールをドリブルしながら、美羽は思い切り回転。
そして……

ズッテーンっ!!

「きゃっ!!」

こけた。

「な……バカかお前、すっ転ぶって……」

「う、うるさい」

うわ〜・・・顔真っ赤にしちゃって・・・
仕方ない、俺はそっと右手を差し出す。

「・・・・・・・・」

美羽は相変わらず顔を真っ赤にしながら俺の腕を掴み、グイッと
起き上がる。

「う〜ん・・・ま、とりあえずは基礎からかな」

あ、ちなみに俺、中学時代はバスケット部でした。

ハハハ、入部理由？

・・・モテたいからに決まってるんだろ。

「き、基礎って・・・何すればいいの？」

「・・・・・・・・よし、じゃあ俺と1on1だ!!」

実戦は大事。

「い、1対1!？」

「イエス!!」

美羽はポカ〜ン顔。

「・・・・・・・・今から俺は、コートの中から反対側のゴールに向かって
ドリブルで突っ走るから、お前止めてみる」

「……………」

「いいな？」

「……………」

そう言うと美羽は長い黒髪を束ね、ポニーテールに結ぶ。

「よし、行くぜヨ！」

美羽はコートの中辺りでスタンバイ。

「……………おしっ！！」

ダムっダムっ！！

いくぜ、俺のスーパーマッハなドリブル！！

第14話 熱血っ！！（後書き）

・・・今回の話を書いている時にハッと気付いたんだけど、ちょっと前にジャ○プで主人公の名前が春吉っていうバスケット漫画、あったよね・・・。

な、なんかカブツてしまった！！

次回から更新が遅くなります&新キャラ登場です！

第15話 夏キター！！

「・・・つたく、だりいな・・・」

全く・・・誰だ、球技大会なんて考えた野郎は・・・

「あ！！なつくくん、またサボってんの？ダメだよ、ちゃんと練習しなくちゃ！！」

「るせえ・・・」

はあ・・・あ？なんだテメエら？

は？春吉？だれだソイツは？

俺の名前は吉崎夏哉^{よしざきなつや}、16、高2。

葉城高二年一組、部活は男バス。

「なつくくん、ちゃんと練習しよよ！！」

現在二年一組教室。

時刻は午後6時。

「うるせえ、黙れ」

「はへくん！！そんなんじゃ香音は黙りませ〜ん！！」

うぜえ・・・

今、俺の目の前であっかんべーをしているコイツは水岡香音^{みずおかかおん}、俺

と同じ二年一組。

「ねえ、なつくん!!!早く体育館行って練習しよ!?!」

「……嫌だ」

球技大会……何だか知らんが、6月にあるらしい行事。

まあ、俺は男バス所属だから、参加競技は強制的にバスケ。

「嫌だじゃないの!!!なつくんもちゃんと練習しなくちゃ!!!」

「……そんなにやりたきゃ、一人でやってこいよ、カオ」

カオ……香音のあだ名。かおん〃かお〃顔。

「か、顔じゃない!!!かおんだよ!!!」

「はいはい、じゃあ俺はこれで……」

「だ〜め!!!」

ガシッと、俺の制服のすそを掴んだ香音。

「早くバスケの練習、やろ!!!」

はあ……コイツのクソ真面目さには腹がたつ。

「……俺は帰る」

「だめツ!!!なつくんはバスケの練習をやるの!!!」

「一人でやれ、カオ」

「だから顔じゃなあ〜い!〜!」

ぼかぼかと叩いてくる香音。

・・・痛くねえし。

「・・・わっくたよ、練習すればいいんだろ」

仕方ない、面倒だがやるか、練習。

「本当？」

途端にパーツと明るくなる香音の表情。
とつても分かりやすい奴だ。

「そのかわり、明日の昼、パンおごれよ」

「え〜!〜?」

今度はかなり嫌そうな表情。
マジで分かりやすい。

「はい決まり。おし、体育館行くぞ」

「え!〜?あ、ちょっと待ってよなっくん〜!〜!」

明日、昼はコロッケパンにしよう。

俺と香音は、昔からの付き合いだ。
まだ幼稚園の頃、かけっこ中すっ転び、膝を擦りむいてワンワン泣いていた俺にハンカチを差し出し、保健室まで連れて行ってくれたのが香音。

『うええくん、痛いよおー!!』

『ねえ、大丈夫?』

『うえ、ひ、ひっく……』

『どうしたの? 転んだの?』

『う、うええくん!』

『……はい、これでお膝を押さえて』

『う、うう……ひっく、ひっく』

『大丈夫? 立てる? ……じゃあ、一緒に“ほけんしつ”に行こ
う! ……!』

『うっ、うっ、うっ、うん』

・・・それからというものの、まだ当時イジメられっ子だった俺を、いつも香音は守ってくれたな。

砂場の砂を投げられた時も、おもちゃのブロックを投げられたときも、水道で思いつ切り水掛けられた時も・・・

「あれま！！先客がいるよ！！！」

あ？香音が体育館の中を覗きながら、何か呟いてらあ・・・

「なつくん、他に誰かいるみたい」

「・・・誰か？」

「うん・・・シューズの色が緑だから、同じ二年生だ」

「二年？」

その時、体育館の中から声が聞こえた。

ダムっダムっ！！

「はい、そこで Dank!!」

「む、無理い！！！」

・・・男と女の声だ。

「おい美羽、そんなんじゃ “キセキの世代” には勝てないぞ！！！」

「春・・・あなた、どんだけジャ○プネタ引きずるつもり!?!」

「うるさい、俺は努力と友情と勝利で出来ている男だ!?!」

「だからソレ、ジャ○プ知らない人は分からないでしょ!?!」

・・・随分と賑やかそうだな。

「ねえ、なつくん」

「なんだ?」

「ワ○ピースって言ったらやっぱり、アラバスタ篇だよね!?!」

「お前もジャ○プネタか!?!」

ケツ・・・ワ○ピースはやっぱり“偉大なる海路”に入る前までのストーリーが1番だろうが。

・・・え?違う?

「・・・やっぱり俺、帰る」

他人が使ってるならしょうがない。

「え〜!?!少し待てばどくよアイツら!?!」

「・・・ったく、じゃあ明日やるから、それでいいだろ」

もう今日は帰って寝たい。

「え〜〜〜・・・分かった。じゃあ明日、絶対だからね」

頬つぺたを膨らませてプイツと横を向く香音。

何故そこまで、練習にこだわるのかが分からん。

「・・・帰り、チャリ、後ろ乗ってくか？」

俺はポケットに手を突っ込み、チャリの鍵を引っ張り出す。

「うん!!」

・・・コイツの笑顔はいつも眩しい。

俺には・・・とてももったいない。

第15話 夏キター!!! (後書き)

どうでもいい後話

「・・・ねえ美羽」

「何？春？」

「今回、俺、物語を語ってないんだけど・・・」

「・・・うん、そうだね」

「もしかして、主役交代とか・・・無いよね？」

「さ、さあ・・・」

「ぶ、ぶどうしよづ・・・このままでは・・・」

「うう・・・ま、まあ頑張りな、春!」

「うわ〜ん、ぶどうしよづ!」

「出番ないあたしらよりかは・・・まだ、マシじゃん・・・」
BY 楓&小夜&権三朗

次回から“後書き”を使つてのミニコーナー「キャラプロフィール紹介」やります！！
お楽しみに！！

第16話 魔法戦士

「魔法戦士ワイバーンナイト、始まるよお!!」

・・・はい、今俺、木山春吉は、帰りの電車の中、携帯にイヤホンをつけ、ワンセグでアニメを視聴中・・・。
本当だったら、家でゆっくり見るはずだったのに・・・。

「春、またソレ見てんの!?!」

隣には美羽。

「うるさいうるさい!!俺にとって、これが金曜日唯一の楽しみなのだ!」

・・・先程までやっていたバスケット練習。

美羽と一対一やったり、ダンクの練習したりしているうちに、時刻はもう午後7時。

で、ぶつちやけた正直な感想、美羽バスケット下手くそすぎ・・・
ドリブルすら微妙な所でした。

で、今、その練習を終え、電車で帰宅中。

「春もホント、アニメ好きだよねえ」

「・・・まあね、面白そうなヤツはゴールデンだろうが、深夜だ

ろっが必ず見るし」

・・・暴露します。

俺は軽度のアニメオタクです。

「ソレ、魔法戦士ナンチャラとか言うやつでしょ！？ちびっ子向けの」

「ナンチャラではない！ワイバーンナイトだ！」

魔法戦士ワイバーンナイト・・・ドラゴンにまたがる魔法戦士の主人公が、魔法を使って世界征服を企む悪の組織とバトルしたり何かしたりするアニメ。

「全く・・・」

少々飽きれ気味の美羽、しかしそんなの無視。

「いや〜！！いつ聞いてもこのオープニングはいいねえ！！」

超絶感動中！！

「・・・ねえ、春」

「あ？」

意識の90%はアニメ、10%を美羽へ。

「あのさ・・・春、楓とか小夜と・・・」

「んあ〜？」

何かを躊躇っている美羽。

「あの・・・その・・・ふ、二人とは・・・」

「二人とは？」

「えつと・・・」

あ！オープニングが終わって、アニメ本編が始まった！！

「何？用件あんなら早く言って」

「だから、その・・・」

そして、美羽が何か言い掛けたその時！！

ガコンっ！！

「うおっ！！」

電車が揺れた！！！！

手に持っていた携帯は見事にすっ飛び、俺はバランスを崩し・・・

「のわっ！！」

「ひっ！！」

つんのめりながら、美羽の胸元へ Dive！！

「痛つてゝ・・・・・・・・て、アレ？痛くない・・・・・・・・」

フニフニ・・・・・・・・何か柔らかい物が顔の下に・・・・・・・・

「はっ・・・・・・・・ばっ・・・・・・・・ひっ・・・・・・・・」

「ん？」

俺は視線を上を。

そこには・・・・・・・・

「なわ・・・・・・・・はへ・・・・・・・・ひい・・・・・・・・」

顔を真っ赤にした美羽・・・・・・・・ツ！！

「はっ・・・・・・・・はっ・・・・・・・・はっ・・・・・・・・」

・・・・・・・・ヤバイ予感。

「春のバカアア！！」

バシ〜ンツ！！

あべしっ！！

頬に強烈なビィ〜ンタ！！

そしてギャース！！他の電車利用客の視線が！！

「何あれ……」

「もしかして痴漢？」

「嫌ねえ」

あらぬ誤解がつ!!

「え！ちよ、ちが……ふ、不可抗力!!」

美羽は顔を真つ赤にして俯き中。

「美羽、も、申し訳ないっ!!」

……俺はその日、生まれて初めて、電車の車内でジャンピング土下座を執行しました。

「ひ、ヒドイ目にあつた……」

多分、今俺の頬は、真つ赤に熟しているだろう。

……結局、俺は美羽と何も話さないまま駅に着き、そのまま別れた。

・・・あれは気まずかったな。

「はぁ・・・何なんだよ、このラノベ的なトラブルは・・・」

月曜日、学校行きにくい事この上ない。

に、しても・・・

「あの時・・・」

あの時、美羽は俺に、何の質問をしようとしてたんだろう・・・？

「うーん・・・」

ちょっと気になりつつも、俺は自宅に向かい、歩き出した。

それは、深夜アニメ「花嫁DOG」を見ていた時だった。

「ふぁ〜」

現在土曜日午前1時、木山家リビング。

金曜日は「魔法戦士ワイバーンナイト」で終わり、土曜日は「花嫁DOG」（ラブコメ風深夜アニメ）から始まるみたいな感じの木山春吉（俺）は、いつも通り、ブルーレイ録画をスタンバイして、アニメを觀賞していた。

「……やつぱり、犬ノ助と猫美は結ばれるのかなあ？」

などと言うアニメの感想を述べながら、さっき作ったコーヒーを一口。

そして、アニメが番組の中間のコマーシャルに入ったその時

ピンポーン！！

「ん？」

インターホンが鳴った……つーか今深夜1時！

「誰だ？こんな時間に……」

出ようか出まいか……迷う。

ピンポーン！！

再びインターホン。

「……は、はい」

し、仕方ない。

木山流忍法、居留守を使ってもよかつたが、とりあえず出てみる。
・・・俺の右手には金属バットを装備。

そして玄関へ。

「ど、どちら様？」

と、言いながらチェーンを着けたドアを開ける。

ガチャー！！

そこには・・・

「春吉、久しぶり」

「元気にしてた？」

「なっ・・・」

そこには、確か第1話で夜逃げしたはずの・・・

My両親の姿がありました。

第16話 魔法戦士（後書き）

新・ミニコーナー！

キャラクタープロフィール紹介！！

キャラクターNo. 1

木山 春吉

（キヤマ ハルヨシ）

男性、現在16歳、葉城高校二年三組在籍。

身長：175cm

体重：59kg

誕生日：2月3日

血液型：B型

好きな物：ジャップ、アニメ、平和、昼寝

嫌いな物：勉強、暴力、権三郎

趣味：アニメ観賞、権三郎をからかう

特技：口だけで綺麗にミカンの皮がむける

その他：み○さんのモノマネが得意（自己満足レベル）、自己暗示でモンキー・○・ルフィになれる（あくまで暗示）、サッカーよりもバスケ派（スラムダ○ク派）。

第17話 渡邊さん

俺、木山春吉は、自分で言うのもアレだが、ツラはそれほど悪くない。

別に、額の真ん中にホクロはないし、目は普通に丸いし、シワやできものもない。

髪だって、いつもワックスで固め、ムダ毛の処理も完璧（主にヒゲ）。

至って普通の顔だ。

しかし……

「いいか春吉、今から大事な話をするぞ」

現在土曜日、午前2時、木山家リビング。

俺はテーブルに着き、向かい側には、蒸発したハズの両親の姿。

これが……またヒドイ。

特に顔。

我が父親、木山桃雄。

……シワの寄った四角い顔、超細い目、若干ハゲた頭。

……皆様、想像できましたか？

これでもまだ40半ばですよ？決して60後半ではありません。

我が母親、木山桜

赤い三角メガネに分厚い唇、おだんご頭にシワシワフェイス。

……ザマス系。

ぶつちやけブサイクな2人から、ノーマルフェイスな俺が生まれ
た事は、奇跡に等しい。

「……つーか父さん、あんたら今まで何処に行ってたの？」

もう一度言うが、現在午前2時。

花嫁DOGも終わったし、そろそろ寝たい。

「うう……そ、それは……ふ、富士の樹海に……」

おどおどしてる父。

「……何しに？」

「そ、それは……」

「……」

「……」

「……」

「……」

プチっ！！

「はよ答えろやハゲえ~~~~!!」

「あ、ああ」

じ、じれったいい!!

「つーか母さん、あんたも何か喋れよ!!」

「・・・いやザマス」

「ガア〜!!!ふざけるな!!」

・・・父親は小心者、母親はわがママ。
うぜえ!!

「テメエら!!マジで息子置いて何処行ってた!!」

「だから、ふ、富士の・・・」

「知らないザマス」

「ナーウ!!!!!!」

ふざけるなあ!!

「ぜえぜえ・・・分かった、じゃあもうソレは聞かない」

・・・久しぶりのツツコミ仕事に、ちょっとテンパってる俺。

「で、何故あんたらは今更になって帰ってきた!？」

「・・・実は、その事で話があって・・・なあ、桜？」

「・・・そうザマス」

「な、なんだよ・・・ま、まさかこの小説が次回で最終回とか!?」

「いや、そんな事ではない・・・」

「じゃあ何だよ!??」

「じ、実は・・・」

数秒後

「な!??お、俺に許婚だとお!??」

パニックフェイス!!

「あ、ああ。実はな・・・」

簡単に言うところだ。

父親母親は借金に耐えられなくなり、自殺をしに富士の樹海に行ったらしい・・・(っーかウチに借金あるって、今初めて知った!!)。

で、向こう(富士)で借金元の渡邊会の頭首と、その娘さんには

ったり!!)・・・渡邊会って、まさか・・・闇金?)。

で、渡邊会頭首と少し会談をし、(多分、金早く返せのな)。

その中で、たまたま父親が持っていた俺の写真を、渡邊会頭首の娘さんが見たらしく・・・

「その娘さんがお前を気に入ったらしくてな、結婚したいんだって・・・」

「ワッツ!?!」

あんですとお!?!?

「渡邊さんは、娘さんの願いならばと、結婚を全面的にOKしてきてな・・・」

「・・・まさか」

「・・・もし結婚が成立したなら、借金をチャラに・・・」

「NOオ!?!?!」

まさかの急展開!!

つーか今、一応、球技大会篇だよな!?!?

「春吉、これは木山家の存続問題ザマス。もしアナタが結婚を認めれば・・・」

「いゝやだ!?!」

嫌だあ！絶対嫌だ！！

「つーか渡邊会ってヤクザとか何かだよね！？ネーミング的に！？」

「いや、そんな事はないぞ春吉。確かに渡邊さんはスキンヘッドでサングラス、タバコに白いスーツだったが・・・」

「それヤクザあ！！」

つーか、もはやそれ、極道じゃねーか！！

「すまない春吉、父さんを救うと思って、結婚を・・・」

「やーだー！！！！！！」

嫌だよ！！どうせチャカとかブツとか白い粉とかでしょ！？？

「春吉、わがママを言わないザマス」

「るせえ！！つーか結婚ってテメエらのわがママだろうがッ！！」

「春吉、頼むよお・・・もう父さんは限界なんだよお」

「黙れハゲジジイ！！限界なのは俺の方だ！！」

もう限界。

脳内記憶細胞がもう悲鳴を上げてるし。

「つーか・・・つーか・・・俺、まだ16だぞ！？結婚できるかあ！！」

ドカーンッ！！

ああ、木山春吉脳内大火山が噴火した・・・。

「春吉い・・・」

「・・・もういい。俺は寝るッ！！」

俺は半泣きの父親をシカトし、自分の部屋へ。

もう・・・何が何やらである。

第17話 渡邊さん（後書き）

ミニコーナー、キャラクター紹介！！

キャラクターNo.2

濱垣 美羽

（ハマガキ ミハネ）

女性、現在16歳、葉城高校二年三組在籍。

身長：164cm

体重：49kg

誕生日：7月24日

血液型：A型

好きな物：本、綺麗なペン、戦国時代関係（特に武将）

嫌いな物：運動全般、辛い食べ物、水玉模様。

趣味：読書、戦国合戦場&城巡り。

特技：英単語暗記、家事全般。

その他：葉城高校生徒会長、人見知りか激しい（何故これで生徒会長になったのかは謎）、歴女（真田幸村が一番好き）、至って真面目な子。

第18話 土曜日の朝（前書き）

ども〜!..

今回は夏哉目線で物語は進みます!..

第18話 土曜日の朝

「・・・何故、こんな朝早くに・・・」

「いいじゃんー!」

「・・・」

今日は土曜日。

本当は家でごろごろしていたかったんだが・・・

「・・・つーか、本当に今日じゃなきゃ駄目か？」

「当たり前じゃない!昨日約束したんだし!」

ハア・・・

満面の笑みの香音。

「・・・ついさっき(午前6時ごろ)、まだ寝ていた俺の携帯に着信あり。」

「うう・・・誰だよ、こんな朝早くに・・・」

ぼちっ!

「・・・もしもし?」

『あ、やっと出た』

何処かで聞いた声。

「・・・誰？」

『誰って・・・ヒドッ、なっくん、あたしの声忘れちゃったの！』
『？』

・・・もしかして

「・・・カオか？」

『か、カオじゃない！香音だよ香音！！』

「・・・」

んな事はどうでもいい

「・・・何用だ」

『うん、ちょっと外見ってみて！！』

「外？」

俺はよたよたとベッドから起き上がり、2階自室の窓のカーテンを開ける。

シャッ！！

「・・・」

『昨日言ったよね？体育館空いてなかったから、バスケ明日やる、』

って』

「……………」

我が吉崎家の隣には、小さい公園がある。

ベンチとぶらんこ、滑り台に鉄棒があるだけの小さな公園。

その公園の滑り台のてっぺんに、バスケットボールを持った少女が一人。

『早くう!!』

……まだ6時だぞ？

……ってなわけで、まだ午前6時の公園、俺は香音と1on1。

「はっ!!!!」

ダムツダムツ!!

「ま、待ってえ〜」

俺はボールをドリブルしながら公園を一周。

香音はそれについて来るのに必死。

「遅えぞ、お前ソレ本気か？」

「うん」

香音は頷くと、覚束ない手つきでドリブルを開始、そしてゆっくりと前進。

「お前は亀か？」

「えっ!?!」

・・・下手過ぎる。

「まったく、ドリブルってのはな、平手でやるんじゃないよ。こっ、指先を少し曲げてだな・・・」

「・・・こっ!?」

「外側に曲げてどうする!!内側だ内側!!」

学習能力もないのか、コイツは・・・。

「だって、分かんないものは分かんないんだもんっ!!」

「・・・すねてる暇があんなら、ほら、練習しろ、カオ」

「カオじゃなあゝい!!!」

すねたり怒ったり、忙しいヤツだ。

その時・・・

「あ……」

「あ？」

俺の後ろから声が。

そして振り返るとそこには、一人の少女が。

黒いロングヘアーにメガネ、色白の肌にワンピースを着用。

「すみません。木山さんってお宅、この辺にありませんか？」

「木山？」

木山……確か同じ学年にそんな苗字のヤツがいたような……

……分からない。

「……すまん、分からんな」

「そうですね。お手数をお掛けしました」

そう言うと、彼女は一礼し、去って行った。

「なつくん、今の誰？」

「分からん」

んな事より、

「ほら、もっかいドリブルやってみろ」

練習再開だ。

第18話 土曜日の朝（後書き）

ミニコーナー、キャラクタープロフィール紹介！

キャラクターNo.3

荏咲 小夜

（エサキ サヨ）

女性、現在16歳、葉城高校二年三組在籍。

身長：160cm

体重：45kg

誕生日：9月7日

血液型：AB型

好きな物：家族、友達、うどん、猫

嫌いな物：暴力な人、爬虫類全般、炭酸飲料

趣味：整理整頓、マグネット集め

特技：裁縫、料理

その他：家は7人姉弟、バイトは週6（毎週火曜日以外全部）、
一応弓道部所属（バイトのない火曜日のみ参加）

第19話 牛のプライド

「……………」

土曜日の朝、俺、木山春吉が起床し、リビングに行くとき置き手紙が。

“また、お父さんお母さんは夜逃げしてきます。渡邊さんとお幸せにい！！”

父母より”

ふ、ふ……ふざ……ふざけ……

「ふざけるなあ！！」

どうしてウチの親はこうなんだ？

もっとちゃんとした一般家庭に生まれたかった、と言っのが、この所の感想かな。

「ざけんじゃねーよ、マジでブチ切れるぞ」

もう十分ブチ切れているが。

・・・イライラしてても仕方ない。
ここは一旦、落ち着こう。

「とりあえず牛乳・・・」

冷蔵庫オープン・・・って、あれ？

「牛乳が・・・つーか何もないッ!？」

すっからかんの冷蔵庫は、とても虚しかった。

「まさか・・・あのバカ両親が・・・」

昨日までは冷蔵庫内に牛乳はあった。
だとしたら・・・

「・・・」

両親に飲まれた。

「・・・もう嫌」

・・・仕方ない、のども渴いたし、近くのコンビニまで朝食調達
に行くか。

財布と携帯持って、いざ出陣!!

「まったく、今度両親に会ったら牛乳ぶっかけてやる!!」

などと言う愚痴をこぼしながら、俺は近所のコンビニへ。
ちなみに、コンビニは自宅から徒歩三分。
これはこれで結構便利だったりする。

「・・・ついでに、から○げクンでも買ってくかな」

はい、何のコンビニか分かった人は挙手。

「にしても、渡邊さんとかの件、あれ本当なのかなあ？」

などと言う疑問を考えているうちに、コンビニに到着。

ウーーン!!

「いらっしやいませ」

俺は店員の業務ワードを聞きながら店内へ。

「えーっと、牛乳、牛乳と・・・」

とりあえずは飲料水コーナーへ直行。

新作の菓子やパンなどに興味を引かれつつ、俺が牛乳の賞味期限を確認していると……

「あ！！春吉！！」

「ん？」

Myネームを呼ぶ声が！！
俺は後ろへ振り返る。

「やっぱり春吉だ！」

そこには、Tシャツに下ジャージ姿の楓が！！

「おお、楓か」

「そうだ、楓だ！！」

ニコニコ顔の楓……つーか、あれ？

「つーか、何で楓がこっちのコンビニにいるんだ！？」

楓ん家は確か、駅を挟んだ南側にあるはず。

ウチやこのコンビニは、駅を挟んだ北側。

「ん？ああ、朝のロードワークでな」

「ロードワーク！？」

「うん、ウチの道場の決まりで、学校がない日の朝は駅の北側ま

で走るんだ!!」

「ああ、なる程……」

確か楓ん家は道場だったっけな。

沢那柔道場、それが楓の家。

「……春吉、お前牛乳なんか買っつのか？」

「ん？ああ……」

いつの間にか、楓の視線は俺の手元の牛乳へ。

「うわ……」

「な、何だよ」

「だ、だって牛乳って……」

楓は心底嫌そうな顔。

「牛乳って、牛の体内で形成された、白い液体だよ？」

「だ、だから何だ」

「……気持ち悪い」

あ、そう言えば楓、牛乳嫌いだったっけ。

「バカ言え、牛乳ってのはな、牛さんが一生懸命、汗水流して我ら人間に与えてくれる、栄養満点の有り難いお水なんだぞ！」

「……水と云うか、体液じゃんソレ」

「なっ……」

「、この子は何て事を……」

「お前、だからチビっ子なんだよ」

牛さんのプライドのため、木山春吉反論開始！！

「な、チビっ子……」

「そうだ。だからチビっ子なんだ。カルシウムナメるな！！」

元素記号Caだぞ、ナメるなポケエ！！

「ち、チビだっていいもん、心さえでかければ、それでいいんだ
！！！」

……何言ってるんだ、コイツ……。

「はは〜ん、本当に心だけでいいのか？」

俺はからかうつもりで、Aカップ（自称Bカップ）の楓の胸部に
目をやる。

「なっ……」

突然の事に、どんどん赤くなっていく楓。

……もう俺の頭の中には、昨日の電車内事件の事はない。

「牛乳飲め、牛乳」

俺は棚の手前の牛乳を掴み、今度はパンコーナーへ。
その時だった。

ブオオオオン！！

「ぐっ！！」

背中に走る強烈な痛み！！

な、なんだ・・・

「・・・好きでAやってる訳じゃねえ」

ボソツと、どす黒い声でそう聞こえたが、俺は聞こえない振りをして、そのまま気を失った。

第19話 牛のプライド（後書き）

ミニコーナー、キャラクタープロフィール紹介！

キャラクターNo.4

沢那 楓

（サワナ カエデ）

女性、現在16歳、葉城高校二年三組在籍。

身長：155cm

体重：44kg

誕生日：12月16日

血液型：B型

好きな物：柔道、甘いお菓子、特撮ヒーロー物

嫌いな物：牛乳、野菜、勉強、幽霊

趣味：ロードワーク、特撮ヒーロー物観賞

特技：早食い、背負い投げ

その他：実家が柔道場&学校でも柔道部所属、生クリームは好きだが牛乳が苦手、実は身長や胸の大きさがコンプレックス

第20話 訪問者

「あゝヒドイ目にあつた・・・」

「それは春吉のせいだからな!!」

あゝ・・・背中が痛いよおゝ!!

現在、俺の家。

で、何故か・・・

「うん・・・なかなかね、この味」

「・・・美味しい」

「あつち!!ふうふう」

・・・土曜日午前8時、我が木山家には美少女が3人。

「・・・何故、あんたらが・・・」

『えっ!?!』

楓、小夜、美羽の声が見事に重なる。

「だから、何であんたらがウチの朝食を・・・」

事の発端はさっきのコンビニ。

見事、楓の幻の右を喰らった俺は、ボタンきゅ〜になってしまった。

で、意識を失った俺を、楓が家まで運んでくれたらしい（つーか、こうなったのも全て楓のせいじゃ・・・）。

で・・・

「この借りは、みんなに朝ごはんご馳走してくれたらチャラにしてやるよ」

などと言う、我が家庭の食料状態を無視した要求を突き付けられ、渋々了承したのだが・・・

「・・・まさか、お前らが来るとは・・・」

なんでこいつらに朝食をご馳走せねばならんだ！！

「ま、いいじゃん！！さっさと食おっぜー！！」

「・・・つたく、牛乳飲まずぞコラ！！」

「あゝ！？」

「・・・すみません」

食費が・・・

「ねえ、春？」

「・・・あ？」

今日の朝食メニューはお手軽チーズトーストにコンソメスープ、
サラダ。

「あんだ、両親は？」

「ブホッ!!」

「ぱ、パンが気道に!!」

「春!？」

「だ、大丈夫・・・」

実の所、まだ学校や親族、そして美羽達にも、両親夜逃げの件は
言っていない。

何て説明するか・・・

「そう言えば、春吉の両親って確かサラリーマンだったよな？」

「あ、ああ」

サラリーマン、それは昔の話。

「そ、そんな事より・・・あ、後でマ○オヤんねえか？」

苦し紛れの言い訳。

「春、両親は？」

美羽・・・くそ、強敵がコイツ！！

「・・・確かに、土曜日のこの時間に両親がいないのは、おかしい」

小夜・・・無口キャラのお前が何言ってるんだ！

「あたし・・・マ○オパス。帰って柔道の練習しないと・・・」

楓・・・お前だけ赤ヒゲの話題に乗っても意味ねえんだよ！！

「りよ、両親は・・・」

夜逃げしました、と素直に言ってみるか？
いや、それじゃ何か恥ずかしい。

「・・・現在、旅行中です」

結果、嘘をつく。

「・・・どこに？」

「・・・サイパン」

「いつまで?」

「・・・多分一週間」

「多分?」

「・・・しつこい」

「えーっと・・・その・・・」

その時!!

ピンポーン!!

インターホンが鳴った。それは、質問攻めの終わりを意味する。

「おっと、誰だろ?」

俺は美羽と小夜を無視し、玄関へ。

「はい」

ガチャッとドアを開けると、そこには・・・

「こんにちは!」

ニコッと微笑むワンピース姿のメガネ少女がそこにいた。手には

小さいかばん。

え？誰？

「えーつと……どちら様で……？」

すると、少女は何やら「そとそととかばんの中をあさり出し……小さい紙を取り出した。

「私、渡邊会所属の、ワタナベアキ渡邊亜希と申します」

そう言って、少女　　亜希は俺に小さな紙、名刺を差し出してきた。

「あ、ども」

俺はつられて名刺を受け取る。

渡邊会若頭　渡邊亜希

ん？渡邊？

確かどっかで……

……まさか

「本日は、春吉さんとの「結婚」の件について、いろいろと「相談」したく……」

「「結婚」！？」

「ま、ままままま、まさか「の子」！？」

「あの、お邪魔してもよろしいでしょうか？」

笑顔の亜希。

わ、渡邊会って・・・

いちゃあ〜！……！！……！！……！！

第20話 訪問者（後書き）

ミニコーナー、キャラクタープロフィール紹介！

キャラクターNo.5

重原 権三朗

（シゲハラ ゴンザブロウ）

男性、現在16歳、葉城高校二年三組在籍。

身長：171cm

体重：60kg

誕生日：8月1日

血液型：A型

好きな物：名誉、地位、空想、消しゴム

嫌いな物：地味、2番手、現実、犬

趣味：同人誌を書く、読む

特技：現実逃避、嘘泣き、絵画

その他：地味脇役ポジションの子、意外と絵が上手い、結構な二次元派で現実が嫌い（妄想癖あり）

第21話 ご結婚

「……………」

俺はさっき煎れてきたお茶を、ちゃぶ台の上に置く。

「あ、すみません」

渡邊嬢はニツコリ微笑んだ。

……………ここはウチの和室。

ついさっき、我が家に尋ねてきたのは、両親が言っていた渡邊さん。

渡邊亜希さん、年齢は16、高校2年生。
ぶっちゃけ、ヤクザの子供!?

「……………あの……………その……………」

な、何を話すべきか……………。

「……………木山さん」

「は、はいッ!?!」

この子はヤクザの子(多分)!!

もし下手な対応でもしたら……………首がッ!!

「木山さんのご趣味は……………」

「しゅ、趣味で……ごんす……か？」

やべつ、緊張で敬語が分からん。

「はい」

「趣味……趣味……」

第16話の後書き見る……とは言えないな。

「えーっと、その……あ、アニメのご観賞を……」

って俺、何言ってるんだ！！

「アニメ……ですか……？」

オタクオーラが滲み出てますかね？俺の体から？

「は、はい。その、あ、アニメを……」

……お見合いか？この空気？

「アニメですか、私もたまたま見ますよ」

「そうですか……」

……沈黙。

「……木山さん」

「は、はい？」

メガネを掛けている渡邊さんの色白の顔が、少し赤くなっているのが分かる。
な、何ッ!？

「木山さんには・・・今、お付き合いしている方とかは？」

「お付き合い!？」

その時、俺の脳内には先程、渡邊さんが言った言葉が・・・

「結婚・・・」

「いや・・・特に、お付き合いらしい事は・・・」

「では・・・？」

「あ、いや、でもね渡邊さん、まだ俺、渡邊さんの事・・・」

何を言おうとしてんだ、俺!!

その時・・・

「春吉いゝ!!!」

リビングの方から聞こえる、半男生物の声!!

「木山さん？」

「あ・・・すみません、ちょっと・・・」

今がチャンスー！！
俺は咄嗟に立ち上がり、部屋を出る。
そして、そのままリビングへ！！

「春吉、あのお客さんは誰？」

「・・・渡邊さん」

楓が俺を呼んだ理由・・・洗剤の場所どこ？

俺は朝食の洗いものをしながら、三人の問いに答える。

「春、渡邊さんって・・・誰？」

「・・・知らん」

いやマジで。

「知らんって・・・あんだ、大丈夫なの？」

「ああ・・・」

はあ・・・

「すみません・・・ちょっと洗いものが・・・つてうお!？」

俺が和室に戻ると、そこには渡邊さんと・・・小夜の姿が!!

「木山さん・・・あなた、この人とどう言うご関係で？」

「え？あ、ああ・・・小夜とは・・・」

「つかその小夜は、渡邊さんの顔をジーツと見たまま微動だにしない。

な、何という失礼な行為・・・。

「さ、小夜・・・？」

「渡邊亜希・・・渡邊財閥の正式な跡取り」

「小夜・・・？」

渡邊財閥？

「・・・木山さん」

「はッ、はい!?!」

渡邊嬢は、不適な笑みを浮かべた・・・。

「私と結婚して下さい」

「・・・ん?」

・・・もう意味が分からん。

「私はあなたの事が好きです、大好きです」

「え、あ・・・」

そして、渡邊さんはその場でムスツと立ち上がり、俺に接近。

「私は渡邊財閥の正式な跡取り。私と結婚すれば、全てが自由になります」

「な、ななな・・・」

何を言って・・・

「・・・春吉」

一方、小夜は俺の顔をジーツと凝視。

「木山さん、今こそ私と愛の契りを・・・」

「の、NOオオ〜!!!!!!」

駄目だあ!!

こ、こいつ、この小説をR18にするつもりか？

「木山さん……」

「駄目です、駄目ですよ……っーか渡邊さん、あんた初対面の
人に何を言っ……」

その時、先程まで少し真面目顔だった渡邊さんの顔が、一瞬で曇
った。

「え？わ、渡邊さん……？」

「やはり……覚えてないのですね……あの夜の事を……」

渡邊さんの顔には、うつすらと涙が……
っーか、え〜!!

「あの夜……」

小夜がそう呟いた。

「えっ？ち、違う！俺は何も知らん!!」

「ヒドイです……木山さん、あの夜の事を忘れるなんて……」

「え！？何！？ほ、本当に分からない!!」

何、何かしたっけ、俺！？

第21話 ご結婚（後書き）

ミニコーナー、キャラクタープロフィール紹介！

キャラクターNo.6

吉崎 夏哉

（ヨシザキ ナツヤ）

男性、現在16歳、葉城高校二年一組在籍。

身長：181cm

体重：64kg

誕生日：7月7日

血液型：O型

好きな物：夕日、グダグダした時間、昼寝

嫌いな物：面倒臭い事、厄介な事

趣味：音楽やったり、鑑賞したり

特技：バスケット、音楽（ギター系）

その他：一応第2の主人公、バスケット部所属、結構な面倒臭がり屋

第22話 昔のお話前編（前書き）

どうもー！！

えーっと、今回から次回にかけての2話は、春吉と亜希の過去話になります。

亜希の言う、「あの夜」の全貌が明らかに！！

第22話 昔のお話前編

それは今から11年も前の話。

まだ木山家に借金がなく、平和な生活をしていだ時代。

木山春吉、5歳、幼稚園年長。

「はい、じゃあ今日はみんなに、新しいお友達を紹介します！

！」

築場^{ヤナバ}幼稚園、年長、きりん組の教室。

当時、そのクラスの担任だった花岡^{ハナオカ}先生に連れられて、一人の女の子が教室に入ってきた。

「さあ亜希ちゃん、大きな声でみんなにお名前を言ってみよう！

！」

教室には約30人くらいの子供達。皆正座。

壁にはかわいらしいきりんの絵やパンダの絵。

教室後ろの棚にはブロックや人形などが沢山。

「わ、わたなべあきです・・・」

まだ恥ずかしいのか、小さな声で自己紹介をする亜希。

そんな彼女の声を、春吉は教室の最前列で聞いていた。

「ねえ春くん!!」

「なあに？」

休み時間、春吉は数人の友達とぶらんこで遊んでいた。

「きのこのウル○ラマンみた？」

「うん、みたよ!!」

「やっぱりウル○ラマンかけえよな!!」

「うん!!」

などと言う銀色巨人の話をしていると・・・

「春くん、そろそろじゅんばんかわってよ!!」

春吉の目の前には二人の少女。

「げ・・・かえちゃん、みーちゃん・・・」

そこにいたのは、まだ幼き日の楓と美羽。

「はやくどいてよ!」

「やだ!」

「・・・」

ズドっ!!

その瞬間、まだ未熟ながらも、後に幻の右と呼ばれる事となる楓の右ストレートが春吉に直撃!!

「うう・・・うわ〜ん!! 痛い!!」

春吉、一撃でノックダウン!!

春吉はぶらんこから飛び降り、教室へダッシュ!

「ま、まっつてよ春くん!!」

他の男友達も、春吉を追って教室へダッシュ!

「ふ〜んだ!! みーちゃん、ぶらんこのろ!!」

「うん!!」

楓と美羽は笑顔だ。

きりん組の隣、いるか組の教室。

「もう……疲れました……」

「言うつのは、きりん組担任の花岡先生。」

「まあ、あの渡邊財閥の娘さんだもんな。氣い使うよ、そりゃ」

「言うつのは、いるか組担任の平石先生^{ヒライシ}。」

「もう……なんでウチのクラスに……」

「花岡先生、これも何かの試練です。頑張つて下さいよ!!」

しかし、花岡先生はビタッと机に伏せたまま。

「もう……今度園長先生に講義してやる!」

「……そんなに嫌なんだ」

「だってそうよ!!もし亜希ちゃんに何かしらあつたら、私の首が吹っ飛ぶわ……」

「花岡先生……」

その時・・・

「せんせえ〜」

「ん？」

声のした方に平石先生が振り返ると、そこには一人の女の子。

「小夜ちゃん？どうかしたの？」

女の子・・・まだ幼き日の小夜は、外を指差した。

「・・・さつき、知らない女の子がお外に・・・」

「えっ!？」

二人はガバツと立ち上がる。

「さ、小夜ちゃん、その女の子は誰？」

平石先生の問いに、小夜は首を横に振る。

「・・・分かんない」

「じゃ、じゃあ何か知ってる事は・・・？」

「・・・えーっと、ながいかみのので、メガネかけてて、おとなしそうな子!!」

その言葉に、二人は青ざめる。

「は、花岡先生・・・まさか!!」

「黒いロング、メガネ・・・まさか、亜希ちゃん!!」

まさかの事態が、発生してしまった。

第22話 昔のお話前編（後書き）

ミニコーナー、キャラクタープロフィール紹介！

キャラクターNo.7

水岡 香音

（ミズオカ カオン）

女性、現在17歳、葉城高校二年一組在籍。

身長：162cm

体重：50kg

誕生日：4月23日

血液型：B型

好きな物：頑張ってる人、スポーツ、ブドウ

嫌いな物：諦め、勉強、昆虫、煙草の煙

趣味：夏哉観察、自転車で遠出

特技：ペン回し、折り紙、立ち寝

その他：夏哉一筋の女の子、若干天然、夏哉以外の男子には冷た

い

第23話 昔のお話後編（前書き）

どうもー!!

やっと学校の定期テストが終わったので、連載再開です!!

あ、あと、今回はキャラクタープロフィール紹介はお休みです！
！

第23話 昔のお話後編

「・・・まただ」

築場幼稚園から少し離れた畑、その畑のすぐそばにある農業用具の物置。

「みんな・・・みんな・・・迷惑なんだ」

その物置の中に、一人の少女の姿があった。

「うう・・・」

少女　　亜希は、一人小さく丸まり、涙を流していた。

先程、亜希は聞いてしまったのだ。
平石先生と花岡先生の、あの会話を・・・

「やっぱり・・・どこへ行っても、わたしが“ざいばつ”の娘だから・・・みんな、迷惑なんだ」

財閥の跡取り それは、周りが嫌でも気を使ってしまつ生き物。

周りからぴりぴりした態度で接しられる事、亜希はそれが嫌いであつた。

どこの幼稚園に行つても、必ず受ける軽蔑の目……。

ガコンッ!!

「……っは!?!」

あれからどのくらい経つただろうか。

物置の中で泣いていた亜希は、いつの間にか寝てしまつていたらしい。

そして……

「……え?」

「……ん?」

今さっき開かれた物置の扉、そして、その向こうにいたのは……

「……あきちゃん？」

「……あ！」

そこにいたのは、小さな少年。

亜希は、彼に見覚えがあった。

確か、今日、あの教室にいた……

「……はるよしくん？」

「……やっぱりあきちゃんだ！」

そう言うと、幼き日の春吉少年は、不思議そうな顔をした。

「なんで、あきちゃんがここにいるの？」

「えっ!?!？」

この畑……何も知らず、ただ逃げるために入り込んだこの畑は・

「ここ、ぼくのおじいちゃんの畑だよ？」

木山家の畑でした。

「はるよしくんの、おじいちゃん？」

「うん!?!」

春吉少年は元気よく頷く。

辺りは既に、夜の静けさに満ちていた。

その頃、築場幼稚園

「どう言う事かね！？何で私の娘が行方不明になっているんだ！
！」

築場幼稚園、職員室

「申し訳ございません、今、警察の方にも連絡をしましたので、
すぐに搜索を……」

幼稚園の職員達は皆、目の前の男性に向け、頭を下げている。

「今だと！？何でもっと早く警察に連絡しないんだ！！亜希は我
が渡邊財閥の跡取りなんだぞ！もし、誘拐でもされたら……」

「本当に申し訳ございません、渡邊様。こちらとしても、監視の
不注意が……」

「もういい！！我が権力を使って、こんな幼稚園なんか潰してやるー！！」

「へえ、あきちゃん、ざいばつが嫌なんだ」

「・・・うん」

現在午後7時。

二人は、木山家の農具倉庫（物置）の中で、おはなしをしていた。

「もう、ざいばつは嫌。みんなに迷惑、かけたくない・・・」

「・・・めいわく」

春吉はボソツと呟いた。

「・・・何で、ざいばつがめいわくなの？」

「えっ・・・！？」

「ぼくは、めいわくしてないよ？」

財閥の跡取り

他人からの軽蔑

必要以上のお節介

気を使う周りの人々

それら全てが、皆に当てはまる、亜希が掛けてしまう迷惑。
しかし・・・

「あきちゃん、何も悪い事、してないじゃん」

「はるよしくん・・・」

迷惑か？と、周りの大人に聞くと、大人はわざとらしい笑顔で「大丈夫」と、答えていた。

初めて、「迷惑じゃない」と、言われた・・・。

なんだか、涙が引いていた。

「あきちゃんは何もわるくないよ、めいわくなんかじゃないよ！」
「！」

春吉少年は、ニッコリと笑った。

その言葉と、わざとらしい感じがない笑顔に、嬉しさを感じた。

そして、感謝なのか、安心なのか、良く分からない感情が、胸をよぎった。

「……ありがとう」

「えっ？」

小さい子供が考える感謝の気持ち、安心を与えてくれた人に、小さい子供は、何の恥じらいもなく、この言葉を言えてしまう。

理性の働いた大人だったら、絶対恥じらう……と言っか、単純な子供の気持ちだ。

「……はるよしくん、迷惑じゃなければ……大きくなったら、私達……結婚しよう!」

大きくなったら先生と結婚する、お父さん、お母さんと結婚する! 皆が小さい子供の時、ほとんどの人が言った事があるであろう、軽い気持ちの「結婚」と言う言葉。

「……うん!」

当時の春吉は、きっとこの軽い気持ちだったのであろう。

「やくそくだよ?」

「うん!」

午後8時、渡邊財閥の跡取りは、幼稚園の入口で発見された。
激しく怒られた。
そして・・・

違う幼稚園へと、転校して行った。

自分に「迷惑じゃない」と言ってくれた彼。

あの夜の、あの「結婚」の言葉。

彼女にとっては、軽い気持ちなんかでは、なかった。

第24話 約束

その時、俺は全てを思い出していた。

「思い出してくれましたか？木山さん……いや、春吉くん……」

「あ、ああ……」

……気まずい。

正直、思い出したと言っても、ほんやり程度。

細部までは覚えていないし……。

「つか、それ以前に、この子があの時の亜希ちゃんかよ!!」

雰囲気、変わりすぎだろ、コレ……

昔はもっと、活発なイメージがあったのに、今は逆におしとやかイメージ。

「じゃ、じゃあ、結婚は……?」

「えっ……いや、マジで?」

どうしようか……

ぶっちゃけ、もう帰りたい……あ、ここ家か。

「……春吉」

「ハッ!！」

さ、小夜! ! そんな目で俺を見るなッ! !

「春吉くん……」

「いやいやいや、ちょっと待ってくれ!」

「ここは冷静な対処を!」

「け、けけ結婚って言ったって、ま、まだ俺ら、お互いの事、何も知らんだろ!？」

「いえ、私は知ってますよ?」

はい?

「木山春吉、16歳、2月3日生まれの水瓶座、好きな物はアニメ、特技は口で綺麗にみかんの皮を剥けること」

「……」

得意げに話し始めた亜希ちゃん……いや、渡邊さん。

「あ……」

「はい?」

俺は勇気を持って質問! !

「その情報は、どちらから……?」

ヤクザの裏ルートだったりして……

「ああ、春吉くんの事は全て、春吉くんのご両親から……」

「……なるほど」

あのクソ両親め、とうとう息子を売ったかッ!!

「私も、始めは驚きました。まさか、春吉くんのご両親と私の両親につながりがあったなんて」

つながり……ああ、借金か。

「……春吉くん」

「は、はい?」

渡邊さんは姿勢を直し、俺の顔に視線を向けた。

「お金の件は、私から父にお願いして、何とか帳消しに出来るように、話しをしてみます」

「はあ……」

借金の件は、両親が俺に内緒でやっていた事だから、俺にはイマイチ分からん……。

「……そして、春吉くん」

「は、はい？」

彼女の顔は、ほんのり赤くなっていた。

「改めてですが、あの時の約束、結婚の・・・」

多分だが、次に渡邊さんが発するであろう言葉が、予想できた。そして、渡邊さんが何か重要な事を言おうとした、その時・・・

「・・・だめ」

今まで静かに傍観していた小夜が、ボソツと呟いた。

「さ、小夜？」

小夜はそつと、俺の側にやって来た。

「・・・だめ。それは、絶対」

「はい？」

彼女の瞳は、何かを訴えているのが分かる。

「・・・そう言えば、あなたは？」

一方、渡邊さんは、話しの腰を折られたのか、話題を小夜へチェンジ。

「あ、そっか。渡邊さんは小夜と違うクラスだったっけ」

懐かしい幼稚園時代。

俺と渡邊さんはきりん組、その他メンバーはぱんだ組だった。だから、面識はないのか。

「こいつは小夜。まあ、学校でのクラスメイトで、昔からの友達だ」

俺は小夜の顔をちらつと見る。

小夜は、目を伏せていた。

「友達……ですか」

……あれ？渡邊さんの目は、なんか訝しげ。

「そう、友達だ……」

その時……！

スパアアアンツ……！

「うおっ……！」

突然、和室の襖が勢い良くオープン。そして……

「春……！覚悟お……！」

「み、みは・・・」

ゴンツッ！！

・・・突然、乱入してきた美羽に、顔面をグーで殴られた。痛いです。

「痛っ、な、何すんだ！！」

「いや、そう言えば昨日の仕返ししてなかったから、今から半殺し！！！！」

「昨日？」

昨日・・・・・・・・昨日・・・・・・・・あ！！まさか、電車事件かッ！！

「なぜ今！？」

「いいから殴らせろお！！」

ゴンツッゴンツッゴンツッ！！

「痛い、痛い！！目はアカン！！」

つか、マジでなぜ今復讐を実行？
理不尽&タイミングが悪い！！
ほら、渡邊さん、引いてるし！！

「ちよっ、待て、一旦止め・・・」

「春のバカアア!!」

ギヤアアア!!目潰し止めてえ!!
つか、こいつの目、超怖い!!

「全部丸聞こえなのよ、何が、何が・・・」

「み、美羽!?!」

「何が結婚よあ!!」

ゴンツゴンツゴンツ!

「だから目は止めッ、ギヤアアア!!」

が、眼球があ!!

そしてその時、

「春吉、食器ってどこにしまえば・・・」

キッチンから、楓がやって来た。

「お!?春吉、プロレスごっこか?」

この状況がプロレスに見えるかあ!!

「ちよっ、楓、た、助けて・・・」

「春のアホオオ!!」

ドカッゴンッバシッ!

「あっはっは、頑張れ春吉!」

のんきな事言ってる場合じゃねえ!!

俺は楓からの救助を諦め、視線をさ迷わせる。

その時、

「お、女の子3人と・・・同棲」

・・・今、何か・・・変な言葉が聞こえたような・・・。

「あの春吉くんが・・・女の子3人と・・・」

・・・俺は、目潰しで半分死んでしまった目で、何となく渡邊さんを見た。

渡邊さんは、呆然としていた。

多分だが・・・変な誤解をしていると、俺は思う。

「わ、渡邊さん?」

「あの春吉くんが・・・同棲・・・」

やはりかッ!!

「ちよっ、ま、変な誤解してない?」

「3人・・・ふ、不潔ですッ!!」

・・・たつた今、ここ木山家に、新たな大誤解が生まれた。

「もう嫌ですっ!!！」

渡邊さんはそう言うと、ガバツと立ち上がり…………。

「3人はさすがに嫌あゝ!!！」

玄関へダツシュ。

「あ、ちよつ、違う……があ、美羽、だから目は止め」

「春死ねえ!!！」

バタンツ!!！」

玄関のドアの、閉まる時の音が、家中に響いた。

俺はただ、美羽の半殺しを受けながら、そのドアの音を聞いている
事しか出来なかった。

第24話 約束（後書き）

ミニコーナー、キャラクタープロフィール紹介！

キャラクターNo. 8

渡邊 亜希

（ワタナベ アキ）

女性、現在16歳、須貝学園二年二組在籍。

身長：159cm

体重：53kg

誕生日：12月30日

血液型：A型

好きな物：木山春吉、紅茶、マドレーヌ

嫌いな物：紅生姜、漬け物、財閥、差別

趣味：木山春吉関連の情報収集、日光浴

特技：茶道、華道、琴演奏

その他：渡邊財閥の正式な跡取り、渡邊財閥の力からとある幼稚園を救った過去がある。

第25話 対戦相手

「・・・遅え」

つたく、何なんだコイツのドリブルスピード。

「ま、待って、なっくん速すぎ・・・」

「・・・置いてくぞ」

朝っぱらからバスケの練習だ、とか言っておきながら、カオは全くドリブルが出来ていない。

現在、カオと公園一周のドリブルマラソン中。

「・・・遅え」

・・・眠っ。

「いやあ、なつくんは相変わらず速いねえ！」

「・・・お前が遅いだけだろ」

練習開始からわずか30分、カオはバテた。
で、今公園のベンチで休憩中。

「つーか、お前なんでバスケット出来ないのに、球技大会、バスケット選んだの？」

俺はそう言うと、持参のスポドリを一口。

「あ、なつくんズルい！あたしにもちようだい」

「・・・質問に答える」

全く、話を聞け、このカオめがッ。

俺はまたスポドリを一口。

「だから、あたしにも一口ちょうだい！！」

「やだ」

「なっ！！・・・だったら」

そう言うとカオは突然、ベンチから立ち上がり・・・

「強制的に奪うのみ！！」

「なっ！！！！」

ぐあつ・・・こ、コイツ・・・俺が飲んでいる時に、スポドリのペットボトルを強引に引つ張りやがった!!

「やめろ、こ、こぼれるッ!!」

「よーこーせー!!」

ぐッ・・・コイツ、どつからこんな力が・・・

「止せ、カオ!!」

「・・・あつ!!」

その時、カオがペットボトルから手を放した。
そして・・・

パシユッ!!

「ぐふっ!!」

ペットボトルの飲み口が、俺の前歯に直撃!!

痛っ!!

「テメエツ、急に放すなボケ!!」

前歯に響く衝撃は、半端じゃなかった。

「ねえなっくん、あれ見て!!」

カオは公園の外、車が走る道路を指差した。

「んだよ」

「ほらあそこ、パトカーが止まってる!」

「……………」

「ねえ、すごくない? 白黒スーツだよ? パトカーならぬ、あれパトカーだよな!」

「……………」

「パトカー、パトカー……何か、発音が仮面ライダーに似てるね!」

「……………」

「……コイツ、殴りてえな。
その時……」

「ん?」

何となく携帯を見たら、メール受信の文字。

「なつくん、どしたの?」

「いや、メール……森島からだ」

「森島?」

森島つづーのは、ウチのクラスメートで、行事委員会所属。
確か今日は、委員会があるからとかで、土曜だが学校にいるらしい。

「……お、緊急速報……ウチのクラスの球技大会、バスケの部、初戦の相手が決まった……だよ」

こんな事、いちいちメールしなくても……

「え？どこどこ？」

「あ？えーっと……初戦の相手は三組」

「三組かあ……」

三組……三組って、まさか……

「ん？なつくん、どうかした？」

「あ？いや」

……思い出した。

三組には確か、中学時代のバスケット大会で、この俺をかなり苦しめたムカつく野郎がいるクラスだ。

「……そういや、奴の苗字って確か……」

ついさっき、メガネの女の子が聞いてきた苗字……

「……もうちょっと早く、思い出していればな」

「なっくん？」

「……おし香音、練習するぞ」

やる気出てきた。

「え？あ、うん！」

多分、初戦からかなりの激戦になるだろうな、今年の球技大会。

第25話 対戦相手（後書き）

次回より、球技大会篇本格始動！！

あと、もうキャラクターが尽きたので、しばらくの間はキャラプロファイルはお休みします。まさかの事態です、はい。

と、言う事で、次回から新しいミニコーナーを後書き使ってます。

お楽しみに！！

第26話 ヤサイ人

「初戦は一組じゃ〜!!!!!!」

・・・月曜日、俺がいつも通り学校へ登校、そして教室に入った瞬間、物凄い熱気がツ!!!

「これは因縁だ!!!これは因縁なのだ!!!」

教室の中央、そこには行事委員の権三朗の姿が。

「打倒一組!!!」

・・・朝から、かなりのウザハイテンション。
俺はたまたま近くにいたクラスメートに声を掛ける。

「なあ、赤佐」

「ん?ああ、春吉か。何?」

クラスメートの赤佐大輔^{あかさだいすけ}。

まあ、そこそこ仲の良い友達だ。

「あのスーパーヤサイ人は、何かの宗教団体にでも入ったのか?」

「スーパーヤサイ人・・・ああ、権三朗か」

スーパーヤサイ人の歴史・・・それは第2話を見よう。

「いや、何かね、ウチのクラスの球技大会の種目、どれもこれも初戦が一組になったんだってさ」

「初戦？」

「ああ。テニスもバレーも野球もバスケットもサッカーも、全部初戦は一組」

「なっ……」

確か球技大会のトーナメントは、公平に行事委員会がくじ引きで決める。

っーことは……

「……だから、あのヤサイ人はテンション高いのか」

男つてのは、何か偶然が起きるとハイテンションになる生き物なのだ。By権三郎。

「……ウゼエからシバくか、ヤサイ人」

「は、春吉？」

つたく、こっちは寝不足なんだぞ（深夜アニメ見てたから）。馬鹿に騒がれると頭ガンガンすんだよ。

「おい、そのヤサ……」

その時、

ぴーんぼーんぼーんぼーん!!

『二年三組木山春吉、至急校長室まで来なさい。繰り返す、二年三組木山春吉、至急校長室まで来なさい』

こ、校内放送!?

し、しかも校長室!?

「春吉、お前、何かしたか?」

赤佐の顔は、軽くひきつっている。

「・・・心当たりはないぞ、多分」

職員室への呼び出しならまだ分かる。だってまだ進路調査表出してないし。

けど、それぐらいで校長室呼び出し・・・はないだろう。

「ま、まあ春吉、とりあえず行ってこいよ!」

「あ、ああ・・・」

こんにちは！

「し、失礼します」

葉城高校北校舎一階、校長室。

俺は、深呼吸をし、手の平に「人」の字を三回書いて飲み込み、軽く頬つぺたをつねってから、校長室の扉をノック。

そして、入室。

そこには・・・

「あ、来た来た」

校長室内部。

そこには、スーツを着た校長、ラフな私服用用の担任、腕に「会長」の腕章を付けた美羽。

そして・・・

「こんにちは！」

「なッ・・・!？」

我が高校の制服を着た・・・
渡邊さんがいた。

「な、なんで？」

も、もしかして、ラブコメ漫画や恋愛小説によくある、転校してきましたパターンですか!?

「私、この学校に転校する事になりました」

あ、当たったあ!!

「いやあく木山、やっぱりお前、知り合いだったかあ」

「た、たつつあん!」

たつつあんとは、我がクラスの担任、和波辰のあだ名である。名前が辰だから、たつつあん。

「う、これ、どゆことなの?」

「いや、ただこの子・・・渡邊さんが、この学校に知り合いがいるって言うからよ」

「ご指名ですかッ」

ああ・・・

「春吉くん、これからよろしくお願いしますね」

「あ、うん・・・」

・・・この時、まだ俺は気付いていなかった事が、二つある。

一つは、渡邊さんとは同じクラスではない事。

この時の俺は、てっきり同じクラスだと思いこんでいて、かなりの苦勞を覚悟したものだ。

そしてもう一つは……さっきから、美羽がずーっと、殺意の目で俺を見ていた事だ……。

第26話 ヤサイ人（後書き）

新・ミニコーナー！！

（姫様達の日常を覗いちゃおう！！）

「はいどもー！！ ミニコーナーのリポーター役を勤めさせて頂
く、重原権三朗です！！」

今回は、日頃春吉目線で進むストーリーでは、まず書かれる事
ない、ヒロイン達の日常を覗いてしまおうと言っコーナーです！」

第一回 沢那 楓

〇〇県〇〇市

沢那柔道場

平日午前6時00分

「おはようございます、みんなのアイドル、重原権三朗でござん
す！

今日は、沢那楓の実家に潜入です！！」

沢那家、楓の部屋

「むにゃむにゃ……………」

「寝てますねえ…………白いTシャツに、白い下ジャージって、普
通男子の寝着じゃありませんか？

あららあ、寝癖が・・・コイツ、寝る前に髪、ドライヤーで乾かしてねえな。しかも、ヨダレまで垂らしちゃって・・・本当に女子か、コイツ？

って、もう今回終わりかよッ!？」

注意：ミニコーナーは、一回約500文字くらいでお送りしていきます！

つづく!!!

第27話 黒い閃光

「春吉くん・・・私、あれから考えたんですけど、私、春吉くんが誰と同棲しているようが、気にしない事にしました」

「・・・はい？」

学校、校長室からの帰り道。

俺は、渡邊さんを、彼女のクラスの四組へ送っている途中（校舎内案内もかねて）。

「けれど、だからと言って、4番目の女になる気は全くありません」

「いや、あの・・・渡邊さん？」

ま、まだ誤解してんのかこの女！？

「何がなんでも、私は、春吉くんにとっての1番の女になってみせますから！！」

「だ、だから違う」

「そしたら、絶対に結婚しましょ！！」

ニツコリ笑顔の渡邊お嬢様。
無邪気です。

「いや、だから、1番とか同棲とかは違・・・」

「私達、結婚したら、どっちの苗字になるんでしょうね!?!」

人の話聞けえ!!

「今から楽しみですね!?!」

・・・俺は今、ようやく理解した。

渡邊さんは立派なお嬢様キアラじゃない。

妄想癖が激しい天然っ子なんだ!?!

「では、またあとで」

「あ、ああ・・・」

笑顔で手を振る渡邊財閥跡取り娘。
俺も、とりあえず愛想笑いで返す。

・・・疲れた。

見事、渡邊嬢を四組へ送り届けた俺は、フラフラした足どりで教室へ。

ガラガラガラ！

「ただいま・・・」

我がクラス三組の扉を開き、クラスへ入室する俺。
その時・・・

「月牙天衝！！」

「・・・へ？」

次の瞬間、俺の体は吹っ飛んだ！！
そして・・・

ドッスン！！

掃除用具入れに激突！

っーか痛ッ！！

「フハハハハ、ぶざまだな春吉！！」

はッ、この声は・・・

「はッ、どうやら俺のほぅが上だったみたいだな！！」

そこにいたのは、死神代こ・・・じゃなくて権三朗！！
奴の手には、刀に見立てたほうきが一本。

「なっ・・・テ、テメエ!!」

「行くぜ、これが俺の虚化だッ!!」

すると権三朗は、どこからかヒョットコのおめんを取り出し・・・

「うおおおおおおおおお!!」

顔に装着し、絶叫。

普通にウザイ。

しかも・・・

「いけえ、いち・・・じゃなくて権三朗!!」

「ウルキオ・・・じゃなくて春吉に勝てえ!!」

「助けて、黒さ・・・じゃなくて重原くん!!」

クラスの連中は、みんなノリノリだし（野郎共だけが・・・）。

・・・いいだろう

「・・・それで、勝ったつもりか？重原権三朗」

俺も乗ってやる!!

まあ、このまま行くと負け役だが・・・

「・・・鎖せ」

俺は近くにあった机の上に上り、権三郎を見下ろす。

「権三郎、このままだとヤベエ、アレが来るぞ!!」

「権三郎、逃げろ！」

「黒い翼だ・・・!!」

野郎共はマジでノリノリ状態。

「黒翼大魔!!」

俺はそう叫び、これまた近くにあった空ペットボトルを手に取る。

「なッ・・・」

一方の権三郎は、何故かひざまづいていた。

・・・何もしてないのに、ヒョットコのおめんが少し欠けてるし。

「こ、これがウルキオ・・・いや、春吉の刀剣解放だ・・・」

権三郎はポツリと呟いた。

フハハハハ!!

「権三郎、最後だ、見せておいてやる。これが、黒い虚閃だ!!」

調子に乗った俺は、手に持っている空ペットボトルを、権三郎に向かい投げ飛ばす!!

「黒虚閃!!」

「クソッ!」

権三朗は、俺の虚閃……いや、ペットボトルを思い切りほづきで弾いた。

「喰らつかッ」

コソソッ

「ん？」

「あ？」

あれ、今何か、奇妙な音が……？

「春吉、右、右い！」

あ？赤佐が何か小声でジェスチャーしとる。
右？一体右に何が……ッ!?

「……」

俺は一瞬でフリーズ。

「……おい」

……そこには、額に痣が出来た、藍ぜ……いや、楓の姿が……。

「……あ、あの〜」

楓さんの手には、俺が放った黒虚閃があった。

「………」

あ、あらま、殺気が凄いや……視認出来るくらいに……。

一方の権三朗は……こ、こやつ、マツハの速度で土下座しおつた……！

「申し訳ございませんでした……！」

「あ、テメエ、ずりい、抜け駆けは駄目……」

「……おい」

「「は、はいッ！」」

俺もマツハでジャンピング土下座。

「……体育倉庫の裏に來い」

「……え？」

「……おら、行くぞ」

楓さんは瞬歩のごとき速さで俺らの背後に回り、襟をわしづかみ。

「え、あ、嫌、ごめんなさいごめんなさい……！」

「あ、アカーン!!」

・・・その後、俺らは体育倉庫の裏まで引きずられ、処刑を受けました。

「これ、BLEACH知らない人は、全く分からんだろうな・・・」

「・・・春吉」

「あッ!?!すみませんすみませんすみません!?!」

第27話 黒い閃光（後書き）

「ども〜！！権三郎ですたい。では早速ミニコーナー“姫様達の日常生活を覗いちゃおう！！”はーじまーるよー！！」

前回の続き・・・

午前6時30分

「ふあ〜・・・」

「はいはい、半男生物が起床しました！！・・・あ、ちなみに今、俺は“透明マント”被ってるから、楓にはバレてません！！」

「・・・もう・・・朝・・・」

「（母）楓え、今日朝練あるんでしょ？早く起きなさい！！」

「一階から母親の声がッ！！楓さんは、朝が苦手なようです！！」

「・・・今・・・行・・・く」

「・・・まだ、目が半分寝てますね。ハハハッ、この寝ぼけ顔、意外と可愛いではありませんか！！」

「・・・ぐう」

「なッ・・・二度寝だと・・・！！」

第28話 春と夏

「えーつと、本日の放課後、球技大会でバスケを選んだ人は練習があるんで、帰りのSHLが終わったら体育館に集まって下さい！」

体育倉庫裏で地獄を味わった翌日の朝のSHLで、クラス委員の奴がこう言った。

・・・ヤベエ、今日バイト入ってたよな。

「なあ春吉」

「んあ？」

今、俺に話し掛けて来たのは、MY後ろの席の赤佐クン。

「俺さ、今日用事入ってた。だからバスケ練習出れねえから。そこの所よろしく!!」

「・・・は？」

俺も入ってんですけど、用事。

「春吉、俺も用事あるから無理!!」

「・・・はい？」

「悪い、俺も無理!!」

「・・・え？」

「オイラも・・・無理でゴワス」

「・・・へ？」

放課後

「えっ！？今日男子、木山君だけなの！？」

「・・・ああ」

あいつら・・・俺だって生活のためのバイトが・・・。

「はあ・・・全く、男子やる気なさすぎ！！」

「あ・・・俺に言われても・・・」

本当は俺もサボりたかったさ。

こっちは生活掛かってんだから。

けど、俺がサボると練習参加男子が0になって、後々女子から文

句を頂戴する事になってしまふ。

・・・後でバイト先には電話入れとこ。

「まあ、一応木山君は来てる訳だし・・・他の男子はほっといて練習しますか!？」

「うん!！」

「OK!！」

「おし!！」

「・・・うん」

女子共はやる気満々らしい(美羽を除く)。
俺も適当にシュート練習でもしようかな？

「じゃあ各自、4時半まで個人で練習！」

・・・どうやら女子も個人練らしい。

まあ、俺には関係ないがな。

我が葉城高校の体育館は、この辺の高校の中で、群を抜いて大きい。
い。

だって、体育館内にバスケットコートが2つあんだぞ!？

ハーフコートに換算すると4つ!!

で、今日の体育館使用クラスは確か、北コートは我が三組のバス
ケ組。

で、南コートは・・・

「ふあゝ・・・だりいな、オイ」

「・・・おい、ちったあやる気出せ」

・・・体育館内に、本日の南コート使用クラス、一組のバスケ組
が登場。

「・・・」

んな事はどうでもいい、とりあえず今はシュートに集中せねば!!

「・・・ッよ!!」

3Pラインからのフリースロー。

ガッンッ!!

スッ・・・

見事、ゴール!!

「・・・一人じゃ・・・つまらん」

何故・・・マジで・・・男子、俺だけなの？
話し相手がおらんがな。

つまらんがな。

「はあ……」

一方の女子は……楽しそうにキャツキャツやっとするし。
……あ、美羽がこけとる。

「……はあ、何かつまらんし、コレ決めたら帰るか」

マジでつまらん。

俺は近くにあったバスケットボールを手に取り、バスケットコート
センターラインへ。

「……コレ、入ったら奇跡だよな」

俺はバスケットボールを構え、足をグツと曲げ、視線をゴールへ。
……ふう。

よし、今だッ!!

俺は一気に足をバネにしたジャンプ、そして、ボールを手から放
つ!!

その時……

バシッ!!

「……!?!」

ぼ、ボールが弾かれた!?

「……よお、相変わらずシケたシュートすんなあ、オイ」

なッ、こ、この声はッ！！

「……何の用かな？全身バネ人間君？」

「ハハハッ、まだそれ覚えてたか、春吉」

……俺のスーパーウルトラミラクルセンターシュートを弾いた
この男。

不適に笑う、長身男子。

「何がハハハッだボケエ、マヨネーズ掛けるぞ、マヨネーズ！！」

「……何言ってるんだ、テメエ？」

……コイツの名前は、吉崎夏哉。二年一組。

「……で、何の用だ」

「いや、ただ冷やかしに来ただけだ」

いやー、ウザイですわね、この坊ちゃん。

「用がないなら帰れ、邪魔だ」

「……ハッ、何だかやる気なさそうだな」

「……」

・・・吉崎夏哉、コイツとは中学時代からの知り合いだ。一応・・・
まあ、お互い出身中学は違うけど。

「お前、確か三組だろ？まさか初戦から当たるとはな」

「・・・へっ、また“あの時”みたいにポコポコにしてやるよ、
楽しみにしてな、バネ人間」

あー・・・やる気失せた。

俺はバスケットボールをボール入れに投げ飛ばし、バネ人間がいる体育館を後にした。

あー、もう気分は最悪。

第28話 春と夏（後書き）

はい、今回出番がなかった権三朗です！！では、ミニコーナー、始まるよー！！

あ、今回から俺の台詞に「」は付かない事になりました！！理由は、何だか台詞がややこしくなるからです！

沢那家

午前6時45分

「やべっ、遅刻だあ！！」

「（母）こら楓！着替えながら物を食べない！」

・・・現在、楓さんは制服に着替えながら食パン食べてます。意外と器用だな、オイ！！

「だって時間ねえんだもん。あ、食パンおかわり！！」

「（母）楓！だらし無いから止めなさい！！」

「えーっ・・・だって時間が・・・」

「（父）楓ッ！！」

おお！！奥の部屋から父親登場！！ゴツイ！！

「（父）母さんの言つを聞きなさい！！」

「げっ！！父ちゃん・・・」

あ、楓の口から食パンが落ちた。

つづく！！

第29話 木山の歴史（前書き）

ども〜!!

今回から、物語は少し真面目な雰囲気になります。コメディイを楽しみにしていた方には申し訳ない。

ただ、物語のストーリー上、結構重要な箇所なので、よろしくお願ひします。

第29話 木山の歴史

「……今日は厄日だな、こりゃ」

結局、バスケ練習を半分サボった俺は、時間的に間に合うと判断し、バイト先へ直行。

「……………」

堀田スポーツジム

葉城高校からチャリで数十分の所にある、そこそこ大きいスポーツジムだ。

ジムの中にはフットサルコートやバスケコート、トレーニングルームから競泳プールまである。

そして、ここが我、木山春吉のバイト先でもある。

「木山君、バスケ三番コートのメンテナンス、やってくれるか？」

「あ、はい」

主な仕事は、コートの清掃や道具の補充、たまに受付をやったり。

「バスケ三番コート……うわ、テープ剥がれとるがな！」

センターラインのテープがもうベロベロ……貼直さないと……！

「・・・・・・・・」

ペリペリっ

・・・何だか、バスケットにいと、中学時代を思い出すな・

市立・仲田中学校

葉城高校の最寄駅から二駅離れた仲田駅のすぐ側にある、おんぼろ中学校。

俺の母校だ。

俺は、このおんぼろ中学校時代の三年間、モテたいからという理由でバスケット部に所属していた。

まあ、今思えば、あの時は野球だろうが、サッカーだろうが、モテれば何でもよかった気がする。

でも、偶然なのか何なのか、俺はバスケット部に入った。

それから、俺は三年間、どっぷりとまではいかないけど、そこそこ充実したバスケット生活を送る。

そして、自分の気付かぬ内に、強くなっていた。

他の部員と同じ練習量、同じメニューなのに、俺だけ何故か周
より頭一つ上達が早かった。

いや、マジで。

何でかは知らねえ。

ただ、中学三年になる事には、仲田中のエースと呼ばれる程にな
っていた。

・・・コレ、全部本当だからね？

監督からは「天才だ」と言われ、仲間からは「いろんな意味です
げえ」って言われたっけ。

とにかく、俺は中学時代、バスケが馬鹿みたいに上手かったの！！
コラそこ、鼻で笑わない！！

で、元々バスケの強豪だった仲田中は一昨年（俺が中三の頃）、
見事地区大会を制覇し、県大会へ行った事がある。

ちなみに、そんな時のエースは俺。

凄いでしょ！？

で、県大会も見事に勝ち進み、県ベスト4の場所まで来た。

ここで見事勝利したら、インターハイ！！

もちろん、俺はやる気充分だった。

だが・・・

その他の三校に、奴らがいた。

“嵐の四季”

何か中二のネーミングセンスなこの呼び名。
後にこう呼ばれる事となる、四人の選手がいた。

仲田の春風

坂倉の夏空

榑木村の秋雨

筋陵の冬將軍

ガチで中二のセンスの通り名。

奴らは、まさに最強。

物凄い強い。

そして、彼ら四人の中学が、県大会の優勝をかけ、県大会決勝リーグでぶつかった。

・・・もう皆さん、薄々気付いていると思うけど、“仲田の春風”は、この俺木山春吉。“坂倉の夏空”は、吉崎夏哉。

決勝リーグ第一試合

仲田中学VS坂倉中学

・・・この事については、いずれ、ゆっくり話しをするつもり。
まあ、気長に待っていてくれや。

・・・で、先に言うておくが、その“嵐の四季”の四人は今、何の偶然なのか皆、この葉城高校に進学したのだ！！
凄い偶然だよな。

俺も初めて知った時は、ビックリしたもん。

と、言う事は、今年の球技大会二年生バスケの部、そこできつと、四人はぶつかる。

何故つて、四人は皆、別々のクラスだから。

あ、ちなみに去年は俺、バスケ出なかつたから、奴らと試合はしていない。

・・・よし、昔の回想しているウチにテーピング終了!!

「堀田さーん、メンテナンス終わりました！」

俺はこのジムのオーナーの堀田さんをコール!!

「ああ終わったか、じゃあ今から一時間、コート使っっていいぞ」

「ありがとうございます!!」

ぶつちやけ、あまりこのジムには人は来ない。

だから、メンテナンス後には、今バスケ部に所属していない俺にとつての、唯一のバスケ練習の場所として、コートを貸してもらっている。

「・・・よし」

俺はバスケットボールを手に取り、リングに向かい突っ走った。

第29話 木山の歴史（後書き）

物語は真面目になったけど、こっちはふざけるぜえ！…ミニコー
ナー、始まるよ！…！By権三朗

午前7時

沢那家

「じゃ、行ってくる！！」

「（母）車には気をつけてね！！」

楓さん、先程父親からもらったたんこぶを手で摩りつつ、チャリ
で駅に向かい疾走開始！！

「（近所の人）あら、沢那さん、おはよう！」

「おう、おばちゃん、おはよー！！！」

「（近所の酒屋）お！カエちゃん、おはようさん！！！」

「酒屋のおっちゃん、おはよー！！！」

「（近所の子供達）あ、楓姉ちゃん、おはよう！！！」

「おはよー！！ちびっ子共！！！」

・・・近所の人気者なのか？コイツ・・・
っーか、ちびっ子は楓のほう・・・

ぶちっ

い、痛っつう〜!!

「アレ？今、何か引いたか？」

っづづぐじ〜!!

第30話 秋キター!!!

「・・・今日は暑いな、オイ」

現在5月の終わり
午後7時

木山春吉、バイト帰り中。

「・・・」

はぁ・・・つまらん。

やっぱり、夏哉は苦手だな。
どうも好きになれん。

「・・・暑い」

がぁぁぁ!! 蒸し暑い!!

今日は熱帯夜になりそうだ。

良い子のみんなは腹出して寝るなよ。
風邪引くから。

「・・・あれ? 春吉?」

ん? どこからか声が。

「やっぱり、春吉」

「あ?」

俺は声のした方向　後ろを向くと、そこには制服姿の小夜が。
彼女の手には、満ぱんのスーパーレジ袋が4つ。

「あ、小夜か」

「・・・(コクリ)」

相変わらずの無表情・・・ポーカーフェイス。

「どうした？買い物帰りか？」

「・・・うん」

「そつか・・・よし、荷物半分貸しな」

「えっ？」

「このスーパービューティフルハンサメン春吉君が荷物を持って
しんぜようー!!」

か弱い女の子を救うヒーロー、ハンサメン春吉!

「・・・大丈夫」

「ええからええから、遠慮するでないぞよ」

俺はスツと手を差し出す。

「・・・ありがとう」

俺は小夜からスーパーレジ袋を2つ受け取った。
おお・・・意外と重いなコレ。

「コレ、小夜ん家まで運べばいいんだよな？」

「・・・うん。本当にありがとう」

「くるしゅうない、くるしゅうない」

・・・改めて見ると、スーパーのレジ袋の中には卵やらネギやら米やら牛乳やらケチャップやら何やら、いっぱい入ってる。さすが、7人分の食料といった所か。

「・・・」

「・・・」

薄々気付いていた。

やっぱり、無言の帰り道になった。

「・・・なあ、小夜は球技大会、何に出るの？」

「・・・一応、野球にテニス」

「や、野球っすか・・・」

に、似合わねえ！！

「小夜、野球出来るの？」

「……たまに、天馬と野球中継見てるから」

「ああ……」

そのレベルですか。

「……西武ライオンズ、カッコイイよね」

「あ、ああ……そうっすね」

ライオンズか……俺は巨○派かな。

「……春吉は？」

「ん？ああ、俺？」

……はあ

「俺は……バレーとバス……」

その時……

「オイ、そこの残念ボーイ!!」

「ん？」

「……？」

……今、誰か喋ったか？

「後ろだ」

「後ろ……？」

謎の声は後ろからした。俺と小夜は同時に振り返る。

そこには……

「おやおや、まさか木山、彼女とデート中だったかい？」

「……あなた」

そこにいたのは、丸坊主の頭にくろぶちメガネ、そしてシワ一つない制服を着用した男子生徒。

「まさか、木山に彼女が出来てるとは。世界には面白い事でもあるものだな!!」

「……ハゲメガネ」

「なっ……」

……このハゲメガネ、名前は瀬良秋馬^{せいらあきま}。葉城高校二年四組在籍

「フッフ、まあ、一般の残念庶民共には、この瀬良家の美は理解できないか。いやあ残念、残念」

「……あなたの美的センス、おかしいんじゃないかねえ？」

ハゲにくろぶちメガネ

・・・シユール。

「・・・まあいい。それよりも、ここで会ったのも何かの縁、君の彼女を紹介してくれないか？」

「・・・は？」

・・・瀬良秋馬。

夏哉と同じ、中学時代からの知り合いだが、出身中学は違う。

そしてコイツこそ、榑木村中学校バスケット部、不動のエースと呼ばれ、“嵐の四季”の一人、榑木村の秋雨と言われた男だ。

「・・・彼女」

ハゲメガネの言葉に、ポカーン顔の小夜。

「オイハゲメガネ、小夜は別に彼女とかじゃねーよ」

「・・・ッ」

あ？今度は俺の言葉に、シヨック顔の小夜。
珍しいな。

「彼女ではないのか？僕はてつきり、二人でスーパーのレジ袋を持っているから、同棲でもしてるのかと・・・」

「セイヤツ!!」

ドスッ！！

「おふっ！！！」

俺はハゲメガネの腹に正拳突き。

「ぐうう・・・しょ、庶民の分際で・・・」

「うるせえ、とつとと消えるハゲ」

全く、秋馬は夏哉ぐらいウザイ。

「・・・ハッ、まあ僕も庶民相手に本気でキレたりはしないさ。じゃ、僕は忙しいんでね、これで失礼するよ」

「・・・忙しいなら何故俺に話し掛けたんだ」

全く、このハゲメガネの上から目線ときたら・・・

「フン、では木山、球技大会、楽しみにしているぞ」

「・・・」

そう言つと秋馬は、速歩きで立ち去つていった。

「・・・つたく、オイ小夜、そろそろ行く・・・」

・・・小夜さんは、まだシヨック顔でフリーズしていました。

第30話 秋キター!!! (後書き)

ミニコーナー、始まるよお!!!

午前7時半

仲田駅ホーム

「はあ・・・これじゃ朝練、間に合わないな・・・」

楓さんは寝坊しましたからね・・・

「(美羽) あ! 楓え〜!!!」

「ん? お、美羽か!」

生徒会長合流!!!

「(美羽) あれ? 楓、朝練は?」

「あはは・・・それが寝坊しちってさ」

にこやかな談笑中。

そこに、我がヒーローの登場!!!

「(春吉) お、美羽に半男生物・・・」

ドスッ・・・

「(春吉) があつ・・・!?!?」

「うつせえ！！誰が半男生物だ！！」

春吉、瞬殺・・・

「（春吉）くっ・・・な、なんのこれしき」

ドスッ・・・

「（春吉）・・・」

バタンッ！！

「全く・・・」

春吉、ノックアウト！！

つづく〜！！

第31話 四季邂逅（前書き）

どうもー!!

今話は、春吉、夏哉、秋馬の三人の目線で物語は進みます。
ちよつと面倒臭いかもしれませんが、ご了承ください。

あと、申し訳ありませんが、今回後書きのミニコーナーはお休み
させていただきます。

第31話 四季邂逅

荏咲家のある団地前の坂道。

結構な傾斜があり、自転車で上ろうとすると、肺が悲惨な事になる。

だから皆、この坂道は自転車を押して上る。
……んな事はどうでもいいんだよ。

「……にしても、相変わらずこの坂キツイな」

「……ん」

「……お前、案外涼しい顔してんぞ」

「……もう、慣れてるから」

「マジですか……」

熱帯夜に重い荷物、傾斜急な坂道。

俺はもう既にへ口へ口でさあ〜!!

「……春吉」

「んあ？」

横を見ると、何やら不安そうな顔の小夜。

「……あれ」

小夜の目線の先には・・・

「あ、あれは・・・」

坂道のでっぺん、そこにいたのは・・・

「第9話のヤンキーさん達!？」

あのリーゼントやパンチパーマは・・・ガチである時の・・・。

「・・・春吉?」

「・・・小夜、俺は遠回りを推奨するぞ」

あ、あいつらは、俺のギア3でも倒せない輩だし・・・

その時・・・

「だ、誰か助けてえ〜!!」

は? TASUKETEだと!?

っ!か、このパターンはまさか・・・

「・・・春吉、アレ」

「・・・まさか」

俺は恐る恐る、視線を坂道でっぺんへ。

そこには・・・

「コラテメエ、さっさと金よこせや!!」

「シバくぞコラア!」

「や、止めて下さい・・・」

今、ヤンキーさん達にカツアゲされてんのは、この前と違い、天馬ではなかった。

だが・・・

「・・・春吉」

「・・・その目」

まさか

「・・・あの少年を、ヤンキーさん達から助けて来い、って言うてます?」

「・・・あの子、可愛いそう。春吉、助けて・・・」

やはりかッ!!

しかし・・・

女の子（小夜）の手前、日本男子として、恥ずかしい所は見せられない。

「・・・ここは、このスーパービューティフルハンサメンハイパーハードボイルドマグナム春吉に、任せなさい!!」

本当は嫌だあ〜!!

「なっくん、どうしたの?」

「あ?んだよ」

・・・今日はさっきまでバスケット練習、その後、香音と下校。

「だってなっくん、なんかいつもより楽しそうなんだもん」

「・・・ハッ」

まあ、確かにそれらしい事はあったな。

「・・・なっくん?」

「・・・なあ、お前、中学の頃のバスケット大会、覚えているか?」

「えっ？」

「中三の時の、県大決勝だよ」

あん時は確か・・・

その時！！

「誰か、助けてえ〜！！！」

「・・・あ？」

「あ、なっくん、アレ！！！」

香音が指差す先、そこには・・・

「・・・不良か」

「あれ・・・だれかリンチ喰らってない？」

・・・確かに、ガキが何かされてんな。

・・・いいだろう

「今日はすげえ気分がいい」

「な、なっくん！？」

「たまには、暴れてもいいよな？」

「いや・・・なっくん、さすがにそれは・・・」

ちょっと引き気味の香音。

「ハッ、いいよな？」

たまには暴れたい。

「・・・もう、停学になっても知らないならねっ!!」

「・・・停学か、まあいい。じゃ、行ってくる」

不良は5人。

スピードが大事だな、こりゃ。

「退学になっても知らないよお!!」

・・・知るかっ

「しまった、学校に忘れ物をしてしまった」

この秋馬、一生の不覚

と、言う訳で、僕は学校への道を逆走中さ。

「全く・・・何故、我が家から学校は遠いのだ・・・」

今度、父上に相談でもしてみよう。

「・・・にしても、今日は暑いな」

熱帯夜と言うやつか。

その時・・・

「誰か、助けてえ〜!!!」

「むむっ!?!」

今のは、助けを求める声ではないだろうか？

「一体、どこから？」

むむむっ、前方に、何やらゴツイ人達が、少年を攻撃しているではないか。

瀬良家家訓

一つ・弱き者はその身を掛けてでも助ける!!

「・・・父上、僕は瀬良家の一員として、この身を掛けてでも、

あの少年を助けてみせよう!!」

僕はかばんを地面に置き、少年の元へ。

「お、おいつ!!」

「オイッ!!」

「そこの君達!!」

ん?

「あんだ?何のようだガキッ!!」

ヤンキーさんがこっちに気付いた!!
っーかっ!!

「え?」

「は?」

「なぬっ?」

え、こ、コイツら！

「夏哉に秋馬！？」

えーっ！！！！！！

「……ハツ、春吉に秋馬……テメエら、何してんだ？」

「むむむっ、まさか、こんな所で天然記念物に会うとはな」

皆、他の存在に今気付いた模様。

「っーか秋馬、お前もう家に帰ったんじゃ？」

「……忘れ物を学校に取りに行っている途中だ」

バネ人間にハゲメガネ……ぶっちゃけ、ヤンキーさんよりも会いたくない連中に会ってしまった。

「オイテメエら！！」

一方のヤンキーさん、半分キレています。

「にしても、夏哉、なぜ君までここにいるのだ？」

「黙れハゲ、テメエに言う筋合いはねえ」

夏哉と秋馬、ヤンキーを無視！！

「ハゲ……フッフ、どうやら君も、我が瀬良家の美学を分かっ

ていないようだな。いや、哀れ」

「テメエの美学なんて、知った所でへドしかでねえよ」

「へドだと・・・ふん、これだから一般庶民は嫌いなんだ」

「腐れメガネ」

「なにッ!？」

「あ!？やるか？」

・・・この二人は一体、何をしてるんだか。

「オイテメエら、この岡田工業高校の番長、猫舌八郎様に喧嘩売っ
つといて、何してんだオラァ!！」

半ば自己紹介混じりの脅し文句を言いながら、ヤンキーさんこっ
ちへ接近!

「テメエらなんか、この八郎様が八つ裂きに……………」

「ウルセエッ!！」

「邪魔だ!！」

ドスッ!!

「ぐあっ!！」

その時、二人の拳が八郎さんの顎に…………クリンヒットッ!!

そして八郎さん、白目に泡吹いて即倒！！

「ハゲメガネ、今ここでテメエをシバいてやる」

「ふん、庶民の戯言など、下らん事だな」

しかも二人共、まだ口喧嘩中ですし……。

何なんだ、コレ！？

「は、八郎さんが……やられただと……」

「こ、コイツらヤベエ、に、逃げろお！！」

他のヤンキー、八郎さんを担ぎながら撤退！！
な、何とかなった……（俺は何もしてないが）。

「あ、あの……」

「ん？」

ヤンキーさん達が去った後、代わりにそこにいたのは、カツアゲ
されていた少年。

「あの、あ、ありがとうございます」

お礼か……

「あ、礼なら、俺じゃなくてあっちの二人に……ん？」

「あ、あれ？」

俺はその少年の顔を見た瞬間、ハッと気付いた。
どうやら少年の方も、今気付いたらしい。

「お前・・・冬希か？」

「もしかして・・・春吉君？」

少年　冬希の声に、絶賛喧嘩中だった夏哉と秋馬がこちらに
振り向いた。

偶然とは、凄いものだ。

第32話 再会

「……ねえ、春」

「……あのく、な、何でしょうか……？」

翌日、朝、学校

「……なんで昨日、勝手に帰ったの？」

目の前には、黒いオーラを出している生徒会長。

「いやく……その……何つか……」

言い訳が思い付かない俺。

「……」

「……あのく、み、美羽はん？」

く、怖えく！！

昨日の夜・・・

「もしかして、春吉君!？」

俺達（主に夏哉と秋馬）が、ヤンキーさん達から助けあげた少年。なんと、彼は俺達の知り合いだった。

「冬希・・・お前、どうしたんだよ？」

少年の名前は梨本冬希^{なしもとふゆき}。

葉城高校二年二組。

「いや・・・ちょっと、あの人達と肩がぶつかっちゃってさ・・・

全身傷や痣だらけの冬希。

冬希はチビで弱気、人見知りか激しい少年だ。

「そりゃ・・・不運だったな」

「・・・うん」

「一昨年、“嵐の四季”が全面的にぶつかった、男子中学バスケットボール県大会、その決勝リーグ。」

仲田中、坂倉中、榑木村中、筋陵中の四校が、インターハイへのチケツトをめぐり、戦った。

そして激戦の末、インターハイへ進んだのは……“筋陵の冬將軍”が、エースの筋陵中学校だった。

「……ヘッ、まさか、ちびっ子だったとはな」

うわっ、凄い呆れ顔の夏哉……。

「……冬希か」

秋馬は無表情。

「……夏哉君、秋馬君……」

昨日の夜、嵐の四季はこうして再会したのだ。

「で、昨日はバスケット練習サボって、どこ行ってたのよ！」

「えーっと・・・バイトと・・・荷物持ちとして小夜ん家と・・・」

「

もう、正直に話すしかないッ！！

つか、朝学校に来たら、教室で待ち構えていたダーク生徒会長。
なんで・・・俺は・・・こやつから・・・説教を・・・。

「だからって、だからって・・・」

この人は、規律等に関して、かなりうるさい。

「サボっていいと思ってんのかあ！！！」

ドッカーン！！

ああッ！！

濱垣山が噴火しおったで！！

ここから、時間はかなり進み・・・（つまりはしょる）。

球技大会の日が、やってきました!!

第32話 再会（後書き）

はいはい、権三朗です！！

で、早速なのですが・・・このコーナー、今回で最終回になってしまいましたあゝ！！

へ？理由？

・・・それは、昨日作者が思った事。

（これ、ネタバレの危険性高くない？）

・・・読者の皆様、本当に申し訳ないッ！！

コーナー的に、三姫の日常じゃなくて、楓の日常になっちゃったけど・・・そこはご愛嬌。

では、最終回、始まるよお！！

午後12時40分

学校、昼休み

「春吉、ちょっとお願いが・・・」

「んだよ・・・」

「昼休みになった途端、楓さん、春吉の所へ直行！

「あのさ・・・今日弁当忘れちゃってさ・・・」

「・・・俺のパンはやらねえぞ？」

「いや、パンじゃなくて……お金貸して!」

「……金だと?」

「ああ!」

「……だったら、この前ファミレスで貸した千円返してから言え!」

「……楓さんは、お金に詳しいようです。」

第33話 バレーボール

「春吉、いくら何でも、時間の進み、速くね？」

「楓、物語の設定をぶち壊すようなシツコミはやめる」

6月初めの週の月曜日

葉城高校球技大会初日

二年生の競技はバレーボール。

「いいかお前ら、やるからには絶対勝つぞ!！」

朝のSHL、やけにテンションが高いたつつあん……。

『絶対勝つ!!!』

野郎共もやる気MAXらしい。

「はぁ……朝からテンション高いな、オイ」

何だかうらやましい・・・こっちは深夜アニメで寝不足、頭がヤバス!!

「いいか、何が何でも三組が1位だ!!」

『オオオー!!』

・・・熱い

「よお、春吉!!」

「ん?ああ、楓か・・・」

あまりの熱さに、げんなりしていた俺に話し掛けてきたのは楓。

「今日はお互い、頑張ろうぜ!!」

「ああ、そうっすね」

頭痛いよお!!

昨日(つーか今日)は、深夜3時まで起きてたからな・・・

「何だ?顔が死んでるぞ?何かあったか?」

「いや・・・別に」

・・・もし、ここにドラゴンのボールが7個ほどあったら、間違いない頭痛薬を求めらるう。

「ふーん・・・ま、あまり無理すんなよ!？」

「ああ・・・」

がぁ〜!! 頭ぁ〜!!
痛え〜!!!!!!

・・・ちなみに野郎共はあつちで権三朗を胴上げ中です。
早い早ツ!!

午前10時

ついに始まる・・・

「では、只今より球技大会初日、二年バレーボールの試合を
します」

『うおおおおお!!』

会場（体育館）はオーバーヒート状態。
熱いッ!!

「では第一試合、五組と二組の試合を始めます」

球技大会バレーボールのルール説明！！

参加クラスは二年全クラス（二年は全6クラス）

試合はトーナメント

第一試合

二組VS五組

第二試合

一組VS三組

第三試合

四組VS六組（勝った方がシードで決勝へ）

準決勝

第一試合勝者VS第二試合勝者

決勝

準決勝勝者VS第三試合勝者

制限時間は一試合30分。

最初の10分は女子

次の10分は男子

最後の10分は男女混合で（男女少なくとも、それぞれ1人は入れる事）

「では、試合開始！」

『うおおおおお！』

たった今、第一試合がスタート。
熱い。

「春吉、頑張ろうぜ」

こう言ってくるのは権三朗。

「あんたはバレー出ないだろ」

「いやいや、ただ春吉のテンション低いからさ、盛り上げてやる
うと思ってる……」

「……余計なお世話だ」

はあ……頭痛いときに騒がんでほしい。

「はあ……」

ピピッ！！

〔第一試合、二組の勝利！！〕

・・・ああ、前の試合が終わってしまった！！

「よし、三組バレー集まれ！！」

たつつあんが選手を呼び寄せる。

「たつつあん、何？」

「円陣組むぞ！！」

熱い！！

「ほら、早く丸くなれ！！」

・・・たつつあんは、こう見えて音楽教師。
だから声が響く。

頭に。

「おーし沢那、お前真ん中行け！！」

「え！あたし！マジでいいの！？」

担任指名で、楓が円陣の中央へ。
っーかみんなテンション高い！！

「よし沢那、何か掛け声をかける!!」

だから熱い!!

松岡○造並に熱い!!

「え、えーっと・・・さ、三組ファイツ!!」

『オオーーー!!』

熱くて頭が死にそうです。溶ける。

「よしお前ら、行ってこいや!!」

『オオーーー!!』

「只今より第二試合、一組と三組の試合を始めます」

会場は○造だらけ。

へえ、頭痛すぎるとこんな幻覚が見えるんだ。

「じゃ春吉、行ってくんない!!」

「ん、あ、ああ」

そう言つと、楓達女子チームがコート内へ。

俺は何気なく、体育館内の卓球台が置いてあるギャラリーをちら見。

そこには、応援として小夜が座っている。

そして大会本部が設置されている体育館ステージには、生徒会長の席に座る美羽の姿。

・・・もう、球技大会は始まったんだ。

第34話 地獄絵図

それは、前に冬希をヤンキーさんから助けた、あの夜の事。

冬希救助後、俺は荷物を届けるため、小夜の家に行った。

そこでの会話

「なあ小夜」

「……ん？」

「あのさ、もうすぐ球技大会じゃん」

「……うん」

「でさ、俺、バレー出るんだけど、イマイチバレーが苦手でさ」

ジャンケン、チヨキの悲劇。

「……うん」

「で、どうやったらバレー上手くなるかなあ〜って」

「この時はマジで悩んだものだ。」

「……大丈夫」

「……へ？」

小夜さんは、自信たっぷりに答えました。

「……ウチのクラスのバレーには、楓がいる」

「……は？」

「楓はスポーツ強い。きっと大丈夫」

「……もしかして俺、今戦力外宣告されてるのか？」

楓に頼れってか？

「大丈夫、春吉は無理しなくて」

「……ッへ」

俺、頼りにされてないよな……。
いじけたい。

しかし今、小夜の言った事は、まんざらでもなくなった。

「セイヤツ!!」

バシユ〜ンツ!!

「……………」

球技大会初日、二年バレーボール第二試合。

そこはまさに地獄。

「セイヤツ!!」

バシユ〜ンツ!!

「……………」

俺は思った。

バレーボールは、時として人を殺害出来る凶器となれる。

「もう嫌だあ〜!!」

「悪魔や、あそこに悪魔がおる!!」

「まだ死にたくねえ〜よあ〜!!」

「おっかあ〜!!」

これは、対戦相手の一組の野郎共の悲鳴。

現在、第二試合最後の十分。

男女混合試合。

「……あのく、楓さん……」

「あ？」

俺は勇気を持って、魔王の元へ。

「恐縮ですが……少し、相手の事を考えてサーブを試してみたら……」

「手加減はしねえよ」

あら、たくましい子……じゃなくて、

「ちげえよ、お前、もう一組の連中半分死んだよ!!」

事の始まりは、今から20分前……

殺人サーブを習得している大魔神こと、沢那楓は、まず手始めに一組のレディ共を根絶やしにした。

地獄絵図でした。

最初の10分、女子同士の試合は、我が三組の圧勝!!

その後の男子の10分で多少追い返されはしたが……

「セイヤツ!!」

バシユンツ!!

最後の男女混合の10分で再び地獄絵図。

悲鳴やら絶叫やら遺言やらなどが飛び交った。

「ピピイ、試合終了、三組の勝ち!!」

圧勝。

一組の連中は皆、無事生きて帰ってこれた事に感動しているらしい。

「みんな泣いてる・・・そんなに怖かったんだ・・・」

まさか、球技大会で死にかけるなど、誰も予想していなかっただろつ。

で、一方の大魔神は、

「ッしゃ〜!!まずは一勝!!」

ガッツポーズ中。

恐ろしい……

もう、バレーボールは割愛します。

対して面白い相手もないし……

何しろ、ウチのクラス、圧勝の連続であっという間に優勝しちゃったし。

「すげえ、まさか全ての試合で圧勝するとは」

これは赤佐の感想。

「……春、あんた何か活躍した？」

美羽の感想。

「……さすが」

小夜の感想。

「やっぱり大魔神は胸がねえから、空気抵抗がなく・・・」

ドカツ!!

権三郎最後の言葉。

「俺、今回何も主人公らしい事してねえ〜!!」

俺の感想。

「何だ、あんまり手応えなかったな」

大魔神の感想。

明日はテニスです。

第34話 地獄絵図（後書き）

おまけ、各キャラの球技大会参加表！！

三組メンバー

春吉：バレー、バスケ

楓：バレー、サッカー

小夜：テニス、野球

美羽：サッカー、バスケ

赤佐：野球、バスケ

権三朗：テニス、サッカー

一組メンバー

夏哉：テニス、バスケ

香音：テニス、バスケ

四組メンバー

秋馬：サッカー、バスケ

亜希：野球、バスケ

二組メンバー

冬希：野球、バスケ

月曜日：バレー

火曜日：テニス

水曜日：サッカー

木曜日：野球

金曜日：バスケ

第35話 意外な展開

「……なあ春吉」

「ん？」

学校からの帰り道、今日は赤佐と下校中。

「あの……さ、その……」

「……どしたの？」

いつもシャキツとしている赤佐には珍しい、ちよつと躊躇った態度。

「その、お前に聞くのも何だが……」

「あんだよ……」

いつも真面目な奴が、急にへなへなすると気持ち悪い……。

「えーっと、だから、その……」

「……はよ言わんと、置いてきますぞよ」

今日はもうすぐでバイトの時間。
早くしてほしい。

「……あのさ、今のお、おおお女の子って、何が好きなんだか分かる？」

「……ワツツ？」

何言つてんだコイツ？
壊れた？

「ちよ、こっちは真面目なんだッ！！」

夕日のせいかな？
赤佐の顔が紅い。

「……赤佐大輔君、申し訳ないが僕は今、とても忙しいんだ。
お遊びはまた今度……」

「……春吉ッ！！」

「あー……スマンスマン。もうふざけません」

何だかなあ……

「で、赤佐。何でそんな事を俺に聞く？」

俺は間違いなく男だ。

「いや、だって春吉、よく女子とつるんでるからな……」

「……つるんではないと思っ」

だって、俺と親しい女子と言えば……
チビ大魔神、ダーク生徒会長、無口……ぐらいだぞ？

「いや、結構つるんでるだろ!!」

「そ、そうか？」

何だか今日の赤佐怖え〜!!
っーか、

「っーか俺、今女子の好きそうな物なんて、知らねえぞ？」

「……マジで？」

「ああ……それより、何でそんな事聞くの？」

「ええッ!？」

赤佐、動揺中。

「フッフッフ、まゝさか赤佐クン、君、好きな人でも出来たとか
?」

追い撃ち!!

「なッ!？」

この態度……はい、決定!!

「誰だよ誰だよ、安心しなさい、俺は口堅いからさ……!」

「な、だ、誰が言うかッ!!」

顔真つ赤。

「赤佐、お前中二か？あまりにも初心すぎるぞ」

「お、俺は高二だ！」

「おし、だったら言ってみろ！男だろ大輔!!」

「お、お俺は・・・」

「そっだ、いけッ！」

「俺は・・・俺は・・・ッ!!」

さて、誰だろな!?

「俺はッ!!」

「桂咲さんの事が、好きだぁ〜!!」

「ええええええ〜!!!!????」

閑静な住宅街に響く、赤佐の告白と俺の絶叫!!

「あ、赤佐、マジでか!??」

「・・・ああ」

燃え尽きている赤佐。

つか、小夜かよッ!

「な、ななな何で?」

俺が動揺してどうするんだ!!

「・・・だってよ、優しいし、家庭的だし、可愛いし・・・」

「お前・・・」

あの無口の事を・・・

「……なあ春吉、何か荏咲さんの好きそつな物、知らないか？」

「……」

「……面白くなってきた!!」

第36話 テニス

翌日・・・

火曜日、葉城高校球技大会二日目。

二年、競技はテニス。

現在午前10時

テニスは午前男子、午後は女子。

バレーボールと違って、テニスは個人競技となるので、たまにト
ーナメントの関係上、同じクラス同士の奴が戦う事もしばしば。

で・・・

「きゃ〜!!」

「吉崎くん、頑張つてえ〜!!」

「吉崎くんカッコイイ!!」

「なつくんファイトオ!!」

第二テニスコート（葉城高校にはテニスコートは二つある）にて、
黄色い歓声が上がっている。

「ハッ!!」

パソコンッ!!

「きゃ〜、吉崎くん〜!!」

「カッコイイ!!」

「L・O・V・E・夏哉あ〜!!」

「なつくんナイススマツシュ!!」

・・・お分かり頂けただろうか？

容姿端麗頭脳明晰、運動OK勉強OK、おまけにイケメン。

去年のミスター葉城、吉崎夏哉。

ファンクラブもありますよお。

「・・・ふう」

何だかむかつく。

「春、あんたひがんでる？」

「・・・うつせえ」

現在応援席。

周りには美羽、楓、小夜、顔真つ赤の赤佐。

・・・もちろん、あのにつくきバネ人間の応援ではありません。

今、夏哉の戦っている相手・・・

「はあ〜はあ〜、き、キツイ・・・」

もうバツテバテの重原権三朗。

「おい脇役、もっとしっかりせい!!」

ヤジを飛ばしてみる。

「う、うるせえ」

半分声が出てないし……。

「……このままだと、一回も点を取れずにコート負けだな」

奴を庇うつつもりではないが、権三朗はテニス経験者なので、決して下手と言っわけではない。

ただ……

「……いくぜ」

シュツ!!

夏哉はテニスボールを天高く上げ、

パコンツ!!

強烈なサーブ!!

「うわっ!!」

バツシーンツ!!

権三郎のラケット、宙をきる。

「きゃ〜!! 吉崎くん〜!!」

「すごい、カッコイイ!!」

「夏哉様あ〜!!」

「なつくん、手加減手加減!!」

これは・・・精神的に大ダメージ。

権三郎のHPは既に赤く点滅している!!

「・・・あなた、テニス経験者とか言ってたけど・・・」

夏哉はラケットを手の平でクルクル。

「案外、弱えな」

「なッ・・・」

「ご、権三郎のガラスのハートが・・・割れた!!」

「あらら〜、もう権三郎は再起不能だね」

美羽は軽蔑の目。

「ああ・・・ああ・・・あ・・・あ・・・」

権三郎君は、泣いていました。

午前、男子は夏哉の優勝で幕を閉じ、時刻は午後1時。
テニス女子スタート！

「いよいよだ・・・ああ・・・」

「・・・何故、お前がそわそわしてんだ？」

テニス第一コート of 応援席。
そわそわしている赤佐クン。

「だ、だって・・・」

「・・・ピュアヤの」

だいたい理由は分かる・・・。

「只今より第一コート、三組荏咲小夜と一組水岡香音の試合を
始めます」

「ああ・・・荏咲さん・・・」

「まあ、とりあえず落ち着こうぜ赤佐」

俺は赤佐を静めながら、後ろを確認。

「小夜お！！気合いだあ！！」

楓に美羽、権三郎の抜け殻、その他三組の野郎共とレディ共。
あとたつつあん。

「赤佐、あんまそわそわしてつと、気付かれるぞ!？」

純粹赤佐大輔片思い物語がな。

「だ、だって・・・大事な初戦・・・」

「とにかく落ち着こ」

全く・・・。

「あのお、小夜は小学中学とテニス部だったんだ。今でこそ弓道部だが、たまに堀田ジムでテニスやってるし・・・」

「ああ・・・ああ・・・」

話、聞いてねえ！！

「はあゝ・・・しっかし」

小夜の相手・・・確か水岡つつたっけ？
いつも夏哉とつるんでる奴。

「・・・小夜」

小夜はグツとラケットを握り、視線は水岡。
一方の相手は、ラケットの握り方をクラスの女子に教わり中。

「これは・・・余裕かもな」

「・・・それはどうだかな」

「・・・ッ!!」

ぶほっ!!

いつの間にか、隣に夏哉の姿が!!

「あの力才はすげえぞ、いろんな意味で」

「はあ?」

「まあ・・・見てればわかるさ」

その時!!

「ゲームスタート!」

試合が始まった!!

第37話 荏咲VS水岡

ウソだろ・・・

「はっ!！」

バツコーンッ!!

「・・・・・・・・」

強烈なスマッシュ。

「やった、また入った!！」

「・・・・・・・・ッ」

球技大会二日目、火曜日午後女子テニス。

小夜と水岡の試合。

「なんだコレ・・・ほぼありえねえだろ」

俺はどん引き。

「だから言っただろ?カオを甘く見るなって」

そう言う夏哉も、少し顔が引きつってるし・・・

「だが・・・まさか、ここまで上がるとは」

夏哉の頬を、一粒の汗が滴り落ちた。

この試合、最初の方は小夜のペースで事が運んでいた。

水岡なんか、小夜のゆっくりサーブすらスカすほどの下手ぶりだったし。

しかし・・・

試合開始から5分後、突然水岡はスマッシュを決めた。

「あの力才はな、5分もあれば全てのスポーツをマスター出来るほどの運動神経を持っている・・・バスケは例外だが」BY夏哉

「だ、だからって・・・これ無茶苦茶だろ!!」

ブーメランスネイク

ジャックナイフ

燕返し

ムーンボレー

ウォーターフォール

手づ・・・水岡ゾーン

「ここは青学かッ!？」

しかも何で主役の越○リヨーマの技はないの!？

「カオはジャ○プっ子だからな」

「今はSQ・・・って、そう言う問題じゃねえ!！」

はあ、はあ・・・

疲れる。

つか・・・

「ああ・・・荏咲さん・・・」

赤佐がッ!!

「ちょ、落ち着け!」

「そんな・・・荏咲さんが・・・押されてるなんて・・・」
赤佐パニック中。
ピュアゆえの悲劇。

一方、コートでは

「荏咲さん、この試合、あたしがもらった!!」

「・・・まだまだ」

あれま!!

珍しく小夜が燃えてるがな!!

「ねえ、春・・・」

「ん？」

今、話し掛けてきたのは美羽。

「み、右・・・」

「右？」

んだよ、大事な試合中によ・・・
で、右を向く。
そこには・・・

ブオオオオン！！

「へ？」

何か飛んできた

バツコーン！！

「ぐへっ！？」

直撃。

「あ、悪い！！」

向こうから、一人の女子が走ってきた・・・フーか痛い！！
飛んで来たもの・・・テニスラケットオ！？

あ、危ねえ！！

「あの・・・だ、大丈夫ですか・・・って何だ、春吉か」

か、楓え！！

「て、てめえ、何を・・・」

「いや、事故を装ってラケットを相手に投げたら、小夜有利になるかなあ〜って・・・で、今手が滑っちゃってさ」

なッ・・・

「い、いけません！」

馬鹿かコイツ!?

「何、その手があつたか!！」

「赤佐あ!!!だから駄目だあ!！」

楓と赤佐がラケットスタンバイ状態に!!

「殺るか、赤佐？」

「殺りましょう、沢那さん!！」

「二人共、字が違あ〜う・・・つーか暴力は駄目だあ〜!!！」

その時!!!

「ゲームセット!!！」

あ!!!

「勝者一組、水岡香音!！」

「あ〜!!!てめえらがふざけるから、試合見逃したじゃねえか!」
「!!」

つーか小夜負けた!!!

「んだよ、だからラケットで相手を仕留めよう」と・・・」

「馬鹿かあ!!」

全く・・・楓は本当に女子・・・いや、人間なのか？

「ああ・・・荏咲さん・・・」

一方、赤佐は絶賛フリーズ中。

そして小夜は、相変わらずの無表情・・・いや、若干笑顔で水岡と握手。

「・・・水岡さん、今度無我の境地を教えてね」

「うん、いいよ!!」

す、すげえ・・・

「もうテニス終わりかよ・・・春吉、だから時間の進み、速く・・・」

「楓、だから世界観をぶち壊すなよ・・・」

明日はサッカー！！

第38話 探偵ごっこ

球技大会二日目の学校帰り。

ちなみに今日は一人。

美羽は生徒会の仕事。

楓は部活。

小夜も部活。

権三朗は委員会活動。

赤佐は小夜のストーカー（現在犯罪実行中）。

「……つもらん」

空はもうオレンジ色に染まり、アスファルトに写る俺の影は長い。な、なんか虚しくなるシチュエーションだな。

「はあ……」

上空にはカラス、右の塀の上には野良猫、目の前にはでっかい蜂……
……つてうおッ!?

「うわっ、危ねッ!」

ブーンと鳴る羽音をたてながら蜂は空の向こうへ……。

「あ、危ねえなチクショー!!」

今のはスズメバチだったな……怖っ!!

その時・・・

「ん？」

俺の前方約5メートルの電柱に、1人の少女が・・・張り付いていた。

「・・・何？」

電柱の陰から、しきりに前方を伺っている少女に、悲しいながら多少の見覚えが。

「どうする、俺？」

話し掛けるか、シカトするか・・・。

その時、少女がたまたまこっちに振り返った。

「・・・あ！」

向こうは俺に気付いたらしい・・・。

「そこにいるのは春吉君!！」

「よ、よお・・・」

電柱に張り付いていた少女は、俺的により関わりたくない人渡邊亜希です。

「渡邊さん、あんた何してんの？」

「あ、春吉君、私の事渡邊さんじゃなくて、亜希でいいですよ！」

「え・・・あ、じゃあ亜希、何してんの？」

相変わらず電柱に張り付き、前方をちら見している亜希。
怪しいですぞおっ！！

「あ、探偵ごっこです！！」

「・・・はい？」

た、探偵？

「今ですね、ある人を尾行してるんです」

「尾行つか・・・」

暇なのね。

「で、亜希。今誰を尾行してんだ？」

亜希は電柱から次の電柱の陰へ移動。
俺はそれについていきつつ質問。

「それは・・・ほら、あの人です」

電柱の陰から亜希が指差す人。

そして、その指の先には・・・。

「・・・あ、あのハゲメガネッ!？」

俺達の前方で、やたらと挙動不審なハゲメガネがいました。

「あ、亜希。ま、まさかとは思つが・・・」

「私が尾行しているのは瀬良君です」

な、なあッ!？」

思わず叫びそうになった俺。

俺の目の前には、秋馬の姿が。

やたらと周りを気にしている・・・。

「一つ聞きたい。あのハゲメガネは一体、何してんの?」

「さあ・・・?」

「じゃあ亜希、お前は何で秋馬を尾行してんの?」

「何でって・・・何か面白そうだったから・・・」

「単純な理由だなッ!！」

一方、秋馬は相変わらず回りをキョロキョロ。多分、近所の人に見つかったら、不審者として通報されんな。

「あのハゲメガネ・・・ガチで何してんだ？」

何かを探しているみたいに見える。

「春吉君！」

秋馬が若干移動したので、俺達は次の電柱へ移動！！

「何？」

「今日、暇ですか？」

「ま、まあ・・・」

「じゃあ今日は一緒に探偵しましょう！！」

「・・・は？」

今、俺はさっきの言動に後悔。

これは・・・何かのイベントフラグが立った。

「私、瀬良君とは同じクラスなんですけど、たまに瀬良君の生態が気になる時があるんです」

「何故ッ！？」

ハゲメガネの生態なんて・・・死ぬほどどうでもいい。

「あの頭とあのメガネで日頃、何しているのかなあ〜って」

「……お前、意外と悪い性格してんな」

ハゲでメガネだから気になるって、ただの見た目批判!!

「あ、春吉君、ターゲットが何かの店の中に！」

「ターゲットって、お前な……」

ノリノリの亜希。

こいつ、本当に財閥の娘なのか？

つか、それよりも……。

「……秋馬、ここに入って行ったのか？」

「はい、確かに見ました!!」

ハゲメガネが入って行った店。

読者の諸君、ドン引き間違いなしだぞ。

「じよ、女王様がアナタの心と体を踏みにじる、Mっ子限定、
クラブ・クイーンウィップ」って……はいッ!？」

な、何だここおッ!？」

「こ、これはかなりマズイんじゃ……R18だよこれ!!」

「つーかあのハゲメガネ、そんな趣味!？」

「女王様が心と体を踏みじじるって、一体何をするんでしょうね」
「？」

「亜希の心は純粹だあ〜!!」

「……もう、帰ろうか亜希」

「俺、もう精神的に無理です。」

「第一、この小説は学園コメディですよ？」

「これは……もはや論外でしょ。」

「……そうですね、そろそろ武藤が迎えに来る時間ですし」

「亜希は携帯の時刻を確認。」

「ん？武藤？」

「って誰？」

「はい。渡邊家の執事です」

「執事……って、マジですか……。」

「春吉君、今日はもうお開きにしましょう」

「……ああ」

「今日の収穫、ハゲメガネの趣味……つーか、マジで秋馬、こん

な店に通ってるのか？

「あ、春吉君、よかったら送っていきましようか？」

「え、ああ・・・今日は遠慮しとく」

多分リムジン。

無理です。精神的に。

「そうですか・・・では、また明日」

亜希は少し残念そうな顔をしながら駅の方へ。

「・・・はあ」

秋馬・・・お前・・・

読者のイメージがた落ちだぞ。

しかし翌日、俺は驚愕の事実を知る事になるとは、この時の俺は、まだ知らない。

第39話 瀬良家

葉城高校二年球技大会三日目

競技はサッカー

トーナメントの方式はバレーボールと同じ。

ただ、今回はウチのクラスは第三試合。

つまり、試合に一勝するだけで決勝進出なのだ！
ただし、前にも言った通り、初戦の相手は一組。

「ぐわっ、や、やべえ〜!!」

やばい、今日寝坊したッ!!

小鳥のさえずりが耳に入り、爽やかな朝日が降り注ぐ中、俺はゆ
っくりと起床。

清々しい気持ちだったんだ、起きた当初は。
で、

目覚ましを確認した途端、清々しさはどっか行った。

「は、8時半ツ!？」

葉城高校入学以来、初めてのガチ寝坊!!

や、やべえ!!

で、今、いつもより三本も遅い電車に乗り、葉城高校の最寄駅の南葉城駅に到着!!

「うわあ!!」

俺は半ば絶叫しながら、高校への道をダツシュ!

きっと、学校に着いたら規律に厳しいダーク生徒会長に殴られる事を予想しながら。

「グーは嫌あ!!」

奴はいつもグーで目を狙ってくるからな・・・

で、とにかく全力疾走!!

「はあ、はあ、はあ」

よ、よし・・・もう少しで学校だ・・・って思った、その時だった！！

ドンっ！！

「ぐはっ!?!」

曲がり角で、誰かと激突した（コラそこ、ベターだなとか言わない）！！

「お、おい、大丈夫か!?!」

ぶつかった拍子に相手は転倒、俺は無事。

「おい・・・って」

は？何これ？

ぶつかった相手は見知らぬ女性。
ここまでいい。

「痛っ・・・あ！貴方、もしかして葉城高校の人!?!」

ぶつかってきた女性は、俺の着ている制服をガン見。

「え、あ、まあ・・・そうですね」

相手の女性は20歳くらいの黒ギャル。

「え、マジで!!! ちょ、アンタ、私を助けて!!」

ぎゃ〜!!!

この黒ギヤル、突然足にすりついてきた!!!

「ええッ!?」

ぎゃ〜!!!

ギヤルのマスカラが俺のズボンに!!!

「ちょ、あんた、何やって・・・」

その時・・・

「あ、見つけた!!!」

すぐ目の前の角から、見覚えのあるハゲメガネがッ!!!

「観念しろ、姉さ・・・ってうおッ!!! き、キサマ春吉!?!」

「ハゲメガネッ!?!」

秋馬きたッ!!!

「しゅ、秋馬・・・」

黒ギヤルは、秋馬から顔を背ける・・・ん?

「ぎゃ〜!!!」

ギャルの口紅がツ！！
俺のズボンにツ！！

「春吉・・・キサマ、まさか我が姉に手を・・・!?」

「ワッツ!?」

え？

我が姉？

「秋馬嫌あゝ」

「姉さん、いい加減家に戻って来い。父上と母上が心配しているぞ」

まさか・・・

「・・・まさか、この人は・・・」

「・・・その人は瀬良採子。我が瀬良家の長女で、僕の姉だ」

しゅ、秋馬の姉貴!?

「チーース!!!」

に、似てねえ!!!

「……春吉？」

「……あ？」

俺がハッと気づくと、目の前には小夜の顔。

「……大丈夫？」

「あ、ああ……」

現在、葉城高校のグラウンドにて、二年三組と一組のサッカーの試合中。

ルールはバレーボールと同じで、女子、男子、混合の30分制。今は女子がやってる。

ちなみに、グラウンドには楓と美羽の姿あり。

ん？ああ……

結局俺は遅刻しましたよ？

グー？ああ、もらったよ、右目に。

「……しかし」

楓はゴールを決めまくり、美羽は転びまくり。
んな事じゃなくて。

「……………」

今朝は面白い物を見た。

「姉さんはもっと、瀬良家の長女という立場をわきまえてもらいたい!!」

「うるさいわねえ、家なんてアンタが継ぎやいいでしょ!？」

「だからって、あんな危ないクラブで働くなんて……全くだ!

」!

「全くなのはこっちよ、人の職場まで来て、勝手に怒鳴って……

」

「うるさい、姉さんは瀬良家の自覚を持って!!」

……あゝ、何だコレ……?

現在、瀬良姉弟絶賛喧嘩中。

「……………」

俺は勇気を持って二人に質問!!

「俺、学校へ行ってもいいでしょうか？」

「時間くらい遅刻していますし……つーか秋馬もだけど。」

「駄目だ、春吉にはどちらが悪いのか見極めてもらおう」

「君、春吉って言うんだ。ねえ、イマドキ家があるだこーだなんて、古臭くねえ？」

「なッ……学校へ行かせてくれないのか……。」

「……はあ」

結局、俺は丸々30分、ずーっと他人の喧嘩を眺めてました。つーか昨日の尾行、秋馬が入って行った店こそ、秋馬姉の働いている店らしく……。

「姉さん、せめてあの店で働くのだけは止してくれ」

「嫌、私は人をいたぶるのが好きなの!!」

……瀬良家は、怖い家だなと、思いました。

第40話 サッカー

「……今思うと、秋馬の家って……」

お坊ちやま家？

「……春吉？」

「あ、いや、なんでもない」

いかんいかん、今は大事なクラスメイト達が、必死にサッカーをしているのだ！！

「……に、しても」

予想は出来ていたが。

「スーパー楓シュートッ！！」

バシュッ！！

ゴール！！

楓のシュートが、またゴール！！

奴のネーミングセンスには、あえてツッコまない。

「……楓、凄い！」

小夜は少し興奮気味だし……。

あ、ちなみに俺と小夜はグラウンド北側、三組応援席にいます。
まあ、他の連中もいるがな。

「よっしや〜!!」

楓、本日10本目のゴールに、大ジャンプ!!

あやつ、下手したらワールドカップ出れるんじゃない。。。

一方の美羽は・・・

「はあ、はあ、はあ・・・もうイヤ」

さつきから不運の連続。

開始1分

派手にすつ転ぶ

開始3分

仲間からのパスが顔面直撃

開始5分

フリーの状態でパスを受けた美羽、勢い余ってゴールに激突

開始8分

隣のグラウンドでやっている一年の野球の流れ球が直撃

現在、満身創痍の美羽さん。

「美羽ッ!!」

あ、楓が美羽にパスを出した。

「え、ちょ、まつ・・・ぶふっ!!」

バシッ！！

美羽、自らの足に躓き転倒。

直後、楓のパスが倒れている美羽の顔面に落下。

そして・・・

「やっべ、美羽、大丈夫か!？」

美羽はもう、燃え尽きていた。

「うう・・・」

「お!」

美羽が目を覚ました!

「ここは・・・?」

現在保健室

さっきのスーパー楓シュートを顔面に喰らった美羽は、その場でダウン。

その時、たまたま女子の10分が終わったので、加害者の楓と、

暇だったので小夜と俺とで美羽を保健室へ運んだのだ。

「うん・・・特にこれと言った怪我はしていないみたいだし・・・
とりあえずは大丈夫」

と、養護教諭は言ってたっけ。

「大丈夫か、美羽？」

多少悪びれた様子で話す楓。

「うん・・・何とか」

まだちよいとフラフラ気味の美羽。

「しっかし、まさかあの楓のシュートを喰らって、まだ生きてる
とは・・・あなたの生命力はたいしたもんだな」

俺だったら・・・今頃成仏してるかも。

「・・・春吉、喰らってみるか？」

「・・・遠慮する」

まだ死にたくないし。

「・・・」

一方、相変わらず無口の小夜。
なんか喋ろうよ。

「・・・そういや」

俺はふと、思い出す。

そう言えば俺、前ここでみ〇もんたやってスベツたんだよな・・・

(詳しくは第3話)。

よぉ〜し!!

「おい、楓」

ターゲットは大魔神

「ん？」

「お前、今み〇もんたのモノマネやって」

「は？」

フッフッフ・・・

我が悪の陰謀。

「何でみ〇？」

「何でって、小夜が見たがってるから・・・」

俺は視線を小夜に。

頼む、乗ってくれ!!

「・・・見たい」

乗ったあー!!

「え、マジで?」

「マジでだ。さあ楓、早くみ〇のモノマネを!」

「.....」

あの時同様、小夜の目は輝いておる!!
つーか小夜、み〇ファンなのか?

「え、何かハズいな.....」

「大丈夫大丈夫、ほら、さっさとおやり!!」

プレッシャー!!

「じゃ、じゃあ.....」

「奥さん、まだ諦めちゃ駄目だよ(み〇声)」

「.....ふっ」

さ、小夜?

「アツハツハ!!」

み、美羽?

「お、ウケた!!」

どや顔の楓。

・・・つつーか、ええええええええええええ!!

ウケてる!?

俺、スベツたのに!?

「よし、じゃあ次春吉、藤○弘のモノマネやって!!」

「はッ!?!」

ま、まさかの無茶ぶりきたあ!?

「・・・春吉」

ぎゃく、小夜の目が、プラチナ色に輝いておるがな!!
つーか小夜、色黒好きなのか!?

「頑張つて、春!!」

美羽はもうすっかり回復しとるし・・・

「いけ、春吉!!」

・・・ペツタンコ大魔神め、今度シバいてやる。

「・・・・・・・・・・では」

もう、玉碎覚悟であります!!

「サバイバルうゝ（藤〇声）」

「「「・・・・・・・・・・」」」

・・・皆様、頑張った人に、白い目を向けるのは、止めましょう。

じゃないと、頑張った人のメンタルが持ちません。

第40話 サッカー（後書き）

まずは挨拶。

皆様、いつも三姫を御愛読頂き、誠にありがとうございます！！

おかげ様で、PVアクセス数が33333アクセスを突破！！

タイトルが三姫だけに、3のぞろ目は何だか嬉しい！！

さらに、このアクセス数、自分の全作品中、過去最高のペースで到達したんです！！

もうすぐで初掲載から約3ヶ月・・・って、また3なんですな。

そこで、皆様への御礼として、何か特別企画でもやろうかなあ、なんて考えていたりします。

まあ、今後の詳細は作者ページの活動報告や、三姫の後書き等でお知らせするので、よろしく願いしまーす！！

第41話 キックオフ

そして、時間はぐぐぐつと進み・・・

見事、三組は一組に勝利！！

「お疲れっす！！！」

「お疲れ様！！！」

「よくやった！！！」

「ナイスシュート！！！」

で、前にも言った通り、ウチのクラスの初戦は第三試合だったから、もう決勝進出決定！！

そして、昼休みを挟み・・・

「楓、美羽、頑張ってこいよ！！！」

「任せろ！！！」

「うう……」

葉城高校二年球技大会三日目、サッカー決勝。

三組VS四組!!

まずは女子!!

「さあ〜て、試合はどっちに転がるか？」

たつつあん……あんた担任なんだから、ウチのクラス応援してよ……。

「春吉!!」

「うわっ!!」

ぎゃ〜!!

いつの間にか、目の前には権三朗。

「ハハハッ、びっくりした……」

「春吉パーンチッ!!」

ドカツ!!

「ぐはっ……」

腹にグー!!

「突然現れるな！！この羽虫がッ！！」

心臓に悪いんだよ！！

「うう、ヒドイ……」

「腹にグーぐらいで泣なッ、気持ち悪いッ！！」

うわーん、と嘔泣きする権三朗はほっといて。

我が三組の布陣は、

楓がセカンドトップ（センターFWの少し後ろ）

美羽は右のCBセンターバック

後は割愛！！（適當すぎて悪いが……）

「……頑張つて」

小夜は手を組んでコートを見守ってるし、

「四組か……四組って可愛い子いないんだよな……」

権三朗、てめえもサッカー出場すんだろ、アップでもしてるよ！！

「三組、頑張れえ！！」

赤佐は普通に応援。

「暑ぢい……」

たつつあんは試合に興味なしの様子。

この人、バレーとかバスケットかは好きなくせに、サッカーだけはイマイチ乗らないんだよな……。

その時！！

「キックオフ！！」

審判のホイッスルと共に、試合はスタート！！

『うおおおお！！』

会場は決勝だけあってスーパーヒートツ！！

「行くぜえツ！！」

試合は三組ボールでスタート！！
で……

「おりややツ！！」

か、楓が相手陣地に向かい、単独でドリブル攻めを開始！！
馬鹿かアイツツ！！
で、まさかの……

「ハイパー楓シュート！！」

バフツ！！

楓の放った超高速シュートは、相手のキーパーの頭上を越え、あ

っさりゴール!!

試合開始僅か10秒の出来事でした。

その後も、初戦と同様に楓の一方攻めで女子10分は幕を下ろした。

「・・・美羽、活躍してねえ」

「フーかボール、CBに一回も回ってねえし。
楓・・・強すぎ。」

「よおし、次は俺の番だな!!」

「どっこい正一、とベンチから立ち上がる権三朗。」

「おい、お前羽虫の分際でサッカーなんか出来るのか?」

「フッフッフ、なめるな春吉、この権三朗が華麗なシュートを決めてやるッ!!」

「あ、ちなみに権三朗のポジションはキーパー。
シュート・・・無理だろ。」

「ま、せいぜい頑張れ、羽虫」

「ハッ、今に見てるよ!!」

で、権三朗3失点。

まあ、相手に秋馬いたしね・・・

三組6

四組3

のポイントで迎えた男女混合のラスト10分。

ウチのクラスは楓（相変わらずセカンドトップ）

美羽（下手なのに相変わらずCB）

女子のキーパーが熱中症で倒れたので、キーパーは男子から権三朗（あだ名は失点羽虫）

相手にはセンターFWに秋馬（相手チームは秋馬のワントップ）

そして・・・

ピイイッ!!

ラスト10分キックオフ!!

第41話 キックオフ（後書き）

ども〜!!

次回、サッカーに決着がツ!!

で、前回後書きに書いたように、何か三姫の特別企画やろうかなあ〜って。

とりあえず、今の段階で二つほどやろうと思っている事があるんですが……。

まあ、詳しくは次回発表します。

で、もし何か、こんな企画やってほしいなあ〜みたいな事があったら、是非下意見さい。

何だったらコラボでも何でもするので!!（ネタバレ以外なら）

以上、何だか球技大会編の終わりがなかなか見えなくて、妙にむしゃくしゃしている作者でした。

あと、最近コメディィーやラブコメ要素が少なくてごめんなさい!
!

第42話 フリーキック（前書き）

どうも！！

最近更新がなくてすみませんでした！！

あ、ちなみに理由は作者の学校が今、期末テスト週間です・・・その・・・いろいろと忙しくて。

読者の皆様には、勝手に休載した事をお詫び申し上げます。すみません。

第42話 フリーキック

試合は、意外なほどの接戦だった。

「うおおおおー!!」

セカンドトップの楓はいつも通り、単独で相手ゴールを目指すが、

・

「・・・フン」

秋馬が楓に当たっていく。

それも、がちりと隙のないマーク。

「この程度か、ちびっ子？」

「・・・うるせえぞ、ハゲメガネ」

・・・試合中に口喧嘩しとる!?

サッ!!

その時、楓はボールを後ろへパス。
的確な判断!!

「町田と櫻井はおもいつきり上がって!!!」

楓の言葉に、二人のFWが相手陣地へ。

「オフサイド気をつけて!!」

その時、後方のMFから楓にパス!!

「おりゃ!!」

すかさず秋馬がボールの奪取へ動く。

「町田ツ!!」

しかし、楓はボールをスルー。

ボールはそのまま、楓の後ろ（相手陣地）の町田へ。

あ、ちなみに町田とか櫻井ってのは、俺らのクラスメイト。

今、町田は奇跡的にフリー!!

「いけえ!!」

周りからの大声援!!

「とおっ!!」

町田はそのままシュート!!

しかし・・・

バシンッ!!

相手キーパーによって防がれた。

「・・・チッ」

「ドンマイ!!--」

コート内の雰囲気はもう一つになっている!!

凄い!!

みんなの気持ちが一つになっとる!!

(約1人除く)

「あの生徒会長・・・ものすごく負のオーラを出してるんですが」

学校の代表が何学校行事を心底嫌つとんのじゃ!

「はあ、早く帰りたい・・・」

担任まで負のオーラッ!?

「何なんだ、このコートと応援席の温度差は・・・?」

気温26度という微妙な暑さの中、試合は残り一分の所まできた。

「ピピイイ！！ファウル！！三組フリーキック！！！！」

残り一分、得点差は0点まで追い詰められた！！

え？

あ、ああ・・・羽虫ならゴール前で泣いてるよ。

失点羽虫の名はしばらく続きそう。

「・・・ふう」

楓のフリーキック。

美羽も町田も櫻井もみんな相手陣地へ。

「いいかお前たち、これを決められたら、我が四組の敗北は決定だ。何が何でもゴールを守れ！！」

ハゲメガネは声を張り上げ、四組全員に緊張感を持たせてる。

「いけえ！！！！」

「三組ファイツ！！！！」

「決めろお！！！！」

「秋馬守れ！！！！」

「四組頑張れ！！！！」

「ハゲメガネ！！！！」

「・・・はあ」

一人の教師を除き、会場のボルテージはMAX！

「・・・楓」

小夜もグツと手を組み、祈りの体制。

「・・・決めろよ」

俺も少し祈るか。

キリストさん、アーメン・・・

その時！！

「ピイイイ！！」

ホイッスルが鳴り、フリーキック開始！！

「うおおおおおおおおおお！！！！！！」

なッ！！

か、楓のあの構えは！

「ファイナル楓キックッ！！」

出たあゝ！！！！

楓の最終必殺シュート、ファイナル楓キーーーーックッ！！
つーかキック！？

普通ファイナル楓シュートじゃね？

ドウウウンッ！！

辺りの空気を振動させるほどの轟音。

それと同時に、楓の足元から超高速のサッカーボールが放たれた
！！

しかし、ここから奇跡の大惨事が発生！！

バコッ！！

「ぶほっ！？」

まず、その殺人シュートは、ゴール前にいた秋馬の顔面に直撃！！

「・・・あ！？」

あまりの衝撃に、メガネがぱりーん！！

そして、ボールは秋馬の顔面でバウンド、そのまま三組陣地へす
っ飛び・・・

「なっぶほへっ！！」

今度は自軍後方にいた美羽の顔面へ直撃！！
本日二度目の悲劇。

そしてボールはさらにバウンド・・・って！？

「こっち来たあ！？」

で・・・

バコッ！！

「ぐあッ・・・」

次の瞬間には、俺の意識はなくなっていた。

第42話 フリーキック（後書き）

活動報告を読んでもくれた人はもうお分かり！！

いよいよ7月、三姫特別企画「三姫月間」いよいよスタートッ！！

約一ヶ月に渡りお送りする月間企画、ちなみに企画数は7月にちなみ7つの企画を考えています！！

そして、その7企画のうちの第一弾は・・・榎維赤也さんのコラボ！！

榎維さんが三姫を執筆してくれます！！

一応、7月の第一週までには掲載予定！！

第二弾は特別読み切り、「三姫RPG」！！

もし、春吉達が異世界ファンタジー物のキャラになったら・・・みたいな設定です。

これは、7月10日くらいまでに掲載出来たらなあなんて考えています。

この他にもコラボや短編、特別企画などもあります！！

また、通常の本編の連載もしっかりやりますので、よろしくお願
いします！！

番外話 雨の日（前書き）

三姫月間本格的に始動開始！！

と、言う事で早速企画第一弾、榎維赤也さんのコラボです！！

これ、全て榎維さんが執筆してくれました！！

では、榎維風シュールギャグ系の三姫をどうぞ！！

番外話 雨の日

皆さんこんにちは！

俺の名前は木山春吉、16歳の高校二年生だ。

「もう6月か……じめじめした季節、梅雨だな……」

梅雨は嫌いだ。

だって、梅雨というじめじめした感じって……

「あゝ！！ もう、髪が跳ねるっ！！」

こう言いながら鏡と格闘しているのは、濱垣美羽。

「ああ……雨だとやる気でない……」

こう言いながら机に伏せているのは、沢那楓。

「……蝸牛」

こう言いながら外を眺めているのは、荏咲小夜。

皆さん、お分かり頂けたでしょうか？

梅雨というのは、皆を不機嫌の底に落とし入れる、いわば雨悪魔なのだ。

「もう……くせ毛が」

「やる気でない」

「……蛞蝓」

教室は今、歪んだ空気を纏っている。

俺は、この空気を変えるべく、行動を取る事にした。

「よし、今から波動拳大会をしよう!!」

波動拳大会……詳しくは本編第2話参照。

「やだ」

「やだ」

「……」

皆様、微妙な反応。

「だったらよ、今から柔道大会やろう!!」

沢那楓の意見には、何故か皆乗った。

なんで？

「じゃあ、春吉対クラス全員。よーいどん!!」

は？

今この半男生物は何と言った？

次の瞬間

俺は雨でイライラしていた皆の拳を、もろに頂いた。

「……………ッは!？」

俺は目を覚ました。
現在授業中。

まさかの夢オチでした。

第43話 雷雨

「ああ・・・ヒドイ目にあつた」

痛つ・・・まだ顔面が痛む・・・

現在、学校から帰宅し、堀田ジムでバイト中。

「つたく、何なんだ、あの殺人シユートは!？」

全く、恐ろしい。

多分、今俺の顔にはサッカーボール型のあざでも出来てるかな？

「木山君、コートのテーピング終わった？」

あ、いけねえッ!!

「もうちょいです!」

い、急いでテーピングをしなければッ!!

ザアーーーー!!

「…………うげ」

いつも通り8時にバイトが終わり、さて帰宅しようとしていた矢先……

ザアーーーー!!

ドシヤ降りの雨。

「やべ……傘持ってきてねえよ……」

今日の降水確率30%
って、お天気お姉さんが朝言ってたな。

「…………普通、30%じゃ傘は持たない……」

まいったな……

ピカピカッ

ドカ〜ンッ!!

「のあっ……!!」

雷まで鳴ってる……

「これじゃ……帰れない」

マジかよ・・・今日は見たい深夜アニメはねえけど、早く帰りたいんだよ、気分的に!!

ピカピカッ

ドツシヤ〜ンッ!!

うわ、落ちた!!

「・・・仕方ない、雨止むまで待つか」

雷が落ちておだぶっ、ってよりかはましだし。

ピカピカッ

ドツシヤ〜ンッ!!

しかし・・・

「雷すげえ」

眩しいぜっ!!

ピカピカピカピカッ

バリバリバリッ!!

「うわっ!!」

ぎゃ〜!!

すぐ近くの鉄塔に落ちたッ!!

み、耳がッ!!

「こ、怖え」

もういやあ〜!!

ブーブツ!!

「ぎゃあああ!」

雷いやあ〜!! って、あれ?

ブーブツ!!

「.....」

・・・携帯の、マナーモードのバイブ音?

ブーブツ!!

なんか・・・恥ずかしいな・・・。
俺、今携帯にビビってたと思っよ。

ま、とりあえず

ポチっ!!

「もしもし?」

『あ、やっと出た』

「.....赤佐か」

電話は赤佐クンからでした。

「何用だ？」

『いや、あのさ……ちょっと助けて欲しい事がありました……』

『

助けて欲しい事？

「何、どした……」

ピカピカッ！！

バリバリバリッ！！

「ぎゃあああー！！」

近くに落ちたッ！！

『春吉、今……お前何してんの？』

い、いかん！！

いい年した高校生が雷怖いなんて、とてもじゃないが言えん！！

「あー……いや、メンタル修業中」

『はい？』

「な、何でもいいだろ！！……つか、それより助けて欲しい事
って？」

ピカピカッ！！
ドカ〜ンッ！！

「ひい〜！！」

また落ちたッ！！

『春吉・・・だ、大丈夫か？』

「あ、アハハ・・・多分大丈夫」

本当は大丈夫じゃねえけど。

「で、本題は？」

『あ、ああ・・・じ、実は今・・・』

「・・・」

なッ・・・赤佐の音が震えているだとッ！？
一体何が！？

『・・・今、田名辺商店の軒先で、雨しのいでんだけど・・・』

「・・・そっちも今、雨降ってんのか」

田名辺商店ってのは、葉城高校の近くにある駄菓子屋。

「で、どうした・・・まさか、雷が怖いから助けに来てくれとか

「？」

ピカピカッ!!

バリバリバリッ!!

「ぎゃあああー!!」

『いや、違う。じ、実は今、田名辺商店の軒先にいるの、俺だけじゃなくてさ……』

「はへ？」

だからどうした？

『で……今、一緒に雨宿りしている相手ってのがさ……』

「相手ってのが？」

まさかハゲメガネ？

だったら気まずいよな……助けを求めるくらい。

『実はその……え、桂咲さんでさ……』

「小夜？」

ハゲメガネじゃあないのね。

『ど、どうしよう……な、何話していいか、全然分からなくて・

』

「……平和だな」

ピカピカツ!!
バリバリバリツ!!

こっちは……平和とは程遠い死地なのだ。

『春吉どうしよお!』

「赤佐落ち着け。ちゃんと言葉が発音出来てないぞ」

ピュアな子やな。

『ああ……ああ……ああ……』

「とりあえず聞くが、小夜はこの電話の事、気付いてんの?」

『いや……今、ベンチに座って下向いてるから……気付いて
はない』

「……で、田名辺商店はまだ、シャッター開いてる?」

『もう閉まってるぅ〜!!』

「……そっか」

つーか、何でこんな時間帯に小夜がそんな所に?

『助けてくりい〜!』

「……はあ」

面倒臭い。

『もう……ヤバイんだよ……桂咲さんのワイシャツ、雨で透けてて……目のやり場が……』

なッ!?

「あ、赤佐!!早まるなよお前!!」

駄目だ!!リアルすぎだぞ!!

『は?』

「お前、ハンカチか何かは?」

『あ、一応……』

「だったら小夜に渡せ!!“雨、止みそうにないな”みたいな感じで、さりげなくだ!!」

『あ、ああ……』

……電話の向こうで、何かのやり取りが聞こえる……。少し気になる。

「……」

何やってんだろ?

その時!!

プープープープーッ

「な、何の音!？」

何だッ!？

・・・って、この音はまさか!？

俺は恐る恐る、携帯画面の左上を確認。

残りバッテリー、もうなし。
そして

ぷちっ・・・

「・・・あ」

電源切れた・・・

まさかのいい所で、電源切れた・・・

ピカピカッ!!

バリバリバリッ!!

・・・もう、嫌です。
何もかも。

第44話 初夏の嵐（前書き）

ども！！

今回は久々に、夏哉目線で物語は進みます！！

第44話 初夏の嵐

ザアーーーー!!

すげえ雨だな・・・

今は夜の8時近く。

俺はちよつとした野暮用で今から帰宅。

ザアーーーー!!

ピカピカピカッ!!

バリバリバリッ!!

雷も鳴ってんのか。

「ちつ、折りたたみじゃ、ちつとも役に立たねえ・・・」

もう横殴りの豪雨。

ツクそ、もう既にびっしょりだ。

「もうちつと、早く向こうを出るべきだったか」

ピカピカピカッ!!

ゴロゴロゴロ!!

・・・夜の町が光ると、何となくだが綺麗な景色に見える。
もし、ここにカオがいたら、きつと・・・

んな事、考えてる場合じゃねえな。
早く帰らんと。
その時……

「……フッフ」

……ん？

「君が、吉崎夏哉君ですね？」

「あ？」

この嵐の中、傘もささずに、ただ突っ立てる男が目の前に一人。

「こんばんは、夏哉君……」

相手は多分、若い男。

雨のせいでしたっかしと顔は確認できねえが、見た目俺と同じくらい。

そして、奴が着てんのは、どこかの学校の制服、ブレザー！。

「……誰だてめえ」

「ハハハッ、嫌だなあ、そんな怖い顔しないで」

何だ、コイツ……

「僕、知ってるよ。君、葉城でもかなり喧嘩、強いんでしょ？」

不適に笑う野郎。
うぜえな。

「……そこどけガキ、今てめえに構ってる暇、ねえんでな」
早く帰んねえと、この濡れたワイシャツが気持ち悪いし。

「……フッフ」

ピカピカピカッ！！
バリバリバリッ！！

近くに雷が落ちた。

「夏哉君……やっぱり君、まだ分かってないんだね」

「……あ？」

さつきから何だ、コイツ……。
初対面の俺に向かって、何を……。

「まあいい。特別に教えてあげるよ。牛溪、奴を連れてこい」

「牛溪？」

その時、奴の背後にある建物の陰から、一人の大柄……いや、
超巨体の男が現れた。

奴と同じブレザー、短髪、超でけえ。

「……コイツが何なんだよ」

「いや、君に見せたいのは牛溪じゃない。彼の足元を見てご覧」
巨体のため、ついついコイツの顔を見るため上げてしまっ顔を、
あえて奴の足元に顔を向けた。

そこには……

「なッ……!？」

何ッ!？

「フハハハハ、日頃、感情をあまり表に出さない君も、驚く表情
をするときがあるんだね!！」

奴の言葉なんてどうでもいい。
それよりも……

「何でだ……」

何でそこに、香音が倒れてんだよ!？

「……君を怒らせる、一つの道具」

全身雨でずぶ濡れ。

体の至る部分には痣。

制服は泥やら何やらでぐじょぐじょ。

そして閉ざされた瞳、口元と鼻からは、紅い血……。

「……僕の名前は古宇宮 友喜。青上高校三年」

「古宇宮……」

ザアーーーーッ!!

雨は強さを増す。

「牛溪、奴を捕らえろ。逃がすなよ」

次の瞬間、巨体が飛んできた。

「……ッ!?!」

ドッシンッ!!

超衝撃。

俺は咄嗟にかわし、

「……フッ!!」

奴の腹にナツクル!!

しかし……

ガコォーン!!

「ぐっ……」

殴った瞬間、突然手に走った衝撃、痛み。

「フッフ、牛溪、少しシャツをめくってあげなさい!!」

そして奴・・・牛溪は、シャツをめくった。

「てめえ・・・」

奴の腹と服の間には、厚い鉄板が一枚。

「・・・フッフ」

くそっ、どうする・・・。

「言うておくけど、水岡香音の身はこちらにある事をお忘れなく」

ハッ、しまった。

香音・・・

「・・・んだてめえ、お前らの目的は・・・」

ゴンッ！！

「・・・!?!?」

その時、俺の後頭部に凄い衝撃が走った。

「よくやった、牛溪」

しまった、油断したか・・・。

気付いたら、俺はいつの間にか地面に倒れていた。
やべ、意識が・・・

「最後に教えてあげようか。僕らの目的」

くそっ……

「目的……それは、葉城への復讐さ」

「……んだ……と……」

その時から、俺の意識はなくなっていた。

第45話 代理競技

葉城高校二年球技大会四日目

競技は野球・・・のハズでした。
しかし・・・

ザアーーーーッ！！

あ、雨が・・・

「本日の二年野球は、雨天のため中止です。二年生は代理競技の準備をして下さい」

代理競技・・・

それは、雨天などで外の競技が出来なくなった時、代わりに体育館で行う代理の競技の事。

ちなみに代理競技はドッジボール、卓球、バドミントン。

この中から、学年の行事委員が話し合いで一つ決めるのだ。

「おい権三郎、絶対にドッジボールにしてこい」

「ドッジボールだからな、ヤサイ人」

「ドッジボール！！」

野郎共は、行事委員の権三郎によつてたかつての状態。

「ハハハッ、みんな落ち着きたまえ、ハハハッ」

しかも権三朗は調子乗ってるし。
うぜえ。

「死ね権三朗！！」

「この羽虫ッ！！」

「三回死ねッ！！」

「醤油の海で溺れて死ねッ！！」

「生きるなッ！！」

あれから一時間後、権三朗は泣いてました。
代理競技は卓球らしいです。

野郎共はよってたかって権三朗のガラスのハートを粉々にして
います。

「……すげえな」

もうガラスのハートは粉末状態に。

「う、うめんなさいい……！！」

権三郎、メンタル崩壊

「ねえ、春？」

「あ？」

権三郎の涙を鑑賞していた俺に、美羽が話し掛けてきた。

「ねえ、まだ小夜、学校に来てないよね？」

「小夜？」

俺は教室をぐるつと確認。

あ、確かに小夜がいない！！

机にもかばんはなし。

ちなみに、時刻はもう9時半。

「もしかして、また疲労で……」

心配そうな美羽。

「……お前、小夜の携帯にメールとかした？」

「うん。でも、メールも電話も返事がなくて……」

「返事がない？」

何かあったのか？

「……あ」

あ、そう言えば！！

「赤佐なら何か知ってるかも」

「赤佐くんが？」

「ああ」

昨日の夜の、アレ。

もしかして、赤佐なら何か知ってんじゃない？

・・・しかし

「赤佐もいねえ！！」

役立たずめがッ！！

しかもメールも電話も通じん！！

「何なんだッ！！」

まさか、駆け落ちって言うオチか！？

あ！？

まさかな。

・・・いや、ない。

うん、絶対。

「春？」

「ん？あ、いや」

いかんいかん、変な想像している場合じゃない。

「小夜も赤佐も、風邪で休みとかじゃねえの？ほら、昨日ドシヤ降りの雨だったし」

「風邪かなあ〜？」

「きつとそうだよ。うん絶対。じゃなきや・・・」
俺は赤佐をシバく。

「春、なんか目、怖いよ・・・」

その時！！

「お、木山！！」

「あ？」

背後から声が。

そこにいたのは、二年一組の森島。
一年の時のクラスメイトだった奴。

「森島？どうした？」

若干焦り気味の森島。

「いや、ちよいと聞きたい事があって」

「聞きたい事？」

「って何だ？」

「俺の誕生日か何かか？」

「あのさ、木山って吉崎と知り合いだよな？」

「……一応」

「んだよ、バネ人間の話題だよ。
つまらん。」

「でさ、まだ今日、吉崎と水岡が学校来てなくてさ。木山、お前
何か知らないか？」

「知らねえ」

「超絶興味ねえ。」

「そうか……悪いな!!」

「そう言うと、森島は去って行った。」

「友達思いなやつよの……」

「アイツは結構義理堅いのだ。」

「小夜に赤佐に水岡にバネ人間。こりゃ、何かの事件フラグでも立ってそうだな」

「春、そんな事言わないのッ!!」

結構本気な美羽。

「ま、バネ人間は事件に巻き込まれても生還率100%な野郎だし。赤佐も小夜も何だかんだで運いいし。きっと大丈夫だろう」

多分。

番外話 三姫RPG（前書き）

ども!!

三姫月間第二弾は、1000文字の超短編『三姫RPG』!!

超グダグダのギャグ風な感じですよ!!

番外話 三姫RPG

「やっと・・・やっと、着いたんだ・・・」

俺の名前は勇者春吉。

悪を倒し、世の中に平和をもたらすために戦う、勇者だ！！

今、この世界は大魔神カエーデによって、悪に染まりきってしまったている。

俺は、そんな大魔神を倒すため、伝説の武器が眠っているとわれている、古代町ハジヨウに来ていた！！

「ここに、カエーデを倒すための武器、牛乳ソードがあるって聞いたんだけどな・・・」

辺りにはボロボロの石柱だらけ。

ここ、本当に町か？

その時！！

「・・・よくぞ来た、勇者よ」

「なッ!？」

突然、俺の目の前の石柱が光りだし、そこに女性の姿が現れた！！

「・・・私は女神サーヨ。貴方にこの剣を授けるかどうか、見極

める者なり」

「女神だとっ!?!?」

の、わりには何だか庶民的な女神だな・・・
だって、エプロンで・・・

「今から貴方には、伝説の剣を与えるに相応しい者かの、見極めをしたいと思います」

「あ、ああ・・・」

見極め?

「貴方・・・名前はハルヨシ、職種は勇者、LVは84・・・うん、まあまあね」

「なっ!?!?」

こやつ何故・・・俺の個人情報をつ!?!?

「ではまず、これを・・・」

「はい?」

そう言っつて、女神が差し出して来たのは・・・

「これが伝説の剣、『黒大魔王剣ミハーネ』です!?!」

「ちわーす」

どっかの生徒会長キター！！

「剣……ってこれ、ただの女の子じゃあないですか！？あんたまさか人さらいですかコノヤロー！」

「落ち着きなさい勇者よ」

「そーだそーだ、落ち着け！！」

何なんだこいつら！？

「いいですか勇者よ、このミハーネには伝説の力でもある『超念動力』や『瞬間移動』、『質量変化』や『真空操作』などの力が宿っているのです」

「どこのSF小説だポケエー！！」

これは飽くまでも学園コメディー。

「残念ながら『パイロキネシス』や『アクアオーラ』、『エアークントロール』などは使用できませんが……」

「だからどこのSF！？」

つーか真空操作とエアークントロールって同じじゃね！？

「では、このミハーネを貴方に授けましょう」

「……正直、これ人さらいじゃないよね？」

「あの・・・ふつつか者ですが、どうぞよろしく・・・」

「てめえは何赤くなってもじもじしてんだ!!」

「うふふ、仲睦まじい事ですこと。オホホホホ」

「女神ツ、てめえ何かキャラ変わってねえか!？」

「あの・・・私、初めてなんで、出来るだけ優しく・・・」

「あんたも何、勘違いしてんの!？」

「オホホホホ!!」

「もじもじ・・・」

何なんだこれ!？

一方

「・・・」ない

カエーデは自分の城で眩いていた。

番外話 三姫RPG（後書き）

次回の三姫月間第三弾は、またまたコラボ企画！！

作戦参謀さんの日高キャラとコラボです！！

近日掲載予定！！

で、第四弾は、特別短篇の『魔法戦士ワイバーンナイト』！！

三姫月間はまだまだ続きます！！

第46話 襲来

「あゝ……」

「……」

「あゝ……」

「……」

「あゝ……」

「……あの、か、楓さん？」

「あゝ……？」

「ど、どうかしましたか？」

現在、下校中。

隣には楓と美羽。

あ、卓球つか？

いや、はい、ウチのクラスは初戦敗退ですけど？
え？はしよるな？

だって……

地味じゃん、ぶっちゃけ卓球って。

(全国の卓球ファンの皆様、すみません)

ちなみに作者も中学時代は卓球部でした!!
(どーでもいい情報でした)

で、美羽の提案(正確には強制)により、これから小夜の家に行くところ。

あ、理由？

なんかね、美羽さんは今日学校を休んだ小夜の疲労を心配しているように、お見舞いがてら、また家事等を手伝いに行くらしいです。

「はあ、真面目やなあ・・・」

で、

さっきから楓の様子がおかしい。

「あ・・・」

何かふらふらだし。

「おい、大丈夫か？目え死んでるぞ？」

「あ・・・大丈夫じゃねえ」

なんだ？熱でもあんのかコイツ？

「あ・・・血が足りねえ・・・」

「は？」

え？血？
ドラキュラ？

「今日、二日目だからさ・・・」

「なッ・・・って、下ネタかいッ!!」

帰れ!!

「あゝ・・・レバー食べたい・・・」

マジで帰れ!!

で、南葉城駅。

「楓、大丈夫？」

「サンキュー美羽、多分大丈夫・・・」

まだその話！？
つてのは置いといて。

「・・・げ、5分前に電車行っちゃったのか」

俺は一人、時刻表とにらめっこ中。

「次は・・・げげげ、30分後・・・」

まいったな・・・

やっぱり南葉城は不便だなあ。

ここ、急行止まらないし、ホームに自販機ないし、さらに屋根はトタン。

ベンチはボロボロの木製だし、トイレは臭い。

「ちよいと、お二人さん!!」

仕方ない、二人に今後の対策を・・・

「・・・」

・・・あれ？

二人の姿がないや。

「・・・は？」

トイレか？

あ、いや、下ネタ的な意味ではなくて。

「・・・ツたく」

はあゝあ、暇。

「……………」

……暇や。

「……………」

……どうするか。

このまま暇の描写だけでは、読者の諸君は間違いなく飽きる。

「うん、何か打開策を……」

その時……

「やあ」

……ん？

男性の声？

「君、葉城高校の生徒だよね、その制服」

「あ？」

俺が後ろへ振り向くと、そこには大人しそうな青年が一人。

「……………こんにちは」

「誰？」

いやマジで。

「・・・そんな怖い顔しないでよ、葉城高生」

「・・・あ」

あ、もしかしてこの人、ウチの両親の借金関係の人か！？

「・・・僕の名前は古宇宮友喜。青上高校生だ」

「・・・はい？」

予想外れ。

どこぞの高校生かよ。

「・・・あのさ、もう一度確認するけど、君、葉城高校生だよね？」

「あ、ああ」

何だコイツ・・・

「・・・そうか」

不適に笑う古何とか君。

「じゃあ・・・」

ドシンッ！！

「・・・ッ！？」

突然、背後に人が！？

しかも、なかりの大男ときた！！

「・・・さよならだ」

「あ？」

次の瞬間！！

大男の拳が、放たれた。

第47話 古宇宮 友喜

「はあ、はあ、はあ……」

な、何だ!?

「な、何が……」

「……フッフ」

今から遡る事、5秒前

「殺れ、牛溪」

俺は目を見開いた。

目の前にいる大男が、その太い右腕を振り上げ、二つある眼で、俺の瞳を凝視。

そして……

バコッ!!

「がはッ!?!」

物凄い衝撃が、俺の体を走った。
体が、宙を舞った。

な、何が起きたのか、分からなかった。

ドサツ・・・

気が付くと俺は、駅のホームの上に横たわっていた。
今、駅のホームには、俺と大男、そして古何とか君の三人のみ。

「・・・ッ」

体からは、生々しい痛みが。

「・・・牛溪、そいつを回収しろ」

やべ・・・体が動かん・・・痛え。

っーか、何か意識が・・・。

「・・・フッフ」

古何とか君の笑い声が聞こえる。

・・・なるほど。俺、喧嘩でも売られたのか。
相手は二人。

青上校のウシタニ・・・君と古何とか君。

「・・・てめえ・・・ら・・・」

苦しい。

息すんのすらキツイ。

「……何だ、まだ意識があったのか」

この……古何とか君め……。

「あん……た……ら……これ、障害……罪で……捕まるぞ」

「……は？」

場の空気が一瞬フリーズ。

「……障害罪か、葉城高生は面白い事を言うな……」

「笑い……事じゃ……ねえ……」

何か……頭がぼーっとしてきた。

「……フッフ、ではそんな君に、僕からも面白い事を教えてあげよう」

「お……むしろ……い……事？」

何だ？

まさか、作者の中学時代の赤っ恥体験をカミングアウトすんのか？

「……まず初めに、君は青上高校を知っているかい？」

「……青上」

青上・・・確か、不良率96%の、地球一荒れていると言われている極悪の高校だ。

「僕は、その青上の不良集団『ブルーパンチ』を仕切る、いわゆるリーダーと言っちゃった」

作者の補足説明!!

青上高校（男子校）には、沢山の不良がいます。

今では絶滅したと言われているリーゼントやアフロ、パンチパーマからスキンヘッドまで多種多様。

そんな青上高校の中では、不良達にランク付けがされているんです。

ランクはAからEまでの五段階。

Aの方が強く、Eに近くほど弱いんです。

「ブルーパンチって言うのは、そんな不良激戦校の中でも、特に強いランクAだけを集めて創った、最強の不良集団なんだよ」

・・・作者、あんな・・・。

「・・・で、僕はそのブルーパンチのリーダーなんだけどさ」

そう言うと、古何とか君は近くのベンチへ。

「・・・ブルーパンチのメンバーは皆、優秀でさ。みんな僕の命令には絶対服従なのね」

「……………」

何だ、何言ってるんだ？

「……………僕ね、この前、ちよいと葉城高校のとある人と揉め事起こしちゃってさ。今、ちょっとイラついてんだよね」

「とある……………人」

「ああ、とある人とね……………で、僕はそいつが許せなくてさ。葉城に対して今、ブルーパンチの奴らにある命令を出したんだ」

「……………」

何なんだ、コイツ。

「……………葉城高校全生徒723人と、教師等職員51人全員を狩れ」

「なッ……………」

な、何言ってるんだコイツ……………。

「ブルーパンチは総勢89人。僕を足して90人」

「お前……………」

「不良高校内でもかなりの実力者89人が、葉城高校関係者約800人を、狩るんだよ。たとえ、か細い女子生徒でも、もう定年の老人教師でも、とにかく葉城高校関係者全員を、狩る」

「何で・・・」

「決行日はこの一週間。既に、ブルーパンチはみんな動き出しているし、今日までに合計37人の葉城関係者を狩った」

「・・・何で」

信じられない・・・

「・・・フッフ、何でかだと？」

古何とか君は、笑っていた。

「そんなの簡単さ。僕をこけにしたとある男
梨本冬希に復讐するためだよ」

「・・・ツ!？」

コイツ・・・今、何て・・・

「だけど、梨本だけを狩ってもこのイライラは収まらない。だから、どうせ梨本を狩るなら、連帯責任って事で、梨本の学校の奴全員を狩って、このイライラを・・・静めようと思ってさ」

「・・・マジ・・・か・・・よ・・・」

・・・まさか

「・・・古何とか君・・・一つ・・・聞いて・・・いいか？」

「……ん？」

あゝ喉痛え……
けど……

「小夜と……赤佐を……あと夏哉は……お前らが……」

「……さあな。狩った奴の名前など、いちいち覚えてはいないよ」

カチンッ

この野郎……も、ムカつくけど……

冬希……

「……さて、では牛溪、コイツを始末しろ」

「……(コクリ)」

あの弱虫野郎……何勝手に……てめえのせいで……葉城の皆さんが……。

「殺れ」

ブオオオンッ！！

大男の拳が、空気を裂きながら、俺目掛け……

・・・やっぱ、冬希もムカつくけど。

だからって、無関係な俺達を巻き込むな!!
この古何とか君めッ!!

「・・・フッフ」

その時・・・

パシッ!!

俺に向かい放たれた、大男の拳。
しかし、それは俺の5センチ前で止まった。

「・・・ムッ」

あ、大男が喋った。
んな事より・・・

「・・・何へばってんだ、春吉」

「お前・・・ッ」

大男のパンチを素手で受け止め、俺を救ってくれたのは・・・

「こっちは血い不足でふらふらなんだよ、早く立ってくれ」

「うるせえ・・・こちらとてふらふらじゃ!!」

大魔神さんは、ご機嫌ななめのようにです。

番外話 藤高の伝説前編（前書き）

三姫月間第三弾は、作戦参謀さんの日高キャラとコラボ！！
ちょっと話が長くなりそうなので、物語は前後編に分けます！！

番外話 藤高の伝説前編

それは、じめじめとした梅雨本番の、6月のある日の事。

ザアアアアッ

「あゝ・・・雨が、雨があ

俺、木山春吉はいつも通り、学校に向かい登校中！！

「暑ぢーし、雨すげーし・・・」

雨降ってんのに暑いってどゆ事！？

これぞ6月、THE・梅雨って感じだな。
に、しても・・・

ザアアアアッ

雨が・・・もうブレザーもズボンもワイシャツも靴下もビシヨビシヨ。
もう、傘は役に立ちそうにないくらいの豪雨。

『本日の降水確率は90%です！！』

朝、ニュースでお天気お姉さんがそんな事言ってた気がする。

「はあ・・・」

今日は体育ないから、ジャージは持ってきてないしな……。学校行っても、俺はこのままビショビショライフをしなくてはいけないのかッ!?

もう、雨に超げんなりしていた

その時……

「アニキ、本当に今日、実行するんすか？」

「あたぼうよ!! 下藤野、慈恵、葉城、桜ヶ丘、岡田工業、北陽、青上。今日こそ俺はこの7校の番格潰して、俺ら須貝学園が喧嘩1番だつて所を見せ付けるんだ!!」

……その路地裏から聞こえる、明らかなイベントフラグ。声は男の声が二つ。

「まずは何処から潰します？ アニキ？」

「そうだな……慈恵の本庄と青上の古宇宮はやべえって聞くと、かと言って北陽や桜ヶ丘もな……岡工は猫舌さんいるし……」

優柔不断な不良だな、オイ。

「つーか、俺早く学校行かねえと、ダーク生徒会長にグーを貰っちゃおう!!」

早いとこトンスラしよう。

「まずは……下藤野か葉城だな。日高一派を先にやっとかないと、後々面倒だし。葉城は……って、葉城の番格って誰だ？」

・・・こいつ、葉城にも来んのかよ。

「まあ、とりあえずは下藤野だ。須貝不良組全員に伝えとけ、今日午後5時、下藤野の若虎、日高恭介を狙うとな」

「あいあいさー」

下藤野・・・ああ、確か権三郎が言ってたな。

『春吉、藤高って知ってるか？ 最近の藤高はやべえらしいぞ！』

みたいな事を。

その日の下校時

南葉城商店街

「でね、5組の八原さんが、また彼氏ふつたらしくてさ」

「八原っちか・・・あいつ、かなりの飽き性だからな」

「・・・わかる」

「……………」

只今、三人の女子と絶賛下校中（帰る方向が一緒なので…………）。
で、三人は現在、ガールズトークなるものをしているらしい。

「楓は、彼氏とか作らないの？」

「うん…………あたし、別に男とか興味ないし…………小夜は？」

「…………まだ、運命的な結び付きはない」

「……………」

…………もの凄く、いづらい雰囲気。

つか女子三人に男子一人って、かなり気まずいんだよ！！

「…………美羽は？」

「えッ、私？ 私は……………」

…………はあ、ついていけないな、ガールズトークってヤツは。
その時！！

「いたぞ、日高だッ！！」

ん？

突然の怒鳴り声。

その声は前方から。

「・・・何だ？」

何だ何だ？

喧嘩か？

「ちツ・・・ここじゃ人目が・・・一旦逃げるぞ、深月」

「・・・うん」

そんな話し声と共に、俺の横を二つの人影が通り過ぎる。
ん？

あれ？ 今のヤツって確か・・・

「逃がすな、追ええ！！」

謎の二人組が通り過ぎたすぐあとに、今度はどこぞの学ランを着た、ごつい兄ちゃん達が、俺の横を通り過ぎようとしていた。

しかし・・・

「あッ！！！」

一人の学ラン兄ちゃんが、こちらを視認、大声を上げた・・・つか、不良に目え付けられた！！

「どうした松川？」

「榊原さん、こいつら葉城の制服着てますよ！」

「あんだと？」

そう言つと、俺らの周りにゾロゾロと集まりだす学ラン不良達。

「な、なに……」

美羽は不良にビビり気味のご様子。

「……………」

小夜も少し怖がってますな。

「あ？ 何だコイツら？」

逆に楓は戦闘モードに……つてか、超たくましい！！

「相手は約10人……どうする？」

とりあえず、ここは男春吉、震える足に鞭打つて、ドーンと構えますぜ！！

「10人つて、春吉、お前戦うつもりか？」

「あ、当たり前だ！！ お、俺はに、にに日本男子だぞ！！」

あー……声震えちつたな。

「日本男子つて……まあ、あたしの邪魔はするなよ？」

ほ、本当にたくましい子やッ！！

「小夜と美羽は下がってな」

「う、うん」

「……（コクリ）」

そう言うと二人は少し後ろへ。

「榊原さん、確か「須貝のぶつ潰す高校リスト」に葉城って……」

「ああ、確かあった気がする」

一方の相手は、なにやら相談中。

「まあ、とりあえずコイツらしめて、葉城の番格を呼び出すエサにでもするか!?!」

……どつちやら向こうはやる気満々の様子。

「野郎共、やっちまいなッ!?!」

く、来るか……

しかし……

「オラッ!?!」

ドスッ!?!

「……ッ!?!?」

突然、榊原・・・さんって人が吹っ飛んだ。

「な、何だ!？」

「さ、榊原さん!？」

「い、一体!？」

不良共、超パニックってます。

「へ?」

で、俺もきよどる。

「てめえら、一般人には手え出すんじゃないやねえ!! 狙いは俺だろ

!!」

突然の声。

俺は恐る恐る、声のした方向を見る。

「なッ・・・あ、あれはッ!？」

「帰ってきた・・・」

「下藤野の若虎!!」

そこにいたのは、さっき俺の横を通り過ぎた・・・

「出たな」

不良の一人が、そう呟いた。

「日高・・・恭介ッ」

日高恭介？
って、確か・・・

「てめえらの目的は俺だろ？ だったら一般人には手え出さねえで、正々堂々俺んどこに来いよ！！」

なんと凜々しい人！！

「んだてめえ、さつき真っ先に逃げたくせに！」

「う、うるせえ、とりあえず、来るなら来い！」

な、何なんだ・・・

「春吉」

「ん？」

ツンツン、と小声で肩を突いてくる楓。

「ここはあの人にまかせて、あたしらはトンスラしない？」

「・・・・・・・・」

後ろへ振り返ると、コクコクと頷く美羽と小夜の姿が。

「あの人不良の注意を引き付けてる今がチャンスだ。春吉、美羽、小夜、早く、こっち！！」

い、いいのかな？

平和を愛する俺としては、喧嘩はしないにこしたことはないけど。
。。。

「ハッ、いくら日高とて、1対10ではマズイんじゃないか？」

あ？」

「るせえ、やってやるんじゃないのー!!」

・・・任せて良さそうな雰囲気。

「春吉、早くー!!」

「あ、ああ・・・」

「こ、ここはあの人に任せて、一旦退散するか。」

番外話 藤高の伝説前編（後書き）

後編&三姫月間第四弾の短編は、今週中には掲載予定です。（もしかしたら多少遅れるかも）

で、ここからは告知！

今回のコラボ作品、作戦参謀さん執筆の【日高の馬鹿と無口な小悪魔と】は、小説家になろう（当サイトですね）にて絶賛連載中です！！

ぜひ、御一読を！！

番外話 藤高の伝説後編

翌日

「なあ春吉、お前聞いたか？」

朝1番に、俺の席に来た権三郎。

「何？」

うざいから、テキトーにあしらおう。

「藤高の伝説だよ！」

「・・・伝説」

中二ですかコノヤロー

「そう、今下藤野をテリトリーにしている、藤高日高一派!!」

ヤクザか？

極道か？

「下藤野の若虎」日高に、「若虎の右腕」赤坂、「下藤野の守護神」小山とか「藤高の巨兵」山本などなど。不良界では超が付くほどの有名グループ、日高一派」

そう言うところやつ、かばんから一冊の本を取り出した。

なにになに……〔週刊ヤンキー〕。
……は？

「これ、あの不良高の岡田工業のOBが作ってる雑誌」

いや、知らねえし。

「見ろよ、今週の巻頭特集〔須貝学園の番格潰し、全て失敗〕」
いや、だから知らねえから、そんな事。

「中でも、藤高の日高は須貝学園の不良10人を、1人でやったんだって」

……こいつ、もしかして夏休みデビュー希望？

「すげえよな、かなり憧れるんだけど!」

「……」

どうやら、権三郎は間違った方向へ向かおうとしているらしい。

「日高さんか……一体、どんな人なんだろう」

「……はあ」

で、その日の放課後

「何故だ……」

今、俺は下藤野高校前にいます。

「何故、俺はこんな所に……」

「まあまあ」

隣にいるのは権三朗。

どうやら、マジで夏休みデビュー希望らしい。

「今日は日高さんに頼んで、俺も一派の一員にさせて貰うんだ！」

「……馬鹿だ」

権三朗、馬鹿だ。

相手は天下の不良様だぞ？　こんなひよろひよろ、一撃でアウトだぞ？

「にしても、藤高の制服ってかけーな」

そう言うのは楓……ってか

「何でお前もいんだよ!？」

「いいじゃん、何か面白そうだし」

そう言ってる楓の視線は、そろそろ下校者が増えてきた藤高生徒の制服。

「面白そうってな・・・」

まったく・・・

「なんか、大量の藤高制服の中に葉城の制服って、何か目立ちますね」

って言ったのは・・・

「だから、何でお前もいんだよ!？」

「ほへ?」

小首を傾げながら、こっちを見る亜希。

「ほへ? じゃなくて、お前は何しに来たんだよ!？」

「ああ、何か面白そうでしたから」

お前もかッ!!

「・・・はあ」

ため息も出るよ・・・

「ねえ、あの制服、他校じゃない？」

「あれ、どこ校？」

「もしかして、殴り込みとか？」

「不良・・・にしては、ひよろひよろが一人いる・・・」

ん？

辺りを見ると、いつの間にか藤高生がいつぱい。

「・・・権三朗、今日はもう帰らね？」

面倒事が起きる前に。

「・・・いや、俺は不良になるんだ！！　こんな所で諦めてたまるか！！」

「あつそ、じゃ俺らは帰るから。楓、亜希、行こうぜ」

「ああ、ちょっと、一人にしないで！！」

うぜえ。

その時・・・

「おい、てめえら！！」

げ！！

藤高校舎の方から、ちよいと太めの人が・・・
見た目明らか不良。

「あ、小山さん!!」

「ちわーす!!」

「あれです、例の怪しい奴ら!!」

なんか・・・ヤバイ感じに・・・なってきた。

「何モンだ、てめえら？」

うわ、メンチ切つとる、メンチ切つとる!!

「あ、貴方は・・・藤高の守護神、小山さん！」

「あ？」

「う、権三郎!？」

「うわ、マジで小山さんだ・・・すげえ」

「んだテメエ、離れるや」

権三郎と不良の距離、わずか20センチ。

つか、権三郎興奮し過ぎ!!

「コイツが藤高の守護神・・・」

確かに怖いオーラはあるけど・・・ただのデブ。

「春吉、このデブだれ？」

か、楓さん!？」

「なッ、テメエ・・・」
なあッ、怒り買った!??

「ああ、死んだな」

「小山さんの前で禁句ワードを・・・」

「アイツら、マジで言ったのか?」

うわ・・・何か周りの奴が言つとる。

「楓駄目だろ、本人の前でそんな事言ったら・・・」

「テメエ、なめてんのか!?!」

ひいゝ!?!

「貴方、カルシウム足りてます? もっと小魚とかを・・・」

「亜希、火に油を注ぐな!?!」

「この・・・泣かすぞコラア!?!」

「あああ (汗)」

何故か権三郎が1番ビビってます。

「ちッ、やんのか?」

「ちょ、おま、楓!」

ヤバイ、大魔神が戦闘モードに！！

「んだ？ 女はすっこんでろ！！」

「よく喋る豚だな」

楓えく！！ もう止めてえく！！

「んだとコラア！！」

バコッ！！

「グヘッ！！」

あ・・・相手が放った拳が、権三郎にクリーンヒット！！
近くにいるからこうなる。

「次はテメエに喰らわすぞ！！」

「さすがデブだけあって、威力はなかなかだな」

もう、事態は収集のつかない方向に・・・

「うん・・・カルシウムが豊富な小魚と言えば・・・」

亜希は何かズレてるし・・・。

その時！！

「おう、何してんだ小山？」

またまた校舎の方から、一人の男が……。

「あ、あれは!!」

権三郎、フラフラになりながらも、何とか立ち上がる。

「あ、赤坂先輩!!」

赤坂？

「どうした小山？ 喧嘩か？」

新手か……つーか、早く帰りたい。

「赤坂先輩、こいつら、藤高に殴り込みしに来たみたいで」

「あんだと？」

「え、ちょ、違」

「るせえ!!」

バコッ!!

権三郎、本日二発目。

「おっ、どうしたどうした？」

むむ、さらに校舎の方から数人……

「お、沙希に雲雀丘、それに日高ちゃん!!」

またまた新手・・・

つか、その他にも藤高不良組がゾロゾロと・・・

「赤坂、小山、何だそいつら?」

「知らねえ、何か殴り込みらしいけど」

やべ・・・変な誤解が・・・

「殴り込みだ?」

あいつ・・・が、日高恭介って奴か・・・。
正直逃げたい。

「きよーすけ・・・」

「大丈夫、10秒でしめる。深月は下がってな」

うわ、何かカッコイイ・・・じゃなくて。

「楓、ここは一旦引く・・・」

「男三人か、よし、掛かってこい!!」

楓えく!!

「沙希も下がってな。ここは俺らでやる」

「うん、じゃあ任せる!!」

向こうはもう戦闘スタンバイ。

「やべえよ、これはマジで・・・」

ちて、どじするかな・・・

「赤坂、小山、行くぞ!!」

「」
「」
「」

どじする・・・どじする・・・どじする・・・

あ、そうだ。

「おりゃあぁ!!」

俺は咄嗟に行動を起こす。

まずは、そこで伸びている権三郎の襟をつかみ、

「セイツ!!」

相手に向かい投げる!

ブオオオオン!!

「なッ!?!」

「なにッ!?!」

「くッ!?!」

一瞬怯んだ!!
今だッ!!

「えっ!?!」

「うっ!?!」

俺は右手で楓の襟、左手で亜希の襟を掴み……

「ふりゃあ〜!!」

全力疾走で逃げる!!
だって、かないっこないもん。

「な、ま、待て!!」

後ろから声が……

ふ、振り向いてはいけない!! 前だけを見るんだ俺!!

「何で逃げたんだよ」

やっとこさ葉城のテリトリーへ逃げてきた俺。

しかし、大魔神はお怒り気味。

「あんな奴ら、あたしなら5秒で・・・」

「だーっ、だから、喧嘩とかは駄目、下手して学校に知れたら停学だぞ」

「んだよ・・・」

はあ、はあ、っ、疲れたあゝ。

「やっぱり鰯？ それともメザシ？」

亜希はまだズレてる。

「に、しても・・・」

「ん、どうした亜希？」

やっと魚の話題終わったか？

「あの、日高って人の後ろにいた、あの子・・・雲雀丘って・・・」

「亜希？」

「もしかして、雲雀丘財閥の子かな？」

「財閥？」

それって、亜希の渡邊財閥とかの、財閥？

・・・ん？

あれ？

何か・・・忘れてないか？

あれ？

その頃、藤高校門前

「だから俺、日高一派の一員に・・・」

「テメエ、まさか他校のスパイ！？」

「だから違・・・」

「日高ちゃん!!」

「・・・とりあえず、しめとくか」

「え、ちょ、まっ・・・ぎちゃああ〜!!」

後日、権三郎は

「もう、不良嫌!!」

と、言いながらボロ雑巾の姿で帰ってきました。

番外話 藤高の伝説後編（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回、コラボを提案して頂いた作戦参謀さんには、心からの感謝です！！

で、三姫月間第四弾は、作中で春吉が金曜日の楽しみと豪語している「魔法戦士ワイバーンナイト」の特別読み切り！！

第五弾は、三姫世界の設定等の紹介！！

おかげさまで、ユニークアクセス数が80000アクセスを突破＆PVアクセス数も50000アクセス突破目前の所です。

皆様、本当にありがとうございます！！

第48話 ウシタニ君（前書き）

ども。

今ね、この本文&前書き書いているの、午前4時です。眠いです。

空は若干明るくて、カナカナカナと蝉が鳴いています。

ついさっきまで夏休みの宿題やってたんで、頭はぼーっとしています。今年の目標、夏休み前に夏休みの宿題終わらす。

そのため、まさかの徹夜で勉強（宿題）と言う、超真面目かつがり勉的な事やってました。

日頃は不真面目な学生ですよ、作者は。

で、そのせいか多分眠気で今回、誤字脱字が多々あるかもしれませ

ん。
もし、あつたら報告してくれると助かります。

第48話 ウシタニ君

「早く立て、バカ」

「……るっせえな」

あー……クソツ、足に力が入らねえ。

「クソツ……」

何でだ？

別に足は負傷してねえのに。

「……春吉お前、もしかして……」

「あ？」

「足、やられたのか？」

楓はウシタニ君の腕を押さえながら言うてる。

「あ、足？いや、別にやられては……」

「……春吉、お前足が無事なのに立てないのか？」

なッ、この野郎、この状況の中、憎たらしい笑顔を……。

「春吉、まさかビビってんのか？」

「なッ・・・」

「まさかねえ、あの春吉がビビってるわけ、ないよねえ」

「あ、あたぼつよ！」

「この俺がビビるわけ・・・」

「じゃあ早く立てよ」

「う、うるせえ！！今すぐ立ってやる！！！」

で、無理に立とうとした結果。

ドサッ！！！！

「ぐはっ」

転倒・・・ああ、情けない。

「・・・」

あ、このヒチ大魔神め・・・顔が笑つとる！！

「フフフ・・・」

その時、不気味に笑ったのは古何とか君。

「まさかブルーパンチの幹部でもある牛溪のパンチが、女の子に

止められるとは……」

古何とか君は何が可笑しいのか、さっきからフッフフを連呼。

「……テメエ、話は全部聞いたぞ」

一方の楓は、戦闘モードスタンバイ。
……ってか、あれ？
美羽は？

「君は確か……葉城の大魔神、沢那楓」

「だ、大魔神……」

何だコイツ、自覚無かったのか？

「まあ、そこそこの実力は持っているようだが、まだ僕の足元に
も及ばないな」

「何だとツ！！」

次の瞬間だった……

「……ツ！？」

「え……！？」

ウシタ二君の腕を押さえつけていた楓が……
その場で崩れ落ち、倒れた……って、

「なツ・・・か、楓!？」

楓はぐったりとした様子で、地面に倒れていた。

「・・・牛溪、その影にいる奴も狩れ」

古何とか君の命令、その直後、ウシタニ君は駅の看板の後ろへ・・・

そして

「きゃっ!!！」

女性の悲鳴。

まさか・・・

「・・・牛溪」

次にウシタニ君が看板の後ろから出て来た時、奴の手には・・・

「み、美羽・・・!？」

ぐったりと意識を失っている美羽の姿が・・・

「そ、そんな・・・何が・・・」

やべえ、訳わかんなくなってきた。

「・・・フッフ、牛溪の手を、よく見てみなさい」

ウシタニ君の手だと・・・って、何か黒い物が・・・。

「あれは改造スタンガン。普通のスタンガンの三倍の電気を放出する、牛溪の武器さ」

「……ッ」

・・・クソッ

何で……

「牛溪、そこの男子も早く狩れ」

「……（コクリ）」

楓・・・美羽・・・

二人は相変わらず、その瞳を閉じている。

この野郎……

コノヤロウッ!!

バサッ!!

「ほう・・・牛溪の拳を喰らって、まだ立ち上がるか」

知らぬ間に、俺は立ち上がっていた。

目の前にはウシタ二君。相変わらずでけえな。

「狩れ、牛溪」

ある意味絶体絶命

けれど、ある意味逆襲のチャンス

・・・やってやろつじゃないの。

よくも楓を、美羽を・・・

小夜も赤佐も夏哉も水岡も葉城の皆さんも・・・

冬希と何があつたかは知らねえけど

青上、古宇宮

ぜってえ許さねえ！！

第49話 涙色の夕日（前書き）

お久しぶりです!!

またまたまた勝手に休載しちゃってすみませんでした!!

で、この“球技大会編”を半ば無視してやっている感じになってき
ちゃった今編“青上強襲編”は、いよいよ中盤突入です!!

第49話 涙色の夕日

「テメエら・・・許さねえ!!」

「ウシタ二君との距離、およそ5メートル。
俺はアスファルトを蹴り、一気に接近。」

「うおりゃあああ!!」

奴の手　スタンガンだけには注意しないと。
俺はそのままの勢いで、ウシタ二君の腹にパンチ!!
しかし・・・

ガコーン!!

「ツ・・・!!」

響き渡る轟音。

何故か痛みの走る右腕。

「くう・・・」

な、情けない声。

「フフフ・・・頭に血が上ると、人間は冷静さを失う」

な、何が・・・

「・・・牛溪、コイツを早く始末しろ」

「御意」

あ、ウシタニ君がまともに喋った。
って、今はそんな事どうでもいいし。

「クソツ!!」

ウシタニ君は思い切り拳を構え、俺に向かい振り下ろす。

ブオオオン!!

空気の裂ける音。

こ、これはマズイ!!

俺は咄嗟に拳をかわすため、右へ跳躍・・・ってああ!!

「うおっ!!」

ああ!!

勢い余ってホームから落下、線路へ・・・。

ドサツ・・・

「痛つ・・・」

やべえ・・・何とか受け身はとったけど、体のあちこちが痛い。

「フフフ・・・面白い事をするな、君は」

ホームの上から俺を見下ろす古宇宮。

「……ッ」

……体が動かない。
ツクソー！！

「……フッフ、いいでしょう」

なっ……突然笑い出した古宇宮。
き、キモい……。

「明日、そうですね……では、あと仲間を3人連れて、青上の廃工場に来なさい」

……は？

「3人ですよ？ それ以上連れて来たら、人質は全員殺します。あと、もちろんですが他言も駄目。警察に頼ろう何て考えは、甘いですから」

こ、コイツ、何言ってる……

「……つまり、人質を返して欲しければ、明日の昼に仲間を3人連れて、青上の廃工場へ来いと言う事です」

「ひ、人質！？」

って、まさか。

「葉城高校関係者の事ですよ」

・・・やっぱりか。

「フフフ・・・馬鹿な貴方に興味を持ったからの特別処置です。せいぜい足掻きなさい」

「きよ、興味って・・・」

「・・・では、この子達も預かっていきますね」

あッ!!

「ま、待てッ!!」

まさか・・・。

俺は急いでホームへ上がる。

マズイ、この展開は・・・!!

そして・・・やっとこさホームへ上がった俺。

そこには・・・

「・・・そんな」

そこに・・・もう青上の2人と、楓と美羽の姿は無かった。

「マジでか・・・」

カアカア！！

ああ・・・カラスさんが鳴いてらあ。

時刻は午後6時。

俺は燃え尽きていた。

「・・・クソッ」

自分の無力さに腹が立つぜチキショー！！

「なんで・・・」

なんで俺、こんなに弱いんだ・・・。

そりゃ、幼少期は無喧嘩無トラブルな人生を送ってきたわけで・・・。

今でも喧嘩なんてした事のない草食系・・・いや雑食系男子な俺であり。

「・・・明日か」

夕日は空をオレンジ色に染め、俺のメンタルを涙色に染める。

楓・・・

小夜・・・

美羽・・・

「・・・・・・・・」

確か奴は、仲間は三人までとか言ってたっけ。

この際、葉城のボクシング部に頭下げるか？

んな事考えてた

その時！！

「・・・オイ」

「ひっ！！」

は、背後から声が！？

「は〜る〜よ〜し〜」

「・・・・・・・・」

随分なガラガラ声。

俺は何となく視線を足元のアスファルトに。

ユラユラ〜と、俺に近付いてくる影ありけり。

「は〜る〜よ〜し〜」

声と影は徐々に近付いて……って!!

「お、お化け!?!」

ま、まさか……

ここは、南葉城駅近くの人通りの少ない道。

「は〜る……」

「あ、あああああ!」

やぐ、ちびりそご。

しかーし、男春吉勇氣を持って!!

「あ、ああ悪霊退散〜ッ!!」

テキストなお経を唱えながら、一気に振り返る!

「な、なんみよーほーれんそー!!」

「……」

「りんぴよーとーしゃーじんかいめつ……って、アレ?」

「……テメエ、殺されたいのか?」

あれま!!

俺が振り返った先、そこにいたのは……

「お、落ち武者？」

「・・・シバくぞ」

「いや、じよ、冗談です・・・」

そこにいたのは、ボツロボロで傷だらけのバネ人間！！

「な、夏哉！？」

「・・・」

「・・・悪霊ではないようだな。」

第50話 戦力集結

「だ、大丈夫か？」

「……………」

「お前、すげえ怪我じゃん!？」

「……………」

「一体何があつたんだよ!？」

「……………」

ハイ、言葉のキャッチボール。

あ？ 今何してるかってか？

今俺は駅の近くにある公園のベンチにいます。
バネ人間も一緒。

「夏哉、ガチで何があつた？ 水岡は？ っつか、お前青上と…
」

「…………ツチ」

し、舌打ち返し!？

「・・・野郎に一杯食わされたな」

「・・・はい？」

今度は突然話出した！？

「青上の古宇宮だ」

「古宇宮！？」

や、やっぱりか！！

「あの野郎・・・香お・・・いや水岡を・・・ッ！！」

あ、他人の前では言い直すんですね、名前。
つてか、

「お前、何があつたんだ？」

「・・・ッチ、ありゃ、この前の雷雨の時だ」

夏哉は水岡をエサに青上の奴に捕まった。

その後、青上の廃工場へ連れて行かれたらしい。

「頭やられて氣い失って、氣付いたら廃工場だった」

廃工場には、葉城の生徒や関係者が十数人。

そして、青上の奴らが多数。

「あん時は正直ヤバかったな。マジで殺気が」

その後、夏哉は冷静になり、現状を把握。

自分は捕まった事を知る。

そして、脱出をはかった。

まずはタイミング。

青上の連中の目を盗んで外へ・・・って、

「そんな簡単に脱出できたの!？」

「バカか、こっちは大変だったんだぞ。青上の連中、数多いから
な」

な、何だかなあ。

「だが、俺はもう一度あそこへ戻る」

「・・・ッ」

夏哉・・・

「まだ水岡は目え覚ましてねえから、連れて来る事は出来なかった。他にもまだ沢山人質がいる」

お、男前!!

「それに、古宇宮の顔面を殴らねえと、気が済まない」

・・・こ、こやつ!!

「・・・夏哉」

「あんだ？」

「話がある」

で、さっきの明日の昼間の廃工場の話。

「・・・つてな訳で、明日廃工場へ・・・」

「・・・お前も来るのか？」

「え、まあ、はい」

「・・・足、引つ張んなよ」

「・・・今日から貴方の事をアニキと呼ばせて下さい!!」

THE・男心!!

「で、あと二人か」

「では僕も行くろう！」

又スツ！！

「うおおおおおおお！？」
「なッ・・・！？」

ぶおおおおおおお！！

「が、ががが！？」

い、いかん！！
呂律がッ！！

「久しぶりの出番！」

ど、どっから湧いて出た秋馬！！
い、今そこの茂みから・・・

「話は聞かせてもらったぞ。ここはこの瀬良家の僕、秋馬も助太刀する！」

うわあゝ、出たよバカハゲメガネ。

「・・・何でテメエがここに」

夏哉はあ然呆然。

「フッフッフ、瀬良家の家庭の事情って奴さ」

ちなみに、この近くに例のクラブあります。

「・・・秋馬、お姉さん元気？」

「なッ、ばッ、春吉ッ!!」

わー怒った。

「オホン、とりあえずこの瀬良秋馬も参戦と言う事で。弱き者は助ける、それが瀬良家家訓!!」

「・・・ハゲメガネ」

正直、うざりたい。

けど・・・

「・・・まあ一応、戦力にはなるか・・・」

こいつ、いろいろと武道習ってるらしいし。

「ケッ、坊主頭がでしゃばるな」

「なッ、何だと庶民!!」

・・・この二人の相性さえ合えば、強いんだろっけど。

「これで二人・・・あと一人か」

喧嘩っ子夏哉に武道っ子秋馬。
大幅な戦力UP!!

あとは・・・

「・・・あとは、この事件の第一関係者だろ」

「はい？」

振り返ると、そこには夏哉。

あつちにはボロボロの瀬良君。

「第一関係者って・・・まさか」

「戦力としては0に等しいが・・・きっと古宇宮の弱点や、この事件の発端を知っているのは、奴しかいない」

それって・・・

「・・・奴の家って、確か征咲市だよな？ こっからだとバスか・

・・・

「え？ 今から行くの？」

もう6時半過ぎ。

さすがに迷惑じゃね？

「何言っただバカ吉、期限は明日の昼だろ。今行かなくてどうする」

「……………」

そうだよな、これは人の命が掛かってんだ。

大切な仲間の……

迷惑なんて言ってもらえねえ!!

「……………行こう」

「ああ」

「ちよ、ま、待って……………」

俺と夏哉と秋馬は近くのバス停へ歩き出す。

古宇宮が言っていた言葉。

「梨本冬希」

俺らは梨本家へ急いだ。

空には、夕日が沈み掛け、代わりに月が昇っていた。

第50話 戦力集結（後書き）

やりました、50話達成！

やっと100話の半分ですよー！

まだまだこれからですね。

と、言う事でこれからもバリバリ頑張っていくので、どっぞよろしくお願ひしますー！！

番外話 三姫短編集(前書き)

ども!!

本来なら、三姫月間第四弾は「魔法戦士ワイバーンナイト」なんです
が、ちょっとこっちの事情で、ワイバーンは三姫月間第六弾に
変

更。
代わりに今回は、第六弾に予定していた「三姫短編集ギャグ集」を、
ワイバーンの代わりに第四弾としてお届けします!!

急な変更についてはお詫び申し上げます。申し訳ございません。

では、シリアス0%の特別ギャグ短編集、どうぞ!!

番外話 三姫短編集

三人の姫と一人の手下の物語

超短編ギャグ集!!

【小夜の好み】

小夜は何気に色黒の人が好みらしい。

「なあ小夜、藤○弘とみ○もんだとでは、どっちが好きなんだ？」

「……うん……物凄く迷う」

「マジで……」

どこのいいんだろ？

「じゃあ、その二人以外で好きな芸能人は？」

「ケ○ン・コスギ！」

そ、即答!?

「……春吉」

「あ？」

「・・・やって!!」

「はい？」

「・・・コスギ!!」

モノマネ無茶振りには、もう慣れた!!

「では・・・ファイトイツパーツ!!」

「・・・微妙」

【楓のコンプレックス】

牛乳嫌いなくせに身長伸びろと言っ、超理不尽な願いを持つ楓。

「お前、何で牛乳だめなの？」

「だ、だって・・・牛の体内で形成された白い液体・・・」

そう言えば、そんな事言ってたな。

「じゃあ、そう思わなければいいんだよ、いわゆる気の持ちよう

ってやつ」

「え〜・・・」

「いいからいいから、一回飲め!!」

「ちょ・・・むぎゅ」

強引に楓の口を開け、たまたま権三郎の席にあった牛乳を投下!!

「吐き出すなよ?」

「・・・(コクリ)」

相当つらいのか、半分涙目の楓。

「そうだな・・・じゃあ今お前が口に入れてんのはカル〇スの原液って事で。さあ飲んだ!!」

「む・・・」

おお、こやつ何とか飲み込もうとしている!!
えらい!!

「これはカル〇ス、これはカル〇ス」

その時!!

「おい春吉、ここにあった俺の牛乳知らないか?」

「ブーーツー!!」

ぎゃあああああああ!!

【美羽の生徒会朝会】

我が葉城高校には、月イチで生徒会朝会なるものがある。

主な内容は各委員会からの活動の報告、生徒会からの生徒への生活面での注意など。

で、毎回朝会の最後には生徒会長の話なるものがある。

まあ、軽く2、3分話す程度なのだが・・・

ウチの生徒会長はすぐ上がる。

4月の場合

「み、みなさん、いよいよ入学おめ、おめでとございます!!」

噛みすぎ、2年3年は進級だし。

5月の場合

「ゴードンウィーク中にあ、あああった柔道部のたた大会で、は葉城は見事2位に、にににいちゃんッ!!」

ゴードン? にいちゃん? 妹キャラですかコノヤロー!!

6月の場合

「ら、来週からきゅ、球技大会があ、ありんす！！ みんな頑張って欲しいでござ、ござわす！！」

語尾がなまっただ！？

何故、コイツは生徒会長になっただらろうか？

【亜希のお嬢さま】

渡邊財閥次期当主の亜希は、かなりの天然お嬢さまである。しかも若干妄想癖あり。

「春吉くん」

「あ？」

「これ見て下さい！」

そう言って差し出してきたのは、

「え、何コレ・・・」

目の前には、大量の消しゴムの山。
軽く1000個はあるのではないか・・・

「知ってます？ 新しい消しゴムに好きな人の名前を書いて、そ

れを一切他人に触れられる事なく使い切ると、その書いた名前の人物と結ばれるっていうおまじない!!」

「はい!？」

何か才子見えた!!

「春吉くん、今からこの消しゴムに私の名前を書いて、誰にも触れられる事なく使い切って下さい!」

「何だそれ!？」

きよ、強制ですか？

「私は将来、春吉くと結ばれる身。今から結ばれる練習をしないと!」

「はあ!？」

意味分からん!!

「いいから早く!! サインペンを用意してありますから!!」

「えっ・・・つかコレ、消しゴム何個あんの!？」

「占めて一万個!!」

「はあ!？」

やべ、思考停止しそう。

「ささ、早くー!!」

「え、ちょ、まつ……だからまだ結婚とかは……」

「レッツ、名前書きー!!」

亜希はノリノリだあ!!!

その後、昼休み全てを使い、半ば強制の名前書きは終わりを迎えた。

一万回も渡邊亜希って書いたから、午後の小テストの名前欄に渡邊亜希って書きちゃって、みんなに笑われました。

で、消しゴムはと言うとね……。

「あ、春吉くんが消しゴムに名前書く度、一個一個私が手に取って確認作業してたから、おまじないの効果って……」

で、消しゴム一万個は亜希が持って帰りました。

昼休み返せ!!

【春吉と深夜アニメ】

俺はよく深夜アニメなるものを見る。

作者もこの頃になって深夜アニメを見始めたので、その影響かもしれない。

「いいか権三朗、深夜アニメってのは、リアルタイムで見るから面白いんだよ!!」

「は？ 普通DVDやブルーレイに撮って、次の日学校から帰って見るのがオツなんだ!!」

あ、ちなみに権三朗もアニメ仲間。

彼曰く“俺はマニアじゃない、オタクだ”だそうです。

「権三朗いいか？ 深夜アニメっつーのは、よくこんな深夜まで起きていられたね、偉いね、ではご褒美にこの面白く、深夜ならではの規制の緩いお色気アニメを・・・ん？」

いつの間にか、周りの視線が変態に向けられる視線になってました。

「に、二次元に恋して悪いかあ!!」

権三朗は泣きながらそう訴えてました。

さすがの俺も引きました。

【夏哉と香音】

この二人は、もはや奇跡と言っていいくらいの、ラノベによくあるパターンの男女。

ツンな男にデレな女。

きっと二人が合体したら、程よいツンデレキャラになるだろう。
あ、ちなみに男のツンデレはお断りだよ。

「……ツンデレ？」

「はい？」

ん？

なんか殺気を感じるなあ。

なんか、振り返ったら死亡フラグが立ちそうな……。

「……振り返えんなくても、フラグ立ててやるよ」

こやつ、人の心の声を聞けるのか？

「……」

「……バネ人間さん、とりあえずごめんなさい……」

「……シバく」

【三姫と春吉】

「そう言えばさ、六組の中田さん、また彼氏に浮気されたんだって」

「うわ、最低だな」

「・・・酷い」

「・・・」

俺は思う。

「ガールズトークって、なんで他人の恋愛をあれこれ言うところなの？」

他人の恋愛に口出しするなんて、野暮がすることだし。

「ねえ春!!」

「あい？」

ん？

何だ？

「あのさ、私達三人の中で、誰が一番可愛い？」

「・・・は？」

なに言ってるの、このバカは？

「春吉、真面目に答える！！ あ、あたし達の中で一番可愛いのは？」

「・・・何で、そういう話になったのかをまず知りたい」

「いや、ただ何となく・・・」

「・・・そういや俺、コイツらに格付けした事無かったな。」

「一番可愛い奴？ そうだな・・・」

「・・・改めて見ると、葉城可愛い子ランキング上位の三人だけあって、意外とみんな可愛い・・・ってオーイ！！」

コイツらは幼稚園からの付き合いで、決して恋愛対象には・・・

「お、お前らばかか！！ 俺がお前らなんか順位を付けられるかッ！！！」

結果、無難な対処をとってみた。

「・・・あつそ」

「・・・」

「・・・春のバカ」

「・・・あれ？ みんなの態度、おかしくないか？」

急に黙り込んで・・・？

「空気を読め!!」

何となく、自分にツッコみ入れてみた。

番外話 三姫短編集（後書き）

三姫月間第五弾は、三姫の世界感の設定公開！！
何とか今日中には掲載する予定です！！

第六弾は、今度こそ魔法戦士ワイバーンナイトの短編読み切り！！

第七弾は、ちよラストっとした発表です。

気付いたら7月もあと3、4日しかない！！
三姫月間、超加速でラストスパート突入です！！

番外話 World Check (前書き)

三姫月間第五弾は、作品内の世界設定公開と、キャラのおさらい。

ちょっとしたデータ集みたいな感じになってます！

番外話 World Check

“三人の姫と一人の手下の物語”の舞台は、関東内にある架空の県、〇〇県。

主人公の春吉や、その仲間が〇〇県の中央に位置する街、葉城市にある公立の高校「葉城高等学校」に通っています。

ちなみに、春吉のバイト先である堀田ジムも、ここ葉城市にあります。

【街の位置関係】

〇〇県中央に位置する葉城市。

その葉城の南側には、葉城より一回り小さい街、征咲市があります。

征咲には冬希の実家があります。

葉城の西側には、上谷市があります。

上谷には序盤で登場した「岡田工業高等学校」や、番外話で登場した「私立須貝学園」なんかがあります。

そして葉城の東側にあるのが仲田市。

仲田にこそ、春吉の実家や、母校の仲田中学校なんかがあります。あとは、春吉思い出の幼稚園「築場幼稚園」なんかも仲田市です。

そして、楓の実家「沢那柔道場」、小夜の実家「仲田団地」、美羽の実家なんかも仲田です。

で、次は北側。

実は北は、まだ詳しく決めてはいません。

北は他の作家の方とコラボするとき、なんだかんだで隣町設定が必要になった時のために開けているんです。

そのため、作中の本編では一切、北側の地には触れないのです。しかし、そこに何等かの街があるのは事実！

ちなみに、青上高校は他県の設定です！！

【登場人物】

まずは、葉城高校キャラのクラスのおさらい。

二年一組

- ・吉崎 夏哉
- ・水岡 香音
- ・森島

二年二組

- ・梨本 冬希

二年三組

・木山 春吉（主人公）

・濱垣 美羽

・沢那 楓

・荏咲 小夜

・赤佐 大輔

・重原 権三朗

・夕力（第6話参照）

・ナカジー（第6話参照）

・櫻井（第4話参照）

・町田（第4話参照）

二年四組

・瀬良 秋馬

・渡邊 亜希

二年五組

二年六組

お次は教師！！

二年三組担任

・和波 辰

数学科担任教師

・葦本 賢（第4話参照）

体育科担任教師

・鯖江（第3話参照）

保健養護教諭

まだ名前出てきてない……

次は他校のキャラ！

岡田工業高等学校

・猫舌 八郎

青上高等学校

・古宇宮 友喜

・牛溪 則夫

私立須貝学園

・榊原

・松川

次は一般人！！

木山家

・木山 桃雄

・木山 桜

瀬良家

・瀬良 彩子

荏咲家

- ・荏咲 月也
- ・荏咲 星乃
- ・荏咲 天馬
- ・荏咲 夕香
- ・荏咲 空
- ・荏咲 七星

築場幼稚園職員

- ・花岡
- ・平石

渡邊家執事

- ・武藤（第38話参照）

堀田ジム経営者

- ・堀田

第7話柔道大会関係人物

- ・本谷 雛乃（葉城）
- ・佐橋 小夏（岡工）
- ・藤平 華子（松田）
- ・尼郷 夕香（征咲）

三姫月間コラボゲスト

- ・日高 恭介
- ・雲雀丘 深月
- ・赤坂 薫
- ・東條 沙希
- ・小山 哲郎

（作戦参謀さん、コラボありがとうございました！！）

【施設】

次に、作中に登場した施設をおさらい!!

葉城市

- ・葉城高等学校
- ・堀田ジム
- ・南葉城駅
- ・田名辺商店
- ・クラブ“クイーンウィップ”
- ・スイーツショップ“ベリーテイスト”

仲田市

- ・木山家
- ・沢那柔道場
- ・仲田団地
- ・仲田中学校
- ・築場幼稚園
- ・仲田駅
- ・仲田アリーナ（第7話の大会会場）
- ・映画館（第6話参照）
- ・小夜のバイト先

上谷市

- ・岡田工業高等学校

- ・私立須貝学園
- ・吉崎家
- ・公園（第19話参照）
- ・坂倉中学校

征咲市

- ・征咲高等学校
- ・梨本家
- ・笈凌中学校

県外

- ・青上高等学校
- ・青上の廃工場

【リンク】

本作品は、作者が以前執筆した小説「俺の日常って何だ!？」とリンクしている箇所が、いくつもあるんです。

よかったら、そちらの方も読んで頂けると嬉しいです!!
はい、宣伝でした!

番外話 World Check (後書き)

今回【登場人物】に書いたキャラ、全部覚えていた人がいたら凄い
！！ 拍手ものです！！

三姫月間第六弾は“魔法戦士ワイバーンナイト”の短編読み切り！！

第七弾は、ちよつとした発表^{ラスト}！！

三姫月間もラストスパートです！！

番外話 ワイバーン（前書き）

三姫月間第六弾は魔法戦士ワイバーンナイト。

ではござー！！

番外話 ワイバーン

ここは、人と竜と魔法が共存する世界。

人は魔法と竜を従え、この世界のとつぺんに君臨していた。

オリバ帝国

帝国のはずれ、辺境の村「パル」。

そんなパルのさらにはずれにある「サナーの竜騎士訓練所」。

「・・・サナーさん」

木造の二戸建て、庭には竜舎。

「なんだ、ジェイクじゃない!!」

少年　ジェイクは訓練所の扉を叩いた。
すると扉は開き、中から一人の若い女性が。

彼女　サナーはジェイクを手招き。

「入りなさい、もう準備は出来てるわ」

「サンキュー!!」

するとジェイクは家の中へ。

ジェイクはパル村出身の竜騎士ワイバーンナイトの訓練生。

竜騎士　ドラゴンやワイバーンにまたがり、自らの魔法を使

い、国に使える帝国兵のこと。

「パイロキネシス！」

サナーは人差し指をたて、そう唱える。
すると、釜にボツと火がついた。

「今、コーヒーいれるから」

「いつも悪いな」

ジェイクはリビングの椅子に腰かける。

「で、今日はどうするの？」

ポコポコと沸騰しだす釜の水。

サナーは手早くコーヒー豆を準備しつつ、ジェイクに問い掛ける。

「あー・・・今日は低空飛行と旋回を・・・」

ジェイクは軽く苦笑いで答える。

ジェイクは正直、運動が苦手。

竜騎士を目指すなんて無謀な人間なのだ。

しかし・・・

「またその練習？ 全く、いつになったら魔法飛行の練習にたどり着くのやら」

「し、仕方ないだろ・・・これでも、努力はしているんだけど・・・」

自分の言葉に、しょぼんとするジエイク。

その時・・・

「大変だ、また盗賊達が現れたぞ!!」

村の方向から、男性の叫び声が聞こえた。

「なッ、盗賊!？」

サナーはその言葉を聞き、顔が真っ青に。

「この近辺の村に出没し、ワイバーンを扱い盗賊行為を行う集団だ。

普段なら、村の在住騎士に追っ払ってもらうのだが・・・

「前の戦いでクマラさん、怪我しちゃったから・・・」

クマラとは、この村の在住騎士。

先週の戦いで怪我をおい、現在療養中。

「どうしよう・・・」

このままでは、盗賊達が次々と村を破壊してしまう。

その時！！

「僕が行きます」

ジェイクはその場で立ち上がり、サナーの目を見て言った。

「なッ、ジェイクはまだ訓練生でしょ？ それに魔法飛行だって・

・・・

「僕は・・・僕は、村を守るために竜騎士になろうとしているんだ。だから・・・」

そう言うと、ジェイクはコートを手に取り、外へ・・・。

「ちょ、ちょっと」

竜舎

「……頼むぞ」

ジェイクは、自らの愛竜にまたがり、大空へ！！

村上空

「ヒッヒッヒ、クマラがいなければこっちのものだ！！」

盗賊達は村目掛け急降下。

「く、くるぞー！！」

村人達は、急いで建物の中へ。

その時

「待て、と、盗賊！」

「あ？」

盗賊達が声のした方向に顔を向けると、そこには一人のワイバーンナイトが。

「何だテメエは？」

「僕はジェイク。む、村を守る竜騎士だ！！」

今行くしかない、ジェイクは自分にそう言い聞かせ、盗賊達に向かい突撃！

「炎の魔法、ファイア！！」

魔法飛行、それは魔法を使用しながらの飛行の事で、難易度は使用魔法によってかわる。

ファイアは前方に向かい、炎球を放つ初級魔法。

しかし・・・

ガクッ！！

「うおッ！？」

ジェイクはバランスを崩し、危うく落ちかねた。

「ハハハ、そんなんでワイバーンナイト気取りか？ 笑っちまう

ぜ！」

盗賊達は皆ケラケラと笑い、視線を再び村へ。

「こんな奴ほつといて、さつさと村を襲いに行こう！」

盗賊達は皆一斉に急降下。村が危ない！！

「くそっ、僕は村を守るために竜騎士目指してんだ。こんな所で
」

ジェイクは掌をぐつと握った。

「僕は・・・村を守るんだ！」

ジェイクはそう言うと一旦深呼吸。
そして・・・

「雷の魔法、レスクボルト！」

相手の頭上に雷を落とす、上級魔法。

「うおおおおおおおおお！！！」

バリバリバリ！！

「ぎゃあああああ！！！」

雷は盗賊達にクリーンヒット！！

「やられたあ!!」

盗賊達は黒焦げになりながら、村の外れに落ちて行った。

「・・・やった」

ジェイクはぐっと握った掌を見つめた。

「僕は村を救ったんだ!! やったああ!!」

こうしてジェイクの、長い竜騎士生活が幕を開けたのである。

Fin

「ど、どつっすか美羽さん!？」

俺はDVDレコーダーのスイッチを切りながら、目の前にいる美羽に質問。

美羽の手には「魔法戦士ワイバーンナイト1」と書かれたパッケ
ージ。

「……正直」

「しよ、正直？」

「正直、展開が急すぎてつまらない」

「……」

番外話 ワイバーン（後書き）

凄く微妙でしたよね、コレ・・・。

ラスト
三姫月間第七弾は、ちょっとした発表！

これは活動報告の方でやります！！
下手したら8月1日になっちゃっかも・・・

第51話 勇気は大事（前書き）

ども!!

えー、活動報告にも書きましたが、この度無事に三姫月間が終了しました!!

と、言う事でこれからはしばらく、本編続きで行きたいと思っ
!!

そして、三姫月間で報告した通り、三姫を別視点で見た番外編も近
日連載開始予定!!

お楽しみに!!

第51話 勇気は大事

ここは、葉城市の隣町である征咲市。
ぶつちやけ、葉城よりもかなり小さい市だ。

「……………」

「……………」

「……………」

バスで移動する事20分、征咲市役所前。

比較的征咲市の中でも閑静な住宅が建ち並ぶエリアだ。

で、そんな住宅街の中に一際でかい家があった。

うーん、そうだな……よくテレビで大物俳優の家へ突撃訪問！

！ みたいなバラエティーあるじゃん。

まさにそんな感じ。

金持ち臭ぷんぷん。

まさに豪邸。

「……………すげえ」

すごいねコレ、超かっけえ〜木製の門。

表札には「梨本」の二文字。

「もしかして……………いいところの坊ちゃん？」

梨本冬希

市立筋凌中学校卒業

中学時代はバスケット部のエースとして、筋凌をインターハイに連れて行った天才バスケットマン。

しかし、性格は弱虫。

気の小さい奴で、ちょっとした事ですぐメンタルが崩壊する。

「……誰がインターホン押す？」

「……夏哉だろ、言い出しつぺだし」

「行こうと言ったのは春吉だ」

「なぬっ、だったら秋馬押せ」

「何故僕に振る!？」

「だって、ハゲメガネだから」

「理由になつてない」

「早く押せバカ吉」

「るせえ、テメエが押せバネ人間」

「・・・行け、ハゲメガネ」

「だから僕に振るな」

醜い高校生の争い。

「ふん、だったらここはジャンケンでどうだ？」

「俺ジャンケン弱いからやだ!! 親指立てていっせーの・・・
つてやつがいい!!」

「・・・異議なし」

「なぬ、夏哉まで・・・いいだろう、やってやろう・・・」

「おし、じゃあ俺から時計周りな!!・・・いっせーのいち!

！・・・うわ、外したあ！！」

「フン、いつせーのさん・・・なにッ!？」

「フッフッフ、ちよるいな。いつせーのいち・・・ぐああ!？」

文章じゃ現しにくい、あの緊張感が辺りに流れる・・・。
つてか、今回台詞多ッ!!

「ガハハハ、いつせーのよん・・・よし、右手上がりッ!！」

「なッ・・・いつせーのさん・・・俺も右手上がりだな」

「なに!!! いつせーのに・・・ああ!！」

「ハゲメガネバーカ、テメエは一生親指立ててる!！」

「オホオオンッ」

ん？

オッサンの咳ばらいの音が・・・
恐る恐る、バックをルック。

そこには、髭ヅラのオッサンがいた。

「君達、我が梨本家に何か御用かな？」

「・・・・・・・・」

わー・・・オッサン結構ご機嫌ななめだな。

「……あのー、ふ、冬希君、今いますか？」

「勇気は大事！！」

「……冬希なら、まだ学校だが」

「はっ！？」

「今6時半過ぎだよ？」

「部活無所属の冬希が、何故こんな時間まで学校に？」

「……済まないが、今から大事なお客様がいらっしやるんだ。邪魔だから君達は早く帰れ」

「あ……す、すみません」

と、とりあえず撤退！

「怒られた・・・」

多分あのオッサン、梨本家の使用人かなにかだろう。つーか、梨本家って・・・。

「・・・俺の周り、金持ちばっかだな気がする」

「春吉何してる、早く学校へ行くぞ」

ああ、遠くのほうでバネとハゲが呼んでらあ。

「今行く・・・」

はあ・・・。

第52話 小さい男

ピカアアア！！

とある6月の空は快晴、真っ青な空は清々しい。

生温い風、太陽の光を跳ね返すアスファルト、ちよっとじめじめした空気。

「よく来たね」

落ち着いた男性の声。

ちよいと長めの青みの掛かった黒髪、低い鼻、真っ黒な二つの眼。

「……………」

俺は奴の顔に視線を向けた。
相変わらず、憎たらしい顔してやがる。

「フッフ、君の仲間三人は……吉崎に瀬良、そして……」

奴の眼は虚。

何を考えているのか、全くわからない。

「……………フッフ」

俺は今日、コイツをぶん殴る！！

時は遡る事、昨日。

午後7時半、葉城高校のとある部室。

「どうしたの？ 珍しいね、その三人って」

葉城ボクシング部部室

「な、何故!？」

さつき、梨本のオッサンから冬希の居場所を聞いた俺達は、葉城高校へ戻ってきた。
で、

「何故お前はボクシングを嗜んでいるんだ!？」

学校にまだいた奴らから、冬希はボクシング部の部室にいる事を聞き、こうしてやって来たのだが。

パシッパシッ!!

冬希君はサンドバック相手に格闘中でした。

「冬希、ボクシング部だったっけ？」

でもコイツ、確かもやしっ子のはずじゃ・・・

「あ、いや、今日だけの一日体験入部中！」

あ、そっすか・・・って、

「なんで？」

「実は僕、先週青上高等の人と揉め事起こしちゃってさ・・・」

午後8時。

俺達は部活終わりの冬希を誘って近くのファミレスへ。

「揉め事って・・・お前、何したんだ？」

夏哉はドリンクバーのコーラを飲みながら質問。

「つてか、飲みながら喋るってすげえ！！」

「うん・・・せ、先週、いつも通っている塾の帰りに、不良みたいな人達が子供からカツアゲしてるのを見て・・・」

「見て？」

「その子供、まだ小さい子で・・・」

「小さい子で？」

「その時、塾のテストでいい点取ってて、気分良くて・・・」

「良くて？」

「勝てもしないのに、その子助けるために、不良に声掛けた」

「・・・まさか」

夏哉はもう薄々気付いた様子。

一方、秋馬はチーズハンバーグをナイフで真っ二つ中・・・。
コイツだけだよ、本格的な食事頼んだの。

「その不良つてのが・・・」

「青上の人達」

全ては繋がった・・・けど、

「僕が青上の人達に話し掛けて、カツアゲを止めさせようとした

んだけど、青上の人が逆ギレしちゃってさ……“君、うざいからシバく”って……」

哀れ!!

「でシバかれて……“これでは気分が収まらないので、君の高校を潰しますね”って……」

古宇宮ちっさ!!

カツアゲ邪魔されただけで学校潰すって、心どんだけ小さいの!?

「で僕、それが許せなくて……今日からボクシングやって力を……」

「……」

弱いくせに、正義感は一倍ある、残念な子。
ただ、考えが甘い。

「なあ冬希」

「ん？」

「明日学校サボって、俺らについてこい」

「えッ!？」

正義君の冬希に学校をサボらす事は、至難の技。

「いいから来い、これは強制命令だ」

で、現在。

昼は12時、青上の廃工場。

学校には風邪で休むと言っている。

今頃、球技大会最終日の種目、バスケットでもやってんだろっな。

「フッフ・・・木山君、狩られる準備は出来ましたか？」

俺の目の前には、青上ブルーパンチの皆様方。

そして牛溪、古宇宮。

「・・・俺はな、テメエみたいなカツアゲ程度でマジギレするよ
うな小さい心の持ち主には、絶対負けねえ!!」

レッツ、自己暗示タイム!!

俺はナ〇ト、俺は忍のうずまきナ〇ト・・・。

「・・・ゼツテエシバくぜ」

夏哉は戦闘モードに!

「フン、君達は瀬良家を敵に回した事に後悔するだろう」

秋馬うぜえ……

「……………」

冬希は無言。

怖いのかな？

「フフフ……君達はとても愚かだな」

小者の古宇宮には、ぜってえ負けねえってばよ!!!

第53話 決戦！！

「では、早速今回のルールを説明しましょう」

「ルール？」

「って何？」

「ルールは至って簡単。君達四人のうち、誰か一人でも人質を捕らえている倉庫内に入ることが出来たら君達の勝ちだ」

「は？」

「人質はこの廃工場の敷地内にある“第一倉庫”に閉じ込めてある。君達の誰かが、この倉庫内に入れたら君達の勝ちって事だ」

「って、ゲーム感覚！？」

「倉庫に入口は四つ。東西南北に一つずつだ」

「分かりやすいな・・・」

「ちなみに、こちら側からは僕を含め四人で倉庫を守る。つまり四対四」

「.....」

「安心しろ。他のブルーパンチ団員には手出ししないよう命令し

である」

ほ、本当か？

「・・・フッフ、では今から五分後にスタートだ。ちなみに、制限時間は今日中。今日中に倉庫内に入れなければ、君達の負け。皆殺しだから」

・・・マジでか

「フッフ・・・では」

そう言うと、古宇宮と牛溪は去って行った。

その後・・・

「相手は四人で、倉庫の入口は四つ・・・多分、一つの入口に一人ってところだろう」

現在作戦会議中!!

「じゃあ、みんなで一つの入口を攻めるか？ 一番の安全策だが」

「そうだな・・・でも、四人で纏まって行動すると、万が一トラップなんかがあった場合、簡単に全滅するぞ？」

「・・・だが、安全に行動するなら四人だ」

「一人一人の方が全滅の確率は減る。それに、一つの入口に一人とは限らない。もしかしたら一つの入口に四人って事も・・・」

「うん・・・」

ぶつちやけ、俺と冬希は戦力外。出来れば四人の方が・・・

「・・・人質を救助した際、逃げ口が多い方がいいよな・・・」

「一つの入口を攻略して人質を救助しても、万が一ブルーパンチ団員が手を出してきたら・・・俺達は袋の鼠になるな」

「後の事を考えると・・・二人ずつに別れて、北と南から攻略するのが吉だな」

「ああ・・・そうするか」

で、結果

北入口攻略メンバー

木山春吉

吉崎夏哉

南入口攻略メンバー

瀬良秋馬

梨本冬希

そして・・・

「・・・五分経ったな・・・」

正直怖い。

平和主義、無喧嘩無トラブルの俺が、天下の不良と戦うなんて・・・

けど・・・

「・・・行こう」

皆を助けたい。

小者古宇宮にギャフンと言わせるんだ！！

第54話 北と南（前書き）

どもー!!

今回は春吉目線と冬希目線でお送りします!!

第54話 北と南

葉城の皆様を助ける、大作戦の実行。

青上工場第一倉庫、北入口。

「……来ましたね」

「……………」

俺と夏哉は北入口へやって来た。
そして、北入口には……

「マジでか……………」

そこにいたのは、古宇宮と牛溪。

「……………読まれたか」

夏哉はボソツと呟く。

「……………フッフ、木山に吉崎……………」

不適に笑う古宇宮。

相変わらずキメエな。

「・・・おい春吉」

「ん？」

小声で話し掛けてきたバネ人間。

何だ？

「お前、ここであの二人を引き付けとけ」

は？

「ここに二人いるって事は、どこかの入口が空きつて事だ。俺、ちよつくら東入口行ってくるから、あの二人よろしく」

「はあ!？」

え、何？

喧嘩ど素人の俺に、喧嘩最強集団のリーダーとその相棒を引き付けとけだ？

「む、無理っス!!」

無理無理無理無理無理無理無理無理無理だ!!

「うるせえ、とにかく頼んだぞ」

つてうおおおい!!

あいつ、全力疾走で東入口に向かっていきやがった!!

「ちょ、ちよつと・・・」

「フッフ・・・」

ひ、ひいゝ!!

や、やばい・・・

「・・・牛溪、奴を追え。コイツは僕が狩っておこう」

「・・・御意」

つてうおおい!!

ウシタニ君も全力疾走で東入口へ・・・

な、夏哉・・・お前の行動意味ねえ！・・・。

「フッフ・・・」

ハッ!!

この不気味な笑い声!

「さて・・・僕らも殺り合おうか」

・・・無理だ。

一方、南入口。

僕と秋馬君の目の前には、二人の男の人が。

「アッヒヤッヒヤッ！！ 俺あ守屋徹、俺の相手してくれんのは誰だ？」

金髪のリーゼント、グラスサン、手には全ての指に銀色の指輪、腰にはパンパンのポーチが四つ。

チャラい人だな・・・

「・・・俺は櫛山博一。ブルーパンチ幹部」

もう一人は大人しそうな細身の男性。

けど・・・右手に金属バット、左手に釘バット・・・。
こ、怖い・・・。

「二人か・・・」

秋馬君は恐怖心とかないのかな・・・？
全く動じてないし・・・。

「・・・冬希よ」

「えっ？」

その時、突然小声で話し掛けてきた秋馬君。

「作戦変更だ。ここに二人いるって事は、どこかの入口が空
きって事だ。・・・ここは僕が引き付けておくから、冬希は西入口
へ走ってくれ」

「西入口？　つて、それじゃあ秋馬君は・・・」

「大丈夫だ。瀬良家の血を継いでいるこの僕が、不良共に遅れを
とるものか!!」

そんな・・・

「それに、今日は皆武器持参だ。少し卑怯だが、武器さえあれば
あんな奴ら、ちよろいものだ」

・・・そう。

今日はみんな、それぞれ武器を持参してきている。

もちろん僕も・・・

「行け冬希、早く!!」

「……うん!!」

僕は……秋馬君を信じる事にした。

西は確かあっち。

僕は全力疾走で西入口へ向かい、走りだした。

「……逃がさない」

後ろから誰か追ってくる……けど、僕は振り替えずに走った。

第54話 北と南（後書き）

次回より四人それぞれのバトルが!!

青上強襲篇も佳境突入です!!

第55話 蒼き夏空（前書き）

どもですー！..

今回は夏哉目線で物語は進みますー！！

第55話 蒼き夏空

「・・・ツチ」

何とか東入口に到着した俺。
だが・・・

「・・・」

俺の目の前には、あの大男。
春吉の野郎・・・引き付けておけと言ったのに。

・・・だが

「テメエならいいや」

「・・・?」

この大男　牛溪には借りがある。
そう、あの時の。

「・・・テメエには、あの時の借りと、香音の仇の二つがある。
・・・悪いが、ここでその借りを返し、仇を取る」

正直、俺は古宇宮よりもコイツの方がムカつく。

「・・・」

相手は拳を構え、スタンバイ状態。

なら……

「手加減は無しだ」

俺は腰からそっと、今日家から持参した武器である木刀を抜き、構える。

相手の腹には鉄板。

こんな木刀で相手になるか分からんが、一応あった方がまだ。

「……………」

ヒュウ……………

生温い風が吹く。

「……………行くぜ!!」

風が吹き終わったその瞬間、俺は一気に駆け出した。

一方の相手も、俺に合わせて動き出す。

奴の腹には鉄板がある……………なら、狙うは横腹。

相手は巨体なため、動きは遅い。

「……………フン!!」

俺は牛溪との距離があと数歩の所まで行くと、右足で地面を蹴り、右側へ跳躍。

牛溪はそれに反応、咄嗟に右側へ向く。

「・・・遅え」

その瞬間、今まで右手に持っていた木刀を左手に持ち替え、さらに左足に力を入れ、咄嗟に左へ跳躍。

右に振り向こうとしていた牛溪の左脇腹は今隙だらけ。

そして俺は、そのまま突きを放った！！

ドスッ！！

「うぐおっ・・・」

怯んだ！！

今だ、一気に畳み掛け・・・ッ！！

パシッ！！

「なっ・・・」

し、しまった。

木刀を掴まれた！！

「うおおおおおおおお！！！！」

コイツ・・・化け物？

牛溪は雄叫びを上げつつ木刀を手前へ引っ張る。

「ぐっ……」

そのハンパない力に、俺は木刀ごと牛溪の目前に！！
そして牛溪は、思い切り拳を振り上げた。

ヤバイッ！！

「があああああああああ！！！」

ゴオオオオンッ！！

物凄い雄叫び。

俺は木刀から手を離し、咄嗟に左へ。

直後、俺を狙って放たれた牛溪の拳は空を殴り、そのまま地面の
アスファルトへ。

それと共に、物凄い轟音が辺りに轟いた。

「危ねえ……」

マジかよ……アスファルトを本気で殴って、あの轟音。

「……クソッ」

アスファルトに打ち付けた奴の拳は全くの無事。
スゲー頑丈だな。

しかも……

「木刀取られたし」

参ったな・・・

「・・・・・・・・ツ」

ツチ、牛溪の第二撃が来る。
あいつの左手には俺の木刀。
とりあえず取り返したい。

「うおおおおおおおおおお！！！」

「ハッ、相変わらずデケエ雄叫びだなッ！！！」

あの拳を喰らうとさすがにマズイ。
とりあえず回避を・・・。

「・・・・・・・・逃がさん」

なっ！？

ヒュンッ・・・

「ぐあっ・・・・・・・・」

くっ・・・・・・・・あの野郎、木刀投げやがった・・・・・・・・。
ツチ、腹に・・・・・・・・

「があああああああああ！！！」

バチバチバチッ！！

「はッ・・・!?!」

あまりの衝撃に片膝を着いた俺。
そして、ハッと上を向くと・・・

そこには、光る牛溪の拳があつた。

しまつた・・・ッ!!

バチバチバチバチッ

ゴオオオオンッ!!

「ぐああッ・・・あ・・・あ・・・」

牛溪の光る拳は、俺の腹に直撃。

その瞬間、腹が焼けるような感覚が。

痛え・・・くそッ・・・い、意識がッ・・・

「・・・沈め」

「・・・ッ!!」

ヤバイ・・・このままだと・・・

痛み、苦しみ。

・・・踏ん張るしかねえッ!!

ここで意識を失ったら負ける!!

「クソツがああ!!」

俺は持てる力全てを使って、右側へ跳躍。

「うおっ!?!」

その拍子に牛溪の拳は地面へ。

ドスツ!!

「はあ、はあ、はあ……」

やべえ……体が……動かねえ……。
たった一撃でこれほどの威力って……。

……俺の目の前には、さっき牛溪が投げた俺の木刀が。

「はあ、はあ、はあ……うツ」

吐き気がする。

頭クラクラ。

……うツ

「……」

クソツ……牛溪の野郎、またこつちに……。

……野郎の右手には、黒い機械みたいな物。

スタンガンか・・・。

「・・・次こそ沈め」

ハッ・・・最近になってよく喋るな。

・・・クソッ、体が・・・言う事を聞かねえ。

・・・動け

・・・動け俺の体

「・・・終わりだ」

スタンガンを右手に持ち、再び構える牛溪。

動け俺の体！！

動けよ！！

動けッ！！

ブオオオオンッ！！

俺の目の前に、牛溪の拳とスタンガンが。

終わったか、俺……

『なつくん!!』

……ん？

『なつくん!!』

……その瞬間、俺の脳裏に、カオの姿が。

俺は……一度ならず二度までも、カオを救えずに終わるのか？

……仇を取るんだろ

香音の仇を取るんだろ、俺!!

こんなデカイだけの野郎に、二度も負けるかボケエ!!

「・・・ハッ！！」

俺は牛溪の拳が当たる直前に、再び右へ回避の跳躍。
その際、左手で木刀を回収。

「ムッ・・・！？」

牛溪は咄嗟に動けず、スタンガンと拳は再びアスファルトへ。

今だッ！！

俺は回避するための跳躍の勢いを保ち、木刀を右手に移し変え、
そのまま牛溪の頭へ！！

ガココオオン！！

「ぐあっ！！」

怯んだ牛溪。

ってかコイツ、超石頭だな。硬い。

だが、隙は今しかない！！

脇腹への突き

後頭部への打撃

「があっ!!」

さすがの牛溪でも、急所への攻撃は効果大。

「フィニッシュだ」

これで決める。

最後は木刀を捨て、右拳に力を混めて!!

「おらああああああ!!」

ゴオオッ!!

「ぐあっああ!!」

牛溪の顔面に、精一杯のストレート!!

「・・・ハッ」

俺の拳をもろに受けた牛溪は、スローモーションのようにゆっく
りと、地面に倒れていった。

ドサッ・・・

あらら〜ぶざまに鼻血なんか出しゃがって・・・

「くっ・・・」

ツチ・・・俺にも・・・ダメージが・・・。

超フラフラ状態。

クソツ・・・目の前には倉庫の入口・・・

あと30メートルもないのに・・・

クツ・・・だめ・・・だ・・・。

足が・・・意識が・・・体が・・・。

「うつ・・・か、かお・・・ん・・・」

バタツ・・・

・・・俺が覚えてんのは、ここまでだ。

第56話 秋雨降る(前書き)

ども!!

今回は秋馬目線で物語は進みます!!

第56話 秋雨降る

「あ、待て……」

目の前に相手は二人。

つまり、どこかの入口ががら空き。

僕はとりあえず、冬希を西入口へ向かわせようとした。
しかし……

「逃がさん……」

僕はここでその二人を足止めするはずだった。
しかし……

冬希が走り出した直後、相手の一人が冬希を追うため、走り出した。

マズイ、あいつを止めなくては……!!

その時……

「俺を無視すんじゃないよ……!!」

……ツ!?

何だ……目の前に……赤い筒状の物が……

パンツパンツパンツ！

「ぐっ……」

なッ……それは突然爆発した！！
火薬の臭いが。

それに僕が怯んでいる隙に、冬希と相手一人は西入口へ……。

不覚……冬希済まない。

一人しか足止め出来なそうだ。

「アッヒヤッヒヤッ、俺の相手はテメエか？」

僕の目の前にいる相手は、確かさつき守屋と名乗った男だ。

金髪のリーゼント、真っ黒なサングラス、手には十本全ての指に
シルバーの太い指輪。

そして腰にはパンパンの四つのポーチ。

「・・・野蛮だな」

「あああ!?!」

「フン・・・小声で言ったつもりだったが、聞こえていたらしい。」

「金髪にグラサン・・・瀬良家ではまず考えられないスタイルだな」

「んだテメエ、ハゲメガネのテメエに言われたくねえんだよ!!」

「ハ、ハゲ・・・フン、春吉といい夏哉といい、最近の若者は全く瀬良家の美を分かっていない」

「つるつるの頭、黒縁の丸眼鏡。」

「丸こそ瀬良の美!!」

「ヒツヒツヒ、テメエの美なんて知った所で、ヘドが出るだけだ。テメエはブルーパンチ三大幹部の一人、守屋 徹が狩ってやる」

「三大幹部・・・」

「・・・ポケオン?」

「・・・ハゲメガネ、テメエを殺すツ!!」

「フン、短気なやつだ。」

「アツヒヤツヒヤツ!!!!!!!!」

守屋は笑いながら、四つのポーチのうち、一番右側のポーチに手
を突っ込んだ。

そして……

ジャラっ……

「……ん？」

何かを掴んだ？

そして、ポーチから何かを取り出したと思われるヤツの手には、
大量の赤い筒状の物が握られていた。

「ヒツヒツヒ、ブルーパンチの三大幹部には、それぞれの戦闘ス
タイルに合わせた別名が付けられてんだ」

は？

中二発想か？

「雷拳の牛溪、双撲の櫛山、そして俺は……爆炎の守屋ッ!!」

パチンッ!!

守屋はその場で指パチンをした。

そして……

「アッヒヤッ!!」

手に持っていた、大量の赤い筒状の物を空に放った。

「あれは……」

確かさつき、冬希を追う際に……

……まさかッ!?

「ヒッヒッヒ、遅いぜえ!」

ポオオオッン!!

「ぐあっ……」

それは一斉に爆発した。

くっ……物凄い黒煙と熱風がッ。

「まだまだあ!」

「ハッ!」

空を見ると、そこにはまた、大量の赤い……

ポオオオオッン!!

「……ッ!」

しまった……もろに爆発を……

「アツヒヤツヒヤツ、熱いか？　じゃあ次はコレだ！！」

次？

ヒュン、ヒュンヒュンヒュンッ！！

何だ・・・この音？

パアン、パアンパアンパアンッ！！

「くはっ・・・！！」

それは突然、前方から凄い勢いで飛んできた。

そして、僕が避ける暇もなく爆発。

「アツヒヤツ、熱いかハゲ？　・・・ヒツヒツヒ！！」

くっ・・・体のあっちこっちが痛い・・・

火傷か・・・

「いい事教えてやるうかハゲ？　俺様の武器の事！！」

「武器・・・」

だいたい見当はついている。

「そう、俺様の武器は火薬！！　初めに投げたのは爆竹、次に撃つたのはロケット花火！！」

やはりか・・・

「すげえんだぜ！！ この指に嵌めてある指輪、これをこう擦り合わせると・・・」

十本全ての指に嵌めてあるシルバーの指輪。

それを指パツチンのようにして擦り合わせると・・・。

パチッ

一瞬火花が。

なるほど、火打ち石の要領か。

「・・・いいのか？ 僕に全ての種明かしをして」

「ヒツヒツヒ、別に種明かした所で、テメエは俺に勝てない！！

この遠距離からの爆発地獄にはな！！」

恐らく、あのポーチには大量の爆竹やら花火やらが詰まっているのだらう。

・・・チャンスは、やつが油断している今。

「成る程な・・・では、次は僕の武器でも教えてあげようか」

「アツヒヤッ？」

「我が瀬良家には、非常に鞭を使うのが上手い人がいてね」

そう言うと、僕はベルトに挟んでおいた武器を手取る。

「瀬良家は代々、武術で有名な家庭でね。祖父は剣道、父上は柔道で日本一になった事がある」

「・・・だから何だ？」

「僕自身、空手や剣道、弓道何かを習っている。・・・だが、そんな瀬良家に一人、家風を破り、日夜鞭片手に風俗なる仕事をしている残念な人がいるんだ」

「・・・アツヒヤ？」

「全くだよ・・・そいつは小さい頃からかなりのサディストで、悲しい事に天才の卵だった幼き日の僕にまで、鞭の使い方をレクチャーしてきたんだ」

「・・・・・・？」

「そのせいか・・・僕は武術よりも・・・こっちの方が得意なんだよ」

今だッ!!!

やつが僕の言葉に気を取られている今、僕は一気に前方へ跳躍。

そして、僕の武器である鞭を思い切り奮っ!!!

「なっ!!!!」

相手は咄嗟に回避のため左へ跳ぶ。

パシントッ！！

鞭は守屋のいたアスファルトへ直撃。
だが……

「逃がすまい」

僕は守屋を追尾。

僕もそのまま左へ跳び、再び鞭を構える。

「クソがッ！！」

一方の相手は、既に片手をポーチに突っ込み、大量の爆竹を掴んでいた。

くっ……先程の火傷が痛む。

だが……

「火薬など、遠距離でしか使えないッ！！」

僕は何の躊躇もなく、守屋の目前へ。

「チツ……」

今だ！！

パシントッ！！

「ヒヤッ！！」

鞭は相手の手に当たり、やつの手から爆竹がこぼれ落ちた。

「テメエ……」

「まだだッ!!」

……正直、鞭は殺傷能力が低い。

僕の狙いは相手のダウンではなく、鞭でぐるぐる巻きにして拘束、動きを取れなくする事。

そのためには、相手を怯ませ地面に倒すのが得策だな。

狙いはやつの足。

「オラッ!!」

相手は再び爆竹を掴み、今度は火まで付けた。

「フン……」

パァンパァンパァン!

爆竹は爆発。

しかし……

「……」

熱い……痛い……だが、これしき、

「もう慣れた」

「何ッ!?!」

フン……

パシンッパシンッ!!

「いてっ!!」

鞭でやつ足を執拗に攻撃。

「チエックシヨ!!」

守屋はロケット花火を構えながら、再び左へ跳躍……だが

グキッ!!

「のあッ!?!」

足をくじき、転倒。

「フン……瀬良家をなめるなッ!!」

セイッ!!

「うわ、止めッ!!」

僕は一気に守屋へ接近、そして一息でぐるぐる巻きた。これは昔、散々姉に仕込まれた鞭技“鞭縛り”。

「相手が悪かったな」

「くっ……」

初めは暴れていた守屋も、鞭五重巻きくらいから大人しくなってきた。

「フン……負けを認めたか？」

「……バーカ」

ん？

守屋は縛られつつも、右手をポーチへ突っ込んだ。

「馬鹿か？ 僕にもう爆竹はきかないぞ？」

熱さに慣れた。

まあ、火傷は今でもズキズキと痛むが。

「……ヒツヒツヒ、そうかいそうかい、じゃあ、これは？」

不適に笑う守屋。

……ツ！？

ま、まさか……

まだやつこのポーチの中には、大量の……

「道連れだ、ハゲ」

守屋は、そのポーチの中で、指を鳴らした。

第57話 冬將軍到来（前書き）

どもー!!

今回は冬希目線で物語は進みますー!!

第57話 冬將軍到来

ドツカア〜ン!!

「えっ……?」

物凄い爆発音。

今、倉庫南側から聞こえたような……

「……よそ見してていいのか?」

「……ッ」

今、僕は倉庫西入口にいる。

本当だったら、もうとつくに倉庫内に進入して、みんなを助けた
かったんだけど……。

「……」

僕の目の前には、二本のバットを持った長身の男子が。

「……はあ、かったりいな」

……凄い脱力オーラ

「あ、あの……」

何なんだろう、この人……。

「……お前、名前は？」

「えっ、な、名前？」

随分とやる気のなさそうな人っぽい。

「な、梨本冬希」

「ふーん……俺あ櫛山ってんだ」

「く、櫛山さん？」

す、凄いのんびりした雰囲気……。

「ああ。ついでに言つと、俺あお前とやり合う気はねえ」

手に釘バットと鉄バット持ってて、何言つて……。

「つーか、今時ブルーパンチって、昭和かって思うよな。正直、超うんざりしてんだよ、幹部って仕事」

「は、はあ……」

「俺あ、喧嘩とかタイマンとか、そー言つ暑苦しいヤツは嫌いだ」

そつ言つと、櫛山さんはべたべたと地面に座り込んだ。

「なのによ、牛溪や守屋ときたら、いつもタイムンやの喧嘩やはつきり言つて、ついて行けねえんだよ、全く」

「……………」

何て返せば……

「……だからよ、悪いけど、倉庫内入るなら他の入口を当たってくれ。俺、喧嘩嫌いだからさ」

「えっ……………」

他の入口ならいいの？

「俺の担当は西と南の入口の守護。この二つのどつちかを突破されちまうと、俺が古宇宮に怒られちまうからな」

「は、はあ……………」

「けど、北と東は俺の担当じゃあねえ。仲間助けたきや、悪いが東か北から入ってくれ」

こ、この人もしかして……………いい人？

「俺あ元々、こういう人質取るとかは賛成の方じゃねえ。だからよ、今回どつちが勝つても別に俺あ構わねえんだ」

櫛山さんは軽く頭をかいた。

「ただ、怒られるのは嫌だから、入るなら東か北かにしてくれ」

この人・・・

「あ、あの・・・」

「あ？」

「一つ、聞いてもいいですか？」

「何だ？」

榊山さんはぐあぐと伸びをした。
相変わらずのんき。

「な、なんで・・・榊山さんはブルーパンチに入ったんですか？
喧嘩とか嫌いって言ったのに」

・・・どうしても、これが気になった。

「・・・古宇宮に強制されたからだよ」

「きよ、強制・・・」

「俺あ自分で言うのもアレだが、テストでは毎回学年で一位、運動もできる。だから、俺あ古宇宮にブルーパンチの参謀として買われたんだ」

「・・・」

「けどよ、俺あ平和と昼寝を愛する一般高校生だ。よほどの事が

ねえ限り、ブルーパンチの力になる事はねえ」

この人……

まだこの人とはほんの十分も会話していないけど……一つ、分かった事がある。

この人、きつと強い。

多分、夏哉君よりも、秋馬君よりも、下手したらブルーパンチの他の人よりも……強い。

「ほら、分かったらさっさと行きな。西と南から入らない限り、邪魔はしねえからよ」

「……」

では、お言葉に甘えて……と、思ったけど。

「……何してる？ 早く行って、仲間の援護なり人質の救助なりしてやれ」

「……」

……本当にいいのか？ 本当に。

「……どうした？」

「……いや」

「あ？」

今頃・・・みんな、人質を助けるため、必死になって不良達と戦っているんだ。

作戦通り、自分達の担当の入口を突破するため。

けど、僕だけ楽しんでいいのか？

僕は秋馬君から西入口を任された。

なのに、強いヤツがいるからって、任された場所を放棄していいのか？

櫛山さんは他の場所からなら入っていいと言っている。

けど・・・

「僕は・・・」

「あ？」

「僕は・・・西入口を任されたんだ。だから、西入口から入る」

「・・・」

「みんな・・・自分達の担当の入口で、一生懸命戦って、苦しい思いをして・・・僕だけ楽するなんて、出来ない」

「・・・」

「だから、僕も自分の担当の西入口から入る。たとえば、櫛山さんと・・・た、戦おうとも」

「・・・正気か？」

正直、怖い。

でも、僕だけ楽なんて・・・。

みんな、頑張ってくれてるのに・・・。

だから

「僕は、西入口から入ります!!」

僕も頑張る!!

「・・・そうかい。なら、相手をしねえとな。怒られるの嫌だし」

ふあ〜とあくびをしながら、櫛山さんは立ち上がる。

「かつたりい・・・」

・・・僕は、頑張る。

や、やってやる!!

ぜ、絶対に勝つ!!

番外話 主人公の愚痴（前書き）

まさかの番外篇！！

作者の気の迷いです！！

今回の話は、作中の世界観崩壊の危険性があるため、本編を純粹に楽しみたい人は見ない方がいいかも・・・。

まあ、別に構わんって人はどうぞ。

シリアス0%、超ギャグな番外話です！！

番外話 主人公の愚痴

とある日の夜遅く
辺りは真っ暗。

街の外れにある、小さなおでん屋の屋台。
赤い提灯が辺りを照らす。
客はいない。

そこに、一人の若者がやって来た。

「へい、いらっしやい・・・」

店の親父は、客の若者にコップを差し出す。

「ありがと・・・親父い」

若者は羽織っているコートを脱ぎ、隣の椅子に置いてから、屋台のカウンターにぐだぁと突っ伏せた。

「俺、もうだめだ」

「・・・どうした若いの、何かあったのか？」

親父は客に皿と箸を差し出し、自らも椅子に座った。

「親父い、とりあえずコーラ」

「あいよ」

「あと卵とがんどき、大根」

「あいよ」

店の親父は冷凍庫からコーラを取り出し、客の傍に置いた。

「……………」

客はそのコーラを開け、コップに並々と注ぎ、一気にグイッと飲み干す。

「ぶはあく……………親父、ちょっと俺の話、聞いてくれるか？」

「ああ。で、どうしたんだ若いの？」

「……………俺あさ、実はある小説で主人公やってんだよね」

客は再びコーラを一気。

「ほほう、兄ちゃん、主人公やってんのか」

「ああ。ぶつちやけ、主人公ってカツコイイじゃん？ 現に今俺時代の波に乗ってると思ってるんだよね」

「おう、兄ちゃんいかしてるでえ」

そう言つと、親父はそつとがんどきを皿に乗せた。

「ありがと……でもさ、主人公つてめちやくちや大変なんだぜ」

「そういや大変らしいな。この前も若者が来て『もう猫はいやだ』とかぼやいてたしな」

「ああ、そりやもう大変だよ。この前だつて、ウチの小説のメイ
ンヒロインの内の一人がさ、突然俺に『最近出番がねえ!!』もつ
と出番よこせ!!』つて……」

「そりや、大変だつたな……」

「そうだよ、俺に言つたつてどうにもならないんだよ。言つんだ
つたら作者に言えつてんだ、あのチビ大魔神め!!」

そこで客は服の袖をめくつた。

「見てくれよ、ココ。その時グー喰らつて、あざが出来たんだ」

「うわ……こりや上物のあざだな」

「全く……確かに俺あ主人公だけだよ、主人公が何でも出来る
つて訳じゃねえんだよ。大人しく人質になつてろつてんだ!!」

客はさらにコーラを一气、そしてがんもどきを一口。

「あとよ、今不良と戦うシーン撮つてただけどよ、あのハゲメガ
ネ野郎が『僕がこんな簡単にやられてたまるか!!』もつとカツコ
イイシーンが欲しい』とかほざきやがつて……」

「あんだ？ 若いの、監督までやってんのか？」

「いやいや、監督は作者だよ。なのによ、『爆竹つて、普通武器か？』とか言ってきて・・・だったらダイナマイトにしたるかってんだハゲエ！！」

客はまたまたコーラを一気。

親父は皿に大根を置き、客に差し出す。

「まあまあ、若いうちつてのは、いろいろとあるもんだ」

「けどよ・・・だからつて、俺に『主人公代われ』つて言ってきたヤツもいるんだぜ。あのヤサイ人野郎・・・」

「主人公代われか・・・作者、きつと精神的にダメージ大だな」

「だろ？ なのにヤツ、『俺も廃工場突入メンバーに入りたかった。もうボケキャラ辞めて、カッコイイ知的キャラになりたい』とか・・・テムエは一生波動拳大会でもしてろつてんだボケエ！！」

客は大根を一口でたいらげた。

「作者の気持ちも考えろつてんだ。作者だつて『やべえ、このまま行くと、青上強襲篇にヤサイ人と渡邊嬢の出番ねえ・・・』つて・・・つてか今のネタバレじゃねえーか！！」

「若いのも苦労してんだな」

「そつだよ親父、俺だつてさ、アニオタのビビリ野郎つてキャラはやだよ、バネ人間みたいなクールキャラになりたいよ。でもそしたら読者からの批判が・・・」

「だよな、主人公にとって読者離れつてのが一番怖いらしいな」

「そうだよ、読者離れが一番怖い。だから今更キャラ変更とかできねえんだよ、ああ……」

「若いのも、作者も大変だなあ」

親父は、こんどは卵を皿に取り、客の前へ

「こちらとて、作中のキャラの性格が被らないよう、いろいろと凄く大変なんだよ。もう新キャラとか考えるのマジ大変」

「若いの……いや、今のは作者の愚痴か」

「もう大変大変、とくに青上キャラ作るのなんか。もうキャラ性格不足で、グロッキーキャラとか、オッサンみたいなキャラまで作っちゃう始末」

「……何だかんだで、作者が一番世界観壊してるな」

「はあ……」

客は卵にかじりつく。

「あとよお俺、さっき言った通りアニメ好きって設定なんだけどよ、作者がまあアニメにうとい」

「そりゃ、また随分と……」

「だろ？ 超知ったかぶりキャラなんだよ俺あ。まあ、作者も最近はアニメ見るようにはなってきたんだけど」

「それはそれは・・・」

「けどよ、ビビリヲタキャラを書くなら、せめて深夜見ながら書いてんだ!!」

「・・・若いの、そんな事言っていると、出番減らされるぞ」

「・・・」

客はまたまたまたコーラを一気。

「・・・もう、嫌」

「・・・頑張れ若いの、きつといい未来が待ってるよ」

番外話 主人公の愚痴（後書き）

さてさて、青上強襲篇もいよいよクライマックスに近付いてきました！！

次回は、春吉と古宇宮の戦いがメイン！！
冬希と櫛山の行方は！？

では次回、第58話をお楽しみに！！

第58話 春風吹く(前書き)

ども!!

今回から春吉目線に戻ります!!

第58話 春風吹く

「フフフ……」

「……」

む、無理っス。

勝てる気がしないっス、ウツス。

「どうした？ 早く掛かってこないのかい？」

今回の事件の首謀者、古宇宮と一騎打ち。

初めはね、あんなキモい野郎なんかぶっ飛ばす！！ みたいな感じできてたんですけど……

「フフフ……では、こちらから行きますよ？」

あの……奴……古宇宮の手にね、何だか……銀色に光る……
鋭利な物が……。

「あのー古宇宮さん」

「……何か？」

「その、貴方様が手に持っている、その銀色の物は一体……？」
怖いけど聞いてみる。

「これですか？」

古宇宮は、その手に持っている物を軽く上に掲げた。

「これは、名刀“嵐雲月陰”ですが何か？」

ランウンゲツエイ？
って、

「って、もろガチの刀じゃねーかッ！！」

ノーマルに突っ込んでみた。

「そうですねよ、これはれっきとした真剣」

この人、もしかして銃刀法を知らない？

「我が古宇宮は戦国時代、とある名武將に仕えていた武家の家。
真剣の一本や二本、普通にあります」

あ、あんですと！？

「フフフ・・・今日は一本、家から拝借してきました」

キラリ〜ンっと、シルバーに輝く刀。
こ、怖い・・・。

「フフフ・・・では、行きますよッ！！」

や、ヤバイか？ この状況。
つか、真剣とか反則だろッ！？
マジで殺人鬼？

その時！！

キィ〜キィ〜キィ〜

「ん？」

な、何の音？

キィ〜キィ〜キィ〜

「……フッフ、この音は」

古宇宮は何故か、倉庫の方を凝視。
すると……

キィ〜キィ〜キィ〜

「あ〜だりい〜」

そ、倉庫の陰から、リアカー引いた若い兄ちゃん来た！？

「櫛山か……」

櫛山？

「あー、古宇宮いた」

櫛山つて人は、リアカー引きながら古宇宮の前へ……ってか新
手!?

「櫛山……南と西の守護はどうした?」

「あー、その事でお土産持って来た」

何やってんだ?

「お土産?」

「ああ、リアカーの中見てみ」

「……フッフ」

うう……ここからじゃ中身見れない

「フッフ……櫛山、あいつにも見せてあげなさい」

「あいつ……ああ、あんたの相手の」

すると、リアカー引いた櫛山はこっちへ接近。

「あ、あの……」

「……アンタ、名前は?」

「な、名前？」

何だこの人？

「き、木山春吉！！」

「春吉か・・・先に言つとくが、これは古宇宮の命令だからな」

ん？

何が？

俺は、恐る恐るリアカーの荷台に視線を向けた。

「・・・えっ」

な、何だコレ？

「・・・これはさっき、俺が各入口で拾ってきたものだ」

リアカーの荷台に乗せられていたのは・・・

ポロボロのバネ人間、真っ赤なハゲメガネ、無傷な冬希。
・・・無傷？

ちなみにみんな意識なし。

「安心しろ。梨本って奴とそつちの長身の奴は気絶してるだけだ。
メガネの奴は火傷してっけど、命に別状はねえ」

「えっ・・・？」

みんな・・・

「フッフ・・・櫛山、ついでにそいつも狩りなさい」

なっ・・・

「・・・また命令か」

「早く狩りなさい」

「・・・」

ひいっ！！

この人、釘バット持つてる！？

「狩りなさい」

「・・・ああ」

くっ・・・来るか？

どっしり。。。。

「じゃ、行くぜ」

「こっ、こいやあっ！！」

しゃーない、俺は腹をくくったぞ！！

「・・・フッ」

は、鼻で笑われた!?

「…………ツ」

次の瞬間!!

タツ!!

「何っ!？」

「覚悟しな」

ガキーン!!

その瞬間、櫛山の釘バットは、何故か古宇宮の刀とぶつかり合っていた。

「えっ…………」

な、何がどうなって…………

「…………櫛山、これはどういう事です?」

「…………フツ、悪いが狩りの対象、アンタにさせてもらっせ」

ジジジジジッと、刀と釘バットがぶつかり合い、火花が…………。

「おい、春吉だっけか?」

「は、はい？」

櫛山が古宇宮相手に話し掛けてきた！！

「そのリアカー引いて、倉庫の中行け」

「はい!？」

え……？

「櫛山……どういつつもりだ」

「……もう、お前の下で喧嘩すんのは懲り懲りだ。まあ、謀反
ってやつ？」

櫛山と古宇宮は戦闘中！！

……今、チャンスだよな!？

何故かは知らんが、相手は仲間割れの模様。

よし、俺はとりあえずリアカーを引っ張る!!

「うおお!!」

高校生三人は重い!!

けど、俺はそのまま倉庫へGO!

第59話 謀反

「……櫛山、貴様は僕を裏切るのかい？」

「……ああ」

「謀反か……フッフ、貴様らしい」

「……」

ガキイーンッ！！

「……フッフ、ならまず貴様から斬ろう」

「……俺あ、もう喧嘩とかタイマンとかにはうんざりだ。もちろん、ブルーパンチにもな」

ガキンッ、キンッ、ガキイーン！！

「……フッフ、中々の太刀筋だ。双撲の名は伊達ではないな」

「そりゃどうも。ついでに、今までのウサ晴らしもさせて貰っぜ」

ガキイイイーンッ！！

その頃、倉庫内

「ぜえ〜ぜえ〜ぜえ〜・・・」

リアカー重い・・・けど・・・

倉庫内進入成功!!

「・・・はあ」

そして・・・

「助けに来ましたよおおおおお〜!!」

倉庫内で叫んだ。

今、俺の目の前には……

「えっ……」

「た、助け!?!」

「マジで!?!」

「やったあ!?!」

沢山の人質方!!

人質はみんな、チェーンでぐるぐる巻きに巻かれ、地面に横になっ
っていた。

こんな時に不謹慎だけど……蓑虫みたい。

つか、ロープじゃなくてチェーン!?!

解けるかな……?

「……春吉か?」

「はいつ!?!」

「やったー!」だの「早く助けて!」などの喧騒の中、何処からか俺
を呼ぶ声が……。

「こっちだ!?!」

声のした方を見ると……そこには

「おお、赤佐か!!」

久しぶりの登場!

「やっばお前、捕まってたのか!!」

「ああ、あの雷雨の日に・・・捕まった」

・・・あの日か。

って事は

「もしかして、小夜も・・・」

俺は赤佐のチェーンを解きながら質問。

「あ、ああ。多分何処かに・・・痛いッ」

あ、チェーン食い込んだ。

「済まん・・・もうちよいで解けるかな?」

カチャカチャ

チェーン硬い。

そして、しばらくして

「ほ、解けた・・・」

「おお、動ける!!」

やっと一人・・・もう指が痛い・・・

「赤佐、テメエも解くの手伝え!!」

「ああ!!」

その時!!

「遅えぞ!!」

・・・ムムツ、この声は・・・。

とりあえず、声のした方を見る。
そこには・・・

「遅え!!」

「・・・」

「・・・」

楓に小夜、美羽!!

「み、蓑虫が三匹・・・」

今はそれどころじゃねえな。

「大丈夫か？」

とりあえず解いてやらないと。

その時……

「フフフ……」

……この声、まさか……。

「逃がしはしない」

「来たか……」

刀を持った古宇宮。

……櫛山の姿はなかった。

「な……」

赤佐、絶賛フリーズ中

「出たな……」

蓑虫楓は威嚇中

「……」

「……」

小夜と美羽はさつきから無口。
相当怖いのか？

「フフフ……木山春吉、君を殺す」

・・・狩るじゃなくて、殺すかよ。

こ、怖え〜!!

「は、春吉、あいつは・・・」

「・・・赤佐落ち着け。・・・とりあえず、お前は他の人のチェインを解いてる」

「えっ・・・」

フッフッフ、もう自己暗示しかねえか？

相手は刀持ってんだ。

多分、人質達は捕まっている間、飲まず食わずで体力は低下している。

だったら、古宇宮の相手は危険。

もう、俺がやるしかない。

あ、ヤベ、失禁しそう・・・。

スッ・・・

ん？

「え・・・」

「フッフ・・・」

え？ 何で？

いつの間にか、古宇宮が目と鼻の先に……。

「死ね」

そして、刀が振るわれた。

ガキーン！！

油断した。

もう終わった……と思ったその時。

「油断してんじゃないよバカ」

「全くだ」

「……え」

古宇宮が振るった刀。

それは、俺の目の前で止まった。

夏哉の木刀と、秋馬の鞭によつて。

「お前ら……」

無事なのか？

「フフフ……」

不気味に笑う古宇宮。

「……コイツは俺とハゲメガネとで抑えとく。お前は早く人質を……」

「は、ハゲメガネ……フン、瀬良家の美がまだ分からんか」

「二人とも……」

二人ともボロボロ。

「……任せた」

でも、二人の闘志はまだあつた。

「赤佐、急いでチェーンを解くぞ……」

「あ、ああ……」

これが最後だ！！

第60話 総攻撃

カチャカチャ

「ありがとう!!」

カチャカチャ

「助かった!!」

カチャカチャ

「遅えぞバカ!!」

「うるせえ!!」

俺と赤佐は次々と人質のチェーンを解いて回る。
その間にも・・・

カキンッ、シュッ!!

「・・・フッフ」

「野郎・・・ッ!!」

「クソッ・・・」

二対一なのに、夏哉と秋馬はおされ気味。

二人とも、相当なダメージを負ってんだな。

「この程度ですか？」

カキンッ！！

「チッ……」

「マズイな……」

くっ……早くみんなのチェーンを解いて、脱出しないと！！

「僕も手伝うよ！！」

「冬希！ もう大丈夫なのか？」

その時、冬希がリアカーから降りてきた。

「うん。それより早くみんなを！！」

「分かってる！！」

クソッ……まだ半分かよ……

「痛っ……指が……」

チェーンを力ずくで解いてきたから……指先痛い……
けど……。

カチャカチャカチャ

「あ、ありがとう」

早くみんなを助けないと!!

その時・・・

「ぐあッ・・・」

「うう・・・」

「・・・まだまだだ、僕の足元にすら及ばない」

嘘だろ・・・

古宇宮の目の前で、夏哉と秋馬が・・・倒れた。

あの二人が負けた!?

「次は誰だい?」

くっ・・・化け物かよ・・・。

「次の相手は僕だ!」

その時、冬希がガバツと立ち上がった。

「梨本・・・君は櫛山に一撃で負けたらしいではないか。そんな君が、敵うと思うのかい?」

「・・・」

その時、冬希はそっと背中越しから、彼の武器武器であるボクシンググローブを取り出した。

「ってか、そんな所にしまっていたのか。」

「……掛かってこい!!」

「……フッフ」

冬希……。

「……今はとにかく、人質の救助を!!」

あと数人……

「くっ……」

数分の死闘の末、冬希は倒れた。

「やはり、弱者は弱者だな」

クソツ……

「フッフ……逃がしはしない」

ヤバイ……まだこっちには人質が……

……おし。

「赤佐、残りの人質は任せた」

「えっ、また？」

俺はもう、やるしかない!!

「……よお、古宇宮くん!!」

「次は君か」

古宇宮め……

「て、テメエを倒すのはこの俺だ!! 覚悟しろ!!」

「……フッフ」

「わ、笑ってんじゃねーよ、バカ!!」

ズシャツ……

次の瞬間、俺の腹に、刀の斬撃が・・・

「ううっ・・・」

は、早い・・・

「君は・・・やはり、殺すか」

うう・・・血が・・・

「フフフフフ」

くっ・・・痛い・・・もう嫌・・・

その時・・・

「春吉、人質は全員避難したぞ!!」

赤佐の声・・・

「逃げられたか・・・まあいい。とりあえず君を殺そう」

全員逃げたか・・・

なら、俺も早く逃げないと・・・

ズシヤッ!!

「ぐあっ・・・」

また斬撃を喰らった。

「……フッフ」

クソツ……が……

「そろそろ出血もかなりの量に……では、これで終わりにしますか」

アカン……

「おやおやお」

く……そ……

ガコンッ!!

「なっ……!!」

その時、古宇宮の動きが止まった。

「はあくはあく、後ろがお留守だぜ」

「貴様・・・ッ」

櫛山のバットが、古宇宮の後頭部を捕らえた。

これが、総攻撃の始まりだった。

「オラッ!!」

バコッ!!

「しまっ・・・グハッ!!」

倒れていた夏哉が持てる力全てを使って起き上がり、一気に木刀で奴の腹に突きを放った。

「クソッ・・・ッ」

古宇宮は刀を構え、二人から一旦距離を取る。
しかし・・・

「フンッ・・・」

まだ意識のあった秋馬の鞭が、古宇宮の手に直撃!!

「痛ッ」

カラッ〜ン!!

古宇宮は、そのまま刀を落とした。

「しまっ……」

「オラッ!!」

「フッ……」

「セイッ!!」

櫛山のバット、夏哉の木刀、秋馬の鞭が、この連続攻撃で完璧に流れを崩した古宇宮の四肢を狙う。

そして……

「えいつ!!」

フラフラになりながらも、何とか立ち上がった冬希の拳が、古宇宮の顔面を襲う。

「クソッ……」

俺を殺すために見せた、一瞬の間。

それが、完璧とも言えた古宇宮の唯一の失態。

その一瞬の隙のせいで、流れは変わった。

「とどめはお前がしろ」

「うう……」

俺の目の前には、ボロボロの古宇宮。

お互い、もう立つのがやっと。

周りのみんなに至っては、全員床に倒れている。

俺の武器、それはこの拳そのもの。

「おらあああああああああ！！」

「……フッ」

うわゝ、傷口超開いた。痛い。

けど……

ドカッ！！

痛かったけど、その瞬間、全てが終わった。

第60話 総攻撃（後書き）

なんか最後の方、少しはしよりすぎちゃった気もしますが・・・まあ、決着。

しかし・・・

次回、青上強襲篇最終回です！！

第61話 終結

古宇宮 友喜

全ては、コイツのしょーもない事で始まった。

多くの人々の心を踏みにじり、多くの人々に恐怖を与えた。

この男は一体、何を思ってこんな事を・・・

けど、今はそんな事どうでもいい。

終わったんだ。

全て終わった。

「僕は・・・君達ごときに・・・負ける・・・はずが・・・ない・・・。牛溪・・・守屋・・・早く・・・コイツらを・・・始末・・・しろ」

「あんたはもう、負けたんだよ」

「うう・・・お前は・・・？」

「あんたも地に落ちたな。まさか、ただの一般高校生ごときに負けるなんてよ」

「誰だ・・・貴様・・・」

「古宇宮友喜、テメエはもう終わりだ。ブルーパンチもな」

「・・・・・・・・」

「俺はちよいと、日本で暴力団やってる者でね。今日はあんたをスカウトに来たんだが・・・もう用なしだな」

「うう・・・」

「俺の名前は山田 誠」

「や・・・ま・・・」

「多分、あんたはこれから刑務所行きだろうが、もしあんたが刑務所から出て来た時、奴らに対して復讐の念があったら、俺の所へ来な」

「・・・・・・・・うう」

「じゃあな」

あれから、数日後。

葉城病院

現在、俺は入院中！！

「あゝ・・・病院はつまんねえ」

あの事件の後、人質として救助されたウチの一人が警察に通報。

直ぐさま警察が来て、一時大騒動になった。

“ 高校生不良集団が監禁、暴力事件を起こした ”

その日の新聞にも乗り、テレビのニュースにもなった。

古宇宮友喜、守屋徹、牛溪則夫、そして櫛山博一らブルーパンチ
全員が逮捕されるという、かなりの逮捕劇となった。

そして、俺ら被害者側は皆病院送りに。

とりあえず入院は俺と夏哉、秋馬、冬希。
全員古宇宮に斬られた奴らだ。

けど、そんな大怪我でもなかったり。

そして、しばらくの間、マスコミに追われまくったのは、いつまでもないな。

「さて、読者の皆様に現状報告した所で、やる事なくなった」

あ、ちなみに俺個室。
快適。

「・・・暇だ」

暇過ぎるので、ちょっとした苦勞話を。

みんな忘れてるかも知れないけど俺、今両親いないじゃん？
だからさ、入院するときめちやくちや大變だったんだぜ？

身元保証人やら、入院費やら。

全く、本当にあの両親には困る事ばかり。

まあ、けど、ある人のおかげで全て無事、解決したんだけどな。

ガラッ！！

「春吉くん！！」

「来たか・・・」

そう、全ては今、俺の病室に特攻隊の如く突入してきた、渡邊亜希のおかげ。

なんだかね、渡邊財閥が裏から何か回してくれたらしく、すんなり入院出来ちゃったの。

渡邊財閥・・・一体何なんだ？

「春吉くん、お怪我の方は大丈夫ですか？」

「あー、もう大丈夫。傷口も閉じたし、明後日には退院だ」

「つーか今日もう退院したい。」

「それはよかったです。早く元気になって下さいね!」

「いや、もう元気なんだけど・・・」

「早く元気になりたいからって、リポビอนด์ばかり飲んでたら駄目ですよ!？」

「飲まねえし、つかもう元気だし!」

「あと、最近暑いからって、お腹出して寝たら駄目ですよ? 風邪引きますからね」

「お前はオカンかッ!」

相変わらず人の話、聞かない奴だな・・・

その時!!

ガラガラガラッ!!

「よお春吉!!」

「春吉、大丈夫?」

「春、元気?」

ああ・・・楓、小夜、美羽・・・!!

「見舞いに来たぞ!」

そう言って楓が俺に渡したものの、アロエの植木鉢。

・・・嫌がらせ？

「・・・春吉、大丈夫？」

「おう小夜、俺はこの通り元気っス！！」

ああ・・・一気に病室が賑やかになった！！

「・・・春」

「ん？ どした？」

美羽さん？

「あの一・・・さ、ありがとう」

「へ？」

Thank you？

「そうだな・・・ありがとうな春吉！！」

「は？」

楓が俺にThank you？

「・・・ありがとう、春吉」

「な？」

何でみんなThank you?

・・・もしかして、ネタか？

「春・・・私、ちゃんとお礼がしたくて・・・その・・・あの時、春が助けに来てくれて、本当に嬉しかった」

「あの時・・・か」

・・・。

「本当に・・・ありがとうね」

「・・・別に構わん」

なんか・・・気恥ずかしいな、オイ。

しかし・・・

「・・・」

古宇宮は・・・本当に・・・何が・・・。

僕は、孤独だ。

誰にも相手にされない

話すら聞いてもらえない

誰も振り向いてはくれない

だから、人に振り向いてもらうために、暴力を使う。

孤独が嫌だから、暴力を振るう。

誰も、僕に逆らえない世界。

僕が孤独にならない世界を作るために。

一人は・・・孤独は・・・

もういない。

僕には・・・

もう、力しかなかったんだ。

第61話 終結（後書き）

今回にて、三姫史上かなりのシリアス展開だった青上強襲篇が終了。
・・なんですが、実はまだ古宇宮視点の番外編があるんです。

まあ、それは今度連載を開始する三姫番外編の方に掲載します!!

と、言う事で本編では本当にこれで青上強襲篇終了!!

次回、ちよつと疎かにしちゃった球技大会篇のシメを書いた後、しばらくはコメディー中心の一話完結の話を書こうかなと。

そして、しばらく書いたらコメディー中心の長編“夏休み篇”に入!!

そんな予定です!!

つまり、これからはギャグ&コメディーの二色でいきたいと思いま
す!!

では!!

第62話 いつもの日常（前書き）

どもー！

今回から一気に、物語はほのぼののムードになりますー！
作者的には、こっちが本来の三姫のムードかなと。

ではござー！

第62話 いつもの日常

「春吉、お前のせいだ!!」

「・・・はい？」

病院から退院した翌日、久しぶりに学校に来た俺は、教室に入るなりヤサイ人に絡まれた。

「お前が・・・お前がバスケの日に来なかったから・・・ウチのクラスバスケ初戦敗退したんだぞ！」

「・・・平和だな」

こっちは不良と戦ってたというのに。

「しかも・・・しかもとうとう俺、青上篇一度も出番なかったし
!!!」

「あつたじゃん、代理競技の時」

「あんなのはカウントに入らないの!!」

なんとという贅沢な奴・・・。

「とにかく・・・ウチのクラスはバレーとサッカーの二競技で優勝出来たんだから、いいんじゃないね？」

「まあ、そうだけど・・・」

「ならいいじゃん」

「よくねえよ!」

全くもってうるさい奴だ。

「お前が、お前がバスケしてくんないと、嵐の四季の伏線を回収出来ないんだよ!」

「うるせえ!」

何リアルな事言ってるんだこの馬鹿!!

「ああ・・・もはや競技大会って何だ!」

あ、権三郎が壊れた。

「えー、つまりイオンと分子と原子は、それぞれ性質が異なり・・・」

今日の一時題目は化学の授業。

「つまり、電子式でMgを表すと・・・」

・・・今、かなり話が跳躍したよね？
なんでイオンの話から一気に電子式に？

・・・しかし

「暇だあ」

ガチ暇だ・・・

あ・・・改めて思う。

授業つまんねえ。

「では重原、Liの価電子数はいくつだ？」

「え、は、はい？」

あ、権三郎指された。

「か、価電子数・・・多分、39？」

馬鹿かコイツ？

「何を言っているのかね？　・・・じゃあ沢那」

「・・・ふが？」

今、コイツ寝てたな。

だって寝癖が・・・

「Naの価電子数は？」

「な、納豆の家電の子孫？　何それ？」

・・・すげえや。

「な・・・重原、沢那、君達は真面目に授業を受けていたのかね
!?!」

アハハハ、怒られてやんの!!

「では木山」

「なッ!?!」

な・・・もう何となくフラグは立ってたけど・・・ガチで指され
た!!

「 $N_2 + 3H_2 \rightarrow 2NH_3$ の反応において0、1気圧で56リ
ットルの N_2 を使って生成する NH_3 は何gか？　ちなみに $H=1$ 」

0
N=14

なッ・・・俺だけレベル高くないか!?

「えーっと・・・」

全く分からないんですけど・・・

「えーっと・・・きっとこれは何かの暗号?」

「木山、ふざけるな」

「サーセン」

でも、分からないものは分からない。

「全く・・・じゃあ濱垣、さっきの問題分かるか?」

美羽・・・貴様も道連れだ!!

「えーっと、まずリットルをモルに変換するから、モル \parallel 22.4分の気体の体積、つまりN₂の体積56リットルを当て嵌めて、 \parallel 2.5モル。

そしたら、N₂:NH₃ \parallel 1:2より、求めるNH₃は2.5x2 \parallel 5.0モル。

次にモルをgに変換するから、N \parallel 14、H \parallel 1を利用して、NH₃だから \parallel 17。で5モル \parallel 17分のxだから、x \parallel 5x17 \parallel 85。

答えは85gです

な・・・

「はい正解」

な・・・んだ・・・と
コイツ・・・

「嘘だ・・・」

俺が負けた・・・

「関係代名詞と非制限用法についてだが・・・」

二時間目は英語

「つまり、関係代名詞の前に、を置き、前の名詞や句（節）前文全てを補って説明する用法である」

・・・多分だが、来るぞ。

「では木山」

ほらきた。

「He tried to speak French which he found difficult.これを日本語になおさない」

「・・・」

彼は・・・フランス語を・・・話す・・・難しい・・・？

「・・・もういいです。じゃあ赤佐」

あゝ・・・スルーされたあ！！

「彼はテストに合格した。その事が彼の両親を喜ばせた。これを英文にしなさい」

赤佐・・・道連れだ！

「えー、He passed the test, which pleased his parents」.

クソッ・・・。

「!?! DOOG」

・・・。

「では、次の問題」

三時間目は古典

「では木山、亦と又と複の違いを答えなさい」

・・・またかよ。

これだから主人公は。

「えーっと、みんな人の下半身の事」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

すべった・・・。

「では荏咲、亦と又と複の違いを答えなさい」

しかも無かった事にされたあゝ！！

「・・・亦は同じ動作を別の人が行う。

又は同じ人が別の動作を行う。

複は同じ人が同じ動作を行う」

「はい正解」

・・・（泣）

「教皇のバビロン補囚について」

四時間世界史

「これはカペー朝断絶の事なんですが、教皇庁をフランスのアウトリヨンへ持って行く事です」

来る確率100%

「はい、では木山」

・・・フツ

「1378年にフランスからローマに教皇庁を再び移動させる事になるんですが、その理由を三つ上げなさい」

「・・・バビロン」

何となく、ソフトクリームを思い出す。
ハジケたい・・・。

「分かりません」

もう、正直に言うしかない。

「・・・では重原」

「はい!!--!」

権三朗・・・テムエは確実に道連れだ!!

「一つは百年戦争の勃発。次に大規模な一揆の発生、ジャックリ
ーの乱。三つ目は黒死病の流行」

・・・え?

「正解」

・・・は？

「フッフッフ、ざまあ春吉」

その時、斜め前の席の権三郎が振り向いてきた。

「俺、世界史だけは得意なんだよねえ！！」

「ガハッ！！」

く、くそぉ・・・

期末が怖いです。

第63話 新たな家族

「チキシヨー、何が勉強だチキシヨー！！ もうこの際ニートになつたるか!？」

あゝあ、今日は災難だった・・・。
授業中何回も指されたのに、一問も分からず。

で、現在下校中。

「勉強しないニート・・・いや、仕事しないニートだな」
全く・・・働いたら負けってのがニートの考えらしい。

とか考えているうちに自宅到着！！

「さうて、アイスでも食うかなあゝ!!」

と、思いながら（声出ちゃってるけど）家に入ろうとした俺。
けどね、

「……ん？」

家の玄関の真ん前に、何やら段ボールが一つ。
宅配便か？

「誰からだろ……ん？」

その時、段ボールのすぐ傍に、何やら置き手紙が一枚。

「手紙？」

頭の中でアン○エラ・アキのあの曲を歌いながら、手紙OPEN
！！

以下、手紙の内容

『この段ボールの中に入っているのは、私とあなたの子供です。
もう私、限界よ！！ あなたが強引に作った子供、もう私には育て
る事が出来ません。後はあなたが責任を持って育てて下さい。私は
今、違う男と生活しています。子供の養育費はあなた持ちで』

……は？

いや、ないないない。

は？ ちょっと待とうか。

え？ 何？ ちょ、待って欲しい。

嘘だ、絶対嘘だよ？

有り得ない、いやマジで有り得ないからね？

小説の主人公がそんな事しないよ。

第一まだ俺、高校二年生だし！！

え、ちょ、誤解しないでね？

俺は潔白、無実、覚えなし！！

ガタガタガタツ！！

「うおっ！！」

だ、段ボールが動いた！！

ま、マジで子供入ってるの？

やだよ、俺そっくりの子供がはいつてるパターンとか、マジで嫌だよ？

ってか、早く段ボール開けてあげた方がいいのかな？

でも、後々の展開が……。

ガタガタガタツ！！

「……俺はまだ○貞だ。まだヒヨッコ少年だ。大丈夫、この段ボールは何かの間違いだから」

これ以上下ネタ引きずると、読者からの批判が怖い。

もう、行くしかない。

その間にも、段ボールはガタガタガタ動いている。

「では・・・男春吉、責任取ります!!」

段ボールOPEN!!

そこには・・・

毛むくじゃらの体

フリフリの尻尾

つぶらな瞳

柔らかい肉球

「ワンッ！！」

・・・・・・犬？

・・・ええ〜！！

嘘だ、嘘だああああああ！！

俺、とうとう犬とヤツちまったのか！？

嫌だ、嫌だ、嫌だ！！

ああああああ！！

人間として終わったああああ！！

っておおおい！！

んな事あるかあ！！

「ワンっ！！」

「ワンじゃねえ！！」

何なんだ一体！！

・・・その時、犬の入っていた段ボールのそこに、もう一枚手紙が。

「・・・・・・・・」

もう何の躊躇いもなく、手紙OPEN!!

以下、手紙の内容

『ハツハツハ、騙されたか春吉？ お前に女なんていないもんな。・・・この犬は、日頃一人で寂しい生活を送っているであろう春吉のために、特別に用意した木山家の新しい家族だ。そいつがいれば寂しくないだろう。最後まで面倒見るよ。父母より』

・・・・・・・・は？

シバいたるか？ あのクソ親父とクソババア。

息子をからかって、何が面白いんじゃない！！

「ワンっ！！」

「だからワンじゃねえ！！」

木山家に、新しい家族が増えました。

柴犬のオス、一歳、結構可愛い。

「・・・と、言う事で不本意ながら、我が家で犬を飼う事になった」

「ワンワン!!」

「では、今からお前の名前を決めようと思う」

「ワンっ!!」

只今、木山家にて俺と犬との二人で極秘会議中。
関係者以外立入禁止。

「うん・・・そうだな、お前の毛は綺麗な黄金色をしているよ

な
」

まあ、柴犬だから当たり前か。

「なので金ちゃんはどうですか？」

「……………」

ノーリアクション。

多分嫌なんだろう。

「後は…………ギャップ重視でいくならキヤットとかは？」

「……………」

駄目か…………

「じゃあ…………扇風機ってのは？」

「……………」

ですよー。

「後は…………マルゲリータとか？」

ザ・アメリカン！！

「…………ウウウ！！」

ぎゃー！！！！ 威嚇された！！

「ごめんなさい!」

「ま、真面目にやるから・・・」

とは言っても・・・

候補

チヨツパー

コン

定春

ランボ

ティムキャンピー

ヨツプル星人

テツヤ2号

テリー

いぬまるくん

タマちゃん

クロ

ステーキ

マキバオー

・・・俺、本当にオタクなのかも。

「・・・お前の名前、ジャンプでよくね?」

いや、漫画的な意味ではなくて。
普通に、飛ぶみたいな意味で。

「・・・ワン」

はい決定

第64話 休日

「今日からお前の名前はこがねだ。はい決定」

「ワンっ!？」

あ？ 前回の最後と名前が違うだ？

・・・分かりにくいかもしれんが、前回の最後のあれはネタ。

黄金色の犬だから、こがね。

成金みたいだが、まあマルゲリータよりかはマシだろう。

「あゝ、そっぴや犬小屋作らないとな」

幸い明日は土曜日。

ホームセンターでも行って、素材買ってくるか。

翌日、土曜日。

「とりあえず、木材とペンキと・・・」

今日はホームセンターに来ています。
こがねの犬小屋の素材を買いにね。

「あと・・・釘と金づちと・・・」

「うわぁ・・・バーベキューコンロ売ってる!」

「バーベキューコンロは家にありますよ、お嬢様」

・・・。

「じ、じねは何?」

「じちらは、芝刈り機でいいですよ」

.....。

「これは？」

「こちらは、古新聞を纏める紐を簡単に結べる便利グッズです」

.....フツ

何故だ？

何故、ここに亜希がいる？

しかも、黒いスーツ着た従者も一人いるし。

「春吉くん、ここ、何でも売ってるんですね！」

「あ、ああ・・・」

何で？

さつきまでいなかったのに、突然初めからいた風に現れた亜希。しかも従者も。

「.....あのー」

「春吉くん見て！！ これ全部ネジですよ！！ 綺麗ですね！！」

・・・俺、なんかこんなアニメ見た事ある。

「つてか、なんでここに亜希が？」

「え？」

え？ ってオイッ！！

「何で亜希がここに居るのかって聞いているの」

「何ででしょうかね・・・武藤、分かります？」

「お嬢様、それはお嬢様が木山さんに会いたいとおっしゃったから、我々渡邊財閥が全勢力を掛けて木山さんの居場所を突き止め、こつこつと会いに来たのでございます」

何ッ・・・！！

「そうでしたっけ？」

「そうですね」

・・・おつおつと買い物して帰ろう。

「ルルル、ルルルルル、ルルルルルルルルル」

これ、何のテーマか分かる？

ホームセンターから帰ってきた俺は、このテーマを口ずさみながら、犬小屋作りを開始！！

とんとんとんとん！！

現在、庭にて犬小屋の素材に釘打ち中。
ちなみに、家の中では……。

「うわあ、これ何のDVD？」

「すげえ……これ全部深夜アニメのDVDか」

「うわ、これ超エロい事で有名なアニメ……」

「こっちはちょっとグロいホラーなやつ……」

家の中では、赤佐と権三朗が人ん家のラックを荒らし中。

「こっちは漫画か・・・うわ、ほとんど集〇社の漫画・・・」

「こっちは講〇社・・・スクウェア・エ〇ックス・・・角〇書店・
・芳〇社・・・秋〇書店・・・って小〇館が一冊もない！」

・・・帰ってくんないかな、あの二人。

「こっちは小説・・・うわ、ラノベばっか」

「・・・春吉、獣耳っ子が好きなんだな」

「うわ、意外だな」

「だってほら、ほとんどのラノベのヒロイン、みんな獣耳」

とんとんとんとん！

・・・シバこうかな。

「こっちは雑誌・・・ジャ〇プやS〇Qとかって・・・ベターだな」

「あ・ヤングマ〇ジン発見!!」

「あれはアニ〇ージュかな？」

「おお!! ベットの下角から何か出て来た!!」

何ッ!!

しまった!!

「おいテメエら!!」

ベツトの下は駄目だ!

「あ？」

「何？」

「さつきから人ん家で何やってんだ!! もう帰れ!!」

集中して犬小屋が作れない!!

「えゝ・・・だって、俺今日暇だし」

「俺も暇だ」

「知るかツ!! とにかくもう帰れ!!」

ルルルルルルルルルル、ルルルルルルルルルル

これ、何のテーマか分かる？

ヒント、アニソン。

ちなみにさっきのヤツのヒントは、お昼。

つてな感じで、やっとこさ犬小屋完成！！

「終わった・・・」

あゝ・・・しんどかった。

「ワンワンっ！！」

「あゝ、ワンじゃねえ、ありがとっだろ？」

「ワン！！」

「・・・ま、いつか」

「ううして、俺の休日は過ぎていった。

第65話 虎さん馬さん

それは、6月も半分が過ぎた頃、担任から唐突に言われた事。
それは確か、帰りのSHLの時に言われた。

「えー、お前らはもう知ってると思うが、7月の第一週は期末テストだ。あと10日ちょいしかないから、しっかり勉強してこいよ」
・・・今、たっつあん何て言った？

「ちなみに、一教科でも赤点を取った奴は、夏休み学校に来て補習な」

な、何だつてええええええええええ！！

「ま、マズい・・・ヤバイ・・・マジヤバス」

帰りのSHL終了後、俺は教室でバ〇ビちゃんの如く震えていた。

「赤点一つでも・・・補習・・・ああ!」

ふ、震えが止まらねえよ!!

・・・俺、全く勉強してないし。

得意教科、体育と昼休みだし。

授業中、居眠りばっかだし。

「ああ・・・このままだと、俺の夏休みLifeが・・・」

・・・もう、この世からテストなんか無くなればいいのに。

ちなみに、期末テストの教科は古典、現文、化学、数学、世界史、英語、保健、家庭科の8教科。

葉城高校は昔から、中間より期末の方が教科多いんです。

ちなみに中間は古典、現文、化学、数学、世界史、英語の6教科。

「マズいぞ・・・今回は化学と数学以外、全部文系だし・・・」

ますます震えが・・・って・・・。

・・・あつちにも震えている大魔神が一人。
・・・そつちにも震えているヤサイ人が一人。

仲間いた!!

葉城高校図書室

ここは第4話でのトラウマがある場所。
しかし、勉強にはもってこい。

「え？ モルって何？」

「モルモットの事じゃね？」

「は？ モルモット？」

只今、期末震え症候群の三人は、その図書室にて勉強中。

「ってかさ、閉殻とオクテットって、何がどう違うの?」

「え? 三角とオクトパス?」

「……………」

現在、満場一致で苦手だという化学の勉強中。

「おい、ごんぎつね」

「ごっ…………俺は権三郎だ!」

「共有電子対と非共有電子対の違いは何?」

「そ、それは…………10文字と11文字の違い」

「……………」

はあ…………

「おい、楓」

「何?」

「CO₂のCって何だ?」

「C^{ケイキ}akeのCだろ」

「・・・・・・・・」

今回分かった事

バカが何人集まろうと、バカには変わりない。

「あゝもう飽きた」

楓さん、三角定規の真ん中の穴に指突っ込んで、くるくる回します。

「おい、遊んでないでちゃんとやれー」

「だって〜飽きた」

「ここは秋田県じゃねーぞ」

「うわっ、つまんない」

「・・・・・・・・さっきのはスルーしちゃって下さい」

一方のごんぎつ・・・・・・・・いや、権三朗は

「ZZZ・・・・・・・・」

寝てるし・・・

もう期末テストは壊滅的状况だな。

その時・・・

「あれ？ 楓と春？」

・・・このパターン、どっかで・・・。

「おう、美羽じゃん！！」

楓さん、今アンタ何て言った？

「え？ 今三人で何してたの？」

「ああ、期末のテスト勉強だよ」

・・・やっぱり、前にもこんな事、あったな。

「なあ美羽、ちょっと勉強教えてくんね？」

か、楓さん！？

「うん、別にいいよ！！」

な、何故だ？

変な汗が止まらない。

「あ、ついでに春と権三郎にも教えてあげる！！」

「あ、ああ・・・」

震えが止まらない。

これはアレだ、きつと図書室のクーラーが効き過ぎてて・・・。

あれ？

頭の中で虎さんと馬さんが何か言ってるよ？

何々、第4話を見る・・・って何の事だろ？

「じゃあ、早速バシバシいくよー!!」

パッシーン!!

あれ？ いつの間にか美羽さん、竹刀なんか持ってる・・・。

「・・・・・・・・」

ああ、さっきの虎さんと馬さんが言ってたのは、死のお告げだったのかも。

「じゃあ、まずは元素の種類から!!」

パッシーン!!

で、地獄に堕ちてから数時間で、午後7時半。

「よし、とりあえず今日はここまで」

お、俺は・・・帰ってこれたのか？

「三人共、よく頑張りました！！」

笑顔の美羽。

しかし・・・

「うう・・・う・・・う・・・」

楓のHPは残り僅か。

「・・・」

「こんぎつねのHPはもはや0。
戦闘不能状態。」

で、俺は・・・

「だ、誰か薬草Please・・・」

HPはギリギリで1

きあいのハチマキ使いました。

ってか、誰か回復魔法を唱えてくれ・・・

第66話 先輩

期末試験まであと一週間。

普通、この時期になると皆一斉に勉強モードに入り、友達と遊ばなくなり、ゲームや漫画を控え、テスト対策に集中する。

高校二年の夏は、進学者にとっても就職者にとっても、重要な時なのだ。

現に俺の周りでも、勉強勉強勉強勉強の奴らばかり。

しかし、中には例外もいる。

テスト一週間前にも関わらず、カラオケ行ったり、映画行ったり、漫画読んだり、戦国BORAやったり。

ちなみに作者は幸村使いだ。烈火大好き。

んな事はどうでもいいんだ。

まあ、つまり何が言いたいのかと言うと・・・

「せっかくの高二Lifeを勉強だけに費やすのはもったいない
!！」

今、我々は青春を謳歌すべき時なのだ。

16の夏など、今しか味わえないのだ。

だから俺は・・・

「勉強しない!!」

「それ、ただの屁理屈だろ」

現在、俺は赤佐君と下校中。

「るせえ、勉強したら負けなんだよ、負けちまうんだよ青春に!!」

「青春につて・・・お前、青春してんのか？」

「まあ、何と失礼な」

俺だつて青春真つ盛りだハゲえ!!

「赤佐、お前こそ勉強ばつかで、青春して・・・るか」

「な・・・ばつ、春吉!!」

赤くなつてますぞ、赤佐だけに。

・・・今、上手い事言えなかつた。

「赤佐君よお、あれからどうなの？ 荏咲さんとはよお？」

「う、うるさい！ その事はほつといてくれ！」

「ハハハ、うぶな事・・・」

「うるさい!!」

これは・・・からかいがある。

「ほれほれアンタ、小夜のメアド知ってるか？」

「なっ・・・し、知らないけど・・・」

「あらまゝ！！ 俺、小夜のも知ってるし、小夜の弟君のも知ってるし！！」

「そ、それはお前が荏咲さんと昔から仲いいからだろ！！」

「あらゝ、嫉妬かしらこの子？」

「春吉っ！！！！」

「アハハハ、済まん済まん！！」

ガチでからかいがあるな。
って思いながら下校していると。

「あ
」

本屋発見。

そついや今日、俺の好きな小説の発売日だっけ。
まあ、もちろんラノベだが。

「赤佐済まん、ちよつと本屋寄っていいか？」

「ん？ ああ、別にいいけど」

と、言う事で本屋。

本屋の中はクーラーガンガン。
あゝ、涼しい!!

「アカンな、この涼しさはアカン」

「何がどうアカンなんだ？」

「とにかくアカン」

みたいな事を言いつつ、俺は最新ラノベコーナーへ直行。

「えーつと・・・」

「春吉、お前何探してんの？」

「あ？ ああ、“メイドなアニマル”の最新巻の6巻」

「・・・ああ、この前春吉ん家に行った時にあつた、あの獣っ子の・・・」

「赤佐、お前猫耳や犬尻尾、ウサ耳や肉球、なめるなよ」

メイドなアニマル

まあ、擬人化した動物達がメイド喫茶やる話。

この小説で挿絵書いてる人の獣っ子、すげえ可愛いの。

「獣っ子か・・・俺には全然分からん」

ふん、赤佐に分かってたまるか。

・・・ってか、アレ？

1、2、3、4、5・・・。

「・・・嘘だ」

「どうした春吉？」

マジでか・・・嘘だろ・・・最悪だ・・・

「最新巻が・・・な・・・い・・・」

ああああああ！！

「何故だ？　アレはまだそんなに人気は高くないはずなのに・・・」

「んなら、店の人に聞けば？」

「あ、ああ・・・」

まあ落ち着け俺。

まだ、店の倉庫にあるかもしれない。

ここは、一旦店の人に聞こう。

その時！！

「メイドなアニマルの最新巻、ありますか？」

「あ、はい。……こちらがちょうど最後の一冊です」

何となく聞こえた会話。

……まさか。

俺は恐る恐る、声の聞こえたレジの方を向く。

そこには女の人と店の店員、そして店員の手元には……。

メイドなアニマル6巻

「な……ッ」

今、店員さん、最後の一冊とか言ってたよね？

あ……あ……。

一方の女性の方は、超嬉しそうな顔。

半袖のワイシャツに、チェックのスカート、我が母校独自のリボン……って葉城高生かい。

リボンが赤ということは、3年生か。

んだよ、1年生なら脅しが効いたのに。
それよこせ、みたいな。

……そしたら俺、超大人げないよな。

「どうした春吉？ 本あったか？」

そう言う赤佐の手元には、NAOUTOのコミックスが数冊。

「……お前はいいよな、望みの物が買えて」

「は？　つてか、お前の望みの本はあったの？」

「いつ……」

「……あの人が持つてるので最後だつてさ」

もういいや……

明日、地元の本屋で探せばいいや。

「あの人？　……つて、あの女子生徒か？」

「ああ……」

はあ……

「あの人……本谷先輩じゃねえか？」

「……あ？」

本谷先輩？　つて誰？

一方、向こうは今の赤佐の発言が聞こえていたらしく、ビクッとこちらに振り向いた。

短めの髪を後ろで束ね、黄色いリボンで結んである。

顔は小さく瞳は大きい。
肌は若干小麦色。

・・・普通に可愛い人だな。

しかし、向こうは超焦り顔。

何で？

そして・・・

彼女は風の如きスピードで本の会計を済ませ、音速の速さでこの本屋を後にした。

・・・え？

ってか早ッ！！

「へえ、本谷先輩ってラノベ読むんだ」

一方の赤佐は亀の如きのろのろスピードでコミックスの会計をしていた。

ってか、ガチで本谷先輩って誰？

第67話 先輩の秘密

本谷 雛乃

我が葉城高校三年一組在籍、柔道部所属。

頭いいし運動も出来る

スタイル抜群

性格も明るい

綺麗なお姉さんと言うよりは可愛い先輩

同級生や後輩からよく慕われている

しかも、去年のミス葉城！！

「まさに、葉城の宝」

「キモいぞ、ゴンちゃん」

「ご、ゴンちゃん……って、俺は権三郎だ！！」

「へいへい」

現在、俺はゴンちゃんと共に学校登校中。

で、何となく昨日赤佐が言ってた本谷先輩ってワードを出したら、このゴンちゃんが異様に反応してきて……。

「本谷先輩にはファンクラブが出来てる程、人気が高いんだ!!」

「ファンクラブって、バネ人間かよ……」

何だか最近、葉城の生徒は顔面偏差値が低い、って設定があやふやになってきている気が……。

まあでも、権三郎の顔面偏差値は低いし。

「しかも本谷先輩、柔道部所属だろ？ 可愛いしカッコイイ!! まさに皆のアイドルなんだよ!!」

「ふ〜ん、柔道部ねえ……じゃあ、あの大魔神さんは？」

ヤツも柔道部。

「あ〜、あいつはパス。見た目は可愛いけど、中身がなあ〜……」

「中身が何だった？」

突如、背中に走ったのは冷たい汗。

「おい、中身がどうした？ ああ？」

う、後ろから大魔神オーラが……。

はい、死亡フラグ立った。

で、その日の昼休み。

俺は昼メシのヤキソバパンを求めて、購買部に来ていた。

「おばちゃん、コロッケパン一つ!」

「すみませーん、コーヒー牛乳二つ!」

「チョココロネまだありますか?」

「カツサンドとメロンパン!」

「スマイル下さあ〜い!」

・・・人が多い。

チキショー、これ絶対時間掛かるよ・・・。
早くしないと野郎共が先に昼メシを終えてしまう！！

「・・・はあ」

何だか最近、ため息ばかりだなあ。

その時、

バサツ・・・

「ん？」

何か落ちた音が。

で、何となく足元を見てみると・・・

「あ！！！」

そ、そこにあっただのは・・・メイドなアニマル6巻！！

「嘘だろ・・・6巻の表紙、狼っ子なんだ・・・」

見たいな事を考えていると・・・。

サツ！！

超マツハな速度で、誰かが本取った！！

ってか、この人・・・

「……………」

その人は、超焦り顔でこの場から立ち去ろうとする。

しかし、俺は何を考えたのか……

「あの……………本谷先輩ですよね？」

向こうは俺の言葉に、ぎよつとした顔で振り向いた。

この瞬間、俺の頭の中に浮かんだ言葉。

……………何で今俺、この人呼び止めたんだ？

で、何故か成り行きで葉城高校ロータリーのベンチへ。

現在先輩と二人っきりの状態。

「君・・・昨日、確か本屋にも・・・」

「あー、まあ、はい」

「・・・」

スーパー気まずい！！

先輩、何か俯いちゃってるし。

・・・ん？

あれ？ 今、先輩の持つてる財布のストラップって・・・。
花嫁DOGの犬ノ助？

・・・ん？

あれ？ 今、何となく見えた先輩の財布の中身、その中に入ったのは・・・。

メイドなアニマルの初版特典の特製キャラクターしおり？

・・・まさか

「あー・・・」

そうさ、100%の勇気で聞いてみる。

「先輩って、もしかして二次元派・・・」

「お願いッ!!」

うわッ!!

この人突然、手え握ってきた!!

「この事は誰にも言わないで!!」

「はい？」

えー、何この展開。

「私が二次元オタクだって事、誰にも言わないで!! お願い!!」

まさかのギャップ!!

「あー、先輩？」

「もし私が二次元オタクの腐女子って周りに知れたら、もうこの学校ではやっていけないの!!」

「いや、だから」

「お願い！ 私、学校では真面目な子になりたいの！！」

「……………」

そ、そんなキラキラした目でこっちを……か、可愛い……。

「君、名前は？」

「あー、木山です」

「じゃあ木山君、この事は二人だけの秘密って事でいい？」

「あー、はい」

まさかの新キャラは二次元派の子でした。

第67話 先輩の秘密（後書き）

新ミニコーナー！！

キャラクターデータ集！

今回から五回に渡って、キャラクター達のどうでもいい個人データを公開！！

第一回の今回は、キャラクターの誕生日！！

4月10日：赤佐 大輔
4月23日：水岡 香音
5月19日：櫛山 博一
6月5日：古宇宮 友喜
7月7日：吉崎 夏哉
7月24日：濱垣 美羽
8月1日：重原 権三朗
8月18日：牛溪 則夫
9月7日：荏咲 小夜
10月31日：瀬良 秋馬
11月2日：守屋 徹
12月16日：沢那 楓
12月30日：渡邊 亜希
1月1日：梨本 冬希

1月14日：本谷 雛乃
2月3日：木山 春吉

これ、実は今後の物語の伏線です。

ではまた次回で！！

第68話 期末テスト

期末試験前日の夜。

俺はこがねを連れて、夜の散歩中。

「はあ〜・・・」

あーあ、明日はもうテスト・・・。
俺、ほとんど勉強してないよ。

今日はテスト前日なので学校は午前のみ。
学校から帰ってきたら、自宅でジャ○プ読んで、モン○ン○ヤッ
て、ドラマの再放送見て、小説読んで、アイス食べて・・・。

「・・・・・・・・」

明日のテスト、もう諦めようかな？
それとも今日、徹夜するか・・・？

「つーか俺、進学するか就職するかすら決めてないからな・・・」
たっつあんからは「さっさと進路決めろ」とか言われてるけど・・・。

まあ、まだあと一年半ぐらいあるのであって。
進路今だ未定でも、多分大丈夫なのであって。

「ああ・・・もういいや」

「ワンっ!!」

俺は全てを投げ出す事を決意する。

で、散歩の休憩地点、駅前の公園に到着。

「あゝ、もう7月だし、夜でも暑いな・・・」

「ワンっつ」

あぢっ!!

明日からもう7月。

7月は期末さえやっちゃえば、あとはもう夏休みみたいなものだ。

「はあ、今日は熱帯夜かチキショー」

俺は公園のベンチに座り、一人歎く。

空はもう真っ暗。

近くに駅があるので、辺りは明るい。

・・・ああ、星が見えない。

今日は曇りか？

その時・・・

「・・・春吉？」

「ん？」

公園の前の道路に、知ってる顔が。

「・・・やっぱり、春吉だ」

「ああ、小夜か」

そこにいたのは小夜。

手にはマッ○ヨの袋。

「……春吉、何して……っ犬!？」

「あ? どうした？」

何だか小夜は、こがねに超反応。

「犬……」

恐る恐る近付いてくる小夜。
何か可愛いな。

「コイツはこがねって言って、今ウチで飼ってる柴犬だ」

「ワンっ!!」

ってか、小夜犬嫌いだったっけ？

「こがね……成金みたい」

「そこは黄金色みたいと言ってほしい」

正直、最近自分でも成金感が……。

「……ねえ春吉」

こがねの前にちょこんとしゃがみ、俺に対して上目状態の小夜。
VERY GOOD!!!

「な、何だ？」

「……モフっていい？」

モフる？

何の事、モフるって？

「まあ……いいよ」

「……ありがとう」

そして、

「……えいつ！！」

むぎゅうううう……！

「ワんっ！？」

小夜、こがねの首もとに抱き着く。

で、指でこがねの首もとの毛をモフモフ。

「……柔らかい」

「……ワん！」

小夜は楽しそう。

ちよっと微笑んでるし。

一方、こがねは

「ワン……」

……苦しそう。

頑張って耐えろ、こがね！！

「……モフモフ」

「……ワン」

変に和んだ。

で、小夜と別れ再び自宅へ。

「さてと、やっぱり少しでも勉強するか」

何となくだけど、勉強する気が出て来た。

何故だろう・・・今ならいける!!

和んだからか？ さっきのモフモフに和んだからか？

とにかく、勉強するなら今しかない!!

「うおおおおおおお!!」

いくぜえ!!

で、結局徹夜。

翌日、テスト。

「春・・・あんた」

「あ？」

「昨日徹夜？」

「徹夜」

「隈・・・すじいよ」

で、テスト中

「ZZZ・・・」

で、まさかの

「・・・」

RPGに。

RPG＝レッドポイントゲッター、つまり赤点取った。

ああああああ！！

第68話 期末テスト（後書き）

ミニコーナー！

キャラクターデータ集！

第二回は好きな食べ物！

春吉：米

美羽：チョコレート

楓：甘いケーキ

小夜：うどん

亜希：マドレーヌ

夏哉：林檎飴

香音：葡萄ぶどう

権三朗：鰻の蒲焼き

赤佐：ズワイガニ

秋馬：馬刺し

冬希：枝豆

古宇宮：牛肉

牛浜：プリン

守屋：飴玉

櫛山：キャビア

ではまた次回で！！

第69話 音楽ライブ（前書き）

どうもです!!

さあいよいよ今回から、三姫の新章“夏休み篇”の第一部である夏祭りパートがスタートです!!

夏休み篇は三つのパートに分かれています!!

第69話 音楽ライブ

「ああ・・・あ・・・あ・・・あ・・・」

赤点取った・・・。

化学と数学で・・・。

もうオワタ・・・。

「よお春吉!!」

「ん？ ああ、赤佐か・・・赤佐、あか、赤点ん・・・!!」

パニックインオレ

「何してんだお前・・・」

「赤点嫌あゝ!!」

夏休み補習決定。

ああ、16の夏が・・・。

「それより春吉、ちょっとお前に話が・・・」

「赤点嫌あゝ!!」

「あゝ、春吉？」

「赤点嫌あゝ！！」

「……………」

「赤点嫌あゝ！！」

で、昼休み。

「少しは落ち着いたか春吉？」

「ああ……取り乱してしまって、申し訳なかった」

赤点嫌あゝ！！

「で、話って何？」

「お前、意外と話聞いてたんだな。・・・まあ、話つてのは・・・

」
そう言うと、赤佐はかばんから一枚のチラシを取り出した。

「これだ」

「ん？」

第53回、葉城夏祭り！！

開催日：7月30日

午前10時～午後9時

第一部：音楽ライブ

第二部：芸大会

第三部：夕涼み会

第四部：花火大会

開催地は葉城川グラウンド

「これって、毎年やってる夏祭りの・・・」

確か、俺が小さい頃、まだ夜逃げ前の真面目だった両親によく連れていってもらったものだ。

「そう、毎年恒例の葉城夏祭り」

赤佐はグイッとチラシを見せる。

「でさ春吉、よかつたら一緒に第一部の音楽ライブに参加しないか？」

「音楽ライブ？」

音楽って・・・たつつあんの受け持ち教科。

「そう。音楽ライブは一般参加者達が、吹奏楽、オーケストラ、バンド、はたまたピアノや三味線、合唱なんかで盛り上がる、夏祭り恒例のイベントだ」

読者にも分かりやすい説明ナイス！！

「で、今年の音楽ライブの担当者が俺の親父でさ、何だか今年は参加者が少ないらしいんだって」

「・・・なるほど」

大体話分かった。

「つまり、参加者が少なくて困ってるから、俺らに数合わせのため参加してくれと？」

「その通り！！」

やはりか・・・

「でさ、春吉参加してくんない？」

「参加つつたつて、俺何も楽器出来ねえぞ？」

俺、吹奏楽もギターもバイオリンもピアノの三味線も何も出来ない。

合唱は・・・無理。

「・・・春吉、今日何日だと思ってんだ？」

「今日は8日？」

「夏祭りの日は？」

「30日？」

「つまり、あと20日くらい練習日はある」

「なっ・・・」

れ、練習だと！？

「春吉・・・バンドやらないか？」

「バンド・・・」

だから俺、ギターは・・・

「お前はボーカルでいいから」

「ぼ、ボーカル!？」

歌うの？

俺が？

「バンドだと、6人くらい人数欲しいな・・・」

「ボーカルか・・・」

「ギター2人、ドラムス、ベース、キーボード、ボーカルの6人
だな」

「俺がボーカル・・・」

「俺は昔、ギターかじった事あるからいいとして、あとは・・・」

「俺が歌う・・・夏祭りで・・・」

「・・・ピアノ習ってる奴とか当たるか」

「・・・フフフ」

で、

「春吉、あと4人メンバー集めてきて!!」

と、赤佐に言われた。

ってか、もう俺参加決定なのね……。

「あと4人か……」

あとはギター1人、ドラムス、キーボード、ベースか……。

「……もう、テキトーに集めるか」

俺にそんな都合よくギター出来る知り合いなどいない。

辛い練習日は20日くらいあるらしい。
もうこの際、素人でもいいや。

・・・ちなみに、夏祭りの音楽ライブ、優勝チームには豪華商品
がでるらしい。

豪華・・・商品・・・

翌日、昼休み

「赤佐、メンバー連れてきたぞ」

「マジで!?! ってか1日でか!?!」

フッフッフ、昨日あれこれ使って集めたメンバーじゃ!!

「フッフッフ、赤佐君、驚くなよ？」

「あ、ああ……」

「フッ、では皆さんこちらへ……！」

で、

「春吉、凄い物ってなんだ？」

「……豪華な物？」

「春、凄くて豪華な物って何？」

「春吉くん、相談っていうのは？」

「……」

赤佐、フリーズ中。

「フッフッフ、こやつらが我がバンドのメンバー達だ……！」

大魔神、無口、ダーク生徒会長、財閥（他クラスだが）。

「……春吉よ、これは一体？」

「全員、我がバンドメンバーだ」

えっへん……！

「ちげーよ、ってか、みんな楽器やった事は……？」

「知らん」

「はあ？」

赤佐、壊れ始める。

「ちよ、えー！？ みんな初心者！？」

「大丈夫だよ多分、練習すれば」

一方・・・

「春吉、豪華な凄い物って何だよ？」

「・・・凄い物？」

「春、本当に凄くて豪華なの？」

「春吉くん、相談って・・・？」

少し黙ってほしい。

「春吉、おい春吉よ」

「ん？」

「この4人、何でつった？」

「・・・秘密」

フッフッフ、さあ、春吉バンドの始まりだ！！

第69話 音楽ライブ（後書き）

ミニコーナー！

キャラクターデータ集！

第三回はよく聞く音楽！

春吉：ポップ系全般

美羽：ノリノリ系

楓：ロック

小夜：バラード

亜希：民謡、演歌

夏哉：洋楽

香音：きゃぴきゃぴ系

権三朗：聞かない

赤佐：へびメタ

秋馬：落語（音楽？）

冬希：クラシック

では！！

第70話 バンド

そして、その日の放課後、音楽室。

「ううう……まさか、ほとんどの人が初心者だなんて……」

赤佐、歎き中。

「まあまあ赤佐、小夜もいるんだし、いいじゃないの!!」

これでも頑張ったのだ。

週6バイトの小夜を連れて来るのは大変だった。
いやマジで。

「そりゃそうだけど……」

ここで赤佐は後ろをちら見。

そこには……

「すげえ、本物のギターだ!!」

「ドラムもある!!」

「……マイク」

「……これ、ウチにあるヤツより古いですね……」

皆、一様に楽器に触っています。

「・・・春吉、これで優勝出来ると思うか？」

「よしみんな、今から楽器決めようぜ!！」

「え! シカト!？」

と言う訳で・・・

今から楽器決めます!

「まあ今回は葉城バンド愛好会の連中にコーチングは頼んであるから、まあ気軽に決めてくれ」

葉城バンド愛好会

葉城OB達がやってるバンドの事で、赤佐の知り合いらしい。ちなみにバンド名は“キャッスル”。

あ、あと今回の楽器はその愛好会から借りてる物です。

葉城高校にバンド部とか軽音楽部とかはないので・・・。

「一応俺はギターやってるからギター、春吉はボーカルなので」

「よろしく!！」

で、

「みんな、何やりたい？」

「うん……」

「……俺的に楓はドラムス、美羽はベース、小夜はギターその
2、亜希はキーボードなんだけど」

何となくです、はい。

「あたしは別に、何でもいいや」

「はいじゃあ楓はドラムで……！」

一人決まり。

「あたしは……ベースよりキーボードの方がいいなあ。昔、ピ
アノ習ってた事あるから……」

何だ？ その今付けたような設定は？

「私は……キーボードよりもギターかベースやってみたいです
……！」

お、美羽と亜希の意見が一致。

「じゃあお互い交換で……小夜はギターでいいか？」

「……（コクリ）」

「はい、じゃあ決定」

ギターは赤佐と小夜

ベースは亜希

ドラムスは楓

キーボードは美羽

ボーカルは俺！！

案外、すんなり決まりました。

「次は曲だな」

以下、チラシより

『音楽ライブのバンドの部に参加する場合、曲は1チーム2曲。

1曲は課題曲として、こちらから1曲、楽譜をお渡しするのでそれを。

もう1曲は自由制作曲。各チームで作詞作曲して、それを演奏して下さい。

課題曲の方では、音の協和、正確差、技術面を審査します。

自由制作曲の方では、歌詞や曲の独創感、作り、意欲などを審査。

ちなみに、自由制作曲のジャンルは自由』

って、

「あと20日で作詞作曲して、しかも完璧に覚えるなんて、素人には無理なんじゃ・・・?」

てか、絶対無理だろ。

「いや、実はもう曲は出来てるんだ。後は歌詞だけ・・・」

「歌詞・・・」

歌詞か・・・

「あ、あと課題曲の方の楽譜はもう貰ってあるし、コーチ達は明日からもう来てくれとさつき連絡した。だから明日、皆歌詞作って持ってきてくれ。すぐに練習に入る」

『了解!』

「・・・で、最後に」

そこで、赤佐は机にビターンっと紙を出す。

「バンド名を決める」

ギター!!

「では皆、何か候補は？」

まさかの投げやり！？

「ハイっ！！」

「では沢那さん！！」

楓かっ！？

「“カエデーズ”はどうか？」

「はい却下！！」

今日の赤佐はツッコミ役だあ！！

「は、はい！」

「では濱垣さん！！」

今度は美羽。

「あの・・・“葉城ファイアーズ”は？」

「凄い微妙、はい次」

しょぼ〜ん状態の美羽さん。

この子、ベタな名前大好き。

「はい！」

「じゃあ渡邊さん！」

今度は亜希ですか。

「クーラー”はどうですか？」

ニッコリ顔の渡邊嬢。

「何故家電製品ツ？ 却下！！」

今日の女子はよくボケる！！

「ハイっ！！」

「では沢那さん！」

楓二回目！！

「“ピチオちゃん”はどうっ？」

「ピチオって誰ツ？ 普通に却下！！」

「はいー！」

「では渡邊さん！！」

「“マ〇オブラザーズ”は？」

「それはアレか？ ヒゲの配管工かッ？ 赤いアレかッ？ 却下
！」

凄いポケとツツコミの嵐やな・・・。

「はいっ！！」

「では濱垣さん！！」

「“葉城ファイアーズ”は？」

「さっきと同じいッ！！」

あ、アツイ！！

・・・しゃーない、俺も立候補するか。

「はい！」

「じゃあ春吉！！」

「俺的に“放課後ティ・・・”

「アニヲタは黙ってるッ！！」

「・・・すみません」

玉砕。

「・・・はい」

ん？ ここで小夜が挙手。

「で、ででは、え、荏咲さんっ!!」

・・・赤佐よ、さっきの勢いはどこに・・・。

「・・・夏に結成した葉城高バンド。だから“Summer Leaf”」

夏の葉っぱ・・・うん、俺的にはちょっとな・・・。

「・・・いいと思う」

・・・え？

赤佐君？

「凄くいいと思うよ荏咲さん!! もうこれは決定だ!!」

「はあ〜!?!」x3

「えっ?」x1

・・・このあと、小夜以外の女子からクレーム殺到したんですが、結局。

「Summer Leafに決定だ!!」

赤佐君が強引に決めてしまいましたとき。

第70話 バンド（後書き）

ミニコーナー！

キャラクターデータ集！

第四回の今回は、キャラの実家情報！！

木山家：一般家庭（両親不在）

沢那家：柔道場経営（柔道教室やってるよ！）

荏咲家：団地住まい（父他界、母入院中）

濱垣家：一般家庭

渡邊家：お屋敷住まい（財閥）

赤佐家：マンション住まい（父は地域行事の担当者）

重原家：一般家庭（両親の中悪し）

吉崎家：一般家庭

水岡家：果樹園経営やってます。

瀬良家：武道一筋一家

梨本家：まだ秘密（今後のネタバレのため）

次回より夏祭りパート本格始動！！

第71話 詩（前書き）

ども〜!!

最近、あまり更新出来なくてすみません。
申し訳ないです。

第71話 詩

で、その日の夜。
自宅。

「・・・あ
」

あ・・・米もパンも牛乳も食料何もない。

「・・・
」

あゝしまった、そういや昨日でいろいろ切らしちまって、今日本
当は買い物して帰る予定だったんだ！

けど、バンドやら何やらでその事すっかり忘れて・・・。

「・・・はあ
」

仕方ない、今からスーパー行けば、タイムセールとかやってるか
な？

・・・行くか。

「ふふふふーふんふーふーふー」

はい、何の曲でしょうか？

・・・あまりリズム書きすぎると、著作権があーだこーだになり
そうなので。

現在、スーパーに向かい自転車で全力疾走中！

「ふふふふーふーふーふん」

ヒント、全部アニソン。

OPEDごっちゃ。

「ふふふふふふふつふー」

てな感じで熱唱し、スーパーに到着。

「着いた〜」

俺はチャリを止め、店内入口でカゴを取る。

「ふふふふふつふー」

え〜と、買うのは米と食パン、今日のおかずに、飲み物・・・。

・・・あ、タイムセールやってないやん。

「なんだよ・・・期待して損した」

はあ・・・野口さんがあつという間に無くなって行くぅ!!

「ふーふーふーふふっふーふーふーふーふーん」

・・・仕方ない、とりあえずは先に飲み物のコーナーへ・・・。

「ふふふふふふーふふーん・・・」

その時!!

バラバラバラッ!!

「ん？」

突然の何かの音。

「何だ？」

音がしたのは1.5リットルの飲料水が置いてあるコーナーの方。

「・・・？」

俺は何となく、音のした飲料水のコーナーへ。

そこには……

「……………」

床に落ちてるのは数本の1.5リットルの飲料水ペットボトル。それを、一人の少女が無表情で棚に返していた。

……なるほど、棚からペットボトルを落としたのね。

で、選択肢

- ・ペットボトルを棚に上げるのを手伝う
- ・スルーする

「大丈夫か？」

紳士ジェントルマン、木山春吉登場！！

「……………」

一方の少女はこちらをちら見。

セミショートの髪は黒と茶の間の色。

小さな顔に、大きいながらも若干ツンとした目。

肌は若干白め。

彼女が今着ているのは水色のシャツ、下はショールパン。

……美少女や。

「大丈夫か？ 手伝うよ！」

たまにはカツコイイキャラ作りを。

「……すみません」

一方の彼女は、テキパキとペットボトルを棚に返す。

で、作業完了。

まあ、コーラ超泡立ってるけど……気にしなぐって事で。

「ありがとうございます」

冷淡な口調だな……。

「ああ、別にどつって事ないぜ！！」

ふん、男春吉！！

「……では」

そう言つと、彼女は去つて言った。

「……まあ、いいか」

さて、買い物続きつと！！

「うん・・・歌詞か・・・」

現在スーパーの帰り道の途中。

そっぴゃ、明日までに歌詞作らないといけないんだよね、バンドの。

「うん・・・例えば・・・」

夏の夜

作詞・木山春吉

アツイアツイぜ夏の夜 熱気に満ちたこの街で 俺はSummer
rをEnjoy中!!

・・・ボツ。

「うん・・・」

星輝く

作詞・木山春吉

星がキラキラ輝く 流星群の流れに 逆らうあそこの一等星
まるで俺のように ま

・・・ボツ。

「詩が思いつかねえ」

はあ・・・。

第71話 詩（後書き）

ミニコーナー！

キャラクターデータ集！

最終回の今回は、作者が考えるキャラクター達のコンセプト！！
まさかの初公開です！！

木山春吉

バカでアホだけど、いざというときには頼りになるオタク主人公

沢那楓

チビで強気な体育会系野蛮少女。でも内心は乙女心あり。

荏咲小夜

無口でポーカーフェイスな不思議系女子。でも凄く思いやりのある
優しい子なんです。

濱垣美羽

人見知りの激しい、ちょいツンな恥ずかしがり屋。でもたまに突っ
走る事も。

渡邊亜希

天然お嬢様系。場に和みを与えるが、基本バカで空気読まない、い
や読めない。

赤佐大輔

真面目な子。春吉のバカ仲間で、恋愛には初心。

重原権三朗

いつもやられる側の人間。基本ハイテンションなバカで、うざい。

吉崎夏哉

クールで天才イケメン。我を行く性格で面倒臭がり。男子からはよく嫉まれるが、基本気にしない。

水岡香音

甘えん坊、言い方を変えればぶりっ子系キャラ。超甘えたがり。甘えしか知らない。

瀬良秋馬

天才バカ。超ナルシストで、よく人を見下す。スーパーマイペースキャラ。

梨本冬希

草書系弱虫キャラ。弱虫だけど、正義感是人一倍ある。ただ、若干周りからズレてる。

第72話 休日練習

翌日。

今日は土曜日で学校は休みだが、バンドの練習のため登校。

「あゝ．．．やっぱりバンド面倒臭い」

まさか、休日まで登校して練習とは．．．。

「家で寝てたかったな．．．」

はあ．．．

しかも、

「まだ詩、出来てないしな．．．」

きつと、クラスの連中は家でぐるぐるしているであろう土曜日。
寝たいよゝ!!

そして、誰か代わりに詩を作っておくれ!!

ガチャ!!

「おーっす……て」

何とか眠気と格闘し、やっとの思いでついた葉城高等学校音楽室。

しかし……

「まだ、だれもない……」

嘘だろ……

俺、頑張つて来たのに……。

「……」

誰もいない音楽室は、やけに静かだな。

時間的に、そろそろだと思つのに……。

「……遅刻したヤツにはお仕置きだな」

よし、遅刻したヤツには跳び膝蹴りの刑!!

フッフッフ・・・

その時！！

ガチャ！！

「あ？」

音楽室の後ろの扉がオープン。
誰か来たかな？

・・・しかし、音楽室に入ってきたのは

「・・・え？」

「・・・誰？」

見ず知らずの女子。
誰？

リボンの色が青って事は一年生・・・って、

「あれ？」

あれ？ なんか見た事のある顔だな・・・？

一方の向こうは何か気付いたようす。

「……………」

何？ ちょっと目そらしたよこの子。

「あ、あのさ」

勇気を持って質問！

「……………何でしょうか？」

相手は一応つてな感じで返事。

「俺、もしかして君とあった事……………」

なぐんか見た事ある顔なんだよな。

「……………昨日のスーパーの事ですか？」

「えっ!?!？」

昨日の……………スーパー……………つてああ!!

「も、もしかしてあのペットボトル少女!?!？」

昨日の記憶がフラッシュバック!!

スーパーで確か会ったよな!!

「……………」

「そうだ、確か昨日のスーパーで!!」

へえ、あの子葉城高生だったんだ。

「・・・あの」

「ん？」

何だ？

「・・・あなた、吹奏楽部にいましたっけ？」

「吹奏楽？」

はい？

「・・・今からここで、吹奏楽部の練習があるんですけど」

「は？」

いやいやいや、だって今日の音楽室使用組はバンドメンバーだろ？
たつつあんからも許可もらってるし。

「あなた、吹奏楽部の部員では？」

「は？ 今日の音楽室はバンド練習用にたつつあ・・・いや、和
波先生から許可を・・・」

「バンド？」

昨日、ちゃんとたつたあんから許可取ったし。

「そう、バンド!!」

「・・・あの」

「ん？」

音楽室は渡さん!!

「ここ、音楽室じゃなくて、視聴覚室ですよ」

「・・・え？」

何ッ？

「ここは3階。音楽室は4階ですよ？」

「な・・・えッ!？」

う、嘘だ!?

俺は急いで廊下へ、そしてプレートを確認。

視聴覚室・・・

「・・・しまった!」

やってしもつた!!

「……間抜けな人……いや、先輩ですね」

「やばっ!!」

くそっ、何とまあ恥ずかしい!!

「す、すまない!! 俺のはやとちりだ……」

つて事は、早く本当の音楽室へ行かないと!!

「……失礼ですが、先輩お名前は？」

「え？」

名前？

「き、木山春吉だけど……」

「木山……ああ、なるほど」

なるほど？

「私は泡岸あわぎしれい麗れいって言います。……先輩、昨日はありがとうございました」

「あ、ああ……」

泡岸か……

「……先輩、早く音楽室へ行かなくてもいいんですか？」

「ん、あ、そうだ！」

やべっ、遅刻したら赤佐にシバかれる!!

「じゃ、じゃあ!!」

「はい」

ヤバイ!!

俺は急いで視聴覚室から退室、4階の音楽室へ。

・・・泡岸 麗か。

何か・・・冷淡と言うか・・・素っ気ないと言うか・・・大人し
そうな子だったな。

って、今はそれより音楽室うっ!!

第73話 キャツスル

「遅いぞ春吉!!」

「わ、悪い!!」

あゝあ、結局遅れちったよ。

もうみんな来てるし、コーチらしき人達もいるし・・・。

視聴覚室と音楽室、これからは間違えないようにしないと。

「よし、みんな集まったな。じゃあいまからコーチの皆さんを紹介する」

そう言うと赤佐はコーチの方の前へ。

確か、葉城バンド「キャツスル」だっけ？

「まずはギターのアベシーユさん」

あ、アベシーユ!?

「チエース、アベシーユっス!!」

アフロ!?

グラサン!?

色黒!?

革ジャン!?

「あ、ちなみに本名は阿部一郎さんだから」

「オウ、それ言うなよ赤佐チャン!!」

わー奇抜。

「次にベース、キャサリンさん」

キャサリン!?

「ちやつちやつちゃーす、キャサリンどす!!」

キャサリン男か!!

金髪ロン毛!?

ああひげ!?

女装!?

こいつカマだ!!

「本名は中島寛之さん、本来はおねえバーで……」

「まあ赤佐チャン、止めてえ」

わーキモい。

「次にドラムス、ワチリーGOさん」

ワチリーGO!?

「あは、どもつす、アハハのハ」

ま、まさかの白髪ジジイキター!!
顔シワだらけ!?

猫背!?

杖持つてる!?

「本名は橋口夢斗さん。今年で30歳」

「ども!?!」

わーギャップ。

「次にキーボードのマイケル野島さん」

マイケル野島!?

「初めまして、マイケル野島です。よろしくお願いします」

ここにきて真面目さんキター!!

七三に眼鏡!?

スーツ!?

「本名は佐藤隆二さんです」

「皆さん、なかよくやっていきましょー!!」

わー野島関係ねえ。

もうマイケル佐藤でいいじゃないの?

「最後にボーカル」

お！ 俺の担当の人か。

「ボーカルはてんとう虫さん!!」

てんとう虫!?

「てんてんとうとうてんとう虫、余炉史駈!!」

よろしくって・・・普通漢字なら夜露死苦じゃ・・・。

つてか、まさかのデブ系な人!?

上下ジャージ!?

天然パーマ!?

汗凄い!?

臭い!?

「本名は豚野豚劫さん、好きな食べ物はチキンラーメン」

「あー、お腹すいたな」

わー嫌だ。

「以上がキャツスルのメンバーで、今回のコーチの方だ」

・・・キャツスル、ろくなのいねえ。

「どうも、てんとう虫です。君がボーカルの子かな？」

「あ、まあ……」

現在個別コーチング時間中。

「君、名前は？」

「き、木山春吉……うう」

こ、この人汗臭い！！

「木山か、よろしくな。……ああ、お腹すいたなあ」

「……」

はあく、嫌だなこんなデブ。

本当なら、もっと綺麗なお姉さんとかに……。

そう、ポイン的な色気のある……。

主人公は思春期。

「おい木山、さっそく発声練習からするぞ」

「……あ、はい」

いかんいかん、ギャルゲーのやり過ぎだな、俺。
あんなのは幻想だ。

現実……

「あ・え・い・う・え・お・あ・お」

汗臭デブなんだ。

チクシヨー！！

「あゝ・えゝ・いゝ・うゝ・えゝ・おゝ・あゝ・おゝ……！！」

第73話 キャツスル（後書き）

ども！！

前回、新キャラの泡岸麗が登場したんですけど、なぜ麗が春吉を一発で先輩と分かったのかの理由を書き忘れたので、そこを補足！

まあ、理由は簡単。

葉城高校の制服は、冬服だろうと夏服だろうとネクタイ&リボンは強制着用なんです。

で、そのネクタイやリボンは学年によって色が違うんです。まあ、学年色ってヤツです。

ちなみに一年は青、二年は緑、三年は赤。

つまり麗は春吉のネクタイの色を見て先輩だと判断したんですね。

そのところで、説明不足で申し訳ありませんでした。

正直、書き直すより補足説明した方が早いので、ここで補足&お詫び申し上げます。

第74話 どんぐり

「どんぐりじるじるどんぐりー」

「どどんぐりーじるじるどんぐりー」

「・・・駄目だ」

「は!?!」

現在デブと個別レッスン中。

まあ、詳しくは前話を見てくれ。

「全然なっていない、もっと気持ちを込めて歌わないと!?!」

「気持ち・・・」

精神面かよ・・・

「もっとどんぐりさんの気持ちになって!?!」

「どんぐりさん・・・」

「そう、どんぐりさんの気持ち!?!」

はあ〜。

「ではいくよ・・・どんぐりじるじるどんぐりー」

「どどんぐり〜」

どんぐりの気持ち

それはきつと・・・

(デブより綺麗な子!!)

しつこいようだが、主人公は思春期。

「・・・駄目だ、もっと気持ちを込めて!!」

「ちょっと休憩してきます」

ええ加減にしなさい。

「デブさんころころデブさんこー」

「凄く怪しいんですけど……」

相変わらず素っ気ない態度だな。

「あー、確か泡岸、お前吹奏楽部だっけ」

必技、強引に話を変えるの術!!

「……先輩、人の話聞いてます？ こっちは質問を……」

「その手に持ってんの、泡岸の楽器か？」

「……」

あ、あれ？

呆れられた？

「……ベークラです」

「……は？」

ベーコン？

「ソプラノクラリネットの事です」

「あ、あぁー!」

ならそうと言って欲しいな。

「泡岸はクラリネットなのか」

「まあ、はい」

確か、音楽の授業で教科書に載ってたな。

「なあ、クラリネットと違って、吹くの大変なのか？」

「・・・まあ、初心者には難しいですかね」

「へえ〜」

その時

「あ、いた!」

「ん？」

誰かの声が。
で、俺は後ろをルック。

「春、サボってないで練習に戻る!」

「げっ、美羽・・・」

うわ〜・・・

「・・・では、私は吹奏楽部の練習に戻るので」

「え、あ!」

あゝ泡岸が去って行くうゝ!!

「春、早く音楽室へ戻るわよ!! てんとう虫さんに失礼じゃない!!」

「・・・はあ」

あのデブは嫌だな。

「早く戻る!!」

「はいはい」

・・・仕方ない、戻るしかないか。

第75話 作詩

「よし、とりあえず一旦休憩!!」

美羽に拉致られ、強制的にやらされたデブとの歌レッスン。

もはや精神崩壊が予期できた程のメンタル面強化型歌レッスンに、俺は約3時間も耐えた。

・・・頑張った、俺。

で、やっとこさ休憩の時間に!!

・・・やったよ、俺!

しかし、この後の赤佐のある一言で、俺の休憩時間は地獄へと変わる。

「じゃあ、この休憩時間中に詩の発表でもするか!!」

・・・え?

「じゃあ、誰から発表する?」

現在休憩時間。

俺達は音楽室の机を利用し、詩の発表会を開催中です。

ヤバイ・・・まだ詩出来てないよ!!

「はいはい、あたしからやる!!」

その時、楓がガバツと立ち上がった。

「じゃあ沢那さん、どうぞ!!」

楓の詩・・・なんか、凄く微妙そうな・・・。

「では!!」

力任せ

作詩・沢那楓

力を使う時 私はいつも考える アイツを倒し 私が天下を取る

信長さんは言いました 鳴かないと 殺っちまうぞ ホトトギス
それは嫌だな ホトトギス

ホトトギスって なんだろな？ 鳥かな 魚かな 人かな 信長かな

「どうだ？」

「これ、ただのお前の疑問じゃねえか！..」

もはや詩なのか？

「何だよ、これホトトギスの事を意味深げに書いた、いい詩だろ？」

「ホトトギスは鳥だ、信長じゃない！！」

・・・やはりボケてきたか。

「次は誰いく？」

赤佐は司会役。

「じゃあ・・・私いきます！！」

亜希きた！！

「じゃあ渡邊さん、どっぞー！」

「はい！..」

乙女心

作詩・渡邊亜希

春の明るい夕方に あなたの事を思い出す 爽やかな春風に誘われて 私は一步を踏み出した

あなたはいつも笑ってた 私は影から見てるだけ でも今日は違うの 一步踏み出し伝えるの

四番目は嫌だけど 三人同棲辛いけど あなたの事が大好きよ いつかは一番の女になるの

「ど、どうですか？」

「・・・まだその勘違いしてんのねアンタ」

マジでか・・・

「あとさ、歌うのは俺だからな？ 男が乙女心とか歌えるかあゝ
！！」

「私はいつか、春吉くんにとっての一番になりますから！！」

「だから違あう！！」

「では次……」

「……はい」

お次は小夜!!

「で、ででは、え、荏咲ささん!!」

赤佐落ち着け。

「……うん」

Family Smile

作詩・荏咲小夜

当たり前と思っていた 家族の笑顔 何事もない 自然な笑顔

太陽のような その笑みは 暖かい心を作ってくれる 私の心の

古里

いつも側にあると 思っていた 無くならないと 思っていた

だからそれが 当たり前じゃ無くなった時 その暖かさが 大切な気持ちで知った

ありがとうって 家族に伝えよう 今だからこそ 伝えよう 暖かい気持ちがある 今だからこそ

「……………」

「……………」

……………普通だな。

でもまあ、大魔神や財閥よりかは断然ました。

「俺は凄くいいと思うよ荏咲さん!!」

赤佐さん!?

「……………」

「ああ、まさに神レベルの詩だよ!!」

「……………」

「くはっ……………」

赤佐は鼻血を出しつつ卒倒。

だれかティッシュ持ってこい!!

「じゃあ次は・・・濱垣さんいく？」

両鼻にティッシュを詰めた赤佐は、ノリで美羽を指名。

「えっ、私!？」

一方の美羽はあたふた状態。

「いつとけ美羽、最後になると変にハードル上がるぞ」

「え・・・う、うん・・・」

さあどうなる？

「あ、あんまり期待しないでね」

雨の日Days

作詩・濱垣美羽

朝目が覚めたら 空は曇り空 僕はがっかりしながら 支度をする

長靴履いて 傘を持って 雨降る道を歩いて 学校へ向かう
これじゃあ 校庭で遊べないな

授業を受けて 昼休みが過ぎて 雨は少し小降りになって 帰る
頃には太陽が顔を出す

友達と歩く帰り道 僕は水溜まりへDive!! 水しぶきが輝
きながら この青い空に舞ったよ

「ど、どうかな?」

な、何か歌の歌詞っぽい!!

「何かいいな!!」

「そ、そう?」

まあまあな詩だな。

次は赤佐。

「いよいよ、俺の出番だな」

「いけ赤佐、そして玉砕しろ赤佐!!」

「フッフッフ、ナメるなよ春吉!!」

心の方程式

作詩・赤佐大輔

真つ白な心のノート　そこに書き写すは　心と心の方程式

愛と幸せを足して恋愛を作り出す　信頼と楽を足して友情を導き出す　虚無と孤独を足して悲しみを作り上げる

真つ白な心のノートには　いつしか沢山の　心の方程式が　書かれていったよ

友情から善意を引いて裏切りを作り出す　悲しみを喜びで割って平凡を導き出す　安心と恋愛を掛けて好きを作り上げる

ノートはいつしか　いつぱいの方程式で　書き尽くされた　それが僕の　生きてきた意味なのだから

「どづつですか?」

「こゝいつつ……」

真面目か?

「まあ……いいんじゃない?」

「そうか？ ハッハッハッハッハ！」

うぜー。

で、

「最後は春吉だな」

来てしまったか・・・

「・・・フッフッフ」

もう、その場で口任せに言っしかない！！

「春吉、いいのを任せたぞ」

「フッフッフ」

無敵な俺

作詩・木山春吉

太陽は昇る 我を輝かせるため 太陽は昇る 我を引き立たせるため

我は無敵 無敵なのだ 太陽は我に敵わない 我は最強なのだ

自由研究は太陽について調べました 宿題は太陽の下でやりました 読書感想文は太陽の本を読みました

ああ太陽太陽太陽 我が手下の太陽よ、明日に煌めけ

「どっどっ」

はあはあ、即興で作ったよ詩！！

「……」

……シカト？

……はあ。

第76話 コーチング

「じゃあ、まずはコードを一つ一つ覚えていく所からだな」

「・・・はい」

アベシーユさんのコーチの元、小夜はギターのコードを一つ一つ覚えていく。

「大輔チャンはもう一人で大丈夫だよな？」

「はい」

赤佐はギター経験者。

ギター組は順調に練習中だ。

「ハ〜イ、もっと強く弦を押さえないと、音が響かないわよ」

「は、はい・・・」

ベース組は何だか微妙な空気。

「もつと弦に触りなさいよ!！」

「すみません・・・でも、何だか指が切れそうで怖くて・・・」

亜希は恐る恐るといった感じで弦に触れる。

「切れないわよ、だからもつと弦に触りなさい!！」

カマなキャサリンはキレ気味。

ズンズンジャンツズンズンジャンツ!!

「ほう・・・中々飲み込みが早いな」

「え、そうっすか!？」

ドラム組は何だか順調そう。

「じゃあ次は8ビートでやってみてくれ」

「おっ！！」

コーチのチワリーGOより楓の方がたくましく見えた。

「凄いな・・・君、キーボードで“エリーゼのために”を弾けちやうなんて・・・」

「い、いえ・・・このくらい」

キーボード組は何やら凄いらしい。

「何だか、教える事が何もないな・・・」

「そ、そんな・・・」

美羽さん、照れています。

マイケル野島は褒め上手らしい。

で、俺は・・・

「大きな栗のー木の下でー」

「大きな栗のー木の下でー」

「・・・お前、いい加減気持ちを込めろ!!」

相変わらずのメンタル強化型歌唱特訓。

「栗さんの気持ちになれ、栗だ栗!!」

「栗さん・・・」

コイツ、脳内は幼稚園児レベルなんじゃね？

「お前に足りないのは気持ちだ木山!!」

テメエに足りないのは大人の振る舞いだデブ!!

で、その日の夜
自宅

「チクショーあのデブ、何が栗さんだ!!」
ふざけすぎだ。

はぁ・・・今日は音楽室と視聴覚室間違えるわ、デブのメンタル強化型歌唱特訓を受けるわ、詩を軽くスルーされるわ。

「今日についてないな・・・」

ああついてない。
テンションがた落ち。
心がブルー!

こっついう時は・・・

「アニメ〜!!」

PCスイッチオン！！

さあ、皆さんも二次元と言う名の楽園へGO！

・・・でもまあ、時には現実と向き合わなくちゃ駄目だよ？
画面に逃げるなよ？

「計画通り」

さすがだな・・・この発想は無かったわ。

「僕が新世界の神になる！！」

すげえな二〇、ラ〇トを倒しちゃったよ！？

「チエックメイトだ」

・・・もし、ここにあの黒い死神のノートがあったら・・・フッフッフ。

「響け、俺の武装錬金!!！」

凄いやな錬金術、俺は鋼錬より武錬派だな。

「サンライトクラッシュャー!!！」

俺的にパピオンとC・ブローパーが好き。

「パピオン!! もっと愛をこめて!!！」

カ○キと斗○子のあのポケッッコミも好き。

「は、犯人は、お前だ!!」

謎が主食なんて・・・すげえ発想。

「これが貴様の進化の結末だ」

ネ〇口のあのドSっぷりは面白い。

「さあ、目覚めの時間だ」

ネ〇口とム〇ヨこそ、ジャ〇プの影の支えとなった漫画だと、俺は思うよ?」

「俺は魑魅魍魎の主となる」

ぬ〇孫は、今のジャ〇プで一番絵が上手いと思うよ、俺的に。

「オレはお前を…斬る!!」

ちなみに二番はバクオンかな？

「全ての妖怪はオレの後ろで百鬼夜行の群れとなれ」

ぬ○孫はキャラがカツコイイ！！

「・・・ハッ！！」

あ！！ 気付いたらもう夜11時！！

恐るべき、ジャ○プ系深夜アニメ！！

っていかんいかん、夕食と風呂の準備。

「今日はC○TVだから・・・」

・・・これ、一応伏せ字だからな？

「とりあえず、今日はカップ麺でいいとして、風呂はシャワーだけでいいか・・・」

ザ・手抜き！！

「あとこがねにエサと・・・って、散歩忘れた・・・」

しまったな・・・。

「・・・明日の朝でいいか。それより火い起こしてカップ麺を・・・」

その時

ピンポン！！

「ん？」

インターホン？

誰か来たか？

ピンポン！！

「はい、今出ます」

誰だ、こんな夜遅くに？

もしかして、またあの両親だったりして。だったらシバく。

ガチャー!!

ドアオープン!!
で、

「おっす!!」

「・・・は？」

・・・え？

「よっ春吉、ちよいとお邪魔するぜ」

「え、は？」

そう言つと、さっきインターホンを押した本人、沢那楓は人の家に不法侵入・・・って、

「何で？」

第77話 宿泊交渉

「悪いけど、今晚あたしを泊めてくれない」

「……は？」

現在深夜12時。
自宅。

「何故？」

「何故って……べ、別にいいだろ？」

もしも突然、沢那さんが泊めてきたら？

田舎に泊まる……いや、木山家に泊まろう!!

つてな感じ？

「別につて……しかも何故宿泊希望？ お前実家は？」

「うるせえな、とにかく今日だけでいいから泊めてくれ」

「だから何で!？」

「……」

楓さん、ツーンとしています。

「お前、何かあったのか？」

「……………」

「両親は？」

「……………」

「もしかして、家出とかか？」

「……………」

はあ……………。

「……………ウチは無理だからな」

「えっ……………」

「ここにきてやっと楓の表情に変化が。」

「当たり前だ！！ そんな簡単にはいどうぞ、なんて言えるか！」
「！」

「……………」

「……………とにかく、まずは理由を言ってもらわないと」

「……………理由？」

「そう、理由」

「父さんと喧嘩しました」

案の定すんなり言った!?

「な・・・喧嘩って」

「はい理由言った。じゃあ今晚よろしく」

「つまりは家出か!？」

な、何がどうなってんだ!?

「あたしがさ、バンドやりたいつて言ったら、父さんが・・・ズルズル、断固反対だ、って・・・ズルズル」

「なるほど、方向性の違いか・・・ズルズル」

「全くだよな・・・ズルズル、お前は柔道だけやってればいいんだ、って・・・ズルズル」

「そりゃヒデー親父さんだな・・・ズルズル・・・あっち!!」

現在木山家リビング

まだ食事してない、と楓が言ったため、我が夕飯予定だったカツ
ブ麺を一つ譲り、食事中。

ちなみに俺はシーフード味、楓は塩味。

「でさ、父さんがドラムのステーキ折りやがって・・・あたし、
もう腹立って・・・ズルズル」

「ステーキ折るって、どんな怪力だよ・・・ズルズル」

「で、家出してきた・・・ズルズル」

「・・・だからって、何故家出先をウチにしたんだよ・・・ズル
ズル・・・あっちいっ!!」

少し冷ますか・・・

「だって亜希から聞いたんだぜ、“今春吉くんの家は両親がいな
いのよ”って」

「ぶほおっ!?!」

なっ!?!?

「ん? どうした春吉・・・ズルズル」

「げほっげほっ!!」

あ、あの野郎・・・

この事（両親夜逃げの件）は、周りに内緒って言ったのに！！

「にしても凄いよな、春吉の両親。今トゥールースに旅行中なんだって？」

「はい？」

トゥールース？

「え？ お前の両親、今旅行中だって亜希が・・・」

「・・・あー、あ、ああそう、今旅行中なんだ」

亜希さん、そういう気遣いはかえって分かりにくいよ！！

「じゃあ、本当に今両親いないんだな？」

「ああ、いない」

「なら宿泊OKだな」

「なッ・・・」

「こ、この野郎〜！！
ってか

「つか、お前女だろ！？ そついうのは普通女子の家に行くだろ！？」

何故、男の俺の家に・・・
まあ、確かに両親はいないけれども。

「え？ そんなのお前だからに決まってるからだろ？」

「・・・はい？」

何真顔で言ってたんだ、この大魔神！？

「春吉だったら安全だろ？ どうせ二次元オタクで三次元には興味ないだろうし・・・ズルズル」

「なっ、お前！！」

「それに、春吉だったら人が嫌がる事、絶対にしないだろ？」

「えっ・・・」

「小夜が倒れた時、初めに家事手伝おうって言ったの、春吉だし」

「・・・」

「球技大会の時、美羽の練習に付き合ってたやったり」

「・・・」

「青上の連中に捕まった時だって、真っ先に助けに来てくれたし」

「・・・」

あれー？
目頭が熱く……

「それに、あたしが柔道の大会で負けた時、優しく慰めてくれた
し」

「……」

あれー？
目から汗が出そう。

「何だかんだで、お前は意外と優しい。だから、春吉なら安全か
なってる」

「……好きなだけ泊まっていけ」

こ、心がじゅんってする。
め、目があゝ！！
目から汗があゝ！！

「じゃ、お言葉に甘えるぜ」

しかし、この時の俺は気付いてなかった。

この大魔神、影でこっそりガッツポーズをしていた事を。
そして小声で「計画通り！！」って言った事を。

番外話 振り返ろう(前書き)

三姫番外編Spring Storm連載開始記念。

たまには、三姫本編でも振り返ってみましょう!!

あと、これネタバレ注意なんで、まだ最新話まで読んでない人は読まない方がいいかも。

番外話 振り返ろう

【日常篇・春】

第1話～第4話

これは主に、春吉とメインヒロイン3人を読者に印象付けるのを目的にした感じかな？

ストーリーとしては、春吉の学校での日常をほのぼのと書いています。

楓、小夜、美羽との日常を1話ずつってな感じですよ。

【ゴールデンウィーク篇】

第5話～第7話

メインは楓。

日頃男みみたいな性格をしている楓の、ちょっと女子らしい面を見せてようつてのが狙い（最後のシーン）。

しかし、なんか上手く書けなかった……。

ストーリーとしては、GWが暇になった春吉が、美羽に誘われ楓の試合を観戦する事に。

初めは順調に勝ち星を上げていたが、最終戦に春吉を意識した楓は試合に負けてしまい……。

【春吉ママ参上篇】
第8話〜第12話

小夜メインの話なんだけど、小夜の出番はあまりない……。小夜の家での生活&春吉達のどたばた家事シーンを書いてみました。ただ単に、作者がよくある貧乏大家族を書きたかっただけかもしれないね。

ストーリーとしては、小夜の弟をヤンキーから助けた春吉は、小夜にお礼として夕飯をご馳走される事に。
しかし、その帰りに小夜が倒れてしまい……。

【球技大会前哨篇】
第13話〜第32話

球技大会前哨篇パート1

【練習パート】
第13話〜第16話

球技大会前哨篇は3パートに別れています。

そのウチのパート1、練習パートでのメインは美羽。

これは、ただ単にスポーツの練習を書きたかっただけです。

深い意味とかはあまり・・・いや、ほとんどありません・・・。

あ、あと夏哉初登場のパートでもあります。

ストーリーは、球技大会でバスケット出場が決定した春吉は、バスケット場ながらもバスケット初心者の美羽にコーチングをする事に。

球技大会前哨篇パート2

【渡邊さん来訪パート】

第17話～第24話

メインは初登場の亜希！

作者初の天然お嬢様キャラに挑戦、みたいな感じですかね。今になつて亜希は非常に動かしやすくして便利です！

だって、どんなボケをしてもそこそこ許されるんですもん。

天然キャラは重宝します。

で、ストーリー。ある夜、夜逃げした春吉の両親が帰って来た！！

で、まさかの許婚宣言！！翌日、春吉の家を訪ねてきたのは、

どっかの財閥お嬢様で・・・。

球技大会前哨篇パート3

【四季邂逅パート】

第25話～第32話

秋馬、冬希初登場！！

ハゲメガネは扱いやすいキャラです。

そして、春吉の意外で真面目な過去が明らかに！！

正直、春吉のキャラ崩壊覚悟で書いた覚えがあります。

ふざけキャラに真面目設定はアカンって思っていたので・・・。

本来だったらこの後、球技大会まっしぐら、バスケで対決！！みたいな感じにしようと思っていたのですが・・・。

ストーリー、球技大会バスケの部の初戦の相手に夏哉がいる事を知った春吉は、バイト先のバスケコートで中学時代の事を思い出していた。

そしてバイトの帰り道、小夜と一緒に帰っていた春吉は、過去にある因縁がある嵐の四季の他3人と遭遇して・・・。

【球技大会本戦篇】

第33話〜第42話

三姫の3人のメインヒロインそれぞれに見せ場を作った回。

楓はバレー、小夜はテニス、美羽はサッカー。

後はちよいちよい単発コメディイを。

赤佐の告白、秋馬の家庭の事情など。

何気に春吉、苦労してます。

ストーリーとしては、葉城高校球技大会開催！！

皆がそれぞれスポーツで勝負をする！！

【青上強襲篇】

第43話〜第61話

三姫史上かなりシリアスな回だったと思います。

正直、作者としても書くか書かまいかなり迷いました。

テーマとしては、たまには男キャラをかつこよく書きたい、そんな感じですよ。

古宇宮や牛溪など、結構マニアックなキャラ達が初登場。

冬希の実家や古宇宮の過去、夏哉秋馬冬希のその後などの沢山の伏線を残して終了。

ストーリーとしては、突然春吉の周りで失踪者が多発。何となく気にはしていた春吉だが、その日の帰りに謎の二人組が現れ……。

【日常篇・夏】

第62話〜第68話

青上強襲篇でかなりシリアスな展開になってしまったので、再びゆる〜く行くこうかなと思ひ、犬のこがねを登場させ、ほのぼの感無理矢理かもし出させました。

あとは、学校生活感を取り戻すため、先輩やら期末試験やらで強引に学園感を出したり……。

つまりは無理矢理強引にほのぼの感を出した回です。

ストーリーは・・・犬が家族になり、期末が近づき、とある先輩と知り合いになり・・・。

【夏休み篇】

第69話〜現在継続中

夏休み篇パート1

【夏祭りライブパート】

第69話〜現在継続中

夏休み篇のパート1は夏祭りの音楽ライブ!!

最近疎かにしてきた、春吉とヒロイン達とのラブコメメインで行こうかなと。

さらに新キャラの後輩も登場。

美羽、楓、小夜、亜希、本谷先輩、麗。ヒロインが結構揃ってきた!!

ストーリー・・・ある日、春吉は赤佐から夏祭りの音楽ライブの誘いを受ける。そして、バンドの練習が始まるのだが、これから春吉はいろんな苦勞をする事になる・・・。

夏休み篇パート2

ちよつとだけ予告。

パート2では、球技大会本戦篇で回収しそこねた、あのスポーツや春吉の過去がメイン。

あまりシリアスにはしない予定。

第78話 お風呂

「……さっきはああ言ったものの……」

楓の両親に無断でウチに楓を泊めるなんて、なんか悪いような……。

現在深夜12時半。

俺は今、誰も使っていない両親の部屋に、布団敷いています。

もちろん、あのちびっ子のための。

「よし……後は枕とシーツと……」

……つい、沢那家で何があったんだろっ？
親にバンドを反対されて家出っ……。

どっかのミュージシャン希望かよ。

で、その等の本人は、

「あつたけえ〜」

現在入浴中。

仕方なく風呂を沸かしてやったら、家主の俺よりも先に入りやがった。

「チクショー、俺は召し使いか？ 召し使いなのか？」

とか言いつつも、布団の準備はOK。

「よし、こんなもんだろ」

後は楓が風呂から上がるのを待つだけ。

「とりあえず、PCで動画でも見て時間潰すか・・・」

たまにはニコニコする動画でも見ようかな。

「あゝ、超さっぱりしたあゝ」

数分後、大魔神は風呂から上がった。

どうやら、女性は長湯と言うのは個人差があるらしい。

少なくとも、大魔神にはあてはまらない。

「楓、2階の隅部屋に布団敷いといたから、そこ使いな」

俺の視線はPC、意識は楓に。

「おう、サンキューな!!」

そう言うのと、楓は階段を上り、2階へ。

「さてと・・・」

俺もそろそろ風呂入って寝ようかな。
ちょうど動画も見終わったし。

「タオルとパジャマと・・・」

・・・あ、そう言えば。

「アイツの持ってきたスニーカー・・・」

前話では触れなかったが、楓は今回、着替えやら何やらをスニーカーに詰め込んで持参してきた。

で、そのスニーカーの中身が・・・。

「・・・」

何故だか、廊下に散らばっていた。

「何故？」

「アイツあれか、片付けが出来ないタイプか」

廊下に散らばっていた漫画や小物（奴の私物）を尻目に、俺は風呂場へ。

「全く……ってか楓の漫画、まさかのサ○デーの漫画ばかりじゃねーか!?!」

「コ○ン、メ○ヤァ、結○師等……」

「あの野郎……俺がジャ○プ派と知っての嫌がらせか!?!」

ONE PIECE、NAUTO、BLEACH……。
ジャ○プ作品は英語タイトルが多いな……。

「確かにマガ○ンもサ○デーも面白い。しかし、やっぱり一番はジャ○プ……!」

海賊、忍、死神、警察、マフィア、侍、美食家、漫画家、不良、妖怪、学生、丸だし・・・ジャップには色々います。

「後で楓にはガツンと言ってやらないと・・・」

ガチャッ

「ってか、最近は週間よりSQ・・・ブオツ!？」

小言を言いながら、脱衣所に入った俺。

で、

「な、ななな・・・!？」

俺は床を凝視。

「こ、これって・・・!？」

そこにあっただのは、猫さんがプリントされたパンツ。

「アカンやる・・・」

これはまた、幼い子が履きそうな・・・って違あ〜う!!

「・・・大魔神か」

彼女いない歴〃年齢の俺にとって、この事態の対処の仕方が分からない。

「……とりあえず、洗濯機の中に入れて……ブオツ!？」

洗濯機の中を覗いた俺はさらにパニック!!

「何故だ!？」

何故かウチの洗濯機の中には、いくつかの女性物の下着や衣類が
……。

カチンッ

「あの野郎……」

バタンッ!!

「おい、やい、テメエ、そんなに童〇いじめて何が楽しいんだコ
ラア!!」

楓が使っている元両親の部屋に突入!!

「うわっ、突然入って来るな、ビックリするだろ!！」

んな事お構いなし。

「テメエな、女慣れしてねえ男いじめて、何が楽しいんだコラア
!！」

「は？」

「お前な、あれは非リア充にはキツイぞ、軽くいじめだぞ!！」

「え？」

「第一、テメエにはデリカシーって物がねえのかよ!？」

「春吉？」

「プライドはねえのか？ ああいうのはな、そう簡単に男に見せ
ちやいけないんだよ」

「……」

「もつと恥じらいを持って!！」

「……俺、こんな所で何言ってたんだ？」

「つてか、もはやもう後戻りは出来ない。」

「恥じらい……って何だよ？ つてか何の話？」

「貴様ツ、脱衣所行ってみるチビ助!!」

「ち、チビ……」

ブチッ

あれ？

今何かキレるような音がしたような……？

「……か、楓さん？」

「おい、チビ助ってのは何だ？」

うおっ、スゲエ戦闘オーラ!!

「あ、あの、それは違うん……」

「お前、地獄に行きてえらしいな」

えー

まさかの形勢逆転。
つてか、

「まさかのチビ助でキレたよこの人!!」

「……地獄の扉は開いたぞ」

あ、やば……

声に出してしまった!!

「覚悟ッ!!」

「うわっ、ちょ、タンマッ!!」

身体的コンプレックスは口に出したらアカン。

「おりゃああああああああ!!」

バツコーンッ!!

「な・・・」

楓の一撃のパンチで、ダンスにひびが!?

「ヤバイ・・・あれ喰らうとマジヤバイ・・・」

最悪、この世からおさらばに・・・

否、それだけは嫌だ!!

だったら・・・

こっちからも攻める!!

「フツ・・・調子に乗るなよ、黄色いパジャマを着た大魔神さん
!!」

「大魔神だと・・・やっぱり殺す!!」

・・・怖がるな、俺。

相手はただの小さい女の子ではないか。
ただちよつと、男っぽい少女ではないか。

俺よ、そんな奴に負けたままでもいいのか？

否、それは男として、プライドが許さない！！

「ガオオオオオオオオオオオオオオオオ（春吉精一杯の威嚇）！！」

「が、ガオオ！？」

相手が動揺している。

今だツ！！

「セイツ！！」

相手の懐へGO！

「なツ、させるか！！」

やば、楓の野郎が反応しやがった！！
凄い俊敏！！

つて、

「しまった！！」

「えっ・・・」

楓の反応に気を取られ、バランスを崩した俺。

で、

「うおっ!!」

変な姿勢で楓にDive!!

第78話 お風呂（後書き）

ども〜です。

えっと、突然ですが……申し訳ありません。

作者の都合上、三姫は9月14日までの約10日間、休載させていただきます。

本当に申し訳ないです。

理由としては、まあ、これから学校で文化祭が……で、準備とか色々あって……。

と、言う事で、多分いくらか執筆時間はあると思うんですが、とりあえず14日までは休載をさせて頂こうかなと。

と、言う事でよろしくお願いします。

第79話 すれ違い（前書き）

長らくお待たせしました！！

三姫連載再開です！！

あゝ、結構長かったな・・・。

作者の用事も済んだので、しばらくは通常通りに掲載していきます
！！

あと、今回から後書きスペースにて後書きトークやります。
まあ、簡単な小ネタみたいな物です。

第79話 すれ違い

「うおっ!？」

「ちよっ!！」

ドツス〜ン!!

変な姿勢で楓にD i v e!!

で、共にバランスを崩して・・・

そして二人仲良くタンスの角に後頭部ゴ〜ン!!

「痛っ!！」

ぐあっ・・・あ、頭に星がつ!!

「あんツ・・・」

「・・・は？」

・・・何だ？

今、声がしたような？

「ちよ、春吉、早くどけ・・・あッ!！」

「・・・」

下から声がした。
で、下をLook。

「お、おい、見てないで早く……うっ、ど……け……あッ
!」

「……げ」

今、気付いた事。

俺、今大魔神さんに馬乗り状態!!

で、俺の手の位置が……。

「春吉、早くどけ……くう……あうッ……!!」

「わあ〜!! すまんゴメン申し訳ない!!」

アカ〜ン!!

俺は音速の速さで楓の上からどきました。

「わ、悪い!! あ、わ、悪気は無かったんだ、でも悪い!!
ごめんなさい!! 許して!!」

マツハの速度でローリング土下座を執行。

一方の楓は、顔を真っ赤にしながら俯せに。

……起きないの？

・・・シバかないの？

「か、楓さん？」

「一回出る！..！」

はい？

「え？」

「いいから一回部屋から出るッ！..！」

「あ・・・は、はい！..！ 今直ぐに！..！」

あゝ、参ったなあゝ。

「..！..！..！」

翌朝、俺はリビングに行くと、机の上に・・・

『昨日は泊めてくれてありがとう』

の一文が書かれた置き手紙が。

で、この家から楓の姿が消えていた。

「はあ〜」

参ったぞ、これは・・・

俺は今作ったコーヒーを一口。

・・・苦い。

で、今日も休日練習。

「暑いメンドい寝たいチクショー!!」

愚痴しか出ねえ!!

しかも・・・

「楓と顔合わせにくい〜!!」

超気まずい!!

さらに・・・

「デブやだ〜!!」

汗臭デブとのメンタル強化型特訓嫌あ〜!!

おまけに・・・

「まだ歌詞出来てねえ〜!!」

赤佐に頭下げの嫌だあ〜!!

正直、休日練習行きたくねえ〜!!

「おいっすー!!」

まさかの31度という猛暑の中、俺は汗だくで音楽室へ到着。

「レッツ、クーラーウィンドプリーズ!!」

頼む、音楽室のクーラー付いててくれ!!
キンキンに冷えていてくれ!!

ガチャ!!

「カモン、クーラーアー!!」

俺はドアを開け、音楽室へ。

その時、俺は凍った(フリーズした)。

音楽室のクーラーは付いていなかった。
つまり、教室の温度は30度越え。

しかし、俺はその気温の中、凍ったのだ。

・・・目の前のやり取りを見て。

「グフフ、君、いい体してんね!?!」

「ちよ、止めて下さい!?!」

「グフフ、恥ずかしがらなくていいよ、グフフ」

「止め、ちよ、放して・・・」

「さあ、今からお兄さんと遊ぼう!?!」

「いい加減止めて下さいつ!?!」

・・・読者の諸君よ、何が起きているか分かったかね?

では、分からない人のために、超簡潔に説明しよう。

「おい、何してんだデブ」

ガッン!?!

「痛いっ!?!」

俺はてんとう虫「トチの頭にグー。

「せ、先輩・・・」

一方の麗は安堵の顔。

・・・つまり、てんとう虫が音楽室で麗を襲っていたのだ。

「おいデブ、テメエ警察に引き渡すぞ」

「なっ・・・き、木山、貴様コーチに向かって何を・・・」

「黙れデブ虫!!」

相変わらず汗臭っ!!

「テメエ何生徒襲ってんの!?! 犯罪ですよコノヤロー」

「グフフ、最近は二次元に飽きてきてね。やっぱり三次元だなんて思っ・・・」

「お前はアレか、バカなのか!?!」

「このデブキモい。」

「グフフのフ、やっぱり女の子の食べ頃は高校一ね・・・」

「セイツ!!」

ドスッ!!

「ぐはっ!!」

デブの腹にグー!!

「キモいんだよデブ虫、あんたはアレだ、変態だ!!」

「グムム・・・くそっ、覚えてろよおっ!!」

てんとう虫はザコの悪役みたいな台詞を残し、音楽室を去っていった。

「何なんだ、あのデブ虫は・・・」

もはやガチ犯罪。

・・・って、それより!!

「泡岸、大丈夫か？」

俺は教室の後ろでぽかーん状態の麗の所へ。

「だ、大丈夫です・・・」

顔真っ青。

絶対大丈夫じゃない。

「お前、本当に大丈夫か？ 顔真っ青だし、足震えてるし・・・」

「だから大丈夫・・・うっ」

バサッ・・・

「うおっ!？」

その時、麗はバランスを崩し、俺の方に倒れてきた!!

い、いかん!!

「危ない!!」

で、俺は抱きしめるような感じで麗をキャッチ!!

「うおっ、ちょ、だ、大丈夫か泡岸!？」

「す、すみません、足が震えちゃって・・・」

ってギャ〜!!!!

あ、泡岸の胸が俺の胸板に当たって・・・

トクン、トクンって、心臓の鼓動が直に・・・!!

あ、アカ〜ン!!

「すみません・・・音楽室に譜面台を取りに来たら、あの変な人がいて・・・」

「あ、ああ・・・」

や、ヤバイ・・・

顔近い・・・

息が・・・

鼓動が・・・

俺の理性が・・・

・・・けど、俺がどくと間違ひなく泡岸は倒れる・・・。

・・・耐えろ、俺。

その時だった・・・

ガチャー！！

「おいーっすー！！」

今、音楽室に入って来たのは・・・

「・・・あ

「・・・ッ」

楓・・・

「あ、ちよ、かえ・・・」

ヤバイ、今の状況マジヤバイ！！

だって、誰もいない音楽室で、一年生の女子と抱き合っている画
って……

「……ッ!!」

楓は数秒間のフリーズ後、足早に音楽室から去っていく。

「楓ッ!! ちょっと待て……」

正直、追いかけてい
けど……

「……」

今ここで追いかけると、泡岸が……。

一方の泡岸は、超気まずそうな顔。

「……参ったな」

困ったぞ……。

第79話 すれ違い（後書き）

後書きトーク！！

権三郎

「いいなあ〜・・・」

春吉

「何がだよ？」

権三郎

「お前さあ、最近ハーレム状態だよな」

春吉

「は？」

権三郎

「生徒会長だの、財閥だの、後輩だの、貴様はか弱き少女達を持って遊び過ぎた！！」

春吉

「お前何言ってるの？」

権三郎

「それでだ。春吉、悪いが主人公代われ」

春吉

「・・・・・・・・」

権三朗

「俺だつてハーレムしたいよ!! 高校男児の夢だもんハーレム!!」

春吉

「……………」

権三朗

「お前だけいい思ひは許さん!! 主人公代われ!!」

春吉

「……ハーレムか、確かにお前にも味わって欲しいな……この感動を」

権三朗

「じゃ、じゃあ……」

春吉

「だが断るッ!!」

権三朗

「な、何ッ!!」

春吉

「貴様はムダマッチョのヤンキーさん達と逆ハーでもしてろッ!!」

権三朗

「逆ハーレム……」

春吉

「・・・」、権三郎？」

権三郎

「男同士の・・・遊び・・・」

春吉

「おい、権三郎、意識あるかあ？」

権三郎

「フッフッフ・・・」

春吉

「コイツ、何かに目覚めやがったか!？」

赤佐

「次回、三姫第80話“夏の始まり”!!
を取るのか!?! お楽しみに!!」

春吉は楓と麗、どちら

春吉

「ってか、赤佐がシメかよ!？」

権三郎

「フッフッフ・・・」

第80話 夏の始まり

「本当にすみませんでした・・・」

「い、いや、大丈夫だから!!」

俺は麗を視聴覚室まで連れて行き、そこで別れた。

「ふう・・・」

困ったな・・・

「あれ？ 楓がない・・・？」

その後の練習、楓は来なかった。

「春、楓知らない？」

「ん？ あ、ああ・・・」

正直な事を話すべきか・・・。

・・・でも、その正直な事が口から出てこない・・・。

「春、何かあった？」

「あ？」

美羽はキーボードで「かえるのうた」を演奏しながら聞いてきた。

・・・何故、かえる？

「何か変な顔してるよ？ 嫌な事でもあったの？」

「いや、その・・・まあ、色々あってな」

楓と麗

俺はどっちを優先すべきだったんだろう・・・

「色々ねえ・・・まあ、春らしいか」

「は？ 俺らしい？」

いつの間にか「かえるのうた」は「大きな栗の木の下で」に変わっていた。

だから何故？

「春は何か悩んだりすると、いつも顔に出るもんね」

「そうか？」

自覚はないが・・・

「意外と後に引きずるタイプなのよね、あんたは」

「・・・・・・・・」

曲は「大きな栗の木の下で」から「めだかの学校」に変わっていた。

だから何？ その幼稚園の歌シリーズ？

「・・・・・・・・まあ、もしその悩みが誰かと喧嘩したとか、悪い事しちゃったとかなら、早く仲直りした方がいいよ」

「仲直り・・・・・・・・」

「そう。ずーっと仲悪いままじゃ、気まずくて大変でしょ？」

「気まずいて・・・・・・・・」

微妙な理由だな、オイ。

けど・・・・・・・・

「でも、確かにそうかもな・・・」

みんなでひとつのバンドを作る。

今、楓とあだこだを起こしている場合じゃない。

・・・謝ろう。

色々、全部、謝ろう。

そして、誤解を解こう。

しかし・・・

とある平日の学校

「な、なあ楓・・・」

「・・・」

し、シカト……

で、翌日

「か、楓さん？」

「……」

はいシカト。

さらに翌日

「か、楓様？」

「……」

シカト頂きました。

で、放課後のバンド練習、楓は一応来るんだけど……

「楓、スマンがマイクを……」

「……」

シカトですね。

「はあ〜・・・」

「現在、バンド練習後の帰り道。
最近はバンドのせいで、バイト休み気味だなあ・・・。」

とつとつ月日は流れ、明日は一学期の終了式。

夏休み篇開始から約10話にて、やっと夏休みに突入だよ・・・。

あれこれもう、楓とはかなりの回数会話してない。

「マジ困った・・・」

どつやら、まだ楓は家出の身らしく、今は亜希の家に泊まっ
てい
るらしい。

「この際、亜希に取り繕ってもらおうか？」

でもな〜・・・。

「はあ〜、どつとつよつとつ・・・」

で、今日は終了式。

「おはよー」

俺はいつも通りに学校へ登校。

「お早う春吉!!」

「おう、木山か」

「おはよっス!!」

クラスの野郎共は既に登校していた模様。

「明日から夏休みか・・・」

俺が自分の席に着くと、後ろの席の赤佐が話し掛けてきた。

「だなあ〜」

「でも、7月中はバンド練習で忙しくなるんだろうなあ〜」

「だなあ〜」

「春吉、7月は予定空けとけよ」

「だなあ〜」

「・・・春吉？」

「だなあ〜」

赤佐の話を9割5分2厘無視。

俺は前の方の席を見ながらぼんやり状態。

・・・まだ楓、来てないのか。

「春吉・・・人の話、聞いている？」

「だなあ〜」

「・・・」

「だなぁ」

「……春吉、確かお前、期末テストの補習あったよな？」

「だなぁ……え？」

今、何か聞こえた？

「7月中に補習は何回あるんだ？」

「補……習だと……」

……忘れてた！！

「練習とかぶったらマズイから、一応聞いときたくて……」

「……赤佐」

「な、なんだ？」

「それ、禁句の方向で」

こうして、音楽と勉強ばかりの俺の夏休みが、幕を開けたのだ。

第80話 夏の始まり（後書き）

後書きトーク！！

美羽

「ねえ春、期末で赤点取ったって言ってたけど、実際何点だったの？」

春吉

「うわあ、赤点とかマジ禁句！！」

美羽

「禁句って・・・いいから教えてよ！ 確か化学と数学だけ？」

春吉

「わーわー、聞こえない！！」

美羽

「ちょっと、素直になりなさい！！」

春吉

「聞こえない、教えなさい、知らなさい」

美羽

「・・・いいじゃん、別に減るもんじゃないんだし・・・」

春吉

「俺は天才なんだ、だからこんなテストには縛られる事なく生きるんだ！！」

美羽

「……………」

春吉

「さ、さてと、そろそろ帰る……」

美羽

「……春いいの？ 教えてくれないと、さっきこっそり春のかばんから抜いた、この猫耳キャラがプリントされたラノベをビリビリに……」

春吉

「なっ……メイドなアニマル5巻！！ いつの間に……」

美羽

「さあどうする春!?!」

春吉

「化学が18点、数学が23点です」

小夜

「……………次回、三姫第81話“青春謳歌”夏休み篇本格始動……にしても、低い点」

春吉

「なっ、小夜、いつの間に……」

美羽

「……軽く引くわ」

春吉

「引くな!!」

小夜

「……………」

春吉

「だから引かないでくれ!!」

三姫総集編 Vol.1 (前書き)

どうもー!!

今、文化祭の代休のため、家で超グダグダしている作者です!!

今回は、番外編 Spring Stormの方が本編ゴールデンウィーク篇に突入したということで、まさかの振り返りがてらの総集編!!

Vol.1は勿論ゴールデンウィーク篇!!

本編に加え、総集編のために大量加筆しました!!

Vol.2以降は Spring Stormでそのシリーズに入ったら更新する予定です。

では、まだモブキャラ時代の本谷先輩も登場の総集編、どうぞ!!

5月・・・

俺、木山春吉が葉城高等学校二年生になってから約一ヶ月がたった。

「野郎共、明日からはゴールデンウィークだ！」

『ファイバー！！！！』

ウチのクラスの担任、わなみたつ和波辰が叫ぶと、野郎共はみんなで仲良くファイバー！！！！

俺もファイバー！！！！

・・・平和だな。

「ファイバー！！！！？」

『ファイバー！！！！』

「マックス！！！！？」

『ウエーバー！！！！』

「ザ・ワールド！！！！？」

『無駄無駄無駄ア！！！！』

何かの宗教団体みたいだな、ウチのクラス。

ま、とにかくもうすぐゴールデンウィークだ。

「と、言うわけで明日、映画見に行かね？ 暇な春吉君」

休み時間、俺の机の周りには男友達がいっぱい。

「明日？ 映画館なんて混むんじゃない？ あと暇なは余計だ！！」

「いいじゃねえか、俺、今見たい映画あんだよ」

「んだよ、何見たいの？」

「そりゃアレだろ、アレ！！」

「ああ・・・成る程」

明日は確か・・・バイトは無し。

財布に余裕は・・・若干あり。

OK、明日はF---B---D---a---y---sだな。

「じゃあ後で集合場所とかメールするから！」

「OK!!」

ひゃっほーい、明日の予定が出来た!!

・・・はい、つまり暇だったんです。

その後、眠気と言う軍勢と戦争しつつ授業を受け、なんとか4時間目の世界史を乗り越えた。

「お昼だ!!」

「飯い〜!!」

野郎共が適当に机を寄せ合い、弁当やパンを食べはじめる。

さてと、俺も昼飯にするか。

「春吉、お前今日も自作弁当？」

「イエス・・・あ」

はい、毎度のパターン

「弁当忘れた・・・」

嘘だろ・・・

「はい残念〜!!!」

「一人で学食行ってこ〜い!!!」

「今日は購買やってねえからな!!!」

こ、コイツら、ヘラヘラ笑いやがって・・・
でもこれが現実、悲しいな・・・。

「・・・・・・・・」

俺はスツと立ち上がり、半泣きしながら食堂へ・・・・・・・・。

チクシヨー!!!

んで、食堂。

一人で食堂なんていつ以来だろうか？

あーあ、他の奴はみんな2、3人でテーブルを囲っているというのに……。

とりあえず俺は券売機の前へ。

……何にしようか？

カレー？魚定食？うどん？はたまたナポリタン？

「うわ、見るよあいつ、一人で学食とか……」

「友達なし夫か？」

「うわー、マジ悲しいやつだな」

「もしかして、いじめか？」

……周りのひそひそ声がまる聞こえなんですけど……

よし、心が死んじゃう前に早く食事を済ませよう！！

……あれ？ 何故だか目から汗が出そう。

「……春吉か？」

ん？ 誰かが俺の事呼んだ？
ってナーウ！！ 誰か知り合いに見つかった！？
恐る恐るバツクをルツク！！

「はは、やっぱり春吉だ！！」

「……………春吉？」

「……………まさか、一人で食事しようとしてた？」

そこには、こんな場面で会いたくない奴らがいましたとき。

「……………あ、アハハ……………はあ、お前達か」

楓に小夜に美羽……………
最悪なパターンやな。
絶対イジられる。

……………今、僕はこの学校でも屈指の可愛いさを持つ女の子三人と、
学食を食べています。
成り行きで。

まあ、良いのは見た目だけで、中身はアレですが……。

「みんなさ、このゴールデンウィーク何か予定あるの？」

美羽は鮭定食を食べながら、話題を振る。

「あたしは毎年恒例の柔道大会」

カレーをガツガツ食いながら答える楓。

ちなみにライスは大盛り、ルーは激辛。

これで何故、こんな細身の体型を保てるのだろうか……。

「今年こそは絶対優しよ……ゴホツゴホツ！」

あ、楓むせた。

「小夜は？」

「……いつも通りバイト」

うどんを食べながら答える小夜。

確か小夜ん家は母子家庭で、さらに7人姉弟。

長女の小夜がバイト等をしないと、生活がキツいんだとか。

「じゃあ……友達がない春吉君は？」

カッチーン

「友達と映画……！」

ざけんな！ 俺にもフレンドくらいいるわッ！！

・・・んな事よりも・・・。

「ははぁ・・・春にフレンドなんているのかねえ〜!？」

ニヤニヤ顔の美羽がウザイ。

・・・んな事よりも・・・うん。

俺は話の合間をぬって、ちらつと周りを確認。

周りの野郎共がこつちを凝視。

周りからの視線が・・・痛いな。

学校でもかなりの美少女三人と食事をしている冴えない男子。
・・・野郎共からしてみれば、かなりウザインだろうな。

ハハッ、優越感。

「じゃあ美羽は何か用事あんのか？」

俺がテーブルに視線を戻すと、楓が美羽に質問中。

「私は・・・まあ、買い物とかいろいろ」

ハハハ、これはまだ予定がないと見た。

「本当はどうなんだよ!？」

「なっ、ほ、本当よッ!！」

少し焦りだす美羽。

「じゃあ誰と行くんだ!？」

「うっ……」

……勝った(ニヤリ)

「本当はお前の方がフレンドいないんじゃないかねえのか!？生徒会長さん!！」

「なっ……」

追い打ち成功!!

……実は俺、ちょっとSです。

「は？ 何言ってるんだ？ あたしが友達だろ？」

楓ッ!! なっ……え、援軍だとお!!

「………私も」

小夜まで……

「二人共おっ!!」

あらら、感激中の生徒会長さん。

あいつ、昔から人見知り激しいからな。

楓は他人とケロっと仲良くなるし、小夜は何だか人を寄せ集める体質だし……。

ぶつちやけ美羽は、他人の前では内面的なのだ。

「・・・何なんだ？」

「・・・俺、孤立してね？」

「・・・とりあえず、さっさとこのナポリタン食って、食堂を後にしますか。」

。 八八八、俺、本当に心から友達と思える奴、いるのかなあ・・・

多分、いる・・・うん、多分。

で、月日は流れ・・・

やってきました、ゴールデンウィーク初日！！

で、今日のご予定は野郎共と映画・・・のハズでしたが！！
さっきこんなメールがッ！！

“悪い、やっぱり今日の映画中止！！　タカとナカジーがインフルでダウンしたそうなの。

なので、今日は中止。

クレームはインフルの二人まで

By 権三朗”

ちなみに、タカとナカジーってのは、一緒に映画行くハズだったメンバー。

で、今俺は・・・

一人映画館の前。

さみしッ！！

つーか俺が映画館に到着した時に来たこのメール・・・タイミン
グ悪くね？

どうしよう・・・一人で映画見るか？

否、悲し過ぎる。

「ちて・・・どうしたものか・・・」

このまま帰ってもいいのだが・・・それじゃつまらない。

「・・・とりあえず腹減ったな」

キュグルル〜っとなる腹。切ない。

ちなみに現在午前11時半。

空は快晴、気温は程よい。

「・・・よし、まずはメシにするか」

とりあえず俺は空腹を満たすため、近くのファーストフード店へ。

映画館近くのファーストフード店。

ここはテーブル席以外にカウンター席もあるので、一人でも利用しやすい。

「いらっしやいます〜!!」

営業スマイルを浮かべ、店員はレジの前へ。

・・・やはり、昼時だけあって店内は混んでるなあ〜・・・。

特に若いヤツの集団がいっぱい。

「店内でお召しあがりですか？」

「あーいや、持ち帰りで」

店内での食事を断念。

あんまし人混みは好きじゃないし。

「ではご注文の方をどうぞ」

結局、俺はツインチーズバーガーセットにうまうまチキン、そしてホットアップルパイを注文。

現在俺はその注文した品が完成するのを待っている所です、はい。

・・・俺は何となく携帯を取り出し、時刻を確認。

・・・そう言えば今日、楓の出場する柔道大会開催日だったっけ。
頑張ってるのかな？

「・・・番号札30番でお待ちのお客様？」

俺はハツと気付き、手元の番号札を確認。

あ！30番だ！！

いかんいかん！！

「あ、はい！！」

俺は店員の元へ・・・あれ？

「・・・お客様、お品物でございます」

「あ、はあ・・・」

俺は品物を受け取りながら、店員の顔を確認する・・・ってやっぱり。

「よっ！小夜！！」

「・・・え？春吉？」

やっぱり小夜だ。

向こうも今気付いたみたい。

「ここでバイトしてんだ！？」

「・・・(コクリ)」

相変わらず無口・・・そんなんでやっていけないのか？
それより・・・
制服似合ってるな・・・。

「・・・・・・・・ん？」

「ん？ああ、いや、何でもない」

首をちょこつと傾けて、ん？、は破壊力抜群。

これは一般青少年には刺激が強すぎる！！

・・・俺にもこの刺激は強すぎる。

「あ、俺、そろそろ行くから」

いかんいかん、これ以上ここにいと小夜のバイトの邪魔になっ
てしまう。

邪魔物はさっさと退散すべき！！

「バイト頑張れよ！」

「・・・・・・・・あ！！」

俺が店から出て行くこうすると、小夜に呼び止められた。
何？

「・・・・・・・・えつと」

「ん？」

「ありがとうございました（ニコッ）」

ビブラバツ！！（心の中での吐血の音）

た、太陽の笑みやツ！！

「あ、ああ・・・」

久しぶりに見たな・・・小夜の満面の笑み（営業スマイルだが）。

俺はファーストフード店を後にし、一旦帰路に着く事にした。
家帰ったらゲームでもすんかな。
勿論、やるのはあの有名なアカヒゲさんのヤツ。

俺はチャリスピードを少しだけあげる。

風が気持ちいいえ〜！

・・・今なら時を止める事が出来るかも！！

まあ、無理だけど。

「俺だって、スタンドさえあれば・・・」

その時、俺は道路右側にあるアリーナの駐車場に、見た事ある奴を発見！！

・・・どうしよ？

暇だし、行くか。

俺はチャリの方向をアリーナ側へ変更。

少しスピードを上げ、奴に接近！！

わお、風がすげえ！！

つてかチャリ止まんねえ！！

ピンチ！！

んな事より、

「そこのお嬢さん、こんない日に一人で何やってんの？」

「え？」

俺の声に奴

美羽が気付き、くるっとこっちに振り向いた。

「は、春？」

「イエス、Springです！！」

つまらんシャレを言った所でチャリから降りる。

「何してんの？ こんな所で？」

まさか本当に友達いないの？ コイツ！？

「何って、楓の試合見に来たに決まってるじゃない！！」

「カエデ！？」

あ、そうか！

今日の楓の試合、ここのアリーナでやるんだっけ！！

「春は何してんの？」

む・・・何と答えるべきか・・・

「えっと、今スタンド使って時を止めてました」

「・・・本当は？」

「ファーストフード店行って昼飯調達！」

「ははん・・・一人で！？」

このにやけ顔憎たらしい！！

「ハッハッハ、俺は一人ではないッ！！ いつも心にはもう一人の自分が・・・あ？美羽？」

「・・・」

そ、そんな目で見るなあ〜!!

「……とりあえず、春も暇なんだ」

「まあ……うん」

「じゃあ一緒に柔道の試合、見ない？」

「楓のか？」

「うん。だって他の友達みんな柔道興味ない、って言うし……」

「まあ……暇だし、いいかな……」

「おう、じゃあ見に行こうぜ!!」

本日の暇つぶしが出来ました。

アリーナ入場料&試合観戦料は無料。

「えつと・・・」

俺はアリーナに入場した時に貰った試合表を確認する。

「楓は女だから(当たり前)・・・午後0時から第三アリーナで
葉城高校女子VS岡田工業高校女子・・・か。うわ、初戦は岡工か・
・・・」

岡田工業高等学校

まあ、ぶつちやけ不良の集まりみたいな学校。
ヤンキーやスケバンなどと言う絶滅危惧種が数多く在籍している
らしい。

「岡工か・・・楓、大丈夫かなあ・・・？」

心配そうな美羽。

「大丈夫だよ、あいつは半男生物だから。そんじよそこらのメス
共には・・・」

「誰が半男生物だって・・・？」

・・・背後からパキッポキッと言う関節音が！！

「あ、楓！！応援にきたよ！！」

美羽は笑顔、俺はヤバスな顔。

よし、勇気を持って振り返えろっ。

くるっ!!

「ハロー春吉」

そこには、鬼の形相をした楓の姿が・・・

「あら〜可愛いお嬢さん、お名前は何ていうの!?!」

木山流会話術、三ノ型、初めて会った風に話す。

「……………」

い、威圧感スゲー!!

「もう一度聞こう、誰が半男生物だ?」

「…………権三朗の事です、はい」

咄嗟にごまかす俺。

…………しかし、このごまかし方だと、権三朗は半分女って事に…………

フフツ、キモい。

「本当か?」

うおっ、め、めめめ目が怖え〜!!

「ほ、本当です……………」

権三朗力マ疑惑。

このネタで乗り切ってやるぜよ!!

「まあ・・・今日はいいか」

楓はふう〜ツとでつかいたため息。

ああ・・・一安心。

「楓、どうしたの?」

楓のため息に美羽が反応。

「いや・・・何でもない」

ハハハ、俺は気付いた!!

コイツ、緊張してんな!!

「おい楓、今日は確か団体戦だろ? お前ウチの何番目なの?」

恐らく先鋒と見た!!

「・・・大将」

「・・・は?」

大将?

大将って、あの裸で、おにぎりで、絵を描いている・・・アレか?

「どうしよう・・・めっちゃくちゃ緊張すんだよ」

・・・これは一大事だ！！

で、その後。

「楓、勝てるかなあ〜・・・？」

「勝てるだろ。あいつ半男生物だし」

うん、普通に勝つだろな。

今第三アリーナの2階観覧席に俺と美羽はいます。

もうすぐで試合開始ってとこかな？

「にしても、あいつが大将とは・・・世も末だな・・・」

「世も末って・・・楓は結構強いらしいよ？」

「らしい・・・」

俺と美羽が客席でゴダゴダしていると・・・

「ただ今より、女子柔道団体戦、葉城高校と岡田工業高校の試合を始めます・・・」

アリーナ内に響くアナウンス。

・・・言つとくが、俺はあまり柔道の事を知らない。多分読者の方に難しい事言っても分からないと思うので、見た感じに脳内実況します。

「春、アンタ誰と話してるの？」

「あーいや、何でもない」

おっと、いかんいかん・・・。

「では先鋒、葉城高校、本谷雛乃、岡田工業高校、佐橋小夏、両者前へ」

本格的に始まるみたいだな・・・。

葉城の先鋒は三年生なので、あまり知らない人だが。

「さて・・・どっちが勝つんだか」

「どっちが勝つって・・・葉城校に決まってるじゃない!!」

必死な美羽。

まあ、我が母校だからな。勝つては欲しいが・・・。

「試合始めっ!!」

おっと、いつの間にか始まっていた!!

アリーナ内の客はまばらなので声援は微妙!!

まあ、とにかく頑張れ！！

まあ、楓以外は割愛します。アハハ・・・

つーか今回の試合、先鋒、次鋒、中堅と葉城の連勝。
もう楓の出番はなし。

第一回戦は葉城の圧勝でした。

「呆気なかったな」

「呆気なかったね」

本当に呆気なかった。
まさに瞬殺。

「・・・見る美羽、アリーナの端っこにガツチガチになってる楓
がいるぞ」

アリーナの西側の選手入場口付近に、なにやら不審なおチビ高校
生が！！

「うわゝ、超ガツチガチじゃん楓・・・」

ロボットみたいにガシャガシャと動いている楓。
ハハハ、珍しいから写メっとこ。

「まあ奴は大将だからな・・・つーか、本当にあいつ大将なのか？」

確かにバカ力はあるが・・・

「大将だよ、だって楓はウチの柔道部で1番強いんだって!!」

「1番!？」

さ、三年生の先輩をさしぬいて1番!？」

「うん、だから二年生ながら大将になったんだって」

「ほへゝ・・・」

凄いな・・・さすが実家道場っ子。

「あ、次の試合始まるみたいだよ!!」

美羽の目がマジ・・・

確かコイツも柔道のルール知らないのに、よく試合に集中できるな・・・。

「次は・・・松田高校か・・・知らん名だな」

松田・・・松田・・・うん、やっぱり知らない。

「では、これより松田高校と葉城高校の試合を始めます」

まあ、試合は接戦。

先鋒はこっちが綺麗な背負い投げで一本、勝利。

次鋒はこっちが判定負けしてしまい、敗北。

中堅は逆にこっちが判定勝ち、勝利。

副将はまたまた判定負け、敗北。

現在二勝二敗、全ては大将、楓の手に！！

〔大将戦、葉城高校、沢那楓、松田高校、藤平華子、両者前へ〕

相手 藤平華子は見た目はゴツイゴリラ的な女性。

うわー、アマゾンとかにいそう。

逆に楓は高二の平均身長よりちょっと小さめ、しかも細身。

楓いわく、柔道は剛ではない、柔のスポーツらしい。

「あいつ、あんなんで勝てんのか？」

奴の足、ガクガクしています。ここからでも見て分かる程に・・・

「楓・・・」

美羽は隣で手組んでいます。神様にでも祈ってんでしょっか？

「では・・・始めっ！！」

お、始まった！！

・・・開始わずか10秒、決着つきました。

「ウェイッ！！」

気合いを入れる声？ もしくは奇声？ はたまた雄叫び？ を上げた華子は、早速楓に接近、柔道着の袖を掴もうとした。

その時・・・

「せいっ！！」

一瞬だった。

咄嗟に楓は華子の下に潜り、一気に背負い投げ！

な、何が起こったのか分からん程、速かった。

「い、一本！！」

奴は天才かッ！？

「す、凄いよ楓、すごーい！！」

美羽・・・跳ねるな、落ち着け。

「勝者、葉城高校！！」

ここから、他の仲間と笑顔で談話している楓が見えた。
・・・嬉しそうだな。

満面の笑みを浮かべてやがる。

その後、三回戦柳沼高校にはストレート勝ち。

四回戦須貝学園には次鋒が負けたが、その他は勝ち。

準決勝星村高校は、まさかの大接戦。

先鋒、次鋒が相次いで負けてしまったが、中堅、副将、大将の楓が何とか勝ち、決勝戦進出決定！！

「さっきの高校、ヤバかったよね？」

「ああ・・・星村は柔道の強豪校だからな。あの半男生物はよく頑張ったよ・・・」

さっきの対星村、大将戦は、まさに一進一退。

何とか楓があっちの大将に食いつき、ギリギリの所で勝ったのだ。

「次はいよいよ決勝・・・相手は征咲高校か」

ああ・・・外はもう薄暗くなつてら・・・。

・・・本当に葉城は決勝戦まで来たんだな。

「春、試合始まるよ!!」

「ん？ああ・・・」

いよいよ決勝戦。

泣いても笑つても、これが最後!!

「女子柔道団体戦決勝、征咲高校と葉城高校の試合を始めます」

アリーナ内にアナウンスが響く。

美羽の目はマジ。よし、たまには俺も集中しよう!!

先鋒戦

試合は葉城の勝ち。

こちらの先鋒は相手の足元を狙い、何とか相手をひっくり返し、固める。

んで勝った!!

次鋒戦

試合は征咲の勝ち。

次鋒の三年生は、今日はスランプらしく、呆気なく一本を取られ

てしまった……。

中堅戦

試合は征咲の勝ち。

まさかの二連敗。こっちの中堅の僅かな隙について相手が一本。

副将戦

試合は葉城の勝ち。

ここに来て葉城柔道部部长が意地を見せた。
綺麗な巴投げで一本。

そして……

「ついに来たか」

大将戦!!

「楓え〜!!」

美羽は手でメガホン作って叫ぶ。

きゃー恥ずかしい、隣にいるこっちの身になれ!

〔大将戦、征咲高校、尼郷夕香、葉城高校、沢那楓、両者前へ〕

二人は両陣営からアリーナ中央へ。

相手は至って普通の少女と言った感じ。

楓の方は、もう緊張はしてない様子。

「……ん？」

その時、ふと楓と目が合った。

中央へ移動中、たまたまこちらを見た楓と、目が合ってしまった。

「あ……………」

次の瞬間、楓は慌てて前を向く。

……ん？顔が……赤くないか？

とにかく楓は急ぎ足でアリーナ中央へ。

「……春、今、楓と目え合った？」

どうやら気づいていたらしい美羽。

「ん？ああ……………」

ふうん、とそっぽを向く美羽。

どうした？

「では、試合始めっ！！」

おっと、試合が始まってしまった！！

お互い、睨み合うようにジリジリ動き……

パツと楓が相手の襟を掴んだ……が、呆気なく降りはらわれた。

……あれ？

今、攻めるタイミングではなかったような……

「ん？」

また攻めた・・・しかし、また相手に降りはらわれ、しかも今度はこっちの袖を掴まれる始末。

今のは素人でも分かる、あれは攻めるタイミングじゃない。

何を焦ってたんだ、あいつ・・・？

「・・・ツせいっ!!」

また強引に攻めた!!

バカかあいつ、体格差を考えず、前に踏み込みやがった!!

そして・・・

相手は攻めて来た楓をすんなりかわし、足を引っ掻けそのまま倒す。

「・・・ツ!!」

楓の顔は、驚きに満ちていた。

「一本ツ!!」

審判がフラッグを上げる。

その瞬間、征咲応援サイドからは歓声が上がった・・・

『うおおー！！！！！！』

会場は熱くなる。

相手チーム大将はガッツポーズ&笑顔。

一方、楓は・・・下を向き、俯いたまま・・・。

ここからでも分かる、あいつ・・・震えている。

「楓・・・・・・・・」

隣を見ると、美羽が心配そうに楓を見つめていた。

「3対2で征咲高校の勝ち、礼！！」

『ありがとうございましたあ！！』

アリーナ中央での試合後の挨拶が終わり、両チームは自分達の陣
営へ。

「葉城、負けちゃたね・・・一応小夜に連絡いれと」

美羽は隣で携帯を取り出し、小夜にメール。

俺は何となくアリーナ西側の葉城高校陣営に目を向けると・・・

「・・・・・・・・ん？」

仲間達からの慰めの言葉を無視し、一目散にアリーナの外へ走り出す少女が一人。

「・・・楓？」

楓だ・・・

「ん？どうしたの？」

美羽の視線は携帯の画面、楓に気付いていない。

「あ、俺ちよっとトイレ行ってくる」

「はい」

俺はとりあえず席を立ち、アリーナの外へ。

アリーナの外へ出ると、外はもう真っ暗。

俺が辺りをキョロキョロ見渡すと、遠くの街灯の下に柔道着姿の少女を発見。

下を向き、拳は強く握られ、体は震えている。

「つたく、世話の掛かる女だ」

仕方ない、このスーパーハードボイルドマガナムの俺が直に行つてやるか。

少し小走りで楓の背後へ。

「おい、ちびっ子！」

俺が声を掛けると、楓の体はビクツと反応。

街灯の明かりに照らされてる楓の姿は、いつにも増して小さく見える。

彼女の着ている柔道着はしわくちゃになっており、足元には靴が履いておらず裸足のまま。

多分、アリーナからそのままここへ走って来たのだろう。

「どうしたんだよ？ だ、大丈夫か？」

「うつせえな！！」

帰ってきたのは、大声ながらも震えている声。

つつか、デカツ！！

「どうせ、あたしの事、馬鹿にしに来たんだろ！？」

「はっ！？」

その時、楓は体をこちらに向けた。

下に俯いているため、前髪が邪魔で顔が確認できない……。しかし、グツと顎を噛みしめ、涙が一粒、彼女の頬を伝ってアスファルトに落ちるのが分かった。

「……とりあえず、慰めないと!!」

「……お前は、良く頑張ったと思うよ、俺は」

これは事実。

確かに楓は、良く頑張ったと思う。

「……嘘だ、絶対そんな事思っでない!!」

「ほ、本当だ!!」

また一粒、涙が彼女の頬を伝う。アカンなコレ。

「か、楓……」

「うるせえ! ど、どうせあたしは、せ、攻めるタイミングも分からない、馬鹿な奴なんだッ!!」

「コイツ、あの事自分で分かってたのか。」

「……おい」

「もう……こんなんじゃない……示しが……つかねえ……」

ぼろぼろと涙が溢れてくる楓の瞳。

ふう、全く世話の掛かるヤツだ。

「お前は良くやった」

「……………」

「頑張ったよ、お前」

「……………」

「だからもう、泣くな……………」

……………もういいや、後でどつかれても。

俺は右足を一步、踏み出し……………

ギョツ！！

「えつ……………」

楓をそつと抱きしめた。

「お前は本当に良くやったと思うぜ。大将って言う超圧力の中、頑張つて戦つたんだ。スーパーすげえよ！！」

……………ここで絶対、楓からパンチが飛んでくるな……………
つと思つたけど、あれ？パンチが来ない。

俺はそーつと楓の顔を伺う。

そこには、涙をポロポロ流し、俺の胸の中で思いつ切り泣いてい
る、楓の姿があった・・・。

第81話 青春謳歌

「えー皆さん、明日は夏休みですが・・・」

・・・今、俺は気温30度越えのクソ暑い体育館の中で、校長の話聞いてる。

そう、終了式。

「私がまだ君達くらいの時は、まだ戦後間もなくてね・・・」

・・・暑い

・・・眠い

・・・つまらない

886

「・・・つまり、私の高校生時代には青春など謳歌する暇もなく・・・」

体育館の中は灼熱地獄。

周りでは次々と生徒が体調不良を訴え、保健室へ運ばれていく。

「青春と言えば、青い春と書きますが、そもそも漢字と言つのは・・・」

・・・俺の顔に、一筋の汗が。

ミンミンミンと、外で蝉が鳴いている。

雲一つない青空。

「……つまり、中国の歴史には、漢字が付き物であり……」
……長い。

もう20分は喋ってんじゃね？

「……なので、皆さんもしっかり漢字や歴史を勉強しましょう」

はあ、やっと終わったかな……？

「あ、歴史と言えば、かの有名な徳川家継が……」

……校長

貴様は鉄人か？

「やっと終わったあゝ!!」

「ふう〜・・・」

あれからさらに30分、人体に悪影響を及ぼす謎の病原体“コウチヨウノハナシ”と戦った俺達は、無事体育館から生還出来た事に喜んでいた。

「今回もまた、多くの犠牲者が出たな・・・」

犠牲者一覧

葉城高校総括、濱垣美羽将軍。

コウチヨウノハナシ散布開始10分後、校長の青春のくだり辺りにて戦死（熱中症）。

霊安室（保健室）へ。

葉城軍、重原権三朗二等兵。

コウチヨウノハナシ散布開始15分後、中国の漢字の歴史のくだり辺りにて戦死（貧血）。

現在火葬中（まさかの早退）。

葉城軍、荏咲小夜中尉。

コウチヨウノハナシ散布開始20分後、徳川家のくだり辺りにて負傷（脱水症状）。

現在治療中（ポ〇リと冷え〇タで）。

「ってか、あの校長、今日何話してた？」

この赤佐の質問はごもつとも。

始めは夏休みの注意、それから校長の学生時代の夏休みの話

学生時代の戦争体験の話

青春謳歌のくだり

青い春、つまりは漢字の話題

中国の歴史

漢字と歴史を勉強しよう

日本の歴史のくだり

徳川家とは

葵の家門の話

戦国時代は大変

昔に比べ、今は便利

皆さんは幸運

現代社会に感謝

そう、夏休みの話のはずなのに、何故か戦争や中国の漢字の歴史、徳川家に現代社会など、意味分からん物の話にまで発展。

結果、30分近くも話が続いたのだ。

「ウチのクラスだけでも12人が犠牲に・・・」

恐るべき、コウチヨウノハナシ！！

「フッフッフ、春吉よ、これからさらに犠牲者は増えるぞ」

「何ッ、それは本当か!？」

さらに犠牲者だと!？

「木山大佐、きつと貴方も犠牲に・・・」

「何だと!! 赤佐、それは一体・・・」

コウチヨウノハナシで脳をやられた俺達は、変な茶番劇を演劇中。どうやら、コウチヨウノハナシには判断能力低下の作用もあるらしい。

「きっとこの後、教師軍は一斉に空襲をしてくるだろう・・・」

「な・・・空襲だとツ!?」

「ああ・・・通知表と言う名の爆弾を投下してくるだろう」

「つ、通知表・・・」

さ、最悪だ!!

「しかも木山大佐には、赤点補習と言う名の爆弾も降り注ぐだろう」

「・・・」

「大佐、高二的の夏休みはもう諦めましょう。教師軍にはもう勝てません」

「・・・青春エンジョイは、諦めるしかないのか・・・」

通知表に赤点補習

さらにバンド練習

俺の夏休みは、もうだめだ。

「今なら軽く死ねる・・・」

「た、大佐!! 早まってはなりません!!」

「・・・赤佐少尉、後の事は任せたぞ・・・」

「た、大佐あああああゝゝ!!」

「じゃあ、今から通知表を配るぞ」

その後のLHR。

たつつあん……もとい教師軍による空爆が開始された。

「まずは赤佐」

「は、はい……」

赤佐少尉は特攻していった。
で、

「あゝ……古典で2取った……」

玉碎。

ちなみに通知表は5段階評価。

「次、荏咲」

「……………」

おでこに冷え○夕貼った荏咲中尉も特攻で、

「……………」

後ろから覗いた結果、コイツの通知表に5が三つくらいあるのを確認。

特攻成功。

「次、木山」

「ぎよ、玉碎覚悟お〜!!」

木山春吉、いつきま〜す!!

「木山大佐あ!!」

赤佐はまだ茶番中。

で……

「・・・マジでか」

1は無かった。

しかし、化学と数学で2取った。

「木山、お前明日の補習、ちゃんと出るよ?」

たっつあんからの止めの一言。

ぐあっ・・・

「あと沢那、お前も補習出るよ」

「・・・あ、はい」

・・・楓も補習なのか。

「あと誰か、重原にも補習って伝えとけ」

権三朗もか・・・。

・・・嫌だな。

第81話 青春謳歌（後書き）

後書きトーク

春吉

「くそっ・・・まさか通知表で2が・・・」

亜希

「春吉くん、元気を出して下さい!！」

春吉

「フッフッフ、慰めなんていらななさ・・・」

亜希

「大丈夫です、私も成績は悪かったですし」

春吉

「マジで・・・じゃあ通知表見せてくれる?」

亜希

「ぜひぞー!！」

春吉

「どねどね・・・」

亜希

「ね? 悪いでしょ?」

春吉

「……お前、これ4と5しかないんだけど……もしかしてイヤ
ミ?」

亜希

「悪いですよ、だって4があるんですよ？ 普通は5だけの通知表
が……」

春吉

「……次回三姫第82話“補習”お楽しみに」

亜希

「春吉くん?」

春吉

「よし、もう今日は帰って泣いっ」

亜希

「え？ 何で???.?」

第82話 補習

翌日。

「ぐあつ・・・死んだ、俺もう死んだ・・・」

今日から楽しい楽しい夏休み！！

夏祭り！！

海！！

肝試し！！

プール！！

スイカ！！

お盆！！

ドヒヤ〜！！ 夏休みエンジョイしたい！！

だけど俺は無理！！

「・・・つまり、このXがこのYにかかって、3と6を掛けて・・・」

現在赤点補習中。

今日は午前補習、午後バンド、夜バイト。

夏休みって、何？

「くそつ、海行きてえくなチクシヨー」

「激しく同感」

俺は補習を受けながら、斜め前の席の権三朗と会話。

「海行つて泳いで、夜は花火して・・・」

「水着美女をナンパして、一緒に水中騎馬戦・・・ウヒヒ」

「・・・・・・・・」

権三朗は、立派な思春期だな。

「こら木山、重原！！真面目にやれ！！」

あ、教師怒った。

「「サーセン」」

あ、権三朗とかぶった。

この世の終わりだ・・・

「何で!?!?」

「権、人の心を読むな変態」

「権・・・」

「いーいーないないない、常人っていーいーない」

「・・・どうした？」

現在午後。

「赤点無いやつ夏休みエンジョイ、きつとみんなですイカを食べる」

「おーい、春吉？」

「かえろかえーろお家へかえろ、赤佐を殴ってバイバイバイ」

ドスッ！！

「痛いっ!?!」

「はあく、赤点無かったヤツはいいなあ」

補習メンドイ。

「そんなの、勉強しなかったお前が悪いんだろ!?!」

「うるせえ……」

はあく、スイカ食べたいな。

「まあ、頑張れ」

「まさに他人事って感じだな」

はあく。

「あと本番まで数日しかないぞ。各自家でも練習しろよ」

バンド練習終了。

今話は色々はしよりまくり!!

「さーて、バイト行かないと・・・」

携帯持った、財布持った。

よし行こうと思った、その時。

「・・・春吉」

「ん？」

話し掛けて来たのは小夜。

「どうした？」

「・・・明日、どうする？」

「え？ 明日？」

って、何かあったっけかな？

「・・・」

「明日・・・明日・・・」

明日は・・・補習にバンドにバイト。
まさに今日と同じ。

「……もしかして、忘れてる？」

「……はい多分」

何かあつたつけ？

「……明日、美羽の誕生日」

「明日……ああ、そーいゃ」

明日は美羽のバースデーだ！！

「……春吉、どうするの？」

「ど、どうするって言われても……」

正直、何も考えてない。

ぶっっちゃけ忘れてた訳だし。

「……明日、音楽室でパーティーでも……」

「ん、ああ、それいいんじゃない!？」

パーティーか……

「……明日、美羽が来る前に装飾とかする？」

「ああ、するか」

とうとう美羽も17歳か……。

免許証取得まであと1年だ!!

「……じゃあ、飾りの買い出し、春吉と楓で言ってね」

「……は？」

「……私と亜希で料理作るから。よろしくね」

「……楓とか」

確かに楓は料理とか出来ない……って違う!!

「く、空気が……」

「……じゃあ、楓にも言っってくるね」

さ、小夜さん!?

嘘だあ〜!!

「何気に俺、忘れられてね？」

b y 赤佐大輔

第82話 補習（後書き）

後書きトーク！！

麗

「そついえば、先輩の誕生日って・・・？」

春吉

「ん？ 2月3日だけど？」

麗

「2月3日・・・」

春吉

「あ？ 何？」

麗

「あ、いや・・・2月って冬なのに“春吉”なんだなと・・・」

春吉

「な・・・う、うるせえ！！ 2月3日は節分だろうが！！ 冬から春に変わる日だぞ！！」

麗

「あ、そう言えばそつですね」

春吉

「だから、その春に吉がありますよつに・・・みたいなの？」

麗 「なるほど・・・そういう意味が・・・」

春吉

「何？ 今までどんな意味だと思ってたの？」

麗

「いや、ただ春のようなポカポカした人間・・・みたいな感じで・・・」

春吉

「ぼ、ポカポカ・・・」

麗

「じ、次回三姫83話“買い出し”。もはやバンドとは全く関係のない話になってきましたね・・・」

春吉

「い、いいんだよ！！・・・それより、泡岸の誕生日って・・・？」

麗

「え？ 3月3日ですか？」

春吉

「あ、ちょうどひと月違い・・・ってか、雛祭りの日かよ・・・」

麗

「何か？」

春吉

「あ、いや、何も・・・み、みんなも誕生日は大切にね!!」

麗

「・・・強引にシメましたね」

第83話 買い出し

前話のあらすじ

美羽の誕生日パーティーやる事になった。

俺は楓と共にパーティーグッズとケーキの購入。

お金はみんなで出し合って。

まあ、最悪亜希が多めに払ってくれるらしいが・・・基本割り勘。

「・・・・・・・・」

で、今俺は楓とパーティーグッズ専門店にきてます。

相変わらず空気は最悪う〜。

「ヒゲメガネとクラッカーと・・・三角コーン帽子に・・・」

っーかこの店凄い。

パーティーグッズの他にも、手品グッズ、着ぐるみ、はたまた特殊メイク用の素材まであるし。

「う〜ん・・・」

着ぐるみ買おうかな？

一方の楓さんは・・・

「・・・・・・・・」

超キラキラした目でガチャオンらしき着ぐるみを凝視。
なんでも揃ってるな、この店。

・・・今、会話のチャンスかな？

「な、なあかえ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

あ、無言で去っていった・・・。

まだ駄目か・・・

次にケーキ屋。

「えっと、このチョコレートホールケーキを一つ」

「かしこまりました」

俺が購入、楓は店内をぶらぶら。

「お客様、お誕生日用ですか？」

「あ、はい」

「では、ろうそくは・・・？」

「あ、じゃあ17本お願いします」

ろうそくか・・・懐かしいな。

子供の頃、誕生日ケーキのろうそくの火を両親に消されて、怒り狂った思い出が・・・。

今思えば、あの時既に借金を・・・

「お客様、チョコにお名前やメッセージでもお入れいたしましたしよ
うか？」

「あ、メッセージか・・・」

“HAPPY BIRTHDAY美羽”じゃベターだしな・・・
どうしよう・・・

あ、そうだ！！

俺のイタズラスキル発動！！

「じゃあ“美羽ちゃんお誕生日おめでとう”で

幼稚園児風に！！

「かしこまりました」

店員、無表情でかしこまった！！

一方の楓は・・・

「すげえ・・・」

飴細工に興味津々。

・・・まだ心は子供なのね。

最後に料理の材料調達

小夜と亜希が料理するらしい。

で、俺はメモを確認。

「えーっと、鶏肉にキャベツにトマトに・・・黒糖にこんにゃくに春菊、タコに黒酢に食パン・・・って、何作るの？」

一方の楓は、ケーキを持ったままスーパー内をうろつろ。

「あと・・・味噌に歯磨き粉に鉛筆にドッグフード・・・???」

マジで何作るの？

まあ、とりあえず片っ端から買ってきてか。

「まずは野菜……ん？」

あれ？ もう何かカゴの中に入ってる？

「プリン、ゼリー、ヨーグルト……」

どれもメモには書いてないものだ。

「……ん？」

「……」

どこかに行ってた楓さんが、カゴにアイスを投下……。

「……余計なモンは買わないぞ」

「えっ……」

なるほど、犯人はコイツか。

「余計なモン買っと、予算内で収まんねえんだよ」

「……いいじゃん、これくらい」

「駄目だ、買うならみたらし団子にきなさい」

「何でみたらし団子!？」

「え？ 今俺が食べたいから」

「なっ・・・だったらプリンだろ！！ カスタードとカラメル食
べたい！！」

「駄目だ！！ 絶対みたらし団子！！」

「なんだと・・・！！」

「うおっ！！」

「楓さんから邪悪なオーラがっ！！」

「み、みたらしがいいです！！」

「いやプリンっ！！」

「なっ・・・っわーったよ、プリンでいいよ」

「おしっ！！」

「楓さんガッツポーズ！」

「・・・ははっ」

「コイツは子供か！？」

「でもまあ、いいか。」

知らぬ間に、仲直りも出来ていたし。

第84話 誕生日

「いいか？ 美羽が入って来たらクラッカーパーンだからな？」

「クラッカーパーン？」

今日は7月24日。

我が葉城高校生徒会会長濱垣美羽の誕生日。

「フッフッフ、この物語に誕生日ネタがあるとは……」

「どうした春吉？」

今日の赤佐はツッコミ役。

「つまりキャラが年をとるって事は、この小説はサザエさん方式に当て嵌まらない事になる」

「春吉？」

「って事は、まさかの最終回到卒業式フラグが……」

「……春吉、主人公が世界観ぶっこわすな」

「はあく、暑い」

・・・廊下から美羽の声が聞こえた!!

「もうすぐでターゲットが来るぞ、みんなクラッカーの準備!!」
来るぞ・・・

ガチャリ

「おいーっす!!」

美羽入室!!

今だ!!

パンツ、パンパンツ!!

「えっ!?!」

美羽動揺中!!
いくぜ!!

『美羽、HAPPY BIRTHDAY!!』

パンパーンッ、パーンッ!!

全員でレッツお祝い!

「美羽、誕生日おめでとう!!」

「……おめでとう」(ニコッ)

「美羽さん、お誕生日おめでとうございます!」

「濱垣さん、お誕生日おめでとう!!」

「美羽、おめでとうさん!!」

「え……」

美羽放心状態。

まあ、ビックリはするだろうな。

「今日は7月24日。お前の誕生日だろ」

だから早く放心状態から脱出しろ。

「誕生日……まさかみんな……」

美羽・・・涙出てる。

「HAPPY BIRTHDAY!!」

「うう・・・うわぁ〜ん!!」

「な、何っ!?!」

「ご、号泣だどっ!?!」

「ありがとう〜・・・!!」

「フツ・・・」

涙脆いやツだ。

「美羽ちゃん、お誕生日おめでとう〜・・・」のメッセージ、

幼稚園児か？」

「赤佐黙れ」

美羽誕生日パーティー

その1、ケーキ入刀。

「ぱーんぱーんぱーんぱーん、ぱーんぱーんぱーんぱーんぱーんぱーん」

亜希が入刀のテーマを口ずさむ。

あゝ、活字じゃ分かりにくい！！

ちなみに司会者は亜希なのだ。

・・・ちよつと心配。

「ケーキ入刀、それは初めての共同作業！！」

それは結婚式。

「それでは、美羽さんと楓さんは壇上にご上がって下さい！！」

何故楓？

「ではどうぞ！！」

「さっしゅ」

サクッ

「はい、初めての共同作業です！！ カメラをお持ちの方は、どうぞ前へ！！」

だからそれは結婚式。

パシヤッ

小夜、携帯電話のカメラ片手に壇上前へ。

ノリがいいな。

美羽誕生日パーティー

その2、キャンドルサービス。

だからコレ結婚式だろ！？

「皆様、只今より新婦によるキャンドルサービスを行います！！」

とうとう新婦言ったよ司会者！！

「新婦はチャッカマンの準備を」

「あ、うん」

美羽もノリがいい。

「では、照明ダウン!!」

パチッ

電気が消えた。

ああ、ろうそくの火が幻想的で美しく・・・は、ならなかった。

おい、誰か最低でもカーテンしめようぜ。

日輪眩しい〜!!

キャンドル意味ねえ。

美羽誕生日パーティー

その3、お色直し。

お色直し・・・やる必要あるのか？

「では、美羽さん再入場です！！」

ぱちぱちぱち！！

数人の虚しい拍手と共に、美羽入場。

でもね、

「何故ガチャオン着ぐるみ？」

緑色・・・

つーかあんなの買ったっけ？

「やあ、ボクガチャオンだよ（天の声）」

美羽声マネ上手い！？

「赤い毛むくじやらを見ると、軽く殺意沸くんだ！！（天の声）」

何っ！？

「だってアイツ、ボクの隣でアワアワしているだけなのに、ボクとギヤラ一緒なんだよ? (天の声)」

止めて!!!

子供の純粋な気持ちが崩壊しちゃう!!!

「ボクはスノーボーヤスキューバやって、いつも命掛けてんのに。ボクだって楽に金を稼ぎたいよ!!! (天の声)」

マジ止めて!!!

緑の恐竜、そんな事言わない!!!

「赤い毛むくじやらを見たら、別の意味で真っ赤に染め上げるね!!! (天の声)」

怖っ!!!

ガチャオン・・・いや、美羽怖い!!!

美羽誕生日パーティー

ラスト、両親へ感謝の手紙。

結っ婚っ式っか!!

「では美羽さん、今は亡き御両親に向けて、感謝の手紙を!!」

「・・・両親、まだ普通に生きてただけだな・・・」

とか言いつつも、美羽は手紙オープン。

いつ書いた?

「お父さん、お母さんへ。」

今日、私は17になりました。

とても長かった17年間、本当に長かった。

・・・以下略

か、感動や!!

「では最後に、美羽さん退場」

退場?

卒業式か?

「 白い光の中に、山並みはもえて 」

亜希が歌い出した！？

卒業式か？

「……んな事より、早くバンド練習しようぜ」

第84話 誕生日（後書き）

後書きトーク！！

春吉

「ってか今回、ガチであの着ぐるみどっから持ってきた!？」

楓

「え？ あのパーティーグッズ専門店で買ったんだよ？」

春吉

「何ッ!? いつの間に!？」

美羽

「あゝ、ガチャさんの中は灼熱地獄うゝ」

春吉

「ガチャさん!? それもしかしてガチャオン・・・」

楓

「春吉知らねえの？ あの着ぐるみはガチャさんの着ぐるみだよ？」

春吉

「ガチャさん誰!？」

美羽

「ガチャさんっていうのは、赤いモップの化身ムックリとコンビを組む、天才恐竜の事だよ？」

春吉

「・・・それはアレか？ ポン○ツキ敵に回してる？」

楓

「ガチャさんは凄いんだぜ？ 恐竜なのに宇宙へ行ったり、深海へ行ったり」

春吉

「本家よりすげえ！！」

美羽

「次回三姫第85話“詩が出来ない”とうとう夏祭りパートも佳境突入！！」

春吉

「ガチャさんか・・・著作権とか知ってるのかな？」

第85話 詩が出来ない

「はあ〜・・・」

今日は葉城夏祭りまであと三日と迫った日。

「詩い〜・・・」

が、まだ出来ていなかったりする。

マズイよね？

いくら歌唱特訓しているとは言え、まだ自由制作曲の歌詞が出来てないとか、マジヤバイよね？

「どうしよう・・・この際、この前の美羽か小夜の詩を借用するか？」

でもなあ〜・・・

「じいじい」

「づがれだー」

今日も補習と練習を終えた俺は、半ば死にながら帰路についていた。

「詩か・・・」

練習の時、早く作らないと殺す！！ って赤佐に言われたっけ。

でも、詩なんてそうホイホイ出来る訳がない。

「何かきっかけ、インパクトみたいな物があればな・・・」

そう、例えば楓が女の子らしくなるとか、小夜が関西オバハンみたいな性格になるとか、美羽が立派な生徒会長になるとか。

「あゝ、何かきっかけが欲しい・・・」

その時！！

「だ、誰か助けてえ〜！！」

「ん？」

な・・・今、なんか悲鳴が・・・。

「助けてえ〜!!！」

なっ・・・今作三度目のTASUKETEだっ!??

「だ、誰か・・・ぐはっ!!・・・た、助け・・・て・・・」

・・・嫌な予感しかない。

・・・スルーしたい。

どうせまたヤンキーさんでしょ？

岡田工業か？ また奴らなのか？

岡田工業の猫舌なんて、きっと覚えている読者は皆無に等しいぞ。

「助けてえ!!！」

・・・しかし。

「・・・男春吉よ、今助けを求めている人を、ほっといていいのか？」

自分への問い掛け!!!

「・・・男として、この事態をスルーしてよいのか？」

俺は考えた。

「答えは否!! ここは助けに行くべき!!」

男春吉!! いざ、まかり通る!!

そしてレッツ自己暗示タイム!!

「俺はボンゴレ雲の守護者、あの風紀委員長なんだ・・・」

・・・噛み殺す!!

俺は悲鳴の聞こえた路地裏へ。

「君達・・・何群れてんの？」

決まった・・・トンファーないけど。

しかし・・・

「誰？」

そこにいたのは、ズタボロにされた若い兄ちゃん、これまたまだ若い綺麗な姉ちゃん。

「……え？」

姉ちゃんの方は兄ちゃんの襟を左手で掴み、右手はグー。

リンチ？

一方の兄ちゃんはマジでボロボロ。
鼻血出てるし。

「あんた、誰？」

「……え？」

何、この空気？

「違うのよ、あたし達は夫婦なの!!」

「夫婦っすか・・・」

さっき偶然出会った、何か訳ありの男女。

どうやら、夫婦らしい・・・。

「あー・・・」

ちなみに、まだあの路地裏に俺達はあるよ。

「失礼ですが、一体ここで何を・・・？」

何かのプレイ中だったらすんません。

「あ、いやね、ウチの旦那が浮気しててね」

「う、浮気・・・」

まさかの複雑な関係？

「そう、だからここで制裁してたの」

「せ、制裁……」

怖い……

あ、ちなみに男性の方はその辺でのびてます。
超ボロボロ。

「にしても、恥ずかしい所みられたな」

この夫婦、二人ともかなり若い。
まだ二十歳くらいじゃないか？

「……そろそろお迎えの時間か」

女性は手元の腕時計を確認している模様。

「じゃ、あたしは子供の保育園のお迎えがあるから、そろそろ」

「あ、ああ……な、何かすみませんでした」

変な罪悪感。

見てはいけなかった物を見た気がする。

「いやいや……じゃ、旦那担いで保育園に行きますか」

そう言つと、女性は生きた屍状態の男性を軽々しく担ぐ。
力あるなあ……

「そっいや君、その制服……」

「えっ？」

女性の視線はいつの間にか俺の制服に。

「もしかして、葉城高生？」

「え、あ、まあ……」

何？

「やっぱり……あ！あたしの妹も葉城高生でね」

「そ、そうなんですか……」

どうでもいい……

「じゃ……」

「あ、はい」

女性は男性を担ぎ、保育園へ。

……何なんだ？

第85話 詩が出来ない(後書き)

後書きトーク!!

春吉

「そついや、亜希と小夜は漫画とか読むの？」

亜希

「え？ 読みますけど？」

小夜

「・・・読む」

春吉

「ほお、意外・・・で、どんなの読むんだ？」

亜希

「私は俗に言う、少女漫画と言う物を少々」

春吉

「ああ、あのやたら目がデカくてキラキラしているアレか」

亜希

「・・・それ、少女漫画読者に失礼なのは・・・」

春吉

「小夜は？」

小夜

「・・・私は、月也の持つてる漫画をちょっと」

春吉

「例えば？」

小夜

「・・・い〇じ100%、迷い猫オー〇ーラン、Dr・〇っるとか」

春吉

「・・・すげえな月也・・・ってか小夜、それ月也の許可得て見てんの？」

小夜

「・・・部屋を掃除する時、机の引き出しの奥にあるのをこっそり」

春吉

「引き出しの奥・・・月也は思春期かッ？」

小夜

「・・・ん？」

春吉

「小夜、そういうのは止めた方がいい。きっと月也は必死なんだから」

小夜

「・・・え？」

春吉

「思春期の中学生ほど、可哀相な生き物は他にいないんだから!!
(いろんな意味で)」

小夜

「・・・?」

亜希

「今回は86話ですね。タイトルは“姉妹”」

春吉

「いいか小夜、今後月也の机は無断で掃除しちゃダメだ!! (高校生になると、漫画以上の物を隠し始めるからな)」

小夜

「・・・?」

春吉

「これは男の定めなのだ!!」

第86話 姉妹

そして、まさか詩が出来ないまま、祭の前日を迎えた。

「とうとう明日が本番かよ・・・」

「明日だねえ」

現在音楽室。

みんなでバンドの練習中!!
歌、どうしよう。

「とりあえず、課題の方も一回合わせるか」

「OK!」

赤佐の提案で、皆、楽器の前へ。

・・・一瞬の静寂。

「・・・じゃ、いつでもどうぞ」

皆の呼吸を一つに。

そして・・・

カンッカンッカンッ!

ドラムスティックの叩く音、リズムが一つに。

そして一斉に、楽器が音を奏で始める。

赤佐のリードギターが音楽室に響く。

小夜のリズムギターが全体のバランスを整える。

亜希のベースは深い音色を奏で・・・

美羽のキーボードが音に弾みを付ける。

楓のドラムがリズムとテンポを刻み・・・。

俺の超美声が全てを超越するのだッ!!

「暑い・・・」

で、現在帰り道。

気温はまさかの33度を越えた!!
すごいね、ヒートアイランド!!

太陽はキラキラ、アスファルトはもうもう、空気はムシムシ。

「まだ駅まで距離が・・・」

あ、ちなみに俺の後ろには美羽と小夜。

二人共無言。

暑さが相当効いてるらしい。

さらにちなみに、楓は部活、赤佐はバイト、亜希は何か用事があるらしく、学校で別れた。

「おい、二人共生きてるかあ？」

俺が振り返ると、そこには汗だくの間二人。

「だ、大丈夫か？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二人共無言。

もしかして熱中症か？

だったらマズいな・・・

「……お二人さん、ちょっと休憩するか？」

「……うん」

「……（コクリ）」

休憩決定。

で、近くのファミレスにきました。

「ああ……クーラー最高……」

店内はクーラーガンガン！！

「ここはまるで南極……」

「南極？」

で、俺らは席に着く。

「どじする？ ドリンクバーくらい頼む？」

正直喉渴いた。

「そつね・・・じゃあ頼む？」

「・・・うん」

はい、ドリンクバー決定！！

で、

「何故俺・・・」

あの後店員にドリンクバーを注文、でね・・・

「ジャンケンで負けた人がみんなのドリンクを持ってくる!!」
などと言う美羽提案ジャンケンで、見事敗北した俺。

「私、カル〇スね」

「・・・オレンジよろしくね」

・・・白と橙をご注文した二人。

「チクショー、グラス三つも持てるかな？」

で、

「うおっと!!」

右手に橙と白、左手に俺のコーラ。

超バランス悪い!!!!

「くそっ、こんななら並々入れなきゃよかった!!」

グラス上にはタップンッと揺れるドリンクの波紋。

こ、こぼれる!!!!

で、一旦バランスを取ろうとしたその時!!!

ドンッ!!!!

「うおっ!!」

突然の衝撃!!
で、

バシヤッ!!

「あひゃう!!」

ドリンクぶちまけちまった!!

「あ……」

一方、俺の目の前では、一人の男の子が尻餅をついていた。

……ああ、多分ぶつかったのか。

「君、大丈夫か？」

「……」

え？

シカトっすか？

その時、

「こら、亮一待って……え？」

「……あ」

そこにいたのは、泡岸だった。

「……先輩、何してんですか？」

「あ、泡岸の甥っ子お!!!？」

「はい」

さっき俺とぶつかった少年 名前は亮一君。

現在三歳、で、泡岸麗の甥っ子。

「私の姉の子供です」

「は、はぁ……」

で、一方の亮一君は

「……」

無言。

しかも、さっきぶつかった拍子にドリンクを引っ掛けちゃって・

びっしょり状態。

「先輩、何かご迷惑をおかけしたみたいで……すみません」

「あ、いやー、こっちこそスマン……」

特に亮一君。

で、亮一君は相変わらず無言。

いやホント、すみませんでした。

その時だった

「麗、亮一、何してんの?」

ん? 誰か来た?

「あ、姉さん」

「ママあゝ!!」

あ、気まずいフラグだった。

「どうしたの亮一、こんなびっしょりになって……あ!!」

「・・・あ
」

そこにいたのは、麗の姉で亮一の母で・・・

「君はこの前の!!」

「・・・どうも」

この前、路地裏で喧嘩してた夫婦の!!

「あたしは麗の姉で、亮一の母で、名前は泡岸凜奈。よろしくね
」

「あ・・・木山春吉です」

凜奈さんは軽く微笑んだ。

「姉さん・・・」

麗は何故か呆れ顔。

「ママあゝ!!」

亮一は甘え中。

「あ、今は結婚してるから、名字は泡岸じゃなくて谷笠ね!」

「は、はあ……」

何か気まずいなあ。

「で、木山君だっけ？ 君、亮一に何をしたの……?」

なっ……!!

笑顔の凜奈さんの後ろに、鬼のマスクが見える!!

「あ、いや、その……」

「何をしたの?」

お、鬼がッ!!

「えっと、その……」

「木山君?」

こ、怖い!!

あー、失禁すつかも……。

その時……

「亮一がぶつかったのよ」

え？

れ、麗さん？

「ドリンクを持ってた先輩に、亮一がぶつかったのよ」

「え、そうなの？」

凜奈さん、疑いの顔。

「そう。だから先輩は悪くないわ」

「あ、泡岸……」

な、なんと感動する言葉を……

「亮一、それ本当なの？」

「……………」

無言〓肯定

「先輩」

「ん？」

小声で話し掛けてきた麗。

「姉さんには私から言っておくので、先輩はもう自分の席に戻っていいですよ」

「え？」

「先輩、誰か他の人と来ているんですよね？ その人、待たせているんでしょう？」

「……あ」

美羽と小夜！！
い、いかん！！

「先輩、行って下さい」

「……わ、悪い！ 恩に着る！！！」

だあゝ！！！！

急いでドリンク持っていないと！！！！

その頃

「……春、ドリンク持って来るのに何分掛かってんのよ!?!」

「……もう15分は経ってる」

「もう春遅い!?!」

第86話 姉妹（後書き）

後書きトーク！！

赤佐

「そついや春吉、最近てんとう虫さんを見かけないんだが・・・何か知らないか？」

春吉

「てんとう虫・・・ああ、あのデブコーチね。全く知らないよ」

赤佐

「本当か？ アベシーユさん曰く、キャツスルの方にも来てないらしくて」

春吉

「全く存じ上げないな」

赤佐

「そつか？ ならいいんだが・・・」

春吉

「うん知らない」

後日・・・

新聞にバンド「キャツスル」のボーカル、てんとう虫の逮捕の記事が載った。

罪状は

未成年者誘拐・・・

本人の供述では

「もう二次元には飽きた、今はもう二次元の時代だ!!」との事。

春吉

「た、逮捕・・・」

赤佐

「次回三姫87話“夏祭り前夜”とうとう夏祭りに突入だ!!」

春吉

「・・・もはやリアクションすら取れない」

第87話 夏祭り前夜

「おーし、こんなもんだろ」

どっこいせつと、アンプを置く赤佐。

今は7月29日の午後6時30分。

現在、明日のライブの準備で、楽器を会場の葉城グラウンドに運んでいる最中です。

「うぐぐ……意外とキーボード重い」

「頑張つて、春吉くん!!」

亜希に応援され、俺はキーボードを一生懸命に運ぶ。

……正直、応援するなら運ぶの手伝ってもらった方がありがたい。

「春吉くん、頑張つて!!」

「……」

もはやイヤミにしか聞こえない。

「お、終わったあ〜」

葉城高校から赤佐の親父の軽トラで楽器を運び、グラウンドにて
やっとこさスタンバイ。

その繰り返し作業 が、やっと終わった・・・。

「みんなご苦労様」

今回の事の発端でもある赤佐親父が、気を使ってみんなにジュー
スをくれた！！

「どうも！」

いや〜、汗かいた後のコーラはウマイ！！

「いよいよ明日ね、ライブ」

薄暗いグラウンド。

空はまだ若干橙に染まっているが、東の空にはちらほらと星が。

グラウンド近くを流れる川は透き通り、川の近くは草木が生い茂る。

川の上を通る鉄橋には、沢山の車の姿。

こんな所にいると、荒川OBを思い出す。

あー、緑の村長とかいないかなあ〜？

「春吉くん」

「ん？」

今話し掛けてきたのは亜希。

「いよいよ明日ですね・・・」

「ああ、そうだな」

カナカナカナカナナーって鳴くひぐらし。
切ないッ！！

「もう、夏なんですわ〜」

「・・・ああ」

夏の夕方の風は気持ちいい。

爽やかなこの風は、夜の訪れの合図。

「・・・そういえば」

ポンツと、何かを思い出した亜希。

「結局、楓さんはお父様と仲直りしたのかな？」

「・・・そういえばそうだな」

確か、バンドと柔道が何だから、今は亜希の家へ家出中なんだけ？

「さつき楓さん、お父様と話つけてくるって、お家の方へ向かって行ったんです」

「・・・そうか」

あいつも成長したのかな？

俺は改めて思う。

この空の下、俺は多くの人達と知り合い、この空の下で生きてい

る。

この月や星の下で。

日本の人口約一億人。

その中で、限られた人と人が出会う確率はかなり低い。

美羽、小夜、楓、亜希、麗、赤佐、夏哉、秋馬、権三郎、冬希。

他にも、多くの人達と出会い、今の俺がいるんだな。

「・・・・・・・・」

大切な出会い。

大切な友達。

大切な気持ち。

大切な、とても大切な・・・・・・・・。

って、

「俺は何を言っているんだ？」

作者の脳内イカレたか？ 風邪引いたからか？

「春、そろそろ帰ろ！！」

グラウンドの入口には、美羽と小夜、亜希に赤佐の姿。

空はもう、うっすらと闇に包まれ、星達はその闇に負けじと輝く。

自分を主張するかのように。

「ああ、今行く」

・・・俺は明日、こいつらと共に、輝く！！

明日は本番。

大切な仲間と共に、輝く！！！！

第87話 夏祭り前夜（後書き）

後書きトーク！！

春吉

「おつす！！ 今日は今だ本編で活躍すらしてない超モブキャラ達を紹介するぜ！！」

小夜

「・・・まさにモブキャラ祭？」

春吉

「その通り！！ さあお前ら、モブ魂を見せてやれ！」

No.1 タカ

タカ

「ど、どうも。本編でインフルエンザに掛かったタカです」

春吉

「本名は野間のまぐち口隆敏たかとし では何か一言！」

タカ

「よ、よろしくお願いします」

春吉

「まあ、多分今後出番は無い・・・」

No.2 ナカジー

ナカジー

「フツ、僕は真井仲治まゐなかし」

小夜

「・・・タカと一緒にインフルエンザに掛かった・・・」

ナカジー

「フツ、僕はタカとは違う。僕はインフルエンザに掛かったんじゃない、掛からせてあげたんだけだ！！」

小夜

「・・・？」

No.3 養護教諭

春吉

「保健室の先生はまだ、名前すら出て無かったのか・・・哀れ」

養護教諭

「私の名前は田橋七海たはしななみです」

春吉

「ではまた次回で」

養護教諭

「え？ 出番これだけ？」

第88話 Summer Leaf

パァン、パァン！！

空になる空砲。

今日は晴天。

葉城夏祭り開催！！

「タコ焼き、焼きそば、チョコバナナ・・・うほ、出店いっぱい
！！」

「春吉、はやく準備手伝え」

現在、俺達Summer Leafは音楽ライブ控えテントの中
にいる。

時刻は10時。

ライブまであと10分といった所か。

既にグラウンドには出店がいっぱい。
客もいっぱい。

「みんな、それぞれの楽器の最終チェックをしといてくれ」

ギター、ドラム、ベース、キーボード、マイク。

それぞれが最後のチェックをする。

「……に、しても」

俺はみんなの着ている服、衣装に目をやる。

「凄いな、赤佐父」

女子達が着ているのは特製の浴衣。

それぞれ動きやすいように裾や袖に配慮がなされているし。

楓は薄い黄緑、小夜は水色、美羽は淡いピンク、亜希はオレンジ。

メイドイン赤佐父。

超器用。

ちなみに俺と赤佐は普通にカジュアルな衣装。

かえって目立つ。

「いいかお前達、俺達の音楽魂をぶち込めていこうぜ……！」

『お〜！……！』

それは、昨日の準備の帰り道。

「春吉、お前結局詩、出来たのか？」

赤佐からの質問。

「・・・大丈夫。詩ならもう・・・」

大丈夫。

「だ、大丈夫ってお前・・・」

「いいからいいから、俺に任せろ」

そして・・・

『以上、バンドーズの演奏でした。続きましては、Summer Leaf!』

司会者は紅白のスーツ着用。
キバツやな。

んな事より、

「行くぞ！ 楓、小夜、美羽、亜希、赤佐、準備はいいか！？」

『おー！！！』

楓は昨日、親父さんと色々話を付けたらしい。

小夜は今日、わざわざバイトを休んでまで来てくれている。

美羽は緊張で顔が強張ってやがる。

亜希はいつも通り、のほほん状態。

赤佐は至って真面目。

「・・・行くぜ、Summer Leaf!!」

『おー！！！』

行きます、俺の初ライブう！！

「緊張するね・・・」

「美羽黙って、もうすぐ暗幕上がるぞ」

俺達はステージ上、暗幕の後ろでスタンバイ。

「いよいよですねえ・・・」

「亜希、静かに！」

「なんかドキドキすんな！」

「楓黙れ！」

「・・・」

「小夜も・・・って、小夜は黙ってるか」

ふう〜、何故だろう？

ライブ前なのに疲れが・・・？

「・・・」

さてと、気持ちを切り替えてっど。

「・・・ふう〜」

深呼吸う〜。

「……………」

気持ちを抑えて。

「……………」

……………。

「……………」

……………あれ？

「……………」

……………暗幕、上がらなくなっね？

「……………」

あれ？ 何で？

「……………まだか？」

「春、静かに!!！」

「サーセン」

にしても……………

「……………」

暗幕が上がらない。

その時！！

ウイイイインン！！

あ、暗幕上がった！！

そして……

第88話 Summer Leaf (後書き)

後書きトーク!!

春吉

「春吉先生の質問コーナー!! はい、このコーナーでは皆様より頂いた質問に、私が答えていくコーナーです!!」

質問1

仲田市在住

M・Hさんから

「私とはある学校で生徒会長をやっているんですが、いつも人前に出ると緊張して、悲惨な事になります。どうしたら緊張しなくなるんでしょうか?」

春吉

「緊張つすか・・・はい、じゃあ人をジャガ芋と思えばOK。はい次」

質問2

仲田市在住

S・Eさんから

『葉城で1番卵が安いスーパーって何処ですか?』

春吉

「オーム。はい次」

質問3

葉城市在住

G・Sさんから

『もっと出番を下さい』

春吉

「だが断るッ!!」

質問4

関東圏内在住

Gさんからの質問

『後書きトークのネタが尽きてきました。どうしましょう?』

春吉

「ネタ切れだ? そのシワの少ない脳みそ絞ってでもネタを作れ!!」

質問5

関東圏内在住

Gさんからの質問

『最近、体育で柔道をやって以来、腰が痛くてしょうがないんですが……』

春吉

「いい加減にしる作者!!! ……あ、言っちゃった」

楓

「次回89話“音楽”ってか、体育の柔道ごときで腰痛って……
超もやしっ子か？」

春吉

「……」

Gさん

「……」

第89話 音楽

暗幕が上がった。

そして、俺達の目の前には・・・

『おおおおお!!』

沢山の観客。

母校のヤツらから、普通の一般人まで。

す、凄い賑わいや!!

・・・よし

「みなさん、こんにちは!!」

MCは俺!!

『おおおおお!!』

「おゝし、盛り上がったるかゝ!!?」

『おおおおお!!』

よし、時間ないからそろそろ演奏しないと。だつて1チームたったの15分だよ?

「よーし、じゃあ早速1曲目、課題の方いくか!!」

『おおおおお!!』

おし、俺は右手をくいとあげた。

それが合図!!

「じゃあ1曲目、“虹”!!」

『おおおおお!!』

ちなみに、どのアーティストの虹かは、皆さんの判断で。

で、課題曲は著作権があーだこーだなのではしよるよ!!

「センキューー!!」

『おおおおお!!』

はあはあ、ミスらずに歌えた・・・

途中、なんかドラムのテンポがズレたり、キーボードの間違いが聞こえたけど気にしない。

「おし、まだ若干時間あるからメンバー紹介いくぜ!!」

俺は腕時計を確認。

メンバー紹介の時間くらいならある!!

「では、改めてましてSummer Leafです!!」

『おおおおお!!』

「えー、俺達はみんな、葉城高校二年生なんですけど、今回は1から楽器を練習して参加しました!」

いやー、大変だった。

「では早速紹介を。まずはリードギターの大輔!!」

『おおおおお!!』

赤佐、任せた!!

「どうもお、みんな楽しんでいけやあ!!」

『おおおおお!!』

赤佐決まった!!

「次はリズムギターの小夜!!」

さあ小夜、お前の力を見せてみる!!

「……よろしくね(ニコッ)」

『おおおおお!!』

男共大興奮!!

あ、赤佐がひがんでる!!

「お次はドラムの楓!!」

行けえ、楓!!

「おっす、次もバシバシ行くぜ!!」

『おおおおお！！』

まあ決まった！！

「次はベースの亜希！！」

天然スキルは発動させるなよ！！

「初めまして！ 皆さんよろしくね！！」

『おおおおお！！』

無難だな！！

「で、次はキーボードの美羽！！」

ある意味コイツが一番心配。

「み、皆さん、よ、よろしくお願いしみやふ！！」

噛んだあ！？

『おおおおお！！』

けどウケたあ！！

「……最後に俺、ボーカルのハルヨーシ35世だ！！ よろし

く！！」

『お、おお……』

す、すべった!!

「おほん、じゃ、じゃあ今度は自由曲の方行くぜ!!」

『おおおおお!!』

あー恥ずかしい。

「では自由制作曲。タイトルは“青空”」

『おおおおお!!』

作詞は俺。

作曲は赤佐。

「この曲は、当たり前だと思っていた友達や知り合いとの出会いを、改めて考えさせられるような、改めてその凄さを感じさせられるような曲です」

出会い・・・

「では、早速いきますー!!」

・・・いくぜ。

カンツカンツカンツ!

楓がスティックを叩き、曲はリズムにのる!!

ギターの音色、ベースの響き、キーボードの弾み、ドラムのテンポ。

俺は出会いを、歌う。

この青い空の下 流れる雲は真っ白で 太陽は世界を照らし 僕
らの上に昇る

この空の下には 一体どれくらいの人達が生活しているんだろう?

僕は君との出会いを 当たり前前の運命だと 思っていたんだ

一緒に笑って 一緒に泣いて 一緒に幸せを 感じている事が

普通なんだと思っていた 当たり前だと感じていた
それが間違いなんだと 知らないで

1億人という人の中で 君の笑顔はたったひとつしかなくて それ
に出会えた僕は とても幸運なので

一緒に手を繋いで歩いた あの夕日が照らす川のほとりが 僕にと
って 奇跡と幸せの出会いの場所になった

当たり前なんかじゃない 1億分の1の奇跡の出会いに 僕は運命
と感謝を感じた

改めて思うよ これは当たり前なんかの 出会いではないんだ

第89話 音楽（後書き）

後書きトーク！！

春吉

「やった、やったよ赤佐くん！！」

赤佐

「どうしたバカ吉」

春吉

「ついに・・・ついに“メイドなアニマル”アニメ化だあゝ！！」

赤佐

「・・・ああ、こつちの世界だな」

春吉

「来たよ来た！ 奇跡よ奇跡！！」

赤佐

「次回90話“夕涼み”いよいよ夏休み篇音楽ライブパートクライマックス」

春吉

「アニメだアニメ！！ 声優誰かな？ 制作会社どこかな？」

赤佐

「・・・」

春吉

「やっぱり深夜かな？　もしかしてゴールデン？」

赤佐

「……………」

春吉

「赤佐アニメだ！　アニマルアニメだ！」

赤佐

「うっさいッ！……！」

第90話 夕涼み

「いや〜、最高のライブだったあ〜!!」

いや〜、いい汗かいた!!

「まさかあそこまで大盛況になるとは!!」

お客様いっぱい!!

「もう文句なし!!」

まあ、テンション上がったのは俺だけ。

ちなみに皆の反応は・・・

「はあ〜、最優秀賞取れなかった・・・」

そう、結局俺らは一位を取れなかったのだ。

「皆、お疲れ様!!」

時刻は夕方5時。

楽器も軽トラに運び終え、とうとう俺らの音楽ライブは終わった。

「後はもう自由。帰るなり花火見てくなり、もう自由!!」

赤佐は半分涙目。

そんなに優勝したかったのか・・・。

「さてと・・・自由って言われてもな・・・」

やる事がない。

どうしよ・・・

「焼きそばでも買って帰ろうかな」

出店の焼きそばってウマイよね。

あ、赤佐が泣きながら軽トラに・・・

あ、あいつマジで帰りやがった。

「・・・哀れ」

空はうつすらと橙に染まり、出店の提灯がぼんやりと光り出す。
沢山の客が超賑わい中の葉城夏祭り。

「・・・一人だと悲しいから、焼きそば買ってさっさと帰ろう」
うん、虚しい。

その時・・・

）

「あ」

携帯にメール着信あり。

「誰だ？」

で、携帯オープン。
送り主は・・・

「亜希？」

内容は・・・

「今日はこの後暇ですか？ もし暇でしたら、一緒に花火でも
もちろん行く〜!!」

「・・・みんないたのね」

亜希との待ち合わせ場所に着いた俺。
で、目の前には

「来たか」

「・・・」

「春・・・地味」

「これで揃いましたね!!」

楓、小夜、美羽、亜希

「おお・・・」

まあ・・・いいか。

「いっぱいお店ありますね!」

「そうだな」

亜希、大はしゃぎ。

「亜希、お前お祭りとかって初めて?」

「はい!」

あ、チョコバナナって言いながら走り出す亜希。

金持ちは庶民の祭など知らないのか……。

「……………(じい〜〜)」

「で、小夜は何を見てんだ?」

小夜はひよつとこのオメンを凝視。

「……………口、すぐく曲がってる」

「そりゃ、ひよつとこだからな」

「……………(じい〜〜)」

凄く目がキラキラしてらあ。

「はふおしふ〜ん！」

「あーこら亜希、バナナをくわえながら走るな!!！」

「はい、毎度あり！」

「小夜はひよつとこ買ってるし!!！」

何だかな〜・・・

「すみません、チョコバナナ三つ！」

亜希はどんだけバナナ食べるの!!！」

「はあ〜、俺も焼きそばとか食べようかな」

焼きとうもろこし、じゃがバター、大判焼き、お好み焼き、タコ
焼き・・・

うん、お腹すいた。

「春、綿菓子食べない!？」

美羽さん、右手に風船と金魚、左手に林檎飴と綿菓子、頭には狐
のオメン。

超お祭り満喫してるがな!!！」

「綿菓子は・・・いいや。今は主食って気分だし」

「じゃあ林檎飴は？」

「お前にとって林檎飴は主食なのか？」

全く・・・

「とりあえず焼きそばだな。屋台特有の、あのやたらキャベツが固いやつ」

えっと、確か焼きそばの屋台は・・・

「どこだっけ？」

あれ？

確か焼き団子屋の隣だったような・・・

その時！！

『おおおおお』

「ん？」

突然の歓声。

何だ？

「さっきの子凄くない？」

「うんうん、小さな女の子が、あの藤高の不良を倒しちゃうんだ

もん」

以上、俺とすれ違った一般客の会話。

「小さな女の子が……どこぞの不良を……」

まゝさか……

で、案の定

「やはりか……」

俺の目の前には、二人組のヤンキーさんにカメラクラッチを掛けて
いている楓さんの姿。

ギャラリィ興奮中。

「ぎ、ギブギブ！」

あ、ヤンキーさんの顔が真っ白に……

「ふう……全く」

仕方ない、止めるか。

第90話 夕涼み（後書き）

後書きトーク！！

春吉

「そついや、本編はまだ夏休みなのか……」

美羽

「何言ってるの？」

春吉

「現実だと10月半ばだと言つのに……」

（今話を投稿したのが10月17日）

美羽

「現実つて……」

春吉

「はあく、フィクションっていいな」

美羽

「春……いや、もしかしてアンタ作S……」

春吉

「はあく、祭のタコ焼き食いてえな……」

美羽

「……いくらネタ切れだからって、これはさすがに……」

小夜

「・・・次回、91話“花火大会”。夏休み篇、夏祭り音楽パート
最終回」

春吉

「祭太鼓の音色」

美羽

「春、しっかりして〜!」

第91話 花火大会

「オラ、もうそのへんにしとけ」

「っ、春吉……」

余りにも哀れなヤンキーさんを助けるため、男春吉出動！！
楓さんを後ろから止める！！

「お前、もう相手ご臨終寸前だぞ」

顔面蒼白、口からは泡、白眼。

「う、うるせえ、こいつらがフツてきて……」

楓が目を逸らしながら何かを言おうとした、
その時……

「あ、アイツです！ あの女が俺らの仲間を！」

「んだとー！」

うわー！！

遠くの方からヤンキーさんの仲間らしき人が数人！！
や、ヤバイよー！！

「んだよ、やんのかー！？」

きゃ〜!!!

しかも楓さんは戦闘スタンバイモードに!!!

い、いかん!!!

このままではこのお祭り会場が戦場に・・・

「オメエら、仲間の敵討ちだ!!!」

『オ〜!!!!!』

ヤンキーさんも戦闘スタンバイモード!?

「やってやるぜ、ヤンキー共・・・」

楓・・・

チツ、くっそおがあ〜!!!

「オイ、楓ツ!!!」

「んだよ、邪魔する・・・」

パシツ・・・

「えっ・・・」

俺は楓の腕を掴み、とにかく全力疾走!!!

「なっ、ちょ、春吉・・・」

「いいから、一旦逃げるぞ!!!」

「はあ？」

「いいから、とにかく走れ!!」

俺と楓はヤンキーさんから逃げるため、全力でその場から走った。

「はあはあ、こゝこゝまで来ればもう、安全だろ……はあ」

「……別に逃げなくても」

あれから走り走って、気付いたらグラウンドの隅のまた隅、鉄橋のふもとまで来ていた。

「はあ……走ったから暑い……」

あ、汗がッ!!

「だから、別に逃げなくてもあたしが……」

「それは駄目だ!」

「は？」

楓さん、頭にハテナマークが浮かんでます。

「お前な、見た目普通の女の子が暴力なんて、お前のイメージを壊すだけだぞ」

「なっ……い、イメージって……」

「あのな……お前は黙ってりゃ可愛いんだから、おとなしくしといた方がいいぞ？」

「っ……！」

そう、黙ってりゃまともなヤツなんだ。

「だからよ、やたら喧嘩だの暴力だのは止める。そついつのは女がやるもんじゃない、男の仕事なんだからよ」

まあ、ヤンキーから逃げた俺が言うのもアレだが……。

「……っ」

ん？

「……おい」

「あ？」

楓さん？

下向いて・・・顔赤くしちゃって・・・

ま、まさか熱中症！？

だったらアカン！！

「ま、待ってる！ 今ポ〇リ持って来てやるから！！」

「・・・は？」

やっぱり顔が赤い！！

「頭痛いか？ だったら氷も必要か・・・」

よし、とりあえず氷はかき氷屋にでも・・・

「・・・待て」

「あ？」

いざ、かき氷屋へ向かおうとした俺。

しかし・・・

「よ、弱虫がカツコイイ事言ってんじゃねーよ」

は？

「このバカ吉・・・」

「なっ・・・おま、バカって・・・」

ひどい!..!

「おい春吉」

「んだよ」

早くポ〇リと氷を取りに行かなくてはいけないのに・・・。

「あの・・・その・・・」

「ん？」

何？

「お、お前にとって、あたしって・・・」

「はい？」

何なの？

声が小さくて聞こえない!!..!

「だ、だからお前にとって、あたしは・・・」

「何だよ、声小さくて聞こえねえぞ」

その時・・・

ドオオーッン!!..!

物凄い轟音に、光り。

「おおー、花火が始まったか!!」

ドオオン、ドオオンと花火が上がる。

「スゲー、音おつきいなあ」

花火スゲー!!

「・・・はあ」

「ん？」

楓は何故かため息。

「まあ・・・いいか」

「どうした楓・・・あ、いかんぽー!!」

熱中症はほっとくとマズイからな。

水分補給大事!!

「春吉」

「何？」

何故だろう・・・楓の顔はどこか清々しかった。

「とりあえずお前にはありがとうとゴメン」

「え？」

ありがとう？

ゴメン？

「泊まりの時はゴメン、そして今はありがとう」

「楓……」

な、何だ？

おかしい……

何故だか今、俺は楓をとっても可愛い女の子として見ていた。

いや、正確には可愛い女の子に見えたのだ。

「なあ春吉、ここ人もいないし、少し花火見てこうぜ！」

どこか爽やかな笑顔。

今日は……何だかおかしな日だ。

「……ああ、見るか。花火！」

本当に……おかしな日だ。

第91話 花火大会（後書き）

後書きトーク！！

春吉

「そついや楓、お前どうしてヤンキーさんなんかと喧嘩を？」

楓

「いや、ただ普通に歩いてたらヤンキーとぶつかって・・・」

春吉

「ぶつかって？」

楓

「イラッときたからガン飛ばして・・・」

春吉

「・・・・・・・・」

楓

「向こうが突っ掛かってきたから、ゲーで・・・」

春吉

「結局お前がフツたんかい！！」

楓

「だ、だって・・・」

春吉

「はあ〜・・・で、リアルな話、今回にて夏祭りライブパートは終了、次回より新章突入」

楓

「リアルな話？」

春吉

「しかし、今まで番外編Spring Stormの事をすっかり忘れていたバカ作者的に、しばらくは番外編の方に精を出したいと」

楓

「春吉？」

春吉

「って事で、三姫は少しの間休載。そしてSpringを一気にすすめます」

楓

「・・・・・・・・」

春吉

「三姫再開はSpringの方でお知らせします。でも、そんなに長くは休載しませんからね？」

楓

「・・・・・・・・」

春吉

「では!!--!!--」

番外話 三姫用語集1（前書き）

ども!!

やっと学校の中間テスト終わりました!!

Spring Stormは10月31日より連載再開!!

今回はSpring Stormをより一層楽しんでもらうため、
本作の球技大会本戦篇までに出て来た単語等を用語集としてまとめ
てみました。

青上強襲篇以降のまとめはまた後日にでも。

ではどうぞ!!

番外話 三姫用語集1

三姫用語集!!

夜逃げ 木山家両親の現状。夜に逃げる事。

葉城高等学校 ○○県葉城市にある平凡な学校。顔面偏差値は低い。代表例としては重原権三郎などが挙げられる。

短気 大魔神の持つスキルの1つ。キレやすい人の事。

葉城生徒会 基本会長しか仕事しない葉城高校の生徒間組織。たまに緊急事務員が来る。

かめはめ波EXレボリューション 重原権三郎の必殺技。春吉を吹っ飛ばす程の威力。

スーパーヤサイ人 重原権三郎の通り名1。サイヤじゃなくてヤサイ。

ベリーティスト ケーキショップの名前。葉城高生がよく利用

する。

み〇さん　色黒の偉大な司会者。これをモノマネしようものなら、かなりの確率でスベる。葉城高校にも被害者はいる。

数学得意なハンサムボーイ　重原権三郎の通り名？。自称。でもそんなに数学は得意じゃない。

竹刀　春吉の虎さん馬さんを刺激する悍ましい武器。

岡田工業高校　不良系絶滅危惧種が数多く在籍する荒れた高校。

木山流会話術　木山家を継ぐ者だけが習得できる伝説の会話術。全部で26の型がある。

松田高等学校　ゴツイゴリラがいる高校。

柳沼高等学校　普通の高校。普通。

私立須貝学園　葉城高校に来る前の亜希が通っていた高校。不良もいるが基本弱い。

星村高等学校

柔道の強い高校。

征咲高等学校

征咲市にある高校。何かと伝説が多い。

ちよつと馬鹿だけど真面目な奴
ラ設定。

春吉が学校で通っているキャラ設定。

火竜の天鱗 某狩ゲーの中々手に入らないレアアイテム。春吉は3つ持っている。

深夜アニメ 春吉と権三郎を虜にするテレビアニメーション。これをリアルタイムで見ると翌日寝不足で体がだるくなる。

TASUKETE 春吉がこの単語を聞くとかなりの確率で不幸な目にあう。

ヤンキーさん 喧嘩が強く荒れている人の事。権三郎の憧れ。

自己暗示 春吉の内なる闘志を呼び起こす呪いの一種。基本ジヤ○プキャラになる。

仲田市営団地　　小夜の実家のある団地。黒い悪魔（G）の発生率が異常に高い。Gホイホイは必須。

春吉ママ　　決してオカマって訳ではない。

荏咲家突入作戦　　木山大佐の考案した作戦。

不可坑力　　理不尽な事で被害者になる春吉の事。

金獅子　　激昂したらアカン奴！（春吉談）

ウォーターパラダイス2010　　水の祭典。楓が洗濯機を使うと開催される。

球技大会　　基本球遊び。中にはマジな奴も。

弾丸サーブ　　バレーボールで人を殺す事が出来る伝説の技。大魔神が習得している。

地獄絵図　　大魔神が暴れると見れる絵図。基本悲鳴しか聞こえない。

顔面強打事件 中学時代に美羽が起こした忌まわしき事件。他にも色々ある。

○造パワー お米を食べると使う事の出来る熱血パワー。しじみでも可。

なつくん 吉崎夏哉の前で水岡香音以外が言つと殺される単語。

カオ 顔の事。夏哉は別の意味で使用。

魔法戦士ワイバーンナイト 春吉の金曜日のお楽しみ。

ジャンピング土下座 ローリング土下座、ダイビング土下座と並ぶ最強3大土下座の1つ。失敗すると肘を擦りむく可能性大。

花嫁DOG ラブコメ系深夜アニメ。現在第2期制作中。

木山流忍法 木山家に代々伝わる忍法。ぶつちやけ居留守。

渡邊財閥 金貸し業をやっているらしい財閥。基本謎だらけ。

渡邊会 渡邊財閥の中で亜希が仕切るサークルみたいな物。主な仕事は春吉関連の情報収集。

幻の右 楓が習得している右ストレートの事。下手したら人を殺れるかも。

沢那柔道場 門下生僅か5人の楓の実家。

オタクオーラ 春吉の体から滲み出てるもの。

半男生物 大魔神の別名。禁句。

R18 おおかた亜希が出てくるところなる。18歳未満観覧禁止の意。

4番目の女 亜希がなりたくないもの。昼ドラなどによく出てくる言葉。

月牙天衝 ジャップの某主人公と権三郎が使う必殺技。権三郎の場合ほつきから放つ。

バネ人間 夏哉の事。脚力がパナい。

スーパーウルトラミラクルセンターシュート 春吉がバスケットのセンターからシュートする時に言う言葉。よく噛む。

仲田中学校 春吉達の母校。数々の伝説を残した（いろんな意味で）

嵐の四季 作者が作中を真面目な雰囲気にした時によく登場させる言葉。バスケの強い人達。

残念ボーイ 春吉の事だよ（秋馬談）

庶民 僕以外の事だよ（秋馬談）

スーパービューティフルハンサメンハイパーハードボイルドマグナム春吉 長すぎる春吉のあだ名。予測変換であまり出て来ない単語ばかりなので、作者的に書くのメンドイ。

瀬良家家訓 瀬良家に伝わる家訓。守っているのは瀬良家の中でも秋馬だけなのは秘密。

ダーク生徒会長　黒いオーラを纏った葉城高校生徒会長の事。
こうなると誰にも止められない。

濱垣山　美羽の怒りメーター的役割をしている山。これが噴火
するとダーク生徒会長になる。

ドラゴンのボール　七ツ集めると神様が願いを叶えてくれる
らしい玉。

空気抵抗　大魔神に向かって言うと悲惨な事になる。胸部を見
ながら言うとさらに悲劇が。

ピュア　純粹の意。赤佐が小夜を見るとこうなる。

黄色い歓声　主に女子から夏哉に対し掛けられる言葉。もうま
っ黄色。

ガラスのハート　権三朗の心。ちよつとの事ですぐ割れる。ち
なみに作者もハートはガラス製。

水岡ゾーン　香音がテニス中に発動させる某漫画のパクリ技。
ほぼチートみたい。

探偵ごっこ 亜希の暇つぶしの物。以前秋馬の家庭の事情を暴いた。

ハゲメガネ 秋馬。

藤○弘 サバイバル的な色黒ライダー。モノマネするならばべるの覚悟でどうぞ。

春吉パーンチ 殺傷能力の低い春吉のツッコミ技。基本被害にあつのは重原君。

失点羽虫 サッカーのGKになった権三朗の事。存在は羽虫以下。この一言で権三朗の涙を見る事が出来る。

ファイナル楓キック 楓のサッカーのキメ技。ネーミングセンスに若干の違和感あり。

三姫 本作の略称。最近是三姫ではなく六姫。ヒロイン増えすぎ。

番外話 三姫の詩人達（前書き）

今回は夏祭り音楽ライブパート終了記念、作中では公開されなかった、春吉以外のキャラが作った最終候補の詩を発表！！

おまけで権三朗、夏哉、麗のも書いてみたり！！

多分くだらないので、今話はスルーしちゃっても構いません。

まあ、各キャラのイメージって事で。

番外話 三姫の詩人達

Never give up!!

作詞・沢那 楓

晴れの日も雨の日も

やる気を出さなきゃ始まんない

何やるにしたって

気力と根性大大事!!

暑いから明日でいいやは絶対ダメダメダメ!!

夏バテなんかにはやられるな!!

素麺ばかりたべてるな!!

え? お中元?

暑い日こそ汗かいて

やる気を出して突き進め

さあ今だ、Never give up!!

アスファルトを蹴っ飛ばして

陽炎なんかもシカトして

入道雲がなんぼのものじゃい

夕立きたって気にしない!!

ただただ諦めなければ

きつと掴めるものがある

だから今、青空の下

君の心はNever give up!!

チョコレートはミルクで決まり!!

作詞・濱垣 美羽

甘くてとろけるチョコレート
まるやか幸せチョコレート

チョコレートはやっぱりミルク!!
甘くて甘くて とにかく甘い!!
カカオとミルクのコラボレーション

ビターはちょっとぴり苦手かな?
苦いのはダメなの ほろ苦アウト!

ホワイトもやっぱり苦手かな?
甘すぎるのもアウト!

アーモンド クルミ クッキーにビスケット

さくさくとろけるチョコレートミックス!!

チョコはちょこーっとなんて 言わないの
甘い幸せチョコケーキ!
やっぱりブラウンミルクチョコ!!

甘さ控えめアウトなの
チョコはやっぱりミルクなの
あまあまとろけるチョコレート!!

3時のおやつはチョコケーキ!!

いっただきまーす!!

月光の翼

作詞・荏咲 小夜

眠りに着いた夕日
オレンジ色のグラデーションが 薄くなつて

この空に昇った月に
君は何を見たの？

月の光は優しくも
どこか悲しみを 背負っているようで

君の瞳は この空虚な夜空の星々を 見る事が出来ているのかな？

君の心に開いた穴
私じゃ塞ぐ事は出来ないの？
月明かりに照らされた 君の横顔は
私の事を見てなんかは いなかった

月を越える翼
星を越え、月を越え、君に近付きたい
一緒にいたい

透き通る夜風に 身を任せて
この月光の翼で
君の元へ 行きたいの

いつかは君の瞳に輝く 一等星になりたいの
月より輝く 一つの星に

君に気付いてもらえるような
綺麗な星に

キラキラLove Song

作詞・渡邊 亜希

やばいよ遅刻だ寝過ごした!!

食パンくわえて走り出す

勢い良すぎて 曲がり角で 見知らぬ王子とボタンコ!!

少女が夢見るシチュエーション

ベタベタな少女漫画のワンシーン

それでも乙女は夢を見る

いつかは来る

キラキラしている王子様!!

ある日本当に寝坊して

ジャムパンくわえて走ったよ!!

あと5分、あと3分

逃げ急げと全力疾走!

あの角曲がれば学校だ!

ラストスパート掛けちゃって
そしてまさかのバツタンコ!!

そこにいたのは キラキラ王子様!!

ジャムパン台なし関係ない!
遅刻したって構わない!

ドキドキしてるよ 私的心!!
キラキラしてるよ 王子様!!

EARTH DRIVE

作詞・赤佐 大輔

EARTH DRIVE!!

地球は廻る

365回廻る

俺は日常の中で

一体何がしたいのか？

ちっぽけな存在の俺

地球は廻っている

孤独に慣れた

狼は生きる

俺は 生きられるのか？

地球は廻っていた

ここに俺は存在している

だけど存在してなくて

空虚な心に

虚無な考えに

惑わされ……

俺を存在させてくれ

地球は廻る

俺は廻る地球の上で
自分の意義を探してる

存在してるか確かめる

俺はいる

孤独の中にいる

それじゃOUT!!

生きる

抜け出せ

今なら ゆける

孤独から

抜け出せ

自分を 存在させる!!

地球よ廻れ!!

俺は行くぜ!!

EARTH DRIVE!!

V i v a ・ V i v a

作詞・重原 権三朗

V i v a ・ 俺の青春！

V i v a ・ 俺のマイハニー！

V i v a ・ 俺の人生！

V i v a ・ 俺の全て！！！！

でっけえ飛行機に乗っかって

パラシュート無し の 命懸け Dive！！

なーんてデンジャラスな事は しねえけど

高度3000メートルですら

俺は怖くねえんだよ！

V i v a ・ V i v a ・ V i v a ・ V i v a ！！！！

俺は最強うゝ！！！！

V i v a ・ V i v a ・ V i v a ・ V i v a !!
俺は無敵いゝ!!

マイライフをエンジョイしなけりや
もったいないゝ!!

W o o o !!

V i v a な人生 花街小道
自分の人生楽しくなくちゃ!!

笑っていれば それでいい!!
前歯をだしてアツハツハ!!

V i v a で V i v a な俺として
毎日幸せ爆進中!!

あんたも笑えよ

V i v a !!

夏空のプロローグ

作詞・吉崎 夏哉

ある快晴の日
誰よりも速く
あの夏空の下へ……

白い飛行機雲
その隙間からこぼれる 夏の太陽
キラキラに輝く太陽は この物語の 始めの1ページを飾る

風は優しく語りかける
水は綺麗に透き通る

鳥は羽ばたき
蝉は鳴き
蜻蛉は空に舞う

夏の最初の1ページ

夏休み

まだ物語は始まったばかり

今はまだプロローグ

海へ行こう

山へ行こう

泳ごう 歩こう

広大な夏の日記

今はまだ プロローグ

魔法の音色

作詞・泡岸 麗

クラリネットで奏でる 魔法の音色
あなたの願いを 叶えてあげる！！

楽譜の上に散らばる 人のお願い
ドレミのリズムで 叶えてあげる！！

光る音符が表したのは 桃色のドキドキ
君に届けたいって思う 幸せの音色

さあ奏でよう 願いの第一楽章！！
君とあなたは出会うの この楽譜の上で

柔らかいメロディー フォルテ強くしてみる
桃色が赤く染まる時 この魔法はピリオドね

いつまでも心に響く クラリネットの魔法の音色

次の願いは一体何かな？

私の魔法で奏でてあげる！！

第92話 新展開（前書き）

こんにちは！！

お久しぶりです！！

今回から新章「バスケット部夏合宿篇」スタート！！

夏休み篇パート2です！

音楽の次はスポーツ！

内容的には秋ですよね……

第92話 新展開

皆さん、いかがお過ごしですか？

春吉です。

はい、お久しぶりです。

俺は今、とても重大な局面に立たされています。

「木山クン」

「……………何でしょうか、波紫先輩……………？」

「キミ、死んで」

「……………」

え、ええええ〜!?

事の発端は、30分前にさかのぼる。

「ああ〜……補習ダルいよお〜……」

季節は夏。

8月3日。

夏休み真っ只中。

夏休み　　それは、オタク男子にとって、まさにパラダイス！！

アキバ行って夏コミ行って！！

しかし……

「……全ては、補習で潰れた……」

そんな俺の、悲しい青春夏休み。

クソ暑い昼間。

蝉たちの大合唱。

陽炎ゆらゆら。

「……………暑い」

俺は愚痴をこぼしながら学校へ向かう。

今日は数学の補習だから、権三朗と楓はいない。

権三朗は科学と美術、楓は科学と英語が赤点だったらしい。

「はあ〜……………もう帰りたい……………」

クーラーががんがんの部屋でアイス食って、漫画読みながら畳で〜

ろごろしたい。

ぐーたら人間の願望。

「……………」

ピカアアアッ！！

灼熱太陽光！

紫外線ビーム！

あ、汗が……

汗が止まらねえッ！！

俺の背中はまだびっしょり。

額には大粒の汗。

口の中はカラカラ。

「……………あ、暑い」

もうこれは熱中症になりかねんぞ！！

み、水うゝ

「ついた……ついたぞ……」

あれから、脱水症状らしきものと戦いつつ、何とか学校に到着？

「俺は……ついた……ついた……ガンダーラに……」
(暑さで脳がイカれてます)

俺は……とうとうやったんだ!!
来たんだ……夢の国ガンダーラ!!

この学…… いや、ガンダーラの校門、下駄箱、廊下。
ヒンヤリしてて気持ち良い!!

俺、末期!!

その時……

「なあ、キミ?」

「はい?」

背後から声。

もしかして、ガンダーラの案内役?

俺が振り替えると、そこにいたのは青年。
ウチの高校のジャージ着てる。

夢の国って、もしかして体育会系の国？

「キミ、もしかして木山春吉くんちゃう？」

ガンダーラは関西弁らしい。

「は、はあ……………」

もしかして、夢の国って戸籍必要？

「ホオ……………やっぱりや。その腐った瞳、ナツの言った通り」

「……………はい？」

腐った瞳？

え、何？

「ボクの名前は波紫一真^{はそう かずま}。バスケ部部長や」

「ば、バスケ部部長さん……………？」

が、俺に何の用？

「そう。で、木山くん、ちょっとええかな？」

ちよいちよいと、手招きしながら校舎に入っていく波紫って人。

ジャージの色が赤だから……3年生か。
先輩なのね。

っつか、俺補習あんだけど……

「ここや。中入って、座って待っててな」

「は、はあ……」

「ここって……生徒会室！？
俺、何か悪さしたっけ！？」

まあ、と、とりあえず……

「し、失礼します……」

ガチャリ

入室！！

そこにいたのは……

「……なッ!? ざ、残念ボーイ!?」

「春吉君?」

そこにいたのは、まさかの……

「ハゲメガネに冬希!?」

まさかの二人!!

「何で……お前らがここに……」

嫌なフラグ立ちまくり。

「フン、黙れ庶民。逆にこっちが聞きたい」

「あ? 何だハゲメガネ? 頭シマシマに塗ってスイカにすんぞ」

「バカか残念ボーイ、スイカは緑黒だ。肌色黒ではないんだよ!」

「うるせえ、メガネかち割るぞ!」

いつの間にか、口喧嘩に発展!!

冬希はあわあわ。

「プツ……庶民よ、君はやはり馬鹿だ。このメガネは鉄製だぞ？」

「鉄製ツ！？」

「ああ、フレームがな」

すげえ……鉄製のメガネ。

「冬希、磁石持ってきて」

「なっ……庶民、貴様このメガネを馬鹿にしてるな！？」

「うるせえメガネ！ 第一、鉄製メガネって何だ、ただの馬鹿メガネだろうがッ！」

飛行機乗るとき不便だろうな……

「黙れ庶民、貴様は鉄製の良さを知らない残念庶民のくせに！」

「残念なのはテメエだろうがッ！ 脳内残念ハゲメガネ！」

「何だと！？」

「やんのか！？」

一触即発！

冬希はガチで磁石を求め、科学室へ。

真の馬鹿はアイツかも。

その時!!

「木山クン」

背後から、声。

俺と秋馬、フリーズ。

「……………何でしょうか、波紫先輩……………」

俺は振りかえらずに、声だけで主を判断。

「キミ、五月蠅いねん。死んで」

「……………」

まさかの死刑宣告!?

「瀬良クンもや。五月蠅い奴は死にな」

「……………す、すみません」

「春吉君、磁石持ってき……………あれ？」

冬希は空気を読まずに戻ってきたし。

「……とりあえず、全員座り」

波紫先輩のキャラが読めません。

「今回、キミらをよんだんはな、ちょっとしたお願いがあるから
や」

波紫先輩の細目から、何とも言えぬ威圧感が……

俺と秋馬と冬希は生徒会室のパイプ椅子に座り、向かいにいる波紫先輩を見る。

「お、お願い……っスか？」

何だろう……

今、何と無く分かる事は……

きつとまた面倒な事に巻き込まれる。

何事も穏便に。

「そう、お願いや。……実はな」

さあ、何が来る？

こっちは早く補習行かないと！！

数学の章本（教師）に怒られるがな！！

「実はな……夏休みの間だけ……」

「キミらにバスケット部に入って欲しいんや」

.....
え？

第92話 新展開（後書き）

後書きトーク！！

春吉

「ってか、お前らは補習とかねえのかよ？」

秋馬

「あるわけないだろ庶民！！ 僕は瀬良家の男だぞ！！」

春吉

「うわっ、ウザっ」

冬希

「僕もないな……強いて言えば家庭科が少し苦手だったけど」

春吉

「家庭科か……まあ、俺の周りにも家庭科苦手な大魔人がいたが……ギリで赤点逃れたって言ってたな」

冬希

「僕もギリギリセーフってところかな」

春吉

「俺は一人暮らしだから、家庭科は嫌でも身に付くし……秋馬は？」

秋馬

「……………」

春吉

「…………なぜ黙る？」

秋馬

「……………」

ぴーんぽーんぽーんぽーん！！

校内放送

「瀬良秋馬、校内にいたら早く家庭科室に来い！！ 補習サボるな
！！」

春吉

「……………だってよ……………ッブ！！」

秋馬

「なっ……………赤点二つ取ってる貴様に言われたくない！！」

春吉

「……………プッ」

秋馬

「笑うなッ！！」

冬希

「次回93話“バスケット”これから新展開がどんどん続くよ！！」

春吉

「コイツ、あの大魔人以下……プッ」

秋馬

「貴様っ……」

ぴんぽーんぽーんぽーん……！

校内放送（葦本）

「木山春吉、さっさと補習に來い！！ 2学期も赤点にすんぞ……！！」

春吉

「あぁッ！？ しまった……！！」

秋馬

「……プッ」

第93話 バスケ部

「ば、バスケ部ですか？」

波紫先輩、突然の告白。

テテテテッテテテッテッテッ！！（火サステーマ）
夏休み、バスケ部事件！？

「……………木山クン、真面目に聞いとる？」

「あ、ああはい！」

いかんいかん！！

「波紫先輩、それは一体どういう……………？」

秋馬は真面目だった。

「いや、実はな……………」

春吉さんの、かいつまんだ説明コーナー!!

「波紫先輩の説明があまりにも長いんで、かいつまんで説明する
ぜツ!!」

葉城高校バスケット部

ぶつちやけ、弱小バスケット部だ。

波紫先輩とバネ人間以外、ほとんどが初心者らしいっす。

で……

「近日、葉城バスケット部は一週間の夏合宿に向かう事が決定!!」

合宿先は〇〇県の最南端、六角町。

海に面した、自然豊かな町だそうな。

ちなみに、町の形は六角形ではありません。

あくまで名前が六角町なんです。

でね……

「合宿の最終日に、地元の六角高校との練習試合があるんや」

そして、その六角高校バスケット部こそ……

去年のインターハイ地区予選で、葉城を負かしたチームなのだ。

「ぶつちゃけ、葉城で六角に敵うのは、ボクとナツくらいだけや。あとは全然ダメ」

そこで……

夏休みの間だけ、中学時代バスケット部だった俺らに、白羽の矢が！！

「六角には借りがある。今回だけは、キミらの力を借りてでも勝ちたいんや」

「そんな……」

ちょっと待ってほしい！！

「俺、バスケットやってたの、中学までで……高校ではほとんどやってないんですよ……」

そう、ブランク！！

「……………」

突然黙り込む波紫先輩。

何か……怖っ！！

「確かに、僕も庶民同様、高校ではバスケットをしていない。最近は古武術を……」

ハゲメガネは何を目指してるんだ？

「僕も……春吉君や秋馬君と同じで……バスケットは中学までしか……」

コイツもか……筋凌のエースも落ちたな。

「……ふうん」

波紫先輩……何故かにつこり。
細目がより細目になった!!

「木山くん」

「は、はい？」

何!?

「キミ、確かスポーツツジムでバイトしてたよな？」

「……え？」

何故知ってる？

「そこで、暇な時バスケットしてるやろ」

「なッ……」

だから何故知ってる!?

「その表情……アタリやね」

……今、波紫先輩の目の奥が……キラリと……。

「で……瀬良くんは……確か、染宮さん所でバスケット……」

波紫先輩、今度は秋馬の方を見てにっこり。
「つてか、秋馬もバスケットやってたんだ。」

で、染宮さん誰？

「……先輩、何故それを……？」

秋馬、ちよっとパニックてる。

「いやあ、風の噂やな」

はぐらかした！？

「で、梨本くんは自宅で作ってんよな？」

……俺、波紫先輩が怖くなってきた。

「……はい」

冬希はすんなり認めました。

「まあ、もしblankがあったとて、合宿中に取り戻したらええ」

そして波紫先輩は書類とペンを取り出した。

「これ、入部届けや。夏休み中だけの短期契約やけどな」

……うん。

どうしようか……

確かに夏休み中は暇だけど……
けどなあ〜

「頼むで、嵐の四季さん方」

この人……

「どうや、仲田の春風。夏休みだけ、手伝ってくれへん？
旅費は部が持ってやるし」

「……………」

……本音は嫌。

けどまあ、たまには

「……………旅費、持ってくれんなら、いいっすよ」

せっかくの青春、オタク以外にスポーツにも使ってみるか。

ついでに補習サボれるし。

第93話 バスケ部（後書き）

後書きトーク！！

美羽

「そう言えば中学時代、春はバスケ部だったんだっけ？」

春吉

「ああ……何？もしかして忘れてた!？」

美羽

「あ……いや……別に……」

春吉

「何？お前、同じ中学だよな？真面目忘れてたん!？」

美羽

「いや、だから……忘れてたんじゃなくて……その……」

春吉

「忘れてたんじゃなくて？」

美羽

「その……ど、ど忘れ……」

春吉

「同じじゃんッ……」

美羽

「じ、次回94話“六角へ”。春、バスケット頑張ってね！」

春吉

「ごまかすなッ……っつて、お前もっすぐ出番が……」

美羽

「じゃ、じゃあね……！」

第94話 六角へ

「つつー訳で、悪いけどこがねの事、よろしくな」

学校帰り。

まさかの合宿は明日出発!!

突然すぎるよね。

ひどいよね。

で、

「任せとけ!! しっかり散歩しとくから!!」

現在沢那柔道場。

合宿の間、楓がこがねを預かってくれるのだ!!

「餌は朝昼晩、散歩は朝夕方、1日1回は遊んであげる。OK?」

「OK!! 散歩は朝、メシは昼、そして遊ぶ!!」

「.....」

こがね.....頑張って生きろよ!!

「ワンッ!?!」

こがね.....生きるッ!!

「春吉、お土産よろしくな!!」

楓はにっこり笑顔。

こがねにとっては、恐怖の笑みなんだろうが……。

「お土産って……お前……」

「いいじゃん！ 六角って言ったら海じゃん!! 蟹じゃん!!」

「コイツ……」

「蟹って……俺が逆に食いたいわツ!!」

「じゃあ海老!! ホタテ!! イカ!! イワナ!!」

「食い意地すげえ!!」

そしてイワナは海じゃなくて川!!

「とりあえず、美味しいもんよろしくな!!」

「……俺は釣りに行くんじゃないぞ?」

「まったく……」

「……に、しても。」

「え? 釣りじゃねえの?」

「バスケットッ!!」

コイツ、最近大人しくなったよな……
昔だったら「いいからイワナ釣ってこい!!」って、グーが飛んできたのに。

理不尽大魔人が、最近やけに理不尽でなくなった。

それも、あの音楽ライブの日から……

「ま、とりあえずお土産よろしく!!」

「まだ言うかッ!?!」

とりあえず、こがねの無事を祈る。

「ワンッ!!」

生きるッ……

で、その日の夕方。
俺は合宿用の寝巻きやかばん、洗面用具の買い出しのため、近日のホームセンターへ。

「えーっと、歯ブラシにフェイスタオル、洗顔クリーム……」

はあ〜。

まさかの出費だな、これ。

部活は宿泊費と交通費しか出してくんねえし。

「はあ〜……」

バイト先に連絡入れなくちゃな……

その時……

「……先輩？」

「ん？」

今、どこからか聞き慣れつつある声が……

俺は辺りをキョロキョロ。

「…………あれ？」

どこだ？

「…………後ろです」

「え？」

声はガチで背後から聞こえます。
俺は思い切り振り返った。
で、

「うおっ!？」

「…………そんな驚きますか？」

やっぱりと言うか、麗がいた。
後ろに。

…………ビックリした。

「…………先輩？」

「あーいや、決して驚いた訳では…………」

波紫先輩といい、麗といい…………
そんなに俺の背後はとりやすいか？

「めっちゃくちゃ驚いてたじゃないですか」

「だから……その……はい、驚きました」

「……開き直り」

いいじゃないか、開き直りしても。

「……そういや、泡岸は何か買いにきたの？」

「え？ あ、まあ……」

何故か曖昧に答える麗。

「ふうくん……で、何買つなの？」

追及してみた。

「いや……そんな言つ程の物ではないですよ」

しらっと答える麗。

逆に気になった。

「じゃあ言つてよ」

「いや、だから……」

おや？

麗が少し赤くなりました。

「だから？」

「だから……その……」

ちよつと困り気味の麗は、何か可愛かった。

「……まあいいや。じゃあ俺、買い物に戻るわ！」

ちよつと可哀想になってきたので、仕方なく解放。

……何か俺、悪人っぽかったかい？

「……はい」

少し元気の無くなった麗。

もしかして、悪い事しちやったか？

今度会ったら、謝っておくか。

そして翌日。

「ええか？ お前ら、遊びに行くんとちゃいますよ？ 合宿や！」

午前6時。

くそ早い。

「今回は一週間、みっちり鍛えるで」

葉城高校の駐車場。

そこには、一台の大型バス。

「特に、最終日には六角との試合もある。絶対負けるなや！」

そのバスの前には、葉城高校バスケット部の面々が。

そして、波紫先輩の言葉。

出発の儀式的なあれ。

みんな、真面目な表情で聞いてます。

「じゃあ、ちよいと早いけど、民泊の一覧表配るわ」

……民泊？

え？

「ほい、キミらの」

そう言っつて、波紫先輩が俺ら（他秋冬）に一枚のプリントを差し出した。

「っつてか、合宿は旅館じゃなくて、民泊なの！？
ウソだ……」

「4人で1つの家にお泊まりや。帰宅日を除いた6日間、迷惑掛
けずにせいや」

プリントには、誰がどの家に泊まるかが書いてある。

「民泊か……まさか庶民の家に泊まる事になるとは……」

ハゲメガネうるさい
っつてか……

「1班、木山・吉崎・瀬良・梨本……」

波紫先輩の悪意を感じた。

ちなみに冬希は隣でうとうと。
まだ朝6時、太陽は低い位置。

そんなヤツは放つといて、俺は再びプリント熟読。

「で、泊まる家は……は、濱垣家……」

お、おやおやく？

何か、聞いた事ある名字……

「……そっいゃ」

確か以前、どこぞのダーク生徒会長が言ってたな。

『私、おばあちゃん家六角なんだ』

「……………」

バスケどころではなくなった。
変な汗が止まらない。

「まさか……………」

俺は、どこぞのダーク生徒会長が、夏休み前に言っていた事を思い出していた。

『私、8月は六角のおばあちゃん家行く事になっちゃってさ。春、何かお土産欲しい？』

「……………最悪だ」

最悪の事態が、俺の頭の中をよぎった。

第94話 六角へ（後書き）

後書きトーク！！

春吉

「とりあえず、今話が今年（2010年）最後の投稿になりますな
」

小夜

「……もう後書きのコーナー、何でもアリ……」

春吉

「思えば、今年の3月終わりに始まった今作、よくここまで続いた
な」

小夜

「……春吉、頑張ってたもんね」

春吉

「まあ、今年最後って事で、作者に変わって俺が1つお礼を！！」

小夜

「感謝」

春吉

「今年1年、本当にありがとございました！！ 休載ばっかの作
品ですが、ここまでこれたのも皆さんのおかげです！！」

小夜

「……来年は今年以上に、もっと頑張ります」

春吉

「ですので、来年もまた、どうぞよろしくお願いいたします!!」

小夜

「……春吉が真面目キャラになった」

春吉

「次回95話“合宿開始”多分1月初めには更新出来るかな？」

小夜

「私……合宿篇、出番あるのかな……」

春吉

「大丈夫。無いのは権三郎の方だから」

権三郎

「……」

春吉

「え？ 何、お前いたの!？」

小夜

「……それでは皆さん、よいお年を」

第95話 合宿開始(前書き)

明けましておめでとうございませう!!
五円玉です!!

今年も色々と頑張りますので、宜しくお願い致します!!

第95話 合宿開始

「よ、酔った……」

バスに揺られて約1時間ちょい。

現在、六角町体育館前。

空は快晴！

気温高い！

俺、車酔い。

「うえ〜……気持ち悪いがな……」

俺の席、ちょうどバスの後輪部分上だったから……。

もう……揺れに……揺れて……うつぶ。

「春吉君……大丈夫？ 顔真っ青だよ？」

冬希の心配そうな顔が右側に。

「多分……大丈夫……うつぶつぶ」

い、いけねえ！！

このままじゃ、俺らあ……俺らあ……

全てをぶちまけちまう！！

やべえ……ぶちまけちゃうよ？
きつと、俺の評価ガタ落ちだよ？

「フツフツフ、情けないな庶民。たかがバスごときに酔うなど」

満面の笑みなハゲメガネ。

……ちなみに、コイツも顔真つ青。
なんだよもお。

「じゃあハゲメガネ、そこでくるっと回転してみる」

酔ってないなら余裕でしょ？

「……断る」

顔真つ青なハゲメガネ、震える声で要求を拒否。

「んだよハゲメガネ、テメエも酔ってんじゃねえか……うっ」

「黙れ庶民、僕の席はたまたまバスの前輪の上で……うっぶ」

お互いフラフラ。

「ふ、二人とも大丈夫？ 凄い顔だよ？」

ちくしょー、何故に冬希は酔ってないんだ！

「くそっ……ぐあっ……気持ちわり」

「くそっ……この僕がバスごときに……うつぶ」

その時……

「おいテメエら、さっさと体育館に入れ」

うつぶ……バスの方からバネ人間登場。

嫌だな。

面倒くさくなりそうだな。

「何してんだ、さっさと入れよバカ吉、ハゲメガネ、チビすけ」

「……………」

「……………」

俺と秋馬、気持ち悪さで反論出来ず。

今怒鳴ったら吐くよ絶対。

「あのね夏哉君、春吉君と秋馬君はバスで酔っ……………」

冬希が俺らの弁護に入る。

ああ、優しい子。

……………しかし。

「冬希待てー!ー!」

俺と秋馬の声が重なった。

「…………え？」

冬希、きよんとしてます。

「…………体育館に入ればいいんだな？」

俺は強がってみる。

いいか読者、考えてみるや。

今、俺が気持ち悪いとか言っただけで弱点をさらしたら……………
きつと夏哉や波紫先輩にバカにされるに決まってる！！

「何だ、バスに酔ったのか。情けねえなバカ吉」

「何？ バスで酔うたん？ アハハ、情けなっ」

って、絶対言われる。

…………それは俺のプライド的にアウトっ！！

そして、どうやら秋馬も同じ事を考えてたみたいで。

「フッフッフ……………いいだろう。体育館に入ってやる」

…………強がってます。

そして、俺も秋馬も体育館に入ると言っただけで、バスケやるのは一言も言っていないのは、ここだけの秘密。

「ふ、二人とも、無理は良くな……」

「冬希黙れ!!」

……ここも被った。

「ん？ まあ、とにかく中入れ。さっさとアップするぞ」

夏哉はまだ、俺らが弱化している事に気付いてない様子。

俺は小声で秋馬に提案。

「おいハゲメガネ、ここは1つ、一時休戦しようぜ……っつぷ」

「……ああ」

利害一致。

とりあえず、今は何とかして、この状況を打破しなければ!!

……しかし。

「みんな揃ったん？　じゃあ今からアップするで。まずは体育館
20周や」

波紫先輩からの、地獄の命令。

体育館の中は灼熱地獄。

いるのは葉城高校バスケット部員のみ、つまりむさい男のみ。
ある意味地獄。

マネージャーは今、バスの中で待機中。

……車酔いだって。

「くそお……ちくしょー……うっぶ」

俺はゆっくり走り出す。

お腹の中では、全てがぐちゃぐちゃ。

ゴメンね、食事中の方達。

「やべっ……マジ吐きそう……」

俺は口に手を当てる。

うっぶ。

周りの連中は、掛け声と共にどんどんスピードを上げて行く。

「ほら、木山クンももつとスピードを上げ」

波紫先輩、俺を一周遅れ。

ヤバス。

「それから瀬良クンも、もつとスピード上げな」

俺の目の前。

そこには、もう涙目で走る秋馬の姿。

……辛いよね。

「ほおら、そんなノロノロだと、もう10周プラスするで？」

「……マジっすか、うつぶ」

ヤバス。

マジヤバス。

……くそお。

もう10周は……さすがにキツイ。
絶対死ぬ。

……一大決心、春吉君。

俺はとりあえず秋馬の横へ。
平行走行。

「……つつぶ……どうした……庶民？」

秋馬は、もうなんか凄くなっていた。
危ない顔だよ、これ。

「……ハゲメガネよ、俺……頑張るわ」

これは遺言。

そう、まさしく特攻……。

「……まさか庶民、お前……」

秋馬は辛そうな表情ながらも、少しだけ驚きの表情を見せる。

「ああ……俺、行ってくる。行ってくるよ」

「やめる庶民、そんな事したら、お前の胃袋が……」

ふふっ……俺、もう覚悟できた。

10周プラスは嫌だな……。
だから……

「限界の向こうへ……いざっ！！」

俺は、この肉体の両足に大量のエネルギーを送る。

そう、まさしく……

「うおおおおおおおおお！！」

行くぜ、限界の向こう側……

「しよ、庶民!!」

行くぜ、俺え!!

全・力・疾・走!!

「うおおおおおおおおお!!」

10周プラスは嫌だあッ!!

俺は……走った。

冬希を抜き……夏哉を抜き……波紫先輩を抜き……

限界の向こう側の世界……

リバーズへ……

「うおおおおええええああッ」

……頑張った。

俺はトップでアップの体育館20周を完走。

その後、トイレに直行。

これ以上は、自重。

「うええ……はぁ……はぁ……」

限界の向こう側は、なんか嫌だった。

秋馬はプラス10周らしい。

波紫先輩はニヤニヤ。

「のどろめ。」

「よおし、じゃあ今からシユート練習せ

波紫先輩、ニヤニヤ。

そして、俺の方をちら見。

……くそっ

第95話 合宿開始（後書き）

後書きトーク!!

春吉

「んだよ……新年早々、なんで俺の羞恥シーンから始まるんだよ！」

亜希

「羞恥シーン？ ……ああ、嘔吐のシーンですか？」

春吉

「ストレートに言うなよ……はあ」

亜希

「大丈夫ですよ春吉くん、嘔吐なんて人間誰でもしますから！」

春吉

「だからストレートに言うなよ！ お食事の中の読者とかいるだろ！」

亜希

「でも、作者は食事寸前にこの話を書いてたんですよ？」

春吉

「だから何だ！」

亜希

「作者、今話を書き終えた後すぐに夕食食べてましたし……」

春吉

「……………」

亜希

「まあ、あんまり食べてはいませんでしたか……………」

春吉

「ほら見るッ!！」

亜希

「次回96話“民泊”いいなあ……………私も春吉くんと旅行行きたいな……………」

春吉

「……………合宿なんだけど」

第96話 民泊

「し、死んでしまつよホトトギスう」

「庶民……僕らは生きているのか？」

時刻は午後5時。

本日の練習終了。

俺と秋馬は生きてますからね？

では、ここまでの春吉君をダイジェストでご覧下さいな。

午前8時くらい

体育館到着。

限界のランニング。

リバーズへ……。

午前9時くらい

シュート練習とか、そんな感じの練習。

ここでまたしてもリバーズへ……

午後0時くらい

昼飯休憩。

俺と秋馬はほとんど食べてない。

水ばっかり。
ってか、秋馬死んだ。

午後1時くらい
ミニゲーム。

波紫先輩にボコボコにされる。

ボールが顔面直撃。
痛かった。
リバった。

午後3時くらい
本格的な試合。

俺は秋馬と同じチームに。

つまり、ボロ負け。

バネ人間に鼻で笑われた。
リバった。

……今日はもう、口の中が酸っぱい。
最悪。
死にそう。
もう、語り手無理。

た。……この時の俺は、あまりの気持ち悪さに、重要な事を忘れてい

そう、重要な……民泊の……あれ。

「木山くん大丈夫？ 顔、真っ青やで？」

「だったら休ませて頂きたかった……」

波紫先輩の皮肉を流して、俺は六角町の地図を広げる。

今日から民泊。

……そう、濱垣家。

「庶民よ……僕らの民泊先は何処だ？」

死人ハゲメガネが聞いてくる。

……そう、今回は春夏秋冬が濱垣家にお泊まりする訳だが。

その事を知ってんのは俺と夏哉だけ。

ハゲメガネと冬希は、民泊って事しか知らない。

「……今日は、六角町の最南、南稻森地区の某家に泊まります」
あえて濁す。

「南稻森って……何処だ？」

今日のハゲメガネにいつもの覇気なし。

「とりあえず……行くか」

こここの体育館から徒歩10分くらい。
微妙な距離。

「バネ人間、バネメガネ、冬希、さつさと行くつぜ」
最後の気力を振り絞る俺。

波紫先輩曰く、既に濱垣家には話をつけてあるらしい。

『向こう着いたら、葉城高校から来ました、木山です……って言
えばOKや』

だそうな。

「……はあ」

とりあえず、まさかとは思つが……
いや、無いとは思つけど……一応……念のために……美羽に電話
してみようかな？

「六角にだって、濱垣って名字がいくつもあるだろうし……」

いや、濱垣は意外と珍しいのかな？

「とりあえず電話……あ」

鞆から携帯を取り出す俺に、絶望が襲った。
携帯、電池切れてるし……。

夕日が海に沈む。

波音が心地よい。

海に面した木造一軒家。

表札には「濱垣」。

来ました、今晚のお泊まり先である濱垣家。
何とも風情ある佇まい。

年季はいつてんね。

「来たか……濱垣さんのお宅に……」

多分、俺の知り合いとは別の濱垣さんだ。
……多分。

「バカ吉、お前インターホン鳴らせ」

「……は？」

夏哉さんは、大量の荷物を持って両手がふさがってる。

秋馬は死んでる。

冬希はうとうと。

お眠むの時間ですか？

「お前片手空いてるだろ？ 早くインターホン押せ」

「ちよ、まつ、心の整理がまだ……」

万が一の事態だつてある。
最悪、鉢合わせ……

「いいから押せ、こつちは早く荷物を整理したいんだ」

「こつちは心の整理をしたいんだ！」

くそっ……行くのか？

行つちまうのか？

「……早くしろ」

きゃー、後ろから怖い声がする！！

「わ、分かつたよ」

くっ……し、仕方ないなちくしょーめ！
男春吉、いざ、勇気を持って！！

一か八かに掛けて！！

「いつきまーす！」

ピンポン！！

押したあゝ！！

「はい」

数秒後、玄関からお婆さん出てきた。
白髪の老婆。

……フフッ

別の濱垣さんだ。

「あ、あの、俺ら、葉城高校から来た……」

「あ、君たちが葉城の？ よく来たねえ」

お婆さん、にっこり笑顔。

ああ……優しい。

「とりあえず御上がりな。みんな疲れてるでしょ？」

お婆さんの優しみが身に染みた。

DS先輩とは大違い。

「すみません……じゃあ、お邪魔します。夏哉、秋馬、冬希、早くこっち来い！！」

「命令すんなバカ吉」

反論したのはバネ人間だけ。
残りのふたりは半分意識なし。

「さぞ、どうぞ……あ、そうだ」

お婆さんの言う通り、家にながろうとした俺達。
しかし、お婆さんの口からトンデモ発言が。

「あのね、申し訳ないんだけど、今ね、私の息子家族が遊びに来ててね……」

お婆さんの息子の家族かあ……。

……ん？

「悪いんだけど、お泊まりの間はずっといる事になってるから、そのへんはよろしくね」

……あはは。

「あ、はい。分かりました」

……まさかね。

「じゃあ、お邪魔します」

「……どうぞどうぞ……」

お婆さんのしわくちやの笑み。

……今だけ恐怖を感じた。

そして、全てが最悪のシナリオへと進む。

「あら、凄い荷物ね」

お婆さん、夏哉の大量の荷物を見て慌てる。

「ああ……別に大丈夫ですよ」

夏哉はスルーを試みた。
しかし……

「それじゃあ、家に入れるの大変でしょ？」

お婆さん、余計な心配をする。

そしてお婆さん、家の中に向かって叫んだ。

「ちよつと美羽、降りて来て手伝ってちょうだい！」

……うそっ!!

今、このババア何て言った!?

そして、家の中から……

「あ、民泊の人達来たの?」

見覚えのある、ダークな人が出てきた。

白いTシャツに下はジャージ。

薄いピンク色の。

で、俺と目が合った途端、ダークはフリーズした。
うん、一瞬だけど時が止まったね。
気まずいね。

「……………」

……どうしようか。

とりあえずは……

「よ、よお……………」

挨拶してみた。

「……………は、春さん?」

何故かさん付けで返してきた。

お婆さんはニコニコ笑顔。
頭には？マーク。

ちなみに夏哉は視線を海に。

秋冬は共に意識混濁中です。

……波音だけが響く虚しい玄関。

そう、合宿は始まったばかり。

第96話 民泊（後書き）

後書きトーク！！

赤佐

「出番がねえ」

権三朗

「出番がねえ」

春吉

「……………」

赤佐

「つつー訳で、春吉君。俺らに1つ、出番をおくれ！！」

春吉

「「おとおわあるう」

権三朗

「「うおっ……………まさかのスローで断られた！」

春吉

「だいたいテメエらは前章で活躍したから別にいいだろッ！」

赤佐

「うるさい、俺は主役になりたいんだ！」

春吉

「黙れし背景キャラ」

権三郎

「俺に至っては前章でも活躍してな……」

春吉

「次回97話“濱垣家”まさかの美羽の祖父母の家にお泊まりです
！」

権三郎

「おい、スルーすんなよ!!」

赤佐

「お、俺、背景キャラなのかッ!？」

春吉

「ではまた次回!!」

番外話 思春期だね（前書き）

こんにちは、作者です！

ちょっと気分転換にと、今回は短編書いてみました。
Springに載せようか迷ったけど、今回は三姫本編の方に番外編として掲載することに決定！

たまにはね、読み切り形式の短編もいいでしょ？

では、思春期春吉のお話をどうぞ！！

あと、今回は後書きトークはお休みさせていただきます。

もう、ネタが……

じ、次回からはちゃんと再開しますのでっ！！

番外話 思春期だね

「……………しまった」

俺はフリーズした。

あちゃ〜……………やってしまった……………。

ヤバいな、この状況。

うん、ヤバい。

本日6月のある日。

現在朝の8時半くらい。

今、俺こと木山春吉は、学校に登校してきたばかりです。

今日もじめじめとした天気。

6月だからね。

カタツムリや紫陽花の季節だな。

梅雨だから雨もよく降るし。

いや〜、湿気が多いから寝癖がよくたつ。

……いや、今はそんな事言ってる場合じゃない!!

俺は教室に入室し、自分の席に着き、鞆の中から筆箱を取りだそうとしている所。

周りにはまだそんなに生徒はいない。

……で、

「……なぜ？」

筆箱を取り出すため、鞆を開けた俺。

で、鞆の中には筆箱と、数冊の教科書とノート。

そして……

『男子必見！ 夏直前水着大特集!!』

と書かれた文字の他に、きわどいビキニを着た女性が表紙に写っている本が、あった。

「……………」

俺、超冷や汗。

これ、俺御用達の工口本やんか!!

「……………なんで!?!」

なんで、これが俺の通学鞆の中に入ってんの!?!

だってこれ、俺の部屋の押し入れの奥に隠しといたお宝……………。

まあ、今両親いないから隠す必要ないけど。

ってか、

「なんでこれが俺の鞆の中に入ってんだッ!?!」

おっと、ちょいと声がでかかったかな?

周りの連中が変な目でこっちを見ている。

「……………くそっ、なんでお宝がここに?!」

俺はよく考える。

確か昨日……あ、このお宝を観賞……したんだっけ！！

そうだ、観賞したんだ。

で……

「確か、杏華ちゃんのページを見てた時に、宅配便が来たんだっけ」

そうだ。夜、お宝観賞中にインターホンが鳴って、マジで焦った記憶がある。

「で、確か……」

……あ、そうだ。

「……その時、万が一両親が帰宅したきた事を想定した俺は、隠ぺいのためにお宝を……」

鞆の奥底に押し込んだ。

で、結局は宅配便で、まさかの雑誌の懸賞が当たって、それでテンション上がった……

エロ本の事を忘れてたしまった！！

そのまま、俺は鞆の中のエロ本を忘れ、今日普通に学校へ登校。

「……………やっちゃまった」

最悪だ。

最悪すぎだー！！

学校にエロ本持って来ちゃった！！

「ど、どうしよう」

俺、学校では『ちょっとバカだけど基本真面目なヤツ』のキャラで通ってるんだぞ！？

もしこれで、俺がエロ本持って来てる事がバレたら……………

ああ〜になるー！！

ああ〜になってしまっ！

(あまりにも恐ろし過ぎて、的確な表現が出来ていない)

「まずいぞ……………非常にまずい」

何とかして、今日1日エロ本を隠し通さなければー！！

「くそっ……………ど、どうするんだ俺？」

自分に質問。
ああ、ヤバい。
色んな意味で。

その時……

「あ、春吉ッ！」

むむッ！！

遠くから大魔人接近中！！

ヤバいッ！！

「よ、よよよおお楓！！！」

俺、震える手でとっさに鞆のチャックを締める。

「どうした春吉？　　すげえ汗だぞ？」

楓さん、俺の席の前を陣取る。

「へ？　あ、いや、その……」

ヤバい！！

俺、超動揺してんじゃない！

「春吉？」

何だか不審そうな目でこっちを見てくる楓。

「あ、いや……あ、汗ね。汗だねコレ」

人差し指で額を触ってみた。

超又ルツとしてた。

脂汗かコレッ！？

「春吉どうした？ 何かいつもと違うぞ？」

「ち、違うはないと思わなくは……汗？ そう、汗なの違うの！」

……パニックすぎて、自分でも何言ってるのか分からない。

「は、春吉が壊れた……」

楓マジ引き。

自分でも自分に引く。

俺、本当にパニックってんだな。
落ち着け、俺。

「ん?? …… まあいいや、なあ春吉?」

「はいなっ?」

あー、声が裏返った。

もうマジで落ちけつ。

……落ちけつ?

「お前、昨日の宿題終わってるか?」

「じゅぐう〜だい?」

……もう俺嫌だ。

「……春吉、お前本当に大丈夫か?」

うわー、楓の目線が哀れみの目線に……。

「……………」

俺、無言。

もう駄目だ。

「……………まあいいや。宿題は美羽に見せて貰うから。春吉、お前一応保健室行つとけば?」

「……………」

やっぱり俺、無言。

「……………」

楓さん、頭に大量の？マークを浮かべながら撤退。

……………ふう。

で、俺の心配をよそに、時は刻々と過ぎて行く。

1 時間目の数学

何事もなく終了。

2 時間目の科学

何事もなく終了。

3 時間目の世界史

途中、権三郎の携帯が鳴って没収された以外、特になし。

4 時間目の英語

この頃になると、若干俺の中にも余裕が。

で、昼休みを迎えた。

「……………なあ美羽？」

俺は美羽の席にいた。

「ん？ どうかした？」

美羽さん、今日は何故かズーッと頭にバンダナ巻いてんの。
黄色いやツ。

そう、朝から。

「それ、オタクのコスプレか何かか？」

「へ？」

超甲高い声で反応。

「いやだって、いつもはしてないのに、今日だけ何故かバンダナ巻いてるし……」

美羽の黒髪が少しだけはみ出てる。
前からね。

「あ、いや、その……コスプレじゃなくて……」

何故か顔が赤くなってる美羽さん。

「コスプレじゃなくて？」

非常に気になる。

「いや、だから……これは……」

ちよつともじもじ。

恥じらいつてヤツか？

「ん？」

そうなるともつと気になる。

「だから……えっと……」

主語のない会話が続く。

その時

「前髪切りすぎちゃったんだってさ」

横から同じクラスの女子が登場。

確か……沖島さん……いや、沖浦さん……あれ？

なんて名前だったっけ？

「ちょ、梨沙！」

美羽さん大慌て。

……沖なんとかさんの下の名前は梨沙らしい。

ってか

「前髪切りすぎた？」

だからバンダナ？

一方の美羽は、恥ずかしそうに「うーっ」って唸ってます。

……なんかイイ。

「美羽！ 前髪、木山君にも見せてあげれば？」

美羽の肩を小突く沖なんとかさん。

「いや、いいよ……春はどうせ笑っし」

すねたなダーク。

「笑わねえよ、別に」

自信ないけど。

ってか、切りすぎた前髪見たい！！
パツツンか？

「嘘つけ……絶対笑う」

「だから笑わねえって、絶対」

自信ないけど。

「うー……」

「唸るな」

全く……何だかなあ。

その時……

「春吉」

「あ？」

どこか遠くから、俺を呼ぶ声が聞こえた。

……どこだ？

俺は教室内をキョロキョロ。

「こつち」

「ん？」

声は俺の席の方から。

……俺の席？

そこにいたのは小夜だった。

「どうした？」

「……この前借りた漫画、返そうと思って」

ああ、そっぴや貸してたな。
某ファンタジー漫画。

「おう！」

俺はとりあえず返事。

で、

「……じゃあ、鞆の中に入れてくね」

……鞆？

……あー！！

「……夏直前水着大特集！！」

俺、ぼそつと呟く。

で、その呟きを自分で聞いて、思い出す。

エロ本んぐー！！

一気に冷や汗がっ!!

「さ、小夜！ ちょっとまっ……」

俺は一気にその場から駆け出した。

「……ん？」

小夜さん、俺に気付くも鞆を開ける動作を止めない!!

あ、あかん!!

「……春？」

背後で、美羽の声が聞こえた。

そう、スローモーションで。

もう、あかんだった。

「……………！」

小夜、俺の鞆の中を見てちょっとビクッ！！

「あ……………遅かったか……………」

呟く俺。

鞆まで、あと数メートルの所。

あ……………

終わったあ……………

ジ・エンド

「漫画、入れとくね」

……しかし、小夜はエロ本に気付いたのが気付いてないのか、最初のビクツ以外、特にこれといったリアクションもなく……

漫画を俺の鞆の中へイン！！

……え？

「……漫画、ありがとね」

そして、何事もなかったかのように、自分の席へ。

「……………」

ある意味、一番堪えた。

チクシヨ！。

で、その後は……

「み、見ないでえっ！！」

パツツン美羽と共に帰りました。

バンドナ、沖なんとかさんに取られたんだってさ。

……俺の精神は、もうボロボロです。

第97話 濱垣家（前書き）

お久しぶりです！

五円玉です！

また勝手に連載ストップしてしまい、申し訳ないです。

今回からボチボチ、連載の方を再開していきたいと思えます。

よろしくお願いいたします

第97話 濱垣家

「ハジメマシテ、ボクノナマエハキヤマハルヨシデス」

「木山君だね？ よろしくね」

超カタクト。

現在、濱垣家。

場所は居間。

そう、挨拶中。

目の前には、ニッコリお婆さんとそわそわしている美羽、そして美羽のご両親。

隣には夏哉と秋馬、冬希。

きまずーい。

そして、今日からこの濱垣家でお泊まりです。

「ここが、君たちの部屋だよ。狭いけど勘弁してね？」

お婆さんに連れられ、俺達が案内されたのは二階の一番奥の部屋。

ちよっと狭い。

「窓開ければすぐ海だから、暇なら眺めてみなさい？」

お婆さん、いらぬ世話。

「じゃあ、ご飯出来たら呼びにくるから、それまで自由にしておね
？」

ニッコリ顔のお婆さん。

「ありがとうございます。これから数日間、よろしくお願いします」

夏哉が代表してお礼。

それにつられ、冬希も軽く会釈。

「何故だ……何故ヤツがここに……」

お婆さんが去った後、俺は嘆いた。

「何故だ、何故なんだ……」

何故美羽の祖母の家にお泊まり？
きまずーいよお。

しかも、この家に美羽本人もいるんだよ？

さっき挨拶した時、すげえ目反らされたし。

「何故だあー!!」

「春吉うるさい……」

秋馬、死にそうながらに反発。

畳に突っ伏して微動だにしない。

まだ、気持ち悪いんだ……

「くそッ……なんでこんな事に……」

波紫先輩の悪意が感じられる。

「……………」

一方の夏哉は1人黙々と荷ほどき中。

「ふう……………」

冬希は半分夢の中。

「コイツら……事の重大さを分かってないな……………」

この万年平和野郎共め。

「……………はあ」

ちくしょー。

「……………」

とりあえずトイレ。

「トイレ……トイレ……」

〇〇県六角町南稻森地区にある濱垣さん宅。

内部は意外と複雑。

つーか、かなりでかい家。

トイレの場所が分からない。

「……トイレ、どこ？」

濱垣家は木造。

廊下を歩くたびにギシギシ音が鳴る。

……夜、一人でトイレに行けるかな？

って、さすがにそれはないか。

「……ここか」

多少迷ったけど、何とかトイレに到着。

トイレの扉……超レトロ。

「ちてと……」

で、俺がトイレに入ろうとしたその時

「……あ」

「……ん？」

向かいの部屋から美羽が出てきた。

「……よ、よお」

きまづーい

「……は、春？」

何故疑問系？

「な、何？」

こっちも疑問返し。

「……春、何でここに居るの？」

「……はい？」

「春……バスケット部だったっけ？」

「……成り行きで夏休み限定だけど」

現在美羽の部屋。

恐ろしい事に、この部屋の隣が俺達の部屋。

……つまり、トイレはすぐ近くにあったのだ。

……はあ。

「……まさか、春が来るとは思わなかったなあ」

「……俺も、美羽の婆さん家来るとは思わなかった」
いやマジで。

美羽の部屋は……俺達の部屋と同じで超レトロ。

床には古びたカーペット。

天井にはいくつか不気味な木目が。

怖い……

「……まあ、この一週間、色々よろしくな」

これくらいしか言う事ねえ。

「……うん」

何とも不思議な感じだなあ。

第97話 濱垣家（後書き）

後書きトーク！

春吉

「今日は2月3日、節分ですねえ！！」
（今話投稿日が2月3日）

楓

「……あ、そう言えばそうだな」

春吉

「だよなだよな！ では、2月3日と言えば！？」

楓

「2月3日と言えば……節分？」

春吉

「つまり？」

楓

「つまりって……豆まき？」

春吉

「……まあ、そうだよな。他には？」

楓

「他？ うーん……鬼退治とか？」

春吉

「だからそれが豆まき。他には何がある?」

楓

「他にはって……何かあったっけ?」

春吉

「あるじゃん! ヒント、今楓の周りにいる人の……?」

楓

「周りにいる人? 誰かいるか?」

春吉

「だから前方、主に前方!」

楓

「前方って……春吉しかいないじゃん」

春吉

「そう! つまり!」

楓

「え? 分からないんだけど?」

春吉

「だ、だから、楓の前方にいる人の……何?」

楓

「??????」

春吉

「だから……その……つまり、た、誕生日よ……」

楓

「分かんねえよ、もっとハッキリ言ってくれ」

春吉

「その……だから……今日、た、誕生日よ……がですね……」

楓

「ん？ ……次回98話“危ない夜”……で、本当は何なの？」

春吉

「……も、もういいや」

楓

「ちょ、気になるから最後まで言えよ！」

春吉

「……もういい」

楓

「……もしかして春吉、泣いてんのか？」

春吉

「……どうせ俺は主人公なのに誕生日よ……すら覚えられていない、超地味主人公なんだ……」

楓

「……わけわからん」

「……」
春吉

第98話 危ない夜

「うおお……」

「すげえ……」

現在濱垣家居間。

ちゃぶ台の上には、大量の料理の数々。

お刺身、豚カツ、サラダ、和え物、漬物、味噌汁、白米色々。

凄い……超つまそう。

……そう、今は夕飯の時間です！

俺、夏、秋、冬はちゃぶ台の南側。

美羽、その両親、お婆さんは北側に着席。

居間のテレビでは某イケメングループのバラエティー番組が放送中。

外は薄暗い。

いやいや、星がキレイだ。

そして、これは……わざとなのか偶然なのか、俺の正面の席に美羽。

美羽は全力で目を反らし中だったり。

あー……「気まずい。」

「じゃあ、そろそろ頂こうかね」

そう言つとお婆さんは両手を合わせ……

「頂きます」

それにつられ、他の人も頂きます実行。

俺も両手を合わせて頂きます。

「いやあ、でもまさか、春吉君が来るなんてねえ！」

現在食事中。

俺が豚カツにかじりついていると、美羽の母親が意味ありげに俺に視線を向けてきた。

「いや……俺もまさか濱垣さん家に行くとは思いませんでしたよ」

……俺と美羽は幼稚園から一緒。

なので、昔はよく遊んだ。

つまり、俺と美羽母とは超面識有り。

「これはもしかして、運命なのかもね！」

「……はい？」

美羽母は何かを言い出した。
運命？

「美羽はね、この歳になってまだ1回も彼氏つくった事ないのよ！」

「は、はあ……」

超ニヤニヤ顔の美羽母。

笑顔がマジで美羽そっくり。

ちなみに美羽、今むせてます。

「正直、美羽は人見知りするからね。全く、将来が心配なのよ！」

「そう……なんですか？」

ナアナアで答える俺。

「で……春吉君！」

「はい？」

今一瞬、美羽母の瞳が光った。

「今、彼女とかいるの？」

「ぶほっ！！」

があ……むせた。

「げほっげほっ」

美羽もむせてるし。

「何動揺してんの春吉君！！　ねえ、彼女とかいるの？」

「いや……今はいない……です」

正直に答えた。

はい非リア充宣言。

その時、美羽母はさらに笑顔になった。

「そう！！ だったら美羽なんかどう！？」

「ぶほっ！！！！」

俺、盛大にむせる。

うわっ、気道に豚カツの衣がッ！！

「ちょ、お、お母さんッ！！」

美羽さんは超超顔真っ赤で反論。

「アツハツハ！ いいじゃない美羽、あんた春吉君のこと……」

「あゝ、それ以上は言わないでッ！！」

「アツハツハ！！」

腹を抱えて笑う母親に、顔を真っ赤にして反論する娘。

俺はそれを尻目に、1人いつまでもむせていた。
げほっげほっ。

そして、夏秋冬は無心で飯を食っていた。

薄情者ー！！

「よし、じゃあ風呂にでも行くか」

そう言い出したのは夏哉だった。

あの赤面的夕食を終えた後、俺達は一旦部屋まで戻って来ていた。

もう空は真っ暗。

外からは虫の声。

「……ああ、じゃあ風呂行くか」

満腹感から、畳にねっころがっていた俺、起床。

ちなみに秋馬は本当に死んだ。
いや、それは嘘だけど、本当に畳の上になっところがあったまま動かない。

相当きてるらしい。

「じゃあ冬希、秋馬置いて風呂いっちゃおっせ」

「あ、うん」

「こうして冬希も誘い、いざ風呂へ。」

濱垣家の風呂は、そこそこ大きい。

男三人なら普通に大丈夫な広さだ。

……しつらやまし。

「さて、じゃあ入るか」

脱衣室にて衣服を脱ぎ、冬希が一番に風呂場へと向かう。

……ちなみに、冬希はブリーフ派だった。

高校生のブリーフ派……珍しい。

お子様かつ。

そして冬希は脱衣室と風呂場の境の扉を開けて……

「……あ」

フリーズした。

「……どうした？」

ボクサー派の夏哉、冬希のフリーズに気付き、彼もまた風呂場へ。

で、フリーズ。

「……どうした夏冬。美羽でも入ってたか？」

そう言いながらも、俺は風呂場へ。

女子が先に風呂に入っているシチュエーション。

ギャルゲーお決まりのパターンだ。

こっぴつのは常識です……

「……あ」

で、俺もフリーズ。

「……あら」

風呂場、そこにいたのは……

「……は、濱垣のばあさんッ!？」

見たくもないモノが、そこにいた。

って、

「うおおおおおッ!？」

俺、叫びながら後退。

アカーンッ!!

「なっ」

「す、すみませんっ!?!」

夏哉も冬希も、咄嗟に後退。

「あらあら、まあ若い」

ばあさんはニッコリ笑顔だった。

ある意味ぎゃあああああッ！！

俺、パニクる。

で、

「ど、どうかしたっ!?!」

脱衣室にて、俺の絶叫を聞いた美羽が、血相を代えて突撃してきたのであって。

俺、まあ産まれたままの姿なのであって。

夏冬も上に同じなのであって。

「…………ッ!?!」

真っ裸の男三人に、同じくのはあさんの図。

弁解の余地はあるか?

「み、美羽さん？」

「……ツバカ春!!」

はい、顔を真っ赤にした美羽さんから、ビンタ頂きましたよ。

第98話 危ない夜（後書き）

後書きトーク！！

DJ赤佐

「ヘーイチエケラッ！！ 今日から始まる新コーナーッ！！ DJ赤佐の後書きラジオだよー！！」

春吉

「なんかヒドイのはじまったあッ!？」

DJ赤佐

「第1回目のゲストはッ！！ みんなの邪魔者ッ！！ 木山春吉だよー！！」

春吉

「邪魔者ってなんだコラ。それ以前に、何なのこのコーナー？」

DJ赤佐

「このコーナーはッ！！ ゲストのキャラの個人情報をッ！！ 洗ざらいバラすコーナーだよー！！」

春吉

「犯罪行為ッ!！」

DJ赤佐

「他にも読者からの質問やッ！！ お便りやッ！！ 作者考案のキヤラ設定バラしとかもッ！！ やってい・く・よー!!！」

春吉

「しゃべり方うぜー」

DJ赤佐

「これも俺の本編への出番が少ないがためのっ！！ 救済措置だよ
おー！！」

春吉

「お前のそのキャラは何だよ」

DJ赤佐

「DJだよー！！」

春吉

「……………」

DJ赤佐

「つてな訳でッ！！ 三姫連載再開記念ッ！！ みんなからの質問
やお便りをッ！！ 募集するよッ！！」

春吉

「多分集まんねえぞ、そんなの」

DJ赤佐

「それ言うなッ！！ じゃあ、次回から始まるよー！！」

春吉

「…………え？ 次回から？ 何、じゃあ俺今日何しに来たの？」

DJ赤佐

「特に何もないよー!!」

春吉

「……………は？」

DJ赤佐

「では、今日はここでお開きだよー!! 次回のゲストはあのヒロ
インだよー!!」

春吉

「……………」

DJ赤佐

「ではサ・ラ・バー!!」

第99話 I c a n f r y

「こらそこ、もっとターンを早くッ！」

「切り返し遅いで。足首しっかりッ！」

「シュートのタイミングが早い。もっとよく狙い!!！」

などと言う波紫先輩からのお叱りを受けつつ、俺達バスケ部は今日もまた体育館で練習中。

暑い……

ちなみに昨日はさんざんだった。

お婆さんの一件の後、夏哉はふて寝し、冬希は放心状態。

俺に至っては屋根裏部屋からI c a n f r yしようとする程にまで精神的に追い詰められていたが、美羽によって止められ、無事に今を生きてる。

生命に感謝。

「こら木山クン、もっと足のバネ効かせて跳びっ!!！」

そして波紫先輩には怒りの念しか感じなくなりつつある。

「さて、今日の午後からは近くの海いくで」

午前の血へド物の練習が終わり。

俺……いや、バスケ部員全員が半分死んだ体を強引に引きづり、干からびた体に水分を戻していた時、波紫先輩は笑顔で一言。

「……海？」

そして、その言葉に疑問を持った俺がいた。

「今から海行って、海水浴するで」

六角町は海辺の町。

「はい先輩！」

「なんや木山クン？」

「どづいつ風の吹き回しですか？」

「今日は南風が強いらしいで」

「いや、そーじゃなくて!！」

ドSな波紫先輩が、何故か練習ではなく海水浴をチョイス。
いわば遊び。

普通だったら、

「昼休み無しでランニングや!」
とか言いそうなのに。

「とにかく、午後1時に水着に着替えて、六角海岸に集合な？」

「ちょ、ま、俺水着なんて持ってきてな……」

「はい解散」

「だからちよつと待てえ〜!！」

今話はよく場面転換するなあ。

で、六角海岸。

俺は近くの衣類販売店で海パン購入。

まさかの出費……

そして何故か、夏秋冬含めバスケット部員はみんな海パンを持参してまして。

なんか俺にだけ情報が回ってなかったらしくて。

悲しくなった。

「はいみんな揃ったな？　じゃ、始めるで」

意外と腹筋割れてた波紫先輩、青色トランクス海パンに黄色いゴーグル。

そしてシュノーケル。

……遊ぶ気満々？

「なあ夏哉、何これ？　もしかしてこれから遊ぶの？」

俺は隣にいたバネ人間に小声で質問。

「はあ？　何言ってるんだお前？」

……むむ、バカにされてます俺？

「いやはや、俺の所にはなにぶん情報が回っていませんで……」

「……もしかして、お前ハブられてんのか？」

「いや、その通りでない事を願いつつ聞いてんだよバネ人間」

「ふふっ、庶民が仲間外れに……ふふっ」

「黙れハゲメガネ。ってかお前いつからいたツ!？」

「先刻から」

「ハゲメガネはあくか!！」

「なにっ、バカにバカと言われたっ!！」

「うるせえハゲメガネ、先刻っていつだよばあか!！」

その時……

「ほな、じゃあ今から“ドキッ！まさかのあの子のあーんな姿やこーんな姿を見てしまえッ”大会を始めるで」

『うおおおおお!！』

波紫先輩の何かのフラグ言葉に超反応するバスケット部員。

もち、俺と夏哉はノーリアクション。

いや実際、俺はポカーン状態。

そしてハゲメガネと他バスケット部員は何故か超興奮。

「みんな、あの子の水着姿が見たいか？」

『うおおおおお！！』

「みんな、あの子のムフフが見たいか？」

『うおおおおお！！』

「みんな、あの子とベッドインしたいか？」

『うおおおおお！！』

何かのカルト集団？

そんな勢いで盛り上がるバスケット部員達。

そして……

「ほな、今年の優勝賞品……もとい、勝利者へのご褒美となる女の子の紹介や」

マイクを持ち、炎天下の砂浜の中央で謎の司会進行をする波紫先輩。

そしてその言葉に、

『うおおおおおおおお！！』

バスケット部のボルテージがMAXに。

ちなみに、周りには一般の海水浴客もいるんだよ？

場所をわきまえろ。

そして一体、これから何をするんだバスケット？

第99話 I c a n f r y (後書き)

後書きトーク!

DJ赤佐

「ハイチエケエラーッ! DJ赤佐の後書きラジオだよ!」

美羽

「あれ? 赤佐じゃん。どうしたのそのサングラス?」

DJ赤佐

「第二回の今回のゲストはッ、葉城高校生徒会長のッ、濱垣美羽さんだよ!」

美羽

「何その喋り方?」

DJ赤佐

「まずはッ、自己紹介をッ、お願いするよ!」

美羽

「自己紹介?」

DJ赤佐

「そっだよ!」

美羽

「なんで?」

DJ赤佐

「いいかra！」

美羽

「え、えーっと……は、濱垣美羽で……す」

DJ赤佐

「ほらほら、もっと読者の皆さんにアピールだYO！」

美羽

「読者？ えーっと、私は……7月24日生まれで……歴史が得意で……せ、生徒会長やって……」

春吉

「恥ずかしがりやで、運動音痴で、竹刀持つと熱血キャラになって……」

美羽

「ちよ、春ッ！！」

DJ赤佐

「あ、春吉てめえ、お前の出番は前回でやっただろ！」

春吉

「美羽ん家は意外と和風で、床の間とか神棚とか、仏壇とかあるんだよな」

美羽

「なっ……なんでそんな事知って……」

DJ赤佐

「春吉ストーリーキング疑惑だよ！」

春吉

「ち、ちげえよ！ 昔、まだ小さい頃に美羽ん家行った事があつてだな……………」

美羽

「えっ…………何、ウチの事そこまで覚えてた…………の？」

春吉

「覚えてるよ。確か美羽の部屋は二階…………だったよな？ 昔、俺や小夜とよく外で遊んで、その後は美羽ん家でよくお菓子を…………馳走になつたもんだ」

美羽

「……………」

春吉

「確かあの星形クッキー、お前の手作りだったんだっけ？ 凄くうまかつたのを覚えてる！」

美羽

「春…………そ、そんな事まで覚えていてくれ……………」

春吉

「他にも、美羽の誕生日パーティーとか、クリスマスとか、みんなとよく遊んだよな！」

美羽

「……………うん！」

DJ赤佐

「はい強制終了おー！。何雰囲気作ってたんだコラー！！……………さて、次のゲストは……………あの半男生物だYO！」

春吉

「そっぴゃ、昔クリスマスにもらったあのマフラー、まだ家にあるぞ？」

美羽

「……………うそ、あれ確か小学3年の頃のじゃ？」

春吉

「結構キレイに残ってるぞ。今度持って来ようか？」

美羽

「……………うん！　うわあ〜懐かしいなあ！」

DJ赤佐

「おいコラ、俺のコーナー横取りするなYO！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5879k/>

三人の姫と一人の手下の物語

2011年10月9日20時16分発行